
マクラな草子

アヴェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マクラな草子

【Nコード】

N9958L

【作者名】

アヴェ

【あらすじ】

マクラな草子。それはすなわち、少年・尾崎時良と少女・瀬川奈々実との邂逅から始まり邂逅におわる物語。それが「平常」だろうと「通常」だろうと「非常」だろうと「異常」であろうと、それが「日常」であるのなら、ある限り、二人はその「日常」を生き抜くほかないのである。マクラな草子。それはすなわち、そんな二人の「日常」を描いた徒然なる物語である。

第一章「始まりの草子」　いわゆる「始めに」のページ（前書き）

始めに。

この物語はいわゆる学園モノです。その時点でアウトならばバックを。

この物語はいわゆる日常モノです。その時点でアウトならばバックを。

ただし、日常モノといえど、それは主人公及びヒロイン二人にとつての日常であり、のほほんとただ学校生活を描いただけではありません。

たまにバトルします。

この物語に超能力、魔術、魔法、モンスターなど、いわゆるファンタジーな要素は一切含みません。その時点でアウト（ry

しかしながら章によっては上記の通りバトルを含む章があります。お気をつけて。

この物語の男女比率は大体半々で、ハーレムの要素やギャル格的要素、或いはサービスシーンの類は一切含まれません。軽い恋愛程度です。そういった要素がお望みであればバックを。

全然オツケーだぜ、という方はお読みください。

このページは第一章における主な登場人物の紹介です。

本編は次から始まります。

第一章「始まりの草子」 いわゆる「始めに」のページ

第一章「始まりの草子」

・主な人物。

尾崎蒔良 おざきまくら 夢見里高校三年三組。 自称、特徴無い
のが特徴

瀬川奈々実 せがわななみ 尾崎蒔良のクラスメイト

・その他の人物

尾崎明里 おざきあかり 蒔良の姉。 二十歳

和久井和彦 わくいかずひこ 三年男子。 蒔良の親友

鈴木正時 すずきまさとき 三年男子 美術部

菊地綾子 きくちあやこ 二年女子 美術部

足立智成 あだちともなり 男性教諭。 三年三組担任。

大地獄沢雛 おおじごくさわひな 女子。 蒔良の幼馴染

・その他のクラスメイト

佐藤恵 さとうけい 男子

河野鉄平 こうのてつぺい 男子

千早なつき ちはやなつき 女子

卯の花つぼみ うのはなつぼみ 女子

野中潤 のなかじゅん 女子

日向彩音 ひむかいあやね 女子

櫛ナツカ けやきなつか 男子

立川響 たちかわひびき 男子 生徒会長

七海加奈子 ななうみかなこ 女子

久家千里 くげちさと 女子

第一章「始まりの草子」 いわゆる「始めに」のページ（後書き）

それでは本編をお楽しみに。

第一章「始まりの草子」

始まりでございます。

第一章・001

短い春休みが終わり、今日は始業式の日である。毎年行われているクラス替えのクラス割は春休み中の登校日に発表されたので、新学期の初日である今日という日は案外さっぱりとしたものだと思われている。いっそのことクラス割の発表を今日この日にしてしまえば多少なりとも楽しみが増えるというものではないだろうか。といっても、高校生にもなつてクラス替え如きでときめく僕ではない好きな女子と同じクラスになれたらいいとか、嫌いな男子は他所のクラスへいってほしいとか。そんなありふれた事さえ僕は考えてもいなかった。

僕は今年で三年生だ。これまでの二年間はとても平和で気を抜いて生きてきたが、流石に今年はそのいう訳にもいかない。進学にする就職にする、クラス替えによってどんな人間と関わる事になるうとも、それがたとえ好きな人間でも嫌いな人間でも僕はどっちでも構わない。要は、いちいち人間関係なんて気にしていたらこの先の受験という戦争を生き残れないだろうということだ。

なんて、クールぶった優等生みたいな事も実のところ考えてはいなかったが。僕の場合、クラスの内容がどんなものであれ、いままでの通りの生活をしていれば就職も進学もあまり支障が出ないのだ。特に成績がいい訳でもないし、運動部に入って特別な賞を貰っているわけでもないけれど、それでもそこその大学にいけるだけの学力は持っているし、学校側の推薦でそこその企業には就職できる見込みがある。まあそれでも、あまり甘く見すぎるのもどうかと思うが、この一年ずっと緊張しっぱなしっていう訳にもいかないだろう。

……普通に、今まで通りの生活、か。

「おはよう尾崎くん。今日から一年間、どうぞよろしくね」

「……はあ」

「どうしたの溜息なんてついちゃって。せつかくの新学期にそんな疲れた顔をされると気が滅入って……どうしようかしら」

今日からお世話になる教室に僕が入ると、一人の女子生徒が挨拶をしてきた。彼女の名前は瀬川奈々実。一見すると普通の女子生徒で、一年間一緒にいるクラスメイトに挨拶をするほど気さくな性格をしているように錯覚する。髪は艶やかですらつと長く、制服も乱れなく着こなし、油断するとかかなり綺麗で美しく、見とれてしまいそうだが、これも錯覚。

「朝から無視されるなんて心外だわ尾崎くん。私があなたに無視されるような何かをしたかしら」

「……おはよう瀬川。別に無視していたわけじゃないよ。ただ、今年も平和にのんびりゆっくりゆったり暮らしていこうと誓った僕が馬鹿らしくてね」

「ふうん。今更ね。でも、尾崎くん。私と同じクラスになれてとても残念、という顔をしているけれど、クラス割は私が決めている事ではないのだから恨まれてもどうしようもないのよ。一度私によるしく言っておいてそんな顔をされると、いたく傷つくわ。私はこれでも結構繊細なのよ」

瀬川のどのあたりが繊細なのだろう。僕は疑問に思わずにはいられなかったがなるほど、確かに僕はあからさまに彼女に対して苦手意識を持ちすぎているのか。これでは客観的に見て、僕の方が悪者なんだろう。ふむ。今後はそんな事を思われないように注意しよう。と、いつても、その客観的視点が存在するなら、もとより僕は瀬川を苦手とする理由がないのだけれど。

正直に言えば、彼女は僕だけじゃない、周囲の人間からも苦手とされている。というより、あからさまに避けられている。異常、異端、異質、異様、異例。彼女と関わりと必ず不幸な出来事に遭遇する、といった根拠もない噂が流されたり、彼女は実は既に死んでいて、道連れにする肉体を求めて現世をさまよっているのだ、と言いつ出す輩が居たり、学校の七不思議の全てを瀬川が一任しているのだ

という説も存在する。これではある意味いじめに近いのではないかと僕は考えているのだが、それほどまでに彼女は周囲の人間からは受け入れがたい種類の人間なのだ。そのため彼女はいつだって独りだった。表面上は普段通りにしていても、内心、面白くは決してないはずだ。

何を血迷ったのか（多分、魔が差したんだろう、それ以外考えられない）、そんな彼女に僕は話しかけてしまった。

春休みの登校日。正面玄関の掲示板に貼り出されていたクラス割を見ていた僕は、同じクラスに瀬川奈々実という名を発見する。瀬川とは一、二年と同じクラスになった事はないが、瀬川がどのような人物であるのかは噂で聞いて知っていた。そのため、ああ、彼女は僕が関わる必要性のない人間なのだと、頭では理解しているつもりだった。

なのに僕はどうしてか、彼女に話しかけてしまったのだ。

クラスでのホームルームの後、僕は休み時間に、廊下で窓の外を見て佇む瀬川奈々実の姿を見た。周囲の人垣は、瀬川に場所を譲るように開いている。そのときの僕は心の中で何を感じ、何を思っていたのかはもはや思い出せない。僕の足は自然と瀬川の方へと向き歩き、僕の口が開かれた瞬間、廊下に響いていた喧騒は静寂へと変わる。

「やあ、僕は尾崎蒔良。四月から君と同じクラスなんだ。よろしく」周囲のどよめきが僕の耳に届くのに費やした時間は僅かだ。それ故、僕が一体どれほど馬鹿なことをしたのか理解する。が、一度話しかけた手前、後に引くこともできず、僕は彼女の前に立ち尽くしていた。

彼女の目は驚きに満ちていた。話しかけられたという、彼女にとってはあるえない事実を考えれば当然のことと思えた。しかし、すぐにその表情は怪しげな微笑へと変わり、

「……あなたは、死にたいと考えた事はある？」

と、僕に問いかけた。

その問いに僕は答えるべきかどうか迷っていた。周囲は僕たち二人を遠目で見守りながら、声を潜めてなにやら話をしている。……どうやら、僕は瀬川に話をかけた時点で変人扱いをされてしまっているようだ。

「……僕は、死にたいと考えた事は一度もないよ」

どの程度悩んで導き出した答えかは分からない。周囲の時間がゆっくりと進んでいるように感じた。やけに静かだ。その中で、彼女の声だけが僕の耳の中でこだました。

「……私は、死にたくないなんて考えた事は一度もないわ」

彼女は制服の右のポケットからカッターナイフを取り出した。カチカチと音を立てて剥き出しにされる刃。それをゆっくりと自分の左手首にあてがって。

「おい！ やめろ！」

僕は現状がどんな悪い方向へ向かっているところに来てようやく理解し、彼女のリストカットを寸前で止めた。

「なに考えてんだ！ 危ないだろ！」

よく見れば瀬川の左手首には包帯が巻かれていた。リストカット自体は既に行われていた事実のようだ。確かに、瀬川奈々実に自傷癖があることを噂で聞いたことはあった。が、やはり実際に目の前でリストカットされそうになると、その現実が痛いほどに胸に突き刺さる。心臓に悪い。

「……止めないでよ」

「止めるに決まってるだろ。目の前でリストカットなんてされたくない」

「あなたなんなの？ どうして私に話しかけてきたの」

瀬川の視線は冷たい。どうやら僕の印象はあまりよくないようだ。いや、むしろ感謝して欲しいくらいなんだけれど。

「何って言われても。さっき言っただろ。四月からのクラスメイトだよ」

「クラスメイトだからって私に話しかけてこないでよ。お互い迷惑

でしょ」

……なんだか腹が立った。せつかく独りで居るところを話しかけてやったつてのに。こうなったら、意地でも会話を続けてやる。

「あのな、クラスメイトつてのはコミュニケーションが必要なんだ。だからほら、あれだよ。たとえばお前が独りでいて寂しそうだないとか思ってたわけじゃないぞ」

「そんなこと思われたくないわよ。私が独りで居るのは勝手でしょ。あなたに私の自由を損害する権利はないわ」

「だったらお前は僕の自由を損害する権利はないよな。じゃあ僕は、なんだか独りで居たがるちよっぴり悲しい可愛そうなお嬢様を目前にしてたらだと独りごちてみようかな」

「うっとおしいわよその男子。人の迷惑を考えないでそんなところでべらべらしゃべってるなんてあなたには常識が足りないの?」

「おや何かなお嬢様。僕に話しかけてくるなんて、やっぱり寂しかったのかなあ」

「ぐ。もっいいいわ」

彼女は僕を無視して廊下の先へとすたすたと歩いていく。僕は後ろから着いていき、なにやら独りでしゃべっていた。

「着いてこないでよ」

「ん? どうしたのかなお嬢さん。偶然、僕が行く先とお嬢さんが行く先が重なっただけだよ?」

「……どうして独りでしゃべってるのよ。空しくならないの?」

「いや。独り言が僕の趣味だから」

「……もっいいいわ。勝手にして」

とうとう瀬川が折れた。立ち止まって窓の外を見る。僕はその側で、誰にでもなく独りごちていた。こんな時に無駄に役に立つボキヤブラリーだ。他の生徒たちはなんだか変な目で僕のことを見ているが、それは瀬川に話しかけた時点で同じなので今更気にしない。当の瀬川は僕の話聞いてるのかいないのか、ただひたすらに窓の外の景色を眺めていた。

この日、僕は休み時間のたびにこうして瀬川の側に居た。瀬川も初めは嫌な顔をしていたがどうやら慣れてきたらしく、黙って僕の独り言を聞いていた。

そして放課後。瀬川は僕には目もくれずにさっさと帰ってしまっていた。僕はこの日、一体何をしていたんだろうと自問自答し、辿り着いた答えはつまり『馬鹿なこと』、だった。よくよく考えれば、瀬川奈々実という人物と関わろうとした時点で僕のこれからの人生に安息はないかもしれない。でも今日彼女と接してみて、別にそこまで異様な人間ではないんじゃないかと僕は結論付けたのだが、それ故に逆に不安に駆られるものがあつた。もしかして僕はまだ、瀬川奈々実について理解できていないのかもしれない。彼女が周囲から避けられている存在であるのには、噂だけではない確証たる確信があるからなのだろうから。

それからは自分の行いを悔いて、これからは真っ当に生きよう、と志したのだが、むしろその行為を悔いたほうがいいのだと僕は理解した。本日始業式の今日、教室に入った瞬間彼女に話しかけられるとは夢にも思っていなかったため、実は僕は馬鹿なんじゃないかと本気で思った。

「……まあ、改めてよろしくな、瀬川」

「ずいぶん素直ね。こちらこそよろしく尾崎くん」

普通に、今まで通りの生活。これはどうやら諦めざるを得ないようだ。成績が下がるような事さえなければ、まあ、たとえ瀬川奈々実だろうとただのクラスメイトに過ぎないのだから、僕はそのあたり、腹をくくって覚悟をして割り切っていこうと思う。

「ねえ尾崎くん。実は私、美術部、なんてものに入ってるんだけど、もしよかったら尾崎くんもどうかしら」

自分の席を確認し、再び瀬川の元へ戻った僕に対して彼女はそう聞いた。

「美術部？　なんでまた」

「せっかくお近づきになったのだから同じ部活で一緒に楽しめない

かとか、そう思ったただけなんだけれど」

ふうん。良くない噂しか流れていないこいつがそう言うとか裏でもあるんじゃないかと思ってしまう。けどまあ、こいつは今までひとりで生活してきたようなものだし、案外本気でそう思っているのかもしれない。

「悪い話じゃないんだけれど、僕たち今年でもう三年だし、入ったってどうせすぐ引退だろ？」

「それもそうなのよね。でも尾崎くん、あなた部活なんてやってないじゃない。就職にはちよつと不利なんじゃない？」

あれ？どうして僕が部活に入っていないなんて知っているんだろ。僕が瀬川と会話をしたのは春休みの登校日が初めてだったはずだし、僕は学校内ではそんなに目立っている訳でもないから、全く無関係の瀬川に僕の情報が漏れてるなんてことは不思議な話だ。僕の知り合いの誰かが瀬川に僕のことをしゃべるなんて考えられないし……。

「不思議、って顔してるわね。簡単な事よ尾崎くん。……私が、あなたを、ずっと前から、意識していたのよ」

「……何言ってるんだよ」

「ふふ、冗談よ」

溜息。相手が相手だから多少の冗談でも心臓に悪いな。その内僕は心臓を悪くして病院に運ばれるんじゃないだろうか。その場合、原因はおそらく瀬川になるんだろう。

「確かに僕は部活なんて入ってないけれど。それで、どうして分かったんだよ」

「あなたは案外頭も悪いんじゃないの？ さっき私が、『一緒にどうかしら？』と聞いたときに、あなたは『三年生だから』と答えた。部活をやっている人間なら『僕は既に部活をやっているから』と答えるのが一般的よね。単純に、部活をやっている人とそうでない人では断り方に決定的な違いが出る、というだけのことよ」

「なるほどね」

そりや確かに単純だ。でも、このくらい分からなかっただけで頭が悪いなんて言われたくない。

「とりあえず入っておくだけでも損はないんじゃない？ 内心には響くでしょ。二ミリほど」

「二ミリ程度じゃ一日学校休むか休まないか程度の違いしかねえよ」
「風邪で休むかさぼって休むかくらいの違いは出ると思うわよ」

そんなに僕を美術部とやらに参加させたいのだろうか。今年からはじめたところでもう活動はできないだろうし、そもそも僕には芸術的なセンスを一切持ち合せていない。入っても部員たちの足を引っ張るだけになる事は間違いないと思うのだが。

「美術部って何やってるんだよ。あまり活動をしているような雰囲気は感じられないんだけど」

「……さあね。実際私も大した活動はしていなかったし、ほとんど幽霊部員と変わらないわ。といっても、大抵個人製作だから、私ひとり居ないからって部としての活動に影響が出るわけではないから、それこそ内心のためと言われても仕方ないわね」

「ふうん。部内に中のいい奴とか居ないのか」

「居る事は居るけれど、その子にも迷惑はかけたくないわ」

「お前何のために俺を誘ったんだよ」

勧誘している本人がどうしてこうも後ろ向きなんだ。これじゃ気が滅入る。

「そついえばどうしてなのかしら。自分でも分からないわ」

「……へえ」

始業のチャイムが鳴り、僕は瀬川の元から離れ自分の席へと向かう。瀬川と会話をしていた俺はとくに異常者扱いされているらしく、僕が動くと同時に僕の席までの道は一瞬で確保された。……全く、高校三年生にもなっていないじめを受けているような気分だ。瀬川はこんな気分を二年も味わってたってのか？ 僕が瀬川の立場なら絶対に耐えられないな。下手をすれば自殺位するかもしれない。

「あ、ねえ、君」

僕はふと思いついて近くのクラスメイトに話をかけた。僕に対する反応を間近で観察してみようと思いついたからだ。

「は、はい」

どうして緊張しているの？ 僕何かしましたっけ？

「どうでもいい話なんだけれど、春休みにやってた新春アニメスペシャル『名探偵コモン 怪盗二十五面相』見た？」

「いや、見てないけど」

「そう。残念。悪いね引止めて」

ふむ。今で僕の印象は多少なりとも緩和されただろう。少なくともごく普通に世間話できる人、程度には捉えてくれたはずだ。いや、捉えて欲しい。僕は瀬川奈々実と違って普通の生徒だ。と、思いたい。

ちなみに『名探偵コモン 怪盗二十五面相』は毎週月曜日放送中の『名探偵コモン』の劇場版だ。ネタバレすると、コモンⅡ新二。という探偵アニメだ。

「全員揃ってるか！。じゃ、ホームルーム始めるぞ」

担任の教員が教室に入ってきて、ざわついていた教室は一瞬で静まり返った。

「なんだ意外とおとなしそうなクラスだな。ちつとは張り合いがないと先生としてもつまないんだがな」

そう言っこのクラスの担任、足立智成先生はクラスメイトたちの点呼を始めた。足立先生は国語の先生で、生徒からの信頼も厚く、人気がある。多少、教師らしからぬ態度をとることもあるが、それは生徒の気持ちになって考えた結果の行動で、他の教員からも一目置かれている。

足立先生は点呼の最中、生徒との多少のコミュニケーションをとっているようだ。ただ名前を呼ぶだけでなく、一言二言言葉を交わして親睦を深める狙いのようだ。……といっても、もう三年だし、親睦を深めるというよりは、ただ先生が雑談したいだけなのかもしれないけれど。

「江口」

「はい」

「なんだ、お前はあれだな。眼鏡なんてかけて、見た感じ漫画とかに出てきそうな優等生キアラをしてるな。ふむ。実際どうなのかは知らんが、博士っぽいからな、俺が分からない事があつたらお前に聞くのでよろしく頼む」

「……先生ひとつ質問していいですか」

「なんだ博士」

「なんの漫画から参照したんですか」

「天才キテレコ大百科」

「……聞いたことねえよ。ドマイナーすぎるぞ先生。」

「なんだ知らない？ 面白いんだぞ、あれ。じゃあ次。遠藤」

「はい」

席順は五十音順のため、僕の前に座っている女の子が返事をする。

「遠藤は部活何やってんだっけ」

「え？ えーっと、吹奏楽ですけど」

「あー、吹奏楽な。お前きつと部長だな？ 間違いない」

「いいえ、ただの部員その一です」

「いや。部長だ。お前は部長っぽい顔をしている。そうだな、お前が部長じゃないという事実は俺の中には存在しない。今すぐ部長交代だ」

なんて無茶苦茶な。あんた結構勝手な奴だな。そこがいいところでもあるんだけど、暴走はしないでくれよ、教師として。

「じゃ次。尾崎」

遠藤さんの後ろに座っている僕の名が呼ばれる。

「はい」

「じー」

そんな黙って見つめられると怖い。早く何か喋るか次に回してくれ。

「……なんでしょうか」

「いや、お前、特徴なさすぎるにも程があるだろ。なんかこう、髪の毛一本ツンツンにして見るとか、派手は眼鏡かけてみるとか。制服までちゃんと着こなしゃがって今時珍しいだろ。ん？ 珍しいってことは特徴的なのか？ いや、校則守るのが普通だから普通なのか？」

何勝手に混乱してるんだか足立先生は。国語の教師なんだから旨い言葉遊びでも聞かせてくれ。

「あー面倒くせえ。お前は特徴無いのが特徴。以上だ」

「ひでえ！」

思わず突っ込みをいれてしまった。そのことに対しては何も触れず点呼に戻る足立先生。ま、基本的に悪い先生じゃないんだけどね。むしろ最近の教員は教えることだけに重点を置いて、それだけで生きているような気がして、心地はよくない。こういう先生は、現在まれだと思う。それだけに惜しい。一、二年と足立先生が担任なら良かったのに。

「はい次。瀬川」

瀬川の名前が呼ばれたとき、教室の中は異様な静けさに見舞われた。そんな空気を見無視するかのように、瀬川は平然とした表情で口を開いた。

「……足立先生問題です。例えば私が、先生にとっては都合の悪いだろう写真を持っていたとして、それをこのクラスメイト全員に渡すとしたら、どうします？」

おいおい瀬川。足立先生の何を握ってるんだか分からないが、そんなことをしているから変な噂が立つんじゃないのかお前。

「先生に問題を出すなんていい度胸だな」

先生全く動じてないし。

「答えは簡単。ばら撒くならばら撒けばいいさ。俺にはやましいことは何にもないぞ！」

「……二ヤ」

瀬川が不敵な笑みを見せた。まさか本当に……って、その手に持

っている写真の束はなんだ！

「ほ、ほう、瀬川。そんなのどうせ脅しだ、脅しに決まってる。やれるものならやってみろ。そんな事しても生徒の俺に対する信頼は揺るがない！」

それにしては動揺しているな先生。だがまあそれも当然といえば当然だろうな。例えば自分にやましい事が無くても、瀬川の行動によつて動揺しないやつはおそらく居まい。

「先生、おめでとうございます」

「へ？」

瀬川が手に持っていた写真をばら撒いた。宙に舞う写真。僕は側に舞い降りてきた写真を掴み取って見てみる。その写真に写っているのは先生と、先生が大事そうに抱き上げている、赤ん坊だった。「春休み中に産まれたんでしたよね。母子共々健康に育っているのか」

瀬川がまるで解説するかのように言った。

「あ、ああ。ありがとう。ははは、そうなんだよ」

「で、なんで瀬川がその写真を持っているんだ！」

思わず叫んでしまった。写真を拾い上げたクラスメイトたちは、写真に写った赤ん坊を見て可愛いとつぶやきながら、不思議そうな顔をした。

「そんなに驚かないでよ尾崎くん。これも簡単な事。単に私が先生に無理言つて譲ってもらっただけなのよ」

またそれが。

「ま、そういうことだ。俺は以前から瀬川の話し相手になってやってたりしてたしな。妻が妊娠してからはずっと子供の事に気をかけてくれて、なあ？」

「……」

瀬川が照れている。ふうん。噂通り、というわけでもないじゃないか。

「でもなんで写真なんか」

「それは勿論。私だけがこんな情報もってたって仕方ないでしょ。足立先生は良い先生だし、その先生のクラスの皆には知っておいて欲しいことでしょ？ まあ、どうせその内先生から言い出すだろうとは思ってたけれど、普通に教えるだけじゃつまらないってものよね」

普通に教えるよ。前言撤回。噂通り変な奴だ。

「先生、もしかして先生もグル？」

「いや、完全に瀬川の独断。やられたよ。四十枚もくれって言うから変だとは思ったが。妻に、そんなにたくさん写真撮ってどうするの、って笑われたよ」

変だと思うなら四十枚はやめとけばいいじゃないか。まあいいか。足立先生も嬉しそうだし、クラスメイトたちも、瀬川のでかした事なのになんだか穏やかな顔してるし。この機会に瀬川の孤独が解消されるといいんだけど。

「と、まあ、次行くか。次は……」

興奮冷めやらぬ中、足立先生の点呼作業は続いていく。瀬川以降の生徒からは赤ん坊についての質問が相次いだ。足立先生の信頼は失うどころか、人気急上昇中といったところか。瀬川も粹な事をする。当の瀬川は既にぼうつとしているけれど。

足立先生の点呼作業が終了した時点で残りホームルームの時間は残り僅かとなった。全く、いくらなんでも時間かけすぎじゃないのか？

「あー、今日の予定はだな。ご存知の通り始業式。の、前に大掃除をこれ終わったらやって、始業式の後には休み明けテストだ」

この学校では休み明けテストを始業式にやる。国語、数学、英語の三教科だけだが、休み中の宿題をさぼってたり復習をやってないとかで舐めてると痛い目を見る。

「詳しい日程は用紙を黒板に貼っておくので見て置くように。あと、春休みの課題は帰りに回収。それまではテスト対策にでも使え。以上。……時間余るなあやっぱり」

点呼の方が長いってどういうことですか先生。もうちょっとなんか、教員らしいこと話したらいいのに。

それはそれとして。本日のテストに関しては漢字と英単語を多少見直す程度で大丈夫だな。数学なんてものは公式さえ頭に入っていれば解ける教科なので問題ない。

「んじゃ。時間余ったから早めに切り上げて掃除の準備でもすつかさつさとやってさつさと終わったほうが楽だろ。ほれ、準備しろ」

先生の号令と共にクラス一同行動開始。机を運び、教室の前半分を広くする。足立先生が適当な生徒に担当箇所を指定していき、生徒はそれに見合った道具を準備する。

「尾崎と勝俣の二人は窓拭き。あとで新聞持つてくつから。瀬川、福島、鹿児島、目黒の四人は床拭き。後でクレンザー持つてくつからそれまで水である程度拭いとけ。渋谷と飯島は床のガム取り。念入りにな。……それにしても汚ねえなこの教室」

僕は窓拭きか。二人居るんだから時間内には終わるだろう。……問題は瀬川か。他の三人は瀬川のことはどうやら避けたい気分らしい。どう折り合いをつけてやれるか、ってところか。僕は僕で自分の担当やりながら瀬川のほうも気にしてやろう。……僕は別に瀬川の保護者とかじゃないのだから、気にするのも変な気もするんだけれど。

「おし。とりあえずこんなものだろう。休み時間が終わったらすぐ始めるんだぞ」

足立先生はまだホームルームは終わっていないというのにさつさと退散してしまった。大掃除開始まで二十分弱。ずいぶん時間が余っているようだから、これからお世話になるクラスメイトたちと多少なりとも会話を交わしておきたいところだ。

「……………」

よく見れば、一、二年と同じクラスになった事があるのは数人だけで、あとはあまり関わりがなかった人たちばかりだ。

「……………」

僕も瀬川と関わってしまった時点で、クラスメイトたちから距離を置かれているような状況にあるため、話しかける相手は慎重に選ばなくてはならない。しかし、やはりというべきか、皆それぞれのグループに固まっていて中睦まじい。間に割って話しかけるような勇気は今のところない。

「……………」
このままではクラス内で孤立してしまう。せつかく最後の一年、やはり楽しく生活していきたいというのに。

「……………」
瀬川は瀬川で端の方でぼうつとしている。一体何を考えているんだか検討も付かないが、ああして黙っている分にはなるほど、可愛いものがある。

「……………」
えーっと。うん。あの。つまりだな。

「……………」
怖い。

「あのー。何か」

僕が声を掛けると、その人は僕のほうに歩み寄ってきた。首に大きなヘッドホンを掛けている女生徒だ。先ほども知らずにやら僕を睨みつけるようにしていたのが気になっていただけれど、相手にするものなんだか面倒くさそう、もとい、怖そうな相手なのであからさまに無視をしていたのだ。

「じー」

そんな近くで僕を見ていてどうするんだこの人。

「……………」
あの、怖いんですけど
こちらから話しかけても反応が薄いので、僕も僕なりに彼女を監察することにした。髪はショートで綺麗な黒色をしている。見た目、とてもサラサラだ。制服も見事に着こなし、性格は一見真面目、といったところか。首に掛けているヘッドホンはファッションなのだ

ろうか。

「じー」

彼女に見つめられ、僕は思わず緊張してしまった。彼女の瞳がとても真っ直ぐで、全く濁りがなかったからだ。純粹、純真。そんなものでは決してないが、とても、綺麗な目をしている。こんな目をした人は僕は会ったことがなく、だからこそ、僕の身体は金縛りに遭ってしまったかのように硬直した。

「ふうん」

初めて彼女が口を開いたとき、僕は周りの空気が急に動き出したかのように錯覚した。

「なるほどね」

なにやら一人で納得しているようだけれど、僕には全く理解できなかった。

「私は千早。千早なつきよ。よろしくね」

「え？ ああ、うん。僕は尾崎蒔良。こちらこそよろしく」

僕はなるべく平静を装って、この場に最もふさわしい言葉を探して答えた。

「君の名前、かなり変わってるよね。私ら三年生にとっては不吉極まりないな」

不吉で。かなり失礼な事を言うなこの人。

「気に障った？ と、聞くまでもないよね。このくらいのことで気分悪くするような器のちっちゃい男の子じゃないよね、君は」

うーん。なんだか見透かされているような気がするな。瀬川とは違う意味で可笑しな人だ。

「まあ、ね。君が僕の名前をそんな風に解釈できるってことは、僕にとっては君はそこそこ可笑しな人だと捉えることができるんだけど、どうかね」

「おや、調子が出てきたじゃないか。そうだね、そう思ってくれて構わないと思うよ」

なんつつか、さっきまで緊張していた自分が馬鹿らしくなるくら

い話していて何ともない。

「それで、僕に何の用？」

「うん？ いや、別に。なんとなく」

「なんとなくで話しかけてくるのか、君って」

「私たちクラスメイトだよ？ 話しかけるのに特別な理由なんてないさ。そうだな、強いて言うなら、君、今朝瀬川さんとなにやら話しをしていたじゃないか。瀬川さんと関わりあえるような人間って、どんなかなと思ってね」

……この人も瀬川を避けているのだろうか。

「別に。僕はただ、クラスメイトとして、瀬川と話をしていただけさ。それで、僕の印象派どんな感じなんだ？」

「思ったより安心できるよ。これは実際に会話してみた印象だけだね」

「安心？」

「そ。私としてはそれが何より。これから君と仲良くしていきたいと思っっているんだけど、どうかな？」

今日の今日でよくこんななれなれしいことを平気で言えるようなこの人。悪い人じゃあ無さそうだけれど。

「それは、クラスメイトとして？」

「いいや。友だちとして、ね」

彼女は微笑んだ。元々整っている顔立ちをしているので、笑いかけられると意外と可愛らしいか思ったりもするけれど、なんていうか、何度も言うけど不思議な人だ。

「まあ、僕は別にいいけど」

「そうか？ ありがとう。ふふ、そう照れるな。私のことは異性だなんて思わなくなっただいいんだよ？」

「照れてねえよ。……まあいいや。それより、これは僕からの願いなんだけれど」

言わずもがな。どうやら千早さんにも分かっていたようで、僕が言葉を紡ぐよりも早く解答をくれた。

「うん。分かってる。個人的に彼女にも興味はあるしね。それじゃ、またあとで」

千早さんはそう言っ僕の側から離れていった。他のクラスメイ
トたちを観察するのかと思えばそうではなく、元々仲の良かったグ
ループに加わって談笑を始めた。

ふむ。このクラスにおいて早速友だちができたのは喜ばしことだ。
ちよつと変わった人ではあるけれど、話していてこちらとしても楽
しかったし、どうやら僕はクラス内での孤立を免れそうだ。

時は流れて大掃除の時間。同じ窓拭き担当の勝俣くんと共に作業
を開始する。新聞紙を水にぬらして窓の汚れた部分を擦る。窓は上
と下で二段になっているので、丁寧にやるとするとやはりそこそこ
時間はかかるだろう。

僕が作業をしていると、勝俣くんが作業を中断して僕に話をかけ
てきた。

「お前、今朝瀬川となんか話してただろ」

またそれか。千早さんは好意的に受けてめてくれたようだが、ど
うやら勝俣くんにとってはそうではないご様子だ。

「……サボってると終わらないよ」

「掃除なんてどうだっていいんだよ。で、どうなんだよ」

どうやら勝俣くんと僕は仲良くなれそうにないな。

「どうって、何がだい？」

「しらばっくれてんじゃねえ。瀬川の事だ」

面倒な。瀬川の事が嫌いならそんな事いちいち気にするなつての。
仕方ない。こういう輩はちよつとおちよくつてさよならしよう。

「あー、勝俣くんは瀬川の事が気になるんだね。ひよつとして好き
なの？」

「んだとてめえ」

冗談は通じないらしい。ものすごい剣幕で睨んでくる。下手な事
を言つと殴りかかってきそうだ。まあ、殴りかかってきたところで
困るのは僕じゃないけれど。

「嫌いならそんなに気にする必要ないんじゃないかって僕は思うんだけど」

「じゃあてめえは好きなのかよ」

「別に。好きでも嫌いでもないよ。今のところ、ただのクラスメイトってところか」

例の噂もどこまで真実味を帯びているのかは分からないし。別段、瀬川と始めて言葉を交わしたあの日から異常な出来事が起きた訳でもなし。だから僕は瀬川については楽観視しているのだけれど、このクラスメイトの一部以外はどうかやら彼女の事をよろしく思っていないらしい。そんな風に思われるくらいの事を瀬川がしたのだろうか。

「あんな奴と平気で一緒に居れるような奴が増えろとな、困るのは周りの人間なんだよ」

「……そう言い切れる根拠ってのはなんだい？」

「決まってるだろ。あいつが当たり構わず不幸を撒き散らす疫病神だからだ」

……なんだか腹が立ってきた。僕自身が貶されているわけではないというのに、なんだか自分の事のようにむかついてくる。僕の堪忍袋が切れる前に早々にこの場から立ち去ったほうが勝俣くんにとっては良いかも知れないな。

「そんな事を思っているのは君だけかもしれないだろ」

「そうも言ってられねえんじゃないやねえ？ 見てみるよ、あれ」

勝俣くんが指指した方向には瀬川と、瀬川と同じ床拭き担当の三人の女生徒が居た。僕は勝俣くんに構ってそちら側の注意を怠ってしまったようで、三人がどうやら瀬川に対して何か言っているようだ。

「どうしてあなたみたいなのが同じクラスなのよ」

「あまり近づかないでよ、私たちに何かあったらどうするのよ」

「なんなら掃除なんてしなくていいから、この教室から出て行つてよ」

いじめの現場をリアルタイムで見ているかのようだ。瀬川の方は相変わらず平静そうだが、こちらとしてはやはり気分が悪くなる。こんな時に足立先生は居ない。誰かが場を取り繕ってくれればいいが、そんな雰囲気でも無さそうだ。

「行くなよ。この際だから見てみぬ振りをしろ」

僕が足を踏み出そうとしたとき、勝俣くんに制止された。邪魔だぞこの坊主頭。ぶん殴られたいのかこの野郎。

「君はあれを見ててなんとも思わないのかよ」

「逆なんだよ。お前が、瀬川なんて奴の事どうして気に掛けられるんだ」

僕の頭が沸騰しかけた。というか僕、瀬川の事でこんなに怒れるなんてそんなに瀬川の子と好きだったっけ？

僕が勝俣くんを押しつけて瀬川の元へ駆けつけようと思った矢先、瀬川たちの方から女子たちの悲鳴が聞こえた。

「きゃああ！」

「ほら見るよ、あの女ろくな奴じゃねえ！」

見れば瀬川の足元に血だまりができていた。瀬川の右手にはカッターナイフが握られていて、その刃には真新しい血液が付着していた。瀬川の目は冷たく沈んでいて、自身を貶した三人の女子たちに向けられていた。

まさか瀬川の奴、思いあまってあの女子たちに切りかかったんじや……。いや、違う。三人はまるで痛がっているようには見えず、瀬川の側から逃げるようにして離れていく。じゃああの足元の地だまりは誰の、と、もはや考えるまでもなかった。

僕が春休みに見た瀬川の左腕に巻かれていた包帯。そういえば今朝も巻かれていたが、それを思い出してみれば答えは一つ。

「ああやって人前で自分の手首切っちゃう奴のどこが正常だよ」

そう。瀬川は自分の左手首を突然切ったのだ。いわゆる、リストカット。僕が初めて彼女に話しかけたときもリストカットしようとした。瀬川が自傷癖を持っている事をすっかり忘れてしまっていた。

「……どけよ」

僕は未だ立ちふさがる勝俣くんを思い切り睨んだ。

「ひっ」

彼は情けない声を発して素直に道を明け渡してくれた。ちっ。そんな程度で粹がるなよ。

「大丈夫か瀬川」

「あら尾崎くん。何の御用？」

これは錯覚かもしれないが、心なしか瀬川の声は震えていた。

「そんな悠長にしてる場合か。早く血を止めないと。……あんたら何黙ってみてるんだよ！」

クラス中が黙りこくったまま、瀬川から距離を置いている。くそったれ、お前らそれでも血の通った人間かよ。

「ちよっとじっとしてろよ」

僕は自分が着ていた制服のワイシャツを脱いで、その袖で彼女の傷口に巻いた。みるみる内に鮮血で染まっていく制服。

「歩けるか。保健室に行くぞ」

僕が瀬川の手を引っ張って行こうとすると、一人の女生徒が立ち塞がる。茶髪の、化粧をした女生徒で、さっきの三人の内の一人だ。「どいてくれ」

「そんな女ほっとけよ。どうせ何回も手やってんだから、どうせ死にやしねえ」

どうしてこうも邪魔するかな。全く。

「……どけよ。今の僕はすごく機嫌が悪い。例え相手が女の子だろうと、手加減できるかは怪しいよ」

「んだと？ お前みたいなのひよろっちいのに何ができるってんだよ」「忠告はした。後悔しても知らないよ」

僕はゆっくりとその子に近づいていく。彼女も動じない。どうやら本気で僕とやり合うつもりらしい。

「待って。尾崎くん。ここは私に任せて、君は早く瀬川さんを連れて行って」

背後から声を掛けられ僕は振り向く。千早さんだ。……全く、千早さんならどうにかしてくれるだろうと少しは期待していたのに。「ごめんなさい。私も仲の良い友だちの手前、自分ひとりだけ瀬川さんと仲良くするなんて出来なかったの。いや、言い訳かもしれないけど、私には尾崎くんのように瀬川さんのために何かしてやれる勇気がなかったの」

千早さんは言いながら瀬川の元に駆け寄った。そして瀬川の手を取り高らかに宣言した。

「でももう大丈夫。私はこれから何があっても、例え友だちから嫌われたって、瀬川さんの味方をするわ」

「手を離しなさい」

瀬川が千早さんの手を振り解こうとする。が、千早さんはすばやく瀬川の暴れる手を押さえ込んだ。

「さ、尾崎くん。瀬川さんを連れていってあげて」

「ありがとう。千早さん」

僕は瀬川の元に戻り、瀬川の手を引っ張って行こうとした。だがやはり立ち塞がる女生徒。

「行かせないよ。そんな女が居るから皆不幸になる。もっともっと手を切らせて、自分で死んじまえばいいんだ」

「……全く。君はとんだ愚か者ね、目黒さん」

千早さんが目黒という女生徒の頬にビンタをした。教室中に響く音。目黒さんの頬は見る見るうちに赤く腫れ、それ故目黒さんの怒りも頂点に達した。

「この……！」

「千早さん！」

目黒さんが僕の事など目にもくれず千早さんに襲い掛かる。だが千早さんは平然として微笑んでいた。

「私なら大丈夫」

本当に大丈夫か千早さん。いや、気にするな僕は早く瀬川を保健室に連れて行かなくては。

「どいてくれ」

気が付けば、教室の外では騒ぎを聞きつけた他クラスの生徒たちが集まっていた。僕と瀬川が廊下に出ると皆一目散に教室へと戻っていった。

「さ、行くぞ瀬川。大丈夫か」

「……」

返事がない。が、足取りはまだ軽そうだった。どうやら傷はそんなに深くはないようで安心した。

途中、同じクラスでも他の場所を担当している生徒とすれ違った。

「あ、瀬川さん。その腕どうしたの!？」

「……またか。おい大丈夫か。顔色わりいぞ」

見た感じ優しそうな雰囲気的女生徒と、目つきがちよつと悪い男子生徒の二人組み。どちらも瀬川のことを気に掛けてくれる分、いい人のようだ。……僕は瀬川に構うか構わないかで人のこと判断しなくてはならないのだけれど。

「あ、えーと、なんだっけ」

「尾崎。尾崎蒔良だよ」

「そう、尾崎くん。今から保健室に行くのね？ わたしも付いてく女生徒は思いがけないことを口にした。

「悪いよ。そんなことしたら、君まで孤立しちゃうかもしれないよ？」

「いや、連れてってやれ。怪我の手当てなら、保険の先生よりも腕がいいからな」

僕が女生徒のことを気遣って、嬉しい申し出を断ろうとしたのだが、男子生徒の方がそう言ってきた。

「……なるほど。状況は分かった。また目黒の馬鹿がなんかしたんだな。教室の方は俺が何とかしてくるから。瀬川の事はお前らに任せたぞ」

「お願いね」

言うなり、男子生徒は自分の担当場所を放棄して教室のほうへと

歩いていった。なんて頼もしい背中だ。いや、今はそんな事気にしてる場合ではないか。

「さ、行きましょう」

「……分かった」

この女生徒も女生徒で瀬川に対して献身的だ。将来看護士でも目指しているのだろうか。瀬川は一々抵抗してるんだけれど。

ようやく保健室に辿り着く。ここまで来るのに何人かの教員とすれ違ったが皆、またか、という顔をして、それでも一応教員の顔をして瀬川のことを気遣う体を成していた。けれど、本気で瀬川のことを心配している教員はいなかった。

「失礼します」

「あらあら。……瀬川さんね」

この保険の先生も例外ではなかった。保健室清掃担当の生徒たちは、僕たちが入室するなり廊下へと飛び出して行ったがもはや気にしても無駄である。

「今日は珍しく付き添いが居るのね。……卯の花さんも一緒だったら、先生は別に居なくてもいいわよね」

「先生！」

「……いいよ、尾崎くん」

保険の先生は足早に退室、廊下に居た生徒たちになにやら指示をして、保健室の前には誰一人として居なくなつた。

「なによあの先生。まあいいや。じゃあ瀬川さん、そこ座って腕出して。えーっと、包帯と、消毒液と……」

流石に瀬川も素直になつて、女生徒の言う事にはすんなり従つた。女生徒は自分の制服のポケットから様々な救急道具セットを取り出す。

「それ、いつも持ち歩いてるの？」

「え？ うん。そうだよ」

なるほど。さっきの男子生徒が、怪我の手当ては保険の先生よりも腕が良い、と言つたのも理解できるな。ワイシャツで巻かれてい

た傷口を診て、手早く処置していく女生徒。その行為には淀みがなく、手馴れている感じで安心できる。

「よいしょっと。はい、終わり。あんまり無茶しないでね瀬川さん」
「……」

あつという間に作業を終えた女生徒は近くの椅子を引きずってきて瀬川の前に腰掛けた。

「尾崎くんも座りなよ」

「ああ。……慣れてるね」

僕は言われるがままに椅子を持ってきて側に座る。女生徒は微笑んで答えた。

「うん。結構しょっちゅう、誰かさんの手当てしてるから。……えっと、自己紹介まだだったよね。わたしは卯の花つぼみって言います。よろしくね」

「僕は尾崎時良。さつきも言っただけど」

「うん。さつきの男の子は佐藤恵くん。見た目はぶっきらぼうだけれど、どんな人にも優しくしてくれる良い人よ」

かく言う卯の花さんだって人には優しいそうだ。

「瀬川さん、大丈夫？ まだ顔色が優れないみたいだけど」

「……ええ。もう大丈夫」

ようやく口を開いた瀬川だが、やはり声が震えている。……気の強そうな女だと思っていたのだけれど、本当に繊細な神経の持ち主なんだろうか。

「尾崎くん。悪かったわね。私なんかのために」

「別に僕は何もしてないよ。ただ無駄に怒っただけ」

「そんなことないよ。瀬川さんが目黒さんにいじめ、っていうか、何か言われてたときに、真っ先に怒ってくれたの尾崎くんなんですよ？ 人のために怒れるって、滅多に出来る事じゃないじゃない」
「……僕の事なんかより、卯の花さんにお礼言えよ。傷の手当てしたのだって卯の花さんだし」

本当、僕は役になんて立ってない。卯の花さんや瀬川がそう言っ

ていても、ただひたすら、怒っていただけの僕なんて。……惨めなだけだ。

「二人とも。ありがとう」

瀬川がお礼を言う。卯の花さんは嬉しそうに笑っている。本当に人の単に何かするのが好きなんだ。でも僕は。

「僕は、やっぱり胸を張れるようなことはしてないよ」

僕がそういうと、卯の花さんは頬を膨らました。

「そうでもねえぞ」

不意に保健室の戸が開いて佐藤さんと千早さんが保健室に入ってきた。

「お前が瀬川をかばってくれたおかげで、瀬川に対する態度が少しは良くなるかもしれん。目黒の奴には俺が説得しておいた」

「ありがとう。でもそれは君の説得のおかげ、なんじゃないのかい？」

佐藤くんはムツとした表情になる。なんだろう、僕はなにかいやなこと言ったのだろうか。

「お前な、しまいにや怒るぞ。俺がお前の手柄だつったんだ。お前は自分の行動に間違いがあるとでも思ってたのか」

「……」

「尾崎くん。私は尾崎くんのこと見くびってたみたいだわ。実のところ、瀬川さんとは話せるだけ、だと思っていたから。ああやって行動に移せるとは思ってなかったのよ」

「千早さん……」

千早さんは卯の花さんの方に近づいていって、なにやら二言三言交わし、僕の方を見た。

「ただ今より、私千早なつきと」

「卯の花つぼみは」

「「瀬川奈々実の友だちになることを宣言する」」

瀬川も驚いて二人の事を見上げる。何か言おうと口を開こうとしているが、言葉にならずに半開きでものすごく間抜けな顔だ。

「さあ瀬川さん。これからは休み時間はいつも一緒よ」

「瀬川さんが怪我をしても、わたしが治してあげられるよ」

うむ。もしかしたら瀬川にとっては相性がいい二人なのかもしれない。千早さんは神経図太そうだから、瀬川が何か異行に走っても気にせず付いていけそうだし、卯の花さんは瀬川の自傷行為にとつては丁度いい治療薬になりそうだ。

「ほら尾崎くんも、佐藤くんも宣言して」

「は？」

卯の花さんから思わぬ振りをされた。返答に困る僕と佐藤くん。

瀬川もなんだか所在なさげだ。

「なあに？　ここまできて友だちになりたくないなんて言わないよね」

「いや、僕は別に構わないんだけどさ……」

宣言つて、あの宣言します、つていうやつを言うのか？　正直かなり恥かしいぞ。

「卯の花。俺はあくまで中立な立場をだな」

佐藤くんも焦っている。僕はともかく、佐藤くんの性格ではもつと恥かしいんじゃないかと思うんだけど、どうやら卯の花さんと千早さんにとってはそんなこと構いならしい。

「佐藤。君は男の子でしょう？　男にはやらなきゃいけないときがあるんだ、とか、昔誰かが言つてたような気がするんだけど。言つていいかしら、これ」

「千早、その話はよせ！」

佐藤くんと千早さんは昔からの知り合いなのだろうか。千早さんも佐藤くんのこと呼び捨てだし。

「佐藤くん。平等な立場とか言つても、他にもお友だち居るじゃない。瀬川さんはだめなの？　むしろそれって平等じゃないような……」

「ぐ……」

佐藤くんは困りきっている。というか多分、内心もう諦めている

のだろう。顔が引きつっている。

「……分かったよ」

「ありがとう、佐藤くん」

卯の花さんは嬉しそうだ。さて僕は、今のうちに保健室を出て教室へ。

「後は君だな尾崎くん」

帰れなかった。さすが千早さん。僕の浅はかな考えなど全てお見通しという事か。保健室の出口へ先回りされた。

「はあ。仕方ない。佐藤くん。男にはやらなきゃいけないときがあるんだ」

「知るか」

「良かった。それじゃ、さっき私たちがやったようにお願いね」

ここは腹をくくるか。佐藤くんと打ち合わせて、僕たちは瀬川に向かつて言う。

「あー、ただ今より、この僕、尾崎蒔良と」

「佐藤恵は」

「瀬川奈々実の友だちになることを宣言する」

とりあえず一件落着。で、いいのだろうか。全く、始業式の初日、というか、まだ始業式すら始まっていないというのにこの調子ではこれから先の自分が思いやられる。と言っても、千早さんや佐藤くん、卯の花さんの三人どれもいい人たちだし、瀬川も、いままでは孤独な毎日を送っていたのだとしても、これからはそういう生活とはおさらばだろう。

やれやれ、なんだかどつと疲れた。できればこんな日はもう御免被りたい。けれど、クラスメイトたちの瀬川に対する接し方や認識が多少改善されるようならば、その度にきつと僕が汗を流している事になるのだろう。僕だけでなく、千早さんや佐藤くん、卯の花さんの三人も。

全く。おさきまっくらだよ、自分。

第一章・002

教室での騒ぎを聞きつけた足立先生は、それはもうご立腹だった。これから一年、どう足掻いたって同じクラスでやっていくんだから、つまらない事で揉めてんじゃねえ、と、主に問題を起こした僕以下五人は特に叱られた。新学期初日から幸先が悪い。これ以上僕に対する心象を悪くしてしまうと推薦を受ける事がなくなる。今後気をつけよう。

と、改めて志したところであまり意味はないような気がする。今回の件で、瀬川がどれほど人から嫌われているか僕は思い知ってしまった。だからといって今更後戻りはできないし、僕はこれからも瀬川に関係のある何かしらの事柄に振り回されていくのだろう。

始業式では校長先生が、一年生は部活に入ってどうたら、二年生は中堅としてこうたら、三年生は最上級生としてうんたらといった、とてもありがちで退屈な、ありがたいお話を長々としてくれた。おかげで立ちながら夢を見てしまいそうな程の眠気に襲われた。この学校の校長は話が長すぎる上に定型文すぎるんだよな。おかげで毎年毎回の集会の度にまたその話が、と思わずにはいられない。

そんな始業式も終了し、国語と数学の休み明けテストをそこそこの出来栄えて終えて現在昼休み。瀬川と、さつそく友だちになった千早さんから三人と共に昼食を摂る。学食なんて立派なものはないので、購買で買ってきたパンや家から持参した弁当を食べる。去年はまた別の友だちと共に昼休みを過ごしていたはずだが、初日からメンバーが全交換とは恐れ入る。

「千早さん。他の仲のいい友だちはいいの？」

僕は自分の身を省みずに瀬川の事を庇ってくれた千早さんに聞くけれど、千早さんは別段何ともないように答えた。

「大丈夫。彼女たちも分かってくれたから。でも、それを言うなら尾崎くんこそ、他に友達が居るんじゃないの？」

「元々の友だちは皆他のクラス。と言っても、別段そこまで仲が良かった奴は一人くらいしか居なかったし、そいつは瀬川とも普通に関われる器を持っているから、呼べば来るとも思っけど」

「つか、瀬川とは違う意味で目立ってるからな、あいつ。境遇は似ている、ようで似てもないか。」

「へえ。卯の花さんは人気あるし、佐藤は？ 他の友だちとの関係やいかに」

「どうだろうな。ま、別にいいんじゃないねえの。俺が誰と付き合いおうが、俺のダチが誰と付き合いおうがそれは自由だろ。なるようになるさ」

「このメンバーは皆神経が図太いな。むしろ一番繊細なのって瀬川なんじゃないだろうか。」

「卯の花さんは？ いくら人気があるって言っても」

「んー？ どうだろ。わたしは別に困らないなあ」

「尾崎。こいつの場合はな、卯の花と距離をとると、いざ自分が怪我したときに困るんだよ。怪我を治してくれる奴が居なくなるからな」

「いや、保険の先生頼れよ」

「いくら治療の腕が良かったって、一応免許持つてる先生も居るわけだし。」

「正直に言つて、あんな教員に面倒なんて見てもらいたくはないがな。だから皆卯の花を頼るんだ」

「哀れ、保険教員。」

「……ま、卯の花さんがいいんじゃないんだろうけれど」

「尾崎くんも怪我したらわたしに言つてね」

「本当にやさしいなこの人は。でもなおさら怪我なんてできないなあ。あんまり人に迷惑がかかるような行為は慎まないと。」

「よし、今日はあと英語の試験を受ければ終わりね。いつもより早いし、皆でどっか行く？」

「千早さんが張り切つて提案してきた。悪くはない申し出だがどう

しよう。とりあえずみんなの反応を待つ。

「さんせー」

卯の花さんは迷いなく賛成。明るすぎるなこの人。

「俺は用事があるし、今日はすぐ帰るぞ」

佐藤くんは都合が悪いらしい。後は瀬川だけだが。

「あら、残念。瀬川さんはどうする？」

実はこの昼休み、一度も口を開いていないのだった。こういう、人と会話をするということに慣れていないのだろうか。黙々と弁当を召し上がっている。

「……………」

「瀬川さん、どうしたの？」

「そついえば私、人と一緒に遊びに行つた事なんてない」

初めて口にした言葉がそれか。まあ、今までの瀬川の境遇を考えてみればあり得ない話でもないけれど。

「じゃあ、この際だ、思い切り遊ぼう」

「あ、でも、今日は遠慮しておくわ。私も用事があるの」

何かよからぬことを考えているんじゃないかな。

「そう。残念ね。じゃ、また今度都合がいい時に遊びましょう。尾崎くんはどうするの？」

そつだなあ、今日は特に用事はないし、了承したいところだけだ。なんとなく気まずいような。

「気まずいだなんてそんなことはないよ。ね、卯の花さん」

「うん。ないと思うよ」

また見透かされた。実は読唇術でも持っているんじゃないだろうか千早さん。まあ、二人がそつ言うのなら、別に構わないよな。

「尾崎くん。駄目よ。私と用事があるの、忘れたの？」

瀬川がなにやら僕には身に覚えのないことを言ってきた。……じつと僕を見つめてくる瀬川。完全に口裏を合わせろ、ということらしい。だがまだ僕が否定さえすれば、瀬川の謎の計画は崩壊する。はず。

「ごめんなさいね千早さん、卯の花さん。実は尾崎くんとはこの後大事な大事なお話があるのよ」

僕が行動に移す前に瀬川がどんどん僕との約束を勝手に構築していく。

「大事な話？」

「そう。とつてもプライベートなお・は・な・し」

瀬川、それは卑怯じゃないかおい。千早さんや卯の花さんがなんだかドキドキしているぞ。佐藤くんは完全に傍観モードだし、こうなると僕が慌てて否定すると逆に肯定しているように思われてしまうだろうし。やりおる、瀬川やりおる。

「ご、ごほん。そ、そう。大事な話ね。それはしょうがないね。うん。そう、分かったわ。尾崎くん」

「……なんででしょう」

「ぐっどらつく」

やめてくれ。

否定するまもなく瀬川から押し付けられた約束の時間、つまり放課後がやってきた。佐藤くんはさっさと帰ってしまったし、千早さんと卯の花さんはなんだか落ち着かない様子で僕たちに別れを告げて行った。教室に取り残された僕と瀬川。……居づらい。

「さてと、行きましようか」

暫くして瀬川が口を開く。用件も何も伝わらないその一言に一体どれだけの強制力があるか。この場に居合わせないときつと分らない。

「行くつて、どこへ」

「どこかしら。どこがいい？」

「決まってねえのかよ。僕に言われても、って感じなんだけれど」
無表情の瀬川。一体何を考えて行動しているのだろうか。観察眼に優れた千早さんでも、瀬川の行動を読むのことはできないんじゃないだろうか。

「冗談よ。ほら、今朝話したじゃない」

「話って……。ああ、美術部にどうこうって話ね」

いまさら入っても仕方ない上に、別に今日でなくても問題のない話なんじゃないか。それに、この話の流れから行くと、どうやら美術室に行きたいらしいが、始業式の本日、美術室なんて開いているのか疑問である。

「別に入部しなくてもいいわ。どうせ私だって活動してないし。ただ、ちょっと気になってるのよ」

「気になる？」

瀬川は言おうか言うまいか考えているようだ。なんだろう、美術室に何かしらのサプライズでもあるのだろうか。

「まあいいわ。どうせ暇でしょ。付き合って頂戴」

瀬川は有無を言わず歩き出した。僕は渋々付いていく。……このまま付いていくと、瀬川がみんなから避けられている理由がはっきりするかもしれない。とはいえ、それを今更知ったところで、どうにかなるものでもないだろうが。

廊下を歩いている途中瀬川はずっと無言だった。とりあえず横に並んで一緒に歩いているが、なんだろう、空気が微妙だ。そういえば瀬川は僕のことをどう思っているのだろう。元はといえば僕から先に話しかけ、ある意味それが原因で今日みたいな事が起こったわけだから。心の底では迷惑がっているのかもしれない。瀬川は元々表情が読みにくいから、僕ではそんなのわかりっこないのだけれど。

「あー、なあ瀬川」

僕は沈黙に耐えかねて瀬川に声をかけた。

「千早さんたちのこと、どう思う？」

「何よ突然」

「いや、特には」

再び沈黙。僕の問いには答えてくれないのだろうか。それとも、意外に恥かしがっているだけなのだろうか。

「……いい人たちね」

「え？」

瀬川がポツリとこぼした言葉には全てが込められていた。なるほど、まんざらでも無さそうだな。いままで孤立していた分、千早さんらの好意は素直に嬉しいのだろう。少なくとも僕にはそう見える。

「……あなたは別よ」

「……ん？」

「うつとおしいわ」

「……切ねえ。」

ようやく美術室に辿り着く。瀬川は何も言わずに美術室の戸を開けた。普通に開いているということは、部の活動をしているのだろうか。僕も後に続いて美術室内へ入る。

そこに僕が考えていた光景はなく、そこには誰一人として居なかった。鍵が開いていたのだから誰かしら居ると思ったのだけれど。電気も付いていないし、なんだか暗い。

「誰も居ないじゃないか」

僕が言っても瀬川は立ち止まらなかった。見れば美術室の奥にカーテンで仕切られた小部屋があることに気付く。どうやら瀬川の目的地はあそこのようだ。

「……」

瀬川はその仕切りの向こう側へ入っていく。……僕も行くべきだろうか。でも、僕は一応部外者なわけだし、あまり無断で入るのも良くないような気がするのだけれど。

「どうしたの尾崎くん。こっちょ」

カーテンの向こう側から瀬川の声がする。僕はその声に従い、恐る恐るその向こう側へと入っていく。

「……これは」

小部屋の中には大きな絵が一つだけ飾られていた。どうやら油彩画のようだ。人物が描かれていて、僕のような素人が見ても、それはとても完成された作品である事が伺える。だが、なんだろう。僕はこの絵をどうにも好きにはなれない。

「この絵がどうかしたのか？」

「気味悪いわね」

「瀬川、君、あくまで美術部員だろう。この絵が誰の絵だか知らないが、あんまりそういうことは言わないほうがいいんじゃないか？それともこの絵は君が描いたのか？」

僕はもう一度絵を眺める。うん、見れば見るほどすばらしい絵だ。でもやはり、見れば見るほど不安になる。もしも今の時間が真夜中で、肝試しでもしている中にこの絵を見てしまったら腰を抜かしてしまうだろう。

「この絵を見て不気味に思わないなんて、あなたどうかしているわね」

「……いや、まあ、な」

思わないわけがない。それはきつと、この絵に描かれている人物の性別が特定できないからだ。人は人の形をしたものに自然と恐怖を覚える。いや、正しくない。不完全な姿でありながら、人に近い形状のものに恐れ怯えるのだ。

この絵には、首が描かれていなかった。

それがひたすら、僕の心に不振感を募らせる。そう、ただ単に、首がなくて、性別が特定できないだけの絵だ。そんなものにいちいち不安を覚えるなんて、どうかしてる。

「この絵になにかあるのか？」

「いいえ。ただ、なんとなく尾崎くんにも見せてあげたくて。理由は分からないのだけれど」

「……この絵は何度も見てるんだろ。なんで今更」

瀬川は黙って絵を眺めていた。僕はようやくこの絵の不気味さに慣れてきた。が、そうそう何度も眺めるようなものでもないな。

「瀬川、僕は外に出てるよ」

「……」

返事がないのでそのまま放っておいて僕は小部屋から抜け出す。薄暗い美術室。あちらこちらに画材やら描きかけの絵やらが放置されている。僕はとりあえず一通りに眺めて周ることにした。

一つ目。なんだが抽象的な絵だ。ところどころ乱雑な線が描かれている。全然絵のテーマが見えてこないが、これはこれで面白い。二つ目。これはイラストだろう。ファンタジックなドラゴンの絵が描かれている。といっても、そこまで複雑なデザインではないし、ただ遊びで描いているだけのようにも見える。

三つ目。これはただの石膏デッサンか。それにしても上手い。すごくリアルだ。僕にもこんな絵の才能があればいいのにも思う。適切に手にとっては適当な解釈をするが、僕は芸術に携わった事のある人間じゃないため、その解釈が的を得ているかは甚だ疑問である。実際、どの絵が良くてどの絵が良くないのか判断は付かない……どうして瀬川は僕を美術室になんて連れてきたのだろう。

しかも、僕だけ。千早さんや卯の花さんでは駄目だったのだろうか。なにか僕でなきゃいけない理由が？ いや、自惚れるな。単に瀬川の気まぐれということもあるだろう。……はあ、なんだか考えるのも面倒になってきた。

「それにしても遅いな。いつまで見てるんだ？」

僕は再び、カーテンで仕切られた小部屋へと入る。瀬川は椅子に座って俯いている。なんだろう、なにか考え事だろうか。

「瀬川？」

呼びかけても返事がない。首は下を向いていて、長い髪に隠れて表情も伺えない。

「……瀬川？」

もう一度声を掛けるがピクリとも反応しない。……どうした。何があったんだ？ 僕は慌てて左腕を見る。手首は……切れていない。ということはリストカットはしていないか。

「おい、瀬川」

僕は瀬川の肩を揺する。やはり反応がない。一体どうしたというんだ。新手のドッキリか？ 僕が瀬川の肩から手を離すと、瀬川の身体は斜めに倒れていく。

「おい瀬川！」

慌てて身体を抱き起こす。ようやく瀬川の顔を拝む事ができた。
しかし、目を閉じていて反応がない。

「……瀬川」

僕はその姿を見て、言葉を濁した。なんと表現すればいいのか。
こんな経験は初めてだ。このあと僕は一体どうすればいい？

「……………」

言葉を発さない瀬川の唇。冷たい体。閉じた瞳。綺麗な髪。まるで精巧に作られた人形を抱いているようだ。こうして見れば、どんな男性の心でも射止めてしまえそうな、麗しき令嬢。油断したら僕まで惚れてしまいそうだ。

だが、そんな気持ちと裏腹にこみ上げてくるこの感情の矛先を、一体誰に向ければいいのだろう。動かない瀬川の身体を抱いて、なるべく冷静を装って考えた。考えた末に導き出した答えは、とりあえず、瀬川の事は放っておこう、という事だった。

僕は瀬川の身体を壁に寄りかからせ、おそらく、この大きな絵を埃から守るために被せてあっただろう布を丁寧に折りたたみ、瀬川に被せてやった。

「おやすみ、瀬川」

僕は小部屋から抜け出し、最寄の椅子に腰掛ける。……全く、本当、面倒な奴だな、あいつ。僕は思考をめぐらせ、その内、目の前が真っ暗になって……夢の中へと潜り込んでしまった。

……………

……………

……………

「……………ん」

頭の中で声がする。

「お……………」

澄んでいて綺麗な声だ。

「……………」

なんとも心地よい。

僕は深い海の中に沈んでいる。目を開くと、水面を越えた先の、太陽の光が僕の身体を貫いてくる。暖かい。そして、懐かしい。この感じはきつと、僕がまだ赤ん坊だった頃、母親のお腹の中に居たときの安心感だ。そう。僕は今赤ん坊だ。足を伸ばすと、僕を包み込む壁に当たる。手を伸ばせば、母親の温もりが実感できる。

でも、いつまでもこのままではいられない。早く外の世界を見に行かなくては。

僕は、深く深く沈んでいく自らの身体を思い切り起こし、水面に向かつて手を伸ばす。魚みたいに足を一生懸命に動かして、あの太陽の光を目一杯浴びるために。

………

………

………

「……ん……」

目を開けると、まず真っ先に天井が見えた。電気も点いていない薄暗い美術室の天井。どうやら僕は眠ってしまったらしい。

「ようやく目を覚ましたのね」

すぐ耳元で声が聞こえた。僕が少し顔を上げると、そこには見慣れた少女の綺麗な顔が、さかさまに映った。

「……おはよう、瀬川」

「まったく、お寝坊さんなのね、尾崎くんは」

瀬川が僕の顔を真上から覗き込む。……ん？ これはどういう状況だろう。そういうえば頭がなにか柔らかいものに乗っかっている。

僕の真上には瀬川の身体があつて、瀬川の顔は真っ逆さま。つまりこれは、その、あれだ。

どうしよう。気付いたら猛烈に恥かしくなってきた。いくらなんでも、ありえない。

「あらあら、顔を真っ赤にして間抜けね」

「……なあ瀬川。僕はこういう寝相をしたらこういうことになるのか、説明できるか？」

「簡単な事よ。私があなたの頭を、自分で自分の膝に乗つけたから」
なに考えてんだこいつ！

「どうしたの？ 恥かしいの？ もっと甘えてもいいのよお坊ちゃん」

いやだ、死にたい。いや、もう死ぬ。恥かしさの余り心臓がバクバクいつてて、その内過労で止まる。まさかとは思うが、さっきの夢の中で感じた安心感ってこいつのせいかな？ いやいや、認めたくない。

「よし、起きた。今起きた。だからその手をどかしてくれ頼むから」
瀬川が僕の頭を抑えているせいで起き上がるうにも起き上がれない。手で無理やりひつpegがすることも出来なくはないが、いや、怖い。無理。

「あと、その、なんですか。物騒なものは仕舞ってくれ」
だって、もう片方の手でカッターナイフ握ってるんだもん。

「いいじゃない。私みたいな美人に膝枕してもらえて、あなた幸せモノよ。幸せついでに、耳掃除してあげる」

「あんた僕の母親かよ！」

「黙りなさい。お母さんの言う事は聞くものよ」

なんだかこいつも嬉しそうだぞ。僕みたいな男にいらぬ恥をかかせた上、これからもっと恥かしい事をしようとするな！

「さてはお前、エスだな」

「どうかしらね」

瀬川にこんな一面があるとは思わなかった。マジで何考えてるかわからねえ。しかもここは美術室。もしも誰かが来てこんな場面に遭遇したとしたら、僕はもう立ち直れない。

「人に見られたらどうする！」

「大声出すと、余計集まってくるわよ。安心して、人に見られたところで、私は困らない」

「僕が困るってんだよ」

最早聞く耳持たず。瀬川は、どこに仕込んでいたのやら、綿棒を

取り出して僕の耳に突っ込んだ。

「ほら、耳、こっち向けて」

……抵抗むなしく、僕は同級生に耳掃除させられるという、夢でもありえねえような状況を体験する事になってしまった。もういいや、やくそくだ。

「気持ちいい？」

「あー、意外とな」

それにしても、やっぱりなにか安心できるな。卯の花さんみたいな、元から優しい、というのとは違って、いや、瀬川の場合のこれは優しさでは決してないのだろうけれど。それでも、まだ母親に甘えていた小さな頃に戻ったような気がして。

「……はい。じゃあ反対側」

「ん」

瀬川の為すがまま為されるがまま。僕はこのひと時を過ごしたのだった。

ようやく解放された頃には日もすっかり沈み、元々薄暗かった美術室も真っ暗になった。結局、今日瀬川が一体何をしたかったのか分からなかった。……わざわざ膝枕するために、耳掃除するために僕を連れてきたのだろうか。いや、そんなわけない。これはきつと単なる気まぐれだ。そう思いたい。

「さて、帰るか」

「そうね。勿論送っていつてくれるわよね」

「……しっかりしてるよ、お前は」

なんだかすっかり瀬川のペースに巻き込まれてしまったな。でもなんでだろう。心の中で、それも悪くないと思っている僕が居る。実質まだ二日しか言葉を交わしていない相手に対してこんな気持ちになるなんて、僕もどうかしている。

「瀬川の家ってどの辺なんだ？」

「交差点を右に曲がった先。商店街の手前らへん」

僕たちが通う学校は一本の坂道を登った先にある。生徒たちが何

処に住んでいようと、必ずその一本の坂道を登らなくてはならず、その坂道を下るとに交差点があるのだ。僕たち生徒が交差点、と言えば、必ずその場所のことを指すのだ。

「あの辺か。買い物楽でいいな」

僕と瀬川は美術室を出て、並んで歩いた。鍵は開けたままだ。元々開いてたのだし、帰りも開け放しで大丈夫だろう。

「そうでもないわよ。あそこ、この街一番の商店街だし、どんな時間でも混んでるから結構大変なのよね」

学校はすっかり静かになって、ひよつとすると、生徒用昇降口は鍵が掛けられているかもしれない。

「尾崎くんの家はどの辺なの？」

そうなると、教師用の昇降口から外に出なくてはならない。生徒用昇降口からはそこそこの距離があり、こうしてだらだと会話しながら歩くには、丁度いいのかもしれない。

「僕の家は駅の近くだよ。だから、瀬川の家からは反対側」

商店街反対側、つまり、交差点を左に真っ直ぐ行くと駅がある。

遠くから来る生徒は電車に乗ってその駅で降りる。僕が学校へ行く時間帯には、駅から生徒たちが出てくるのをよく見かける。

「あら、じゃあ交差点までも構わないわよ」

「いや、別にいいさ。大して距離もないし」

何より、僕はもう少し瀬川と話をしていたいと、心の片隅で思っているのだった。なんだか、この時間の居心地よさが、僕の間を鈍らせているのだろう。

「……鍵がかかっているわ」

案の定、生徒昇降口は閉鎖されていた。こんな遅くまで、僕たちは何をしていたのだろう。いや、思い出したくない。

「教師用から出るしかないな」

学校用の上靴をロッカーに入れ、自分の靴を持っていく。廊下の電気も消されていて本当に真っ暗だ。

「……なんだか怖いわ、尾崎くん」

「何を今更。第一瀬川、お前に怖いもんなんてあるのか」

「いやあ、ごめんなさい。怖いのは僕でした。瀬川のカッターナイフに光が反射した瞬間、僕は本気で殺されるかと思った。」

「闇にまぎれて暗殺ですか瀬川さん。まじで勘弁してくださいよ」

「だって怖いんだもの」

「そんなもの持つてるほうが怖ええよ！」

教員用昇降口に辿り着いた頃、足立先生と遭遇した。ちょっと暗くて分かり難いが、どうやら眠いらしい。

「何打お前ら、まだ居たのかよ」

「……先生はまだ帰らないんですか？」

「そろそろ帰るよ。お前らこんな時間までなにやってたんだよ。部活はどこも休みのはずだろ」

「いや、何って。寝てた。うん。」

「実はですね……」

「ちょ、瀬川、何言い出すんだ。先生、なんでもありませんから」

「……そうか。まあいいけどな」

先生もそんなに突っ込んで聞いてこなくて助かった。全く、瀬川が口を開くときつとろくな事にならない。

「ま、あれだ。お前ら仲いいみたいだし。俺もちつとは安心してんだ。尾崎、瀬川の事よろしく頼んだぞ。じゃあな」

足立先生は言うだけ言ってさっさと職員室に戻ってしまった。僕は瀬川の直属の担当じゃないですよ足立先生。

「それじゃ、行きましょう」

昇降口を出ると、広い宇宙に星々が輝いているのが分かる。雲ひとつない空だ。この街は結構田舎だし、街灯が少ない分星は良く見える。

「綺麗な星空ね」

「そうだな」

僕たちは揃って坂道を下っていく。少し小高いところから見下ろす町並みは、この空の星々と肩を並べる輝きを誇っている。

「……そういえば、なんだけど。あの絵、そんなに気にしてどうするんだ」

僕は本日の本当の目的を思い出して瀬川に問う。どうせまともな返答なんて返ってこないだろう事は分かっているのだけれど。

「ああ、あれね。あの絵を見るとちよつとね、不安になるのよ」

「それは分かるが、たかが絵だろ？ 何か問題あるのか？」

瀬川は考え込む。僕は、瀬川がここまで思い悩むほどの何がああ絵に込められているのか分からなかった。僕は本当に芸術というものが分からないのだ。

「分からないけれど、明日もちよつと付き合つてね。明日からは美術部も活動を始めるだろうし、あの絵に関して詳しい人がいると思うわ」

「いると思うって……。お前一応美術部員だろ」

「部員でも、知っている事と知らない事は部外者と等しく存在するもののなのよ」

どう考えても同等ではないと思う。

「で、なんで僕が付き合わなきゃならないんだ。それ相応の理由があるのか？」

「ん。……それはあれよ。秘密って事でひとつ」

本当は理由なんてないんじゃないのか。まあ瀬川の心の中なんて僕には分からないし、どうせ暇なんだから別に付き合つててもいいか。

「オーケー。僕でよければお供しますよお姫様」

「……恥かしくないの？」

散々人に恥かしい事させておきながら平然としてやがる。もう何も言うまい。

「わたしは恥かしいわ」

「知らねえよ」

坂道を下り終えて交差点を右に曲がる。商店街まではまだそこそこ距離はあるが、瀬川の家に着くまで、僕たちは他愛無い会話をし

ながら歩いた。

徐々に商店街を行き交う人々のせめぎ合いが聞こえてくる。この街では一番にぎわう場所だ。瀬川の家はこの商店街の手前に位置しているらしい。

「こんなにも近いと結構迷惑なのよね」

「……分かる気がするな。で、どこだ、お前の家」

「この小路地入ったところ。……じゃ、ここでもいいわ」

「ああ。じゃあな」

「またね」

瀬川は薄暗い路地の中へと消えていった。僕は身体を向きなおして、駅のほうに歩いていく。

なんと今日は騒がしい日だった。高校三年というのはこうも騒がしいものなのか？ いや、まだ初日だし、全てを悟るには早計過ぎるか。千早さんといい卯の花さんといい佐藤くんといい、僕のクラスには瀬川の事を理解してくれる人が居る。というのも変な話なんだよな、やっぱり。

瀬川は確かに変な奴だけれど、彼女にまつわる噂はやっぱり単なる噂に過ぎないんじゃないかと僕は思う。僕はこうして瀬川と一緒に帰ってみて、そのことを強く実感している。

「……はあ。やっぱりただの間違いなんじゃねえのかな」

僕は思わず独りごちてしまった。

まあいいさ。どうであれ、僕はこのままずっと瀬川と共に生活していく事になるんだろうから。それによってどんな未来が待っているようにも、僕はきっと後悔はしないだろう。なぜならこれは、僕が自ら選んで行っている事なのだから。

なにはともあれ、これから先どうなることやら、やっぱり僕には予想できない。おさきはいつでもまっくらなのだ。

第一章・003

翌日の朝。僕はいつも目覚ましがなる前に起きるので、実は目覚ましなんて要らないんじゃないかと常々思っている僕である。欠伸をしながら階下へ降りる。居間に辿り着くと僕の姉さんが朝食と僕の弁当を拵えてくれていた。

「おはよう明里姉さん」

「おはよう弟くん。今日は雨が振るそうだよ」

僕の家では母親はとくに他界し、父親も単身赴任先から帰って来ず、今年二十歳になる姉さんと二人で暮らしている。生活費は父親が一部口座に入れてくれるものの、大半は姉さんがどこから稼いできたお金でまかなっている。僕の姉さんはひょっとしたら宇宙人が何かじゃないかと疑ってしまうくらい人間離れしているので、大学に通いながらも収入の多い仕事を見つけては出稼ぎに出かける事もしばしばだ。

「天気予報でそう言ってたのか？」

「今更ね弟くん。勿論あたしの勘だよ」

だろうな。勿論分かってたけど。勘と言いつつも姉さんの事だから、空気の流れとか雲の流れとか湿度とか肌で感じ取って判断しているのだろう。人口の街に暮らしているくせにかなりの野生人である。

「姉さん、大学のほうは大丈夫なの？」

「前の仕事で稼げるだけ稼いだし、しばらくは学生生活をエンジョイするつもりよ。そうそう、今度学校の創立祭あるんだけど来る？」

「考えとくよ」

姉さんが準備してくれた朝食を摂り身支度をする。今日から通常通りに授業があるので忘れ物がないように確認し、出発までの間、居間で姉さんと団欒する。

「弟くん、良かったね」

「何が？」

「進級早々女の子のお友だちができて」

「……なんで？」

ただのあてずっぱうか？ 僕は昨日の出来事も春休みでの出来事も姉さんに話したことはないのだけれど。いや、まあ女の子のお友だちができたっていうのは本当だし別段隠すような事でもないんだけど。

「まあ、な」

「はっはっはー聞いたよお弟くん。その女の子に膝枕してもらったんだってねえ」

「ぶっ！」

いくらなんでもそこまで知ってるなんて異常だぞこの姉さん。いやまて落ち着け僕。慌てたら肯定と受け止められるぞ。

「……そんなわけないだろ姉さん。デタラメもいい加減に」

「でたらめじゃないよ。弟くんと同じクラスの男の子から聞いた話だし」

それこそ変な話じゃ……。まさかあの時僕が寝ていたときに実は誰かが美術室に来ていて……。

「誰から聞いたんだよ。今日の朝とつちめてやる」

「やめた方がいいと思うよ。あたしでさえ手を焼くもん、そいつ」

「姉さんの知り合いなのか？」

「そうだよ？ 名前、櫛っていうんだけどね。しょうもない悪ガキだよ」

櫛、か。確かにいたなそんな名前の奴。人の秘密を勝手にばらすなんて時点で関わりあいたくないタイプの人間であることは間違いないな。

「ま、櫛から聞いたけど、その女の子のためにクラスの子と喧嘩したんだって？」

「喧嘩って程じゃないさ。ただ、その子、瀬川っていうんだけど、そいつは生徒たちから良く思われてなくてさ。僕はなんだか理不尽

だと思つて瀬川の事庇つただけなんだよ」

「ふうん。いいじゃないか。それでこそあたしの弟だ。あたしは誇りに思うよ、あんたのこと。これからその瀬川ちゃんと仲良くしてあげなね」

全く。姉さんときたら、ただそれが言いたかっただけの癖に回りでどい事を。姉さんとともにやりあうと本当に疲れるな。精神的に。

「当たり前だろ。じゃ、僕はそろそろ行くよ」

「いつてらっしゃーい」

僕はかばんを手に取り家を離れた。

駅前の通りに差し掛かったところで、駅からたくさん生徒が出てくるのが見えた。この時間帯は通勤ラッシュのごとく生徒たちの群れが出来上がる。通日も少し混み合うので、僕はいつも、ここで少し待つてから行く事になっている。それなら混みあわない時間帯を選べばいいのでは、と思うだろうが、こうして人の流れを眺めているのもまた面白いのだ。

生徒たちの数もまばらになった頃、見知った顔が駅から出てきたのを確認する。千早さんだ。相変わらず意味なくヘッドホンを首に掛けている。千早さんとは別に二人の女子生徒の姿も見えた。きつと、千早さんと仲のいい友だちだろうから、僕が話しかけるとするのは野暮だろう。

「おーっす、尾崎」

ベンチに座っていると横から僕を呼ぶ声が聞こえた。振り向くと、眠そうな顔をした佐藤くんと、もうひとり。クラスで見たことある顔だからたぶんクラスメイト。

「おはよう佐藤くん。と、えーっと」

「いい加減クラスメイトの名前覚えろよ。こいつは河野だ」

そんなこと言っただけで、今回のクラス替えで僕の知り合いは全員他のクラスにいつてしまったからなあ。寂しい限りだ。

「よろしく尾崎くん。俺は河野鉄平っていうんだ」

河野くんは朗らかに自己紹介した。笑顔が爽やかで人も良さそう
だ。勝俣くんのように僕と敵対するような人物じゃないだろう。

「で、なにしてたお前」

「いや別に。人間観察。佐藤くん家ってそっちの方なんだ」

「ああ。神社の近くだ」

この街の神社はいくつもあるが、駅側の神社は僕の家からもっと
先にある。ずいぶん遠いところにある神社なのだけれど、毎朝歩い
てきているのだろうか。

「大変じゃないの？」

「別に。このぐらいの距離だったら全然」

「自転車くらい乗ったらいいのに」

「面倒だ」

面倒で。歩くほうがよっぽど時間かかるし面倒なんじゃないだろ
うか。ずいぶん根性あるな佐藤くん。

「尾崎くんって結構変わってるよね」

突然河野くんがそう言った。……また瀬川と関われるなんて、と
か言うつもりなんじゃないだろうな。

「瀬川さんのことは別にね。うん。俺の友だちにも尾崎くんみた
いな人って珍しい、か、居ないかもなあ」

瀬川のこととは別、か。それにしても、それ以外で僕が変わり者扱
いされるような要素ってなにかあるだろうか。自分では思い当たる
節がない。

「まあいいや。さあ二人とも、早く行かないと遅刻するかもよ」

「ああ、そうだな。行くぞ尾崎」

二人が歩き出したので僕もついていく。駅から出てくる生徒はま
だ見受けられたが、もう知り合いは居ないようだ。

「二人はいつから知り合いだったの？」

僕は雑談の意味も込めてとりあえず聞いてみた。別に他人の人間
関係が気になるわけではないのだけれど、僕はこういう類の質問を
よくする。

「別に。特別仲がいいわけじゃねえけど、今日はたまたま一緒になっただけだ」

「俺は友だちが多いからね。学校外でも知り合い多いから、人探しとかは俺に頼むといいよ」

顔が広いつて事か。まあ、無駄に友だちの多そうな奴つてどこの学校にもいるよなあ。明里姉さんも顔結構広いし。

「尾崎くんはクラスで知っている人とか居ないの？」

「そうだなあ。木村くんや逸見さんは有名人だから知ってる。あとは立川生徒会長とか」

木村くんは陸上部のエーススプリンター。僕の学校では一番足が早い人物だ。通称チーター。一年の頃からその俊足を買われ、毎大会上位を維持し続ける生徒だ。逸見さんは合唱部員で、その歌声は全国でも通用するほど美しいといわれている。学校での発表会などでは彼女のソロが特に人気があつて歌姫とも呼ばれる。立川生徒会長に至つては、逸話がありすぎて語りきれない。瀬川とは違う意味で変人。僕の目には馬鹿だろこいつとしか思えないほど馬鹿なことしかからやらない。しかし全校生徒からの支持を受けるなど、カリスマ性は抜群。らしい。

「その三人を知らない人は居ないんじゃないかな。他には」

「他はあんまり。河野くんは誰がどんな人が大体分かるの？」

「大体ね。もちろん知らない人もいるけれど。学校に着くまでに何人が教えておこうか？」

ありがたい申し出だが口で説明されるだけじゃ分からない部分も多いだろう。顔と名前を一致させなきゃいけないわけだし。

「まあ、おいおい教えてもらつよ。でもそうだな、一人だけ教えておいてほしいんだけど」

僕は今朝の姉さんとの会話に登場した櫛という生徒のことを尋ねることにした。僕が櫛という名前を告げた瞬間、佐藤くんと河野くんの表情がそのままで一瞬凍りつく。

「あ、はは。櫛くんねえ。どうする佐藤くん」

「俺に聞くなよ」

なんだろうこの反応。その櫂というクラスメイトはそこまで恐ろしい人物なのだろうか。昨日見た限りじゃそこまで強面な生徒はいなかったと思うのだが。身体が恐ろしくでかかったり堅物そうな人は居たけれど。

「どうしたの二人とも。僕は何か聞いちゃいけないこと聞いた？」

「そうじゃないんだけどね」

「……尾崎。世の中な、知らないほうが幸せということもあるんだぞ。それでも知りたいのか」

そう言われるとなんだか怖くなってきた。誰に対しても平等、という信念を持つ佐藤くんにここまで言わしめる程の人物って一体何者なんだろう。つつか明里姉さん、そんなのと知り合いになっただけじゃねえよ。

「さあどうする尾崎くん。聞かない？」

「いや、やめとく」

「それが賢明だよ。どうせ同じクラスなんだから自然と耳に入ってくると思うしね。逆に、自分から首突っ込んで彼に目を付けられたら結構やばいよ？」

すでに目を付けられている可能性が高い事は伏せておくべきか。どうしよう、瀬川に続いて、聞くだけでやばそうなのと関わりなんて持ったたら僕の最後の高校生活が崩壊しかねない。

僕たちは交差点を右に曲がり、そこから続く坂道を登っていった。学校に到着し、教室へと向かう。途中、河野くんは他のクラスで朝の時間をすごすというので別れ、僕と佐藤くんは自分たちの教室へと入る。

瀬川の姿はまだない。僕は自分の席で荷物を降ろして座る。先に来ていた千早さんと、どうやら同じクラスだったらしいほかの二名は楽しそうに談笑している。他の二人もやけにテンションが高くて相手にするだけで疲れそうだ。

「良く見るとこのクラスは変な奴ばっかだな」

佐藤くんが僕の側に来てつぶやいた。

「平等精神を持ってるんじゃないの？」

「それとこれとは話は別だ。俺は誰とだって同じように接してやるが、そいつが変な奴だろうが構わない、ってだけのことだ」

佐藤くんの価値観的に言えばそういうことらしい。それにしても、そんなに変な人居るだろうかこのクラス。僕の知る限りでは瀬川と、立川生徒会長と、櫂くん、だけか？ そんなに多いとは思わないのだけれど。それとも、三人も居れば多いと言えるのだろうか。僕と佐藤くんの価値観の違いもあるのだろう。

僕と佐藤くんが他愛もない会話を続けていると、一人の生徒が僕の方へ近づいてきた。その生徒の存在に気付いた佐藤くんの表情が一変する。なんだか恐ろしいものを見る目だ。……となるとこの人が櫂という生徒？」

「や。おはよう佐藤くん。と、不吉な名前を持つてる蒔良くん」

「……おう」

一応返事はするあたり、佐藤くんも人ができているな。

「聞いていると思うけど、ボクが櫂だよ。櫂ナツカ。よろしくね」

「ああ、よろしく、櫂くん」

「なんだよ蒔良くん。ボクのような道化のことなど呼び捨てにしてくれたまえ。もっとボクを卑下にくれて構わないんだよ？」

なんなんだろう。思っていたほど普通に見える。ただ、その微笑が不気味に映るのだが、メイクをすればサーカスのピエロと見間違えそう。

「えーっと、櫂くん」

「ま・く・ら・くん？」

そんなに呼び捨てがいいのかこの男。訳が分からない。

「あー、櫂。僕の姉さんと知り合いなんだっけ」

櫂は嬉しそうに微笑みながら答える。

「クスクス。そうだよ。ボクと明里さんは大分前から知り合いでね、キミのことはよく聞いたよ」

思い出した。こいつ、僕が昨日瀬川と何してたのか見てたんだっ
た。そのことについて言及せねば。でも側には佐藤くんが居るし、
あんまり知られたくないなあ。

「フフ。佐藤くん聞いてよ。昨日ね、蒔良くんが……」

「おい櫂。それ以上口にしゃがったら瀬川にカッターナイフ借りて
お前の首掻っ切るぞ」

櫂が空気を読まずに昨日のことを話そうとしたので思わず脅して
しまう。が、それでも櫂は動じる事もなくへらへらとしている。

「やだなあ、蒔良くん。なにをそんなに怒ってるんだい？ なにか
やましいことでもあるのかなあ？」

こいつ確信犯か。性質悪いいな。いやだめだ。怒るな。落ち着け。
「あー、櫂。きみ、なんかいろいろ知ってそうだね。物知りなのか
な？」

ふと佐藤くんの方を見ると、なんだか世界を諦めかねないような
暗い表情をしている。どうしたのだろっ、櫂が側に居るからだろう
か。

「まあ、物知りといえば、物知りだね。何か教えて欲しい事があつ
たら聞いてくれて構わないよ。クスクス。まあ、ボクに構ってくれ
るような物好きは本当に珍しいんだけどね」

櫂はどうやら、人の様々な秘密を握っているらしい。そのネタを
利用して人の反応を楽しむ半外道といったところだ。半、というの
は、そこまで悪質なレベルではないと勝手に判断したからだが、性
格がよくないことには違いない。姉さんですら手を焼くって言うて
たからな。

「じゃあ、君が持っている知識をあんまり人に公開しないようにね。
特に僕の事とか僕の事とか僕の事とか。最初に言っておくけど、僕
を怒らせると怖いよ。姉さんの事は知っているから良いとして、僕
にはもうひとり強い味方が居るんだから」

「知ってるよ。和久井っていう怖そうな人でしょ。っていうか、彼
も結構な有名人じゃないか。彼がいるからこの学校の治安は守られ

ているといつても過言じゃないよね」

やっぱりご存知抜かりなしか。予想はできてたけど。和久井というのは僕の数少ない親友の一人だ。頭が悪い上に短気で喧嘩っ早く、乱暴で猪突猛進な男だ。この学校で和久井に勝負を挑んで勝てた相手は居ない。一年の時、この学校に居た不良グループを単身で壊滅させた程喧嘩の腕は強い。この学校ででかい顔をしたいのならまず和久井を倒さなくてはいけないとも言われているため、和久井の存在は治安維持のために一役買っている。

が、別に和久井が不良というわけではなく、生徒たちに実害が及ぶ連中たちを個人的にシメている内に有名人になっていったというだけである。そのおかげで教師たちからも頼りにされているほどだ。本人は大がつく程馬鹿だが、結構思いやりのある奴なのだ。

樗が僕と和久井が知り合いだという事実を告げたとき、佐藤くんは驚いたような顔をした。そりやそうだろうな。和久井は生徒たちからの人望はあっても近寄りがたいタイプの人間だし、僕も和久井と友だちなんだ、と言ったら単に相手を脅しているようにしか聞こえないらしいから言っていない。

「尾崎、お前和久井と知り合いだったのか」

「まあね。別にただの友だちだよ。和久井の力を利用してどうこうつてわけじゃないからそんなに驚かなくても」

「クスクス。彼と友だちな時点でやっぱりキミも変わりモノだね」

その台詞はそっくりそのまま返したい。たぶん樗のがよっぽど変人だろう。僕が保証する。間違いがないとは言わないが。

「ま、確かに和久井くんを相手にするのはごめんかな。彼も正義感が強いし、ボクの事を知ったら本気で退治しようとするんじゃないかな」

自分が害ある存在だと認めてるようなものだぞそれ。いやまあ、樗みたいな人間は退治されたほうがよっぽど世のためだと思うが。樗本人はそうは言っても全然怖がる風ではないし。

「いやあ、ボクは一年の頃から常々思ってたんだけど、変な人が多い

よねこの学校」

さっきの佐藤くんみたいなことを言い出した。櫛が言う変人の基準とはどんなものなんだろう。気になつてはみるがあまり知りたくないような気がする。

「正確に言うなら変な趣味をもっている人間、カナ。……」

突然櫛の表情が曇る。ひどく真剣な表情で僕の顔を見つめてくる。

……変な趣味つてまさか櫛、そっちの気があるんじゃないだろうな。

「櫛？」

「いや、蒔良くん」

櫛の表情と比例してその声色も真剣な音を奏でる。

「これは言うべきかどうかかわからないんだけど。根拠のないことはあまり話すと混乱するかもしれないし」

「なんだよ回りくどいな」

「……………」

櫛は黙って考え込む。すると櫛の背後から彼女の声が聞こえた。

「櫛くん？ 珍しく考え込んでどうしたの？」

本日遅めに登校してきた瀬川だ。佐藤くんが嫌がるタイプの櫛に平然と話しかけられるところを見れば、櫛の視点では瀬川も変人に映っているのだろう。いや、それは元からか。

「あ、おはよう瀬川さん。いや、昨日はどうも、面白いものを見せられてありがとう」

やっぱり見てたのかこいつ。多分僕が寝ている間に。

「どうしたの櫛くん。表情が優れないわね」

「……………」

櫛が瀬川の顔をじつと見つめる。その表情はやはり暗かった。

「いや、なんでもないよ。クスクス。蒔良くん、いい事を教えてあげよう」

櫛が不適な表情に戻る。

「……ボクはキミのクラスメイトだ。そして、もっとキミたちのことを良く知りたいと思ってる。だからボクはね、蒔良くん。何があ

つてもキミたちの味方だ。……ボクにできることならなんでも協力するよ」

「？」

「じゃ、又ね」

櫂は意味深な事を言い残して僕の元から去った。何が言いたかったのだろうか。あんな顔で味方だ、とか言われても説得力ない上に余計疑わしい。

「……櫂があんなことを言うのは珍しいな」

「そうなの？」

佐藤くんは僕と瀬川を交互に見る。

「お前ら昨日、なんかあったのか？」

いや、何もなかったですよ？ ええ決して。……僕が必死に否定したい事実を櫂が握っているんだよなあ。櫂の目には僕のことになり恥かしい奴として映っているのだろうか。

「今日の櫂くん、変ね」

「そうだな」

言われても僕には分からないのだけれど。櫂のような人間を僕はこの二年の間に認知できていないとは。僕は案外鈍感なのだろうか。……いや逆か。ああいう人間だからこそ、生徒たちも噂にするのを恐れていたのだろう。……それにしても、櫂が最後に残した言葉はどういう意味が？

「……まあ、いいか」

深く考えるほどのことではないと僕は判断し、僕は心の引き出しの中に仕舞い込んだ。

午前中の授業を終えて昼休み。昨日と同様のメンバーで昼食を摂り終え雑談をする。千早さんは途中で仲のいいメンバーに呼ばれて教室を出て行ったため、現在は四人で固まっている。

「卯の花さんと千早さんも結構仲いいよね」

「そうだね。いつからこうして喋るようになったのかは分からない

けど。千早さん、友だち多くていいなあ」

「？ 卯の花さんだって友だちいるでしょ？」

「うっん。わたしの場合友だちっていうよりただの私のファン。わたしを純粹に友だちって言うてくれる子って実は少ないの」

同性からも好かれるタイプだとは思っただけだなあ、やさしいし。そのやさしさが仇になってしまってるのだろう。なんだか複雑な気分だ。

「あ、そういえば、尾崎くんって、あの和久井くんと友だちなんですよ？　すごいなあ」

「すごい？」

「うん。あの人も友だち少なそうだし、なんだか怖そうだけど。有名人じゃない？」

有名人というなら卯の花さんだって有名人じゃないか。僕が卯の花さんと会話することによって、実はさつきから男子陣（卯の花さんのファンだろう）からのお暑いアピールを受けているんだけれど。

「別にすごくはないよ。なんなら呼ぼうか？　意外と普通だよ、あいつ」

「尾崎。それこそ騒ぎになるんじゃないか。クラス中が驚くぞ」

「別にいいんじゃない？　ただ友だちを呼ぶだけだよ」

僕は携帯電話を取り出し、三人の同意も得ずに和久井の番号をプッシュした。

「あ、和久井？　今暇ならこっちのクラス来ないか？」

数コールの内に電話に出る和久井。なんだかだるそうな声をしているが、僕は和久井と二言三言話をして、電話を切った。

「渋々来るそうだな。卯の花さん。あいつしょっちゅう怪我するから治療のしがいがあるよ」

「本当？　それは楽しみね」

人の手当てに生きがいを感じる子なのか卯の花さん。だがまあ、和久井の到来については反対もしていないようだ。佐藤くんはなん

か不安そうだけれど。

「尾崎、いいのか。困るのはお前じゃねえの」

「どうして？」

「言っちゃ悪いかもしれないけど、結構変り者ばつかと知り合いだからな、お前が孤立してしまうかもしれないぞ」

余計な心配をするなあ佐藤くんは。進級当初は孤立することを恐れてはいたけれど、今は佐藤くんたちがいるんだから大丈夫だよ。それにこれは勘だが、僕はまだまだ変な人との関わりが自然と増えるんだろうと思っている。

「……お、来たよ」

背が高く、ガタイの良い男子生徒が近づいてくる。うん。見た目は完全に不良だな。見た目だけ。和久井が教室に入ってきたとき、やはり教室は騒然としたが、すぐに安心した風にもとの空気へと戻る。他の変人たちとは違い、生徒から恐れられはすれど、信頼はされている。

「尾崎、急に呼び出すから何事かと思ったが、なんだこいつら」

だが和久井と僕が会話を始めた瞬間、再び教室は騒がしくなる。

……そんなに珍しい事かなあ？

「なんだか騒がしいな」

「ああ、和久井。今日は新しい友達を紹介しようと思って」

和久井は僕の周りにいる面々の顔をじつと見つめていく。卯の花さん。佐藤くん。そして、瀬川。和久井は瀬川を見た瞬間、一瞬顔をしかめたが、すぐにもとのぶつきらぼうに戻って言った。

「珍しいやつと友だちなんだなお前は。まあいいけどよ」

「みんなも知ってると思うけどコレ、和久井和仁。僕の友だち」
僕がとりあえず紹介するが和久井はぶつきらぼうなままである。

全く、初対面の人間に対してそういう態度をとっているから恐れられるんじゃないのか。

「……俺は佐藤恵。とりあえずよろしく」

「わたしは卯の花つぼみ。尾崎くんから和久井くんは結構怪我する

からって言われて、ね？ 怪我したらわたしに言ってね！」

本当に嬉々としているな卯の花さん。和久井の方は迷惑そうだけれど。

「私のことはご存知よね。瀬川奈々実よ」

瀬川はじーっと和久井の事を見上げている。そんなに見てたら首が疲れるだろうよ。和久井かなり背高いし。

「……なんだよ」

瀬川が不適な笑みを浮かべている。うむ。なにかたくらんでいる顔だ。お願いだからこんなところで奇行に走らないでくれよ。

瀬川は立ち上がって和久井の前に立つ。和久井は瀬川を見下ろし、瀬川は和久井を見上げる。しばらくすると、瀬川は今までにないような満面の笑顔を浮かべてこう言った。

「よろしくね和久井くん。あなたの噂はかねがね聞いてたからあこがれてたのよ和久井くん。間近で見ると格好いいわね和久井くん」

ああ、瀬川の背景にキラキラ花畑が見える。完全に友好的で好意的な人の良いお嬢様を演じている。瀬川は結構な美人だから、そんな笑顔で話しかけられたら、何も知らない男子はすぐに惚れてしまっただろう。

「背が高くて頼りになりそうだし、喧嘩もお強いんでしょう？ いいなあ、私もあなたみたいに大きくなりたいわ和久井くん。ねえねえ、不良グループを一人でノシたって本当？ だとしたらすごいわみんなのヒーローね！ 私が困ったときも助けに来てくれるのかしらヒーローさん。もしくは白馬の王子様かしら？ いずれにしろ良いものよねえ。私強い人好きなの。私王女様やるから王子様やってよ和久井くん。本当素敵ねえ格好いい惚れそうだわ」

ベタ褒めしまくる瀬川。僕はそれが演技だって分かってるからいいけれど、分かっているからこそ怖い。というか、瀬川は地味に、「私の下僕になって」って言ってるんだ。

「お、おい尾崎、なんなんだこいつは」

完全に困り果てている和久井。卯の花さんは状況を分かっている

のなんか楽しそうにニコニコしている。佐藤くんは見てみぬふり。その瞳の向こう側には何を映しているのか佐藤くん。

「その人は瀬川と言つて、僕もまだ知り合つて僅かだが一つだけわかつている事は、瀬川には僕の常識が通じないという事だ」

「あら失礼ね」

巢の顔に戻つて僕に向き直る瀬川。変わり身早ええよ。さっきの満面の笑顔はこの時空に投げ捨てたんだ。

「あらあら和久井くん、何をたじろいじゃつてるのかしらみつともない。これぐらいの誘惑こそ簡単に退けてこそ立派な男の子よ」

「……てめえが訳わかんねえことしてくるからだろうが」

「まあ尾崎くん。和久井くんはどうやら分かつてないようよ。私みたいな美少女が全身全霊を持つて魅力の全てを曝け出したというのにそれに気付かないだなんて。……ショック」

「あー魅力ねー」

ある意味魅力である。魔性の。あと本当にショックそうな顔をするな。それも演技なんだろうがなんだか同情を禁じえない。

「……卯の花さん。振られちゃったわ。私みたいな女の子は眼中にないんだつて。慰めて卯の花さん」

「あらあら瀬川さん可愛いわねえ。こら和久井くん。女の子の乙女心を無下にしちゃ駄目よ」

卯の花さんもノッてるなあ。それとも素か？ 残念ながら僕には判断できなかった。

女子二人の口撃を受ける和久井。すでにクラス中が見物モード。ところどころ笑い声とか聞こえてくるあたり、瀬川もなかなかクラスのマードメーカーになれるんじゃないだろうか。……だとしたら喜んでいいのか悲しんだほうがいいのか。

「和久井くんはだめね。……じゃあ、佐藤くんはどうかしら。ねえ、佐藤くん？」

佐藤くんは自分に向けられた矛先を避けようと席を立とうとするが腕をつかまれ逃げられない。男子として無理に振りほどこうとす

るのはやはりプライドが許さないのだろう。

「いや、その瀬川。酒でも飲んでるわけじゃねえよな」

「……ふえ？」

佐藤くん。その発現は逆効果らしいよ。完全にスイッチ入っちゃったじゃないか。変なスイッチが。

「な、なあ。尾崎。助けてくれ」

「男だろ、佐藤くん。あと和久井。逃げるな」

僕は逃げようとする和久井の腕を捕まえる。瀬川は酔っている振りをして佐藤くんのことを上目遣いで見つめる。女子の必勝パターンらしいな、上目遣いって。そこに涙を浮かべると破壊力が増すらしいけれど。

「瀬川さんって結構可愛いわよね、尾崎くん。いいなあ、なんだか妹に欲しいかも」

「卯の花さん。それ、本気で言ってるの？」

あんなのが妹に居たら一家は崩壊する。妹に全てを掌握され、財産、権力すべて妹のものになってしまう。そんな家庭はいやだ。

「う。瀬川、その」

佐藤くんは苦しそうだ。これはいい加減に助けてやらなきゃいけないかな。友だちとして。

「あー、瀬川。いい加減に……」

僕が声をかけると、瀬川の首が僕のほうに向いた。……嫌な予感しかない。

「……したら……」

「お・ざ・き・く・ん」

瀬川がふらふらと僕の方へ歩いてくる。お前演技美味いな。本当に酔ってるみたいだ。いや、実は元々酒を準備していたとか？ そんなわけねえよな。

「……なんだ瀬川」

「佐藤くんがね、私じゃいやだって」

「そうか。残念だったな」

「だから今度は……」

「却下」

瀬川が言わんとしている事は分かっているのではっきりと断る。
だが瀬川は表情を変えずに僕の前でしゃがむ。

「あのね尾崎くん」

「なんだよ」

瀬川は自分のポケットから、アレを取り出し、そしてアレからアレをのばして僕に突きつける。……微笑みながらこんなものを突き出されるとすごく怖いです。

「……私の言う事一つだけ聞いて」

「嫌だといったら？」

「このカッターナイフの銀色の部分が、赤く染まる」

「誰の赤色で？」

「勿論。ア・ナ・タ・の」

誰か助けて。この目はマジっばいです。いや、まさか本気で刺しはしないだろうが、刺し違える事は大いにありえる。なにせ既にカッターの刃は僕の首元まで伸びてきているので、瀬川がうつかり転んでその刃が僕の喉に突き刺さらんとも限らないわけで。くそ、和久井や佐藤くんには使わなかった最終兵器を僕に対して使用してくるなんて。

「あー、分かったよ。で、なにをすればいいんだ？」

とりあえず命は惜しいので僕のほうが降りる。瀬川は素直にカッターナイフを引いてくれたが、どんな無理難題をふっかけてくるのやら。

「……私はひどく眠いのよ」

「それで？」

「膝枕。して？」

ただ今氷河期がやってまいりました。佐藤くんはやれやれと首を振り、和久井はなんなんだこいつと瀬川を見つめ、卯の花さんだけはやたら楽しそうに微笑んでいる。いや、卯の花さん。まじ勘弁し

て。

「……切るわよ」

一瞬真顔に戻って背顔が脅す。なんだろう、僕は恥をかくか死ぬ
かしか選択肢はないのだろうか。昨日に引き続き、膝枕とは。しか
も今度はクラスメイトたちがいる教室の中で。

「……あー。分かった」

「ふふ、ありがとう。おやすみなさい」

瀬川は僕の膝に頭を乗つけて目を瞑る。本当に寝る気がこいつ。
僕は猛烈な恥かしさが襲い、顔が熱い。クラス中が僕たちのことを
見ている。……ハロー、ハウワースー。

「膝枕なら卯の花さんにやってもええよ」

無駄だとは思うが瀬川に話しかけてみる。どうせ狸寝入りだろう
に。

「尾崎。俺、改めてお前の事すごいと思ったよ」

佐藤くんが僕を褒める。いや、嬉しくないぞ。

「でも瀬川さん、なんだか尾崎くんに懐いてる感じじゃない？」

「そうかな。ただ僕で遊んでいるだけのようない感じがするけど」

卯の花さんがニコニコしながら僕のことを見つめる。なんだよ。
全く。そんなに僕のおかしいか。

「ふふ。尾崎くんは瀬川さんに好かれてるよね。嫌いな人にはそん
なことしないでしょ」

それはそうかもしれないけれど。僕としてはひたすら恥かしい。

「何してるのみんなして」

もう少しで昼休みが終わるところで千早さんたちのグルー
プが戻ってきた。

「……なんか楽しそうな事してるね！」

千早さんの側に居た女子の一人が元気一杯に言う。ん？ 瀬川の
側に来ても大丈夫なのかこの子ら。

「なんかなっちゃん気持ち良さそうだなー。よしちーちゃん、あた
しに膝枕しろ！」

もう一人のボーイッシュの子が叫ぶ。なっちゃんってのは瀬川の事か。既に愛称を付けるあたり、千早さんとの間では瀬川についての話がついているみたいだな。

「ちょっとジヨン、いきなり抱きついてこないでよ。……ん？」

ようやく千早さんが和久井の存在に気付く。他の二名も同様で、和久井の姿を見て最初は驚いた風だったがすぐに元通りになった。

「おー、和久井っていうあの有名な方じゃないっすか！」

「あの怖そうな人だー！」

テンション高けえなこの二人。千早さんが落ち着いてるだけあつてなんとも不思議。千早さんはストッパーか？

「尾崎くんの知り合いだったのね。これは驚き。やあ和久井くん。

私は千早なつき。こっちは野中と日向よ」

「やあやあ日向だよおー！ 下の名前は彩音だよおー！ たまにひまわりとかひなたって呼ばれるけどひむかいだから気をつけてねー！」

「ご紹介預かりましたわたくしは野中潤だ！ 元気が取り柄のソフトボール部現役のピッチャーだぞ！ よろしくな、かずくん！」

かずくん！？ 初対面で和久井に対して愛称を付けるか野中さん二人とも臆面もなく和久井と対峙しているが、和久井はこういう人たちはむしろ苦手だからな。

「あ、ああ」

「それで、なんで尾崎くんは瀬川さんに膝枕を？」

「いや、これには訳が」

野中さんと日向さんは目を輝かせて興味深々な顔をしている。返答に困る僕。別に説明する義務はないと思うけれど、説明しないならしないでしつこそうだし。変にがっかりさせて恨まれそうだし。

「なんて説明すればいいのやら」

「ほら野中さん、日向さん。だめよ尾崎くんを困らせちゃ」

卯の花さんが二人をなだめにかかる。

「決まってるじゃない。瀬川さんの乙女心よ」

だから乙女心ってなに。卯の花さんは別に二人をなだめた訳ではないらしく、余計に二人の輝きが増すばかりで卯の花さんにも困ったもんだ。

「卯の花さん、なんて事を。まあ、確かに尾崎さんと瀬川さんは仲がいいけれど」

どうやらこの女子メンバーの中では千早さんだけがまともらしい。……別に助けてくれる風でもないけど。

「あはは。まあいいけどね！ えーっと、なんて呼べばいいの？

尾崎くんって」

日向さんは明るく能天気と言う。

「別になんでも構わないよ」

「下の名前って蒔良だっけ。じゃあまーくんとか」

「いいな！ よろしく、まーくん」

なんでも言いとは言ったけどやっぱりなんだか恥かしい。まあ、女の子なんてこんなもんだろう、多分。元気で何より。

「そろそろ昼休みも終わりね。うん。明日からは二人も一緒にしない？ 勿論和久井くんも」

そうやって昼休みに一緒に過ごすメンバーが拡大されていく。なんと男性陣が弱いグループになりそうだが、仕方あるまい。なんなら河野くんでも呼ぼうか。いや、河野くんは他に友だち大勢居るらしいから誘っても来ないだろう。櫂を含めれば男性陣のパワーが格段にあがるだろうが、僕がいやだ。

「ん……」

瀬川がゆっくりと身体を起こした。本気で寝ていたようで、ぼーっとしている。というかあれだけ騒がしかったのに良く眠れるな。

「……はう！」

起き上がった瀬川の顔を見て日向さんが奇妙な声を上げる。やはりまだ瀬川の事におびえているのだろうか。そう思ったがいらいな心配だった。

「おでこが赤い！」

「……？」

起き抜けの瀬川には通じない話だった。

第一章・004

その後瀬川と、野中さん、日向さんが二言三言言葉を交わし、昼休みは終わった。今日の午後の授業は二時限。両方とも、今年度のクラス役員を選出するロングホームルームだ。主に決めるのはクラス委員長、副委員長。文化祭実行委員。時間が余れば文化祭の出し物についてをほんの少し。僕たちの学校では文化祭というのがなかなか力が入っていて、新学期の早い段階から準備が始まる。勿論、初めのうちはただの話し合いだけだが、文化祭の一ヶ月ほど前になると本格的な準備が開始される。四月からの綿密な計画によって文化祭をより栄えたものとする試みである。特に三年生が一番盛り上がる学年なので、僕としても最大限に楽しみたいところだ。

「おーっし、席着いてるな。じゃあ時間も無駄にしたくないからさつさと委員長と副委員長、文化祭実行委員やりたいやつはさつと立候補か誰か推薦しろ」

進行もへったくれもない足立先生であった。が、クラス委員といふのに好き好んで立候補する生徒がいるわけもなく、やはり教室は静まり返る。

「なんだお前ら。クラス委員が決まらねえと文化祭も何もねえぞ。周りと話し合ってもいいから誰か推薦しろよ」

「ねえねえ尾崎くん。誰が良いと思う？」

僕の隣の席に座っている河野くんが話しかける。

「そうだなあ、佐藤くんは誰が良いと思う？」

「俺は別に誰でもいい」

佐藤くんは河野くんの後ろの席なので、僕たちの席は実は案外近かった。クラスの席は僕たちが座っている窓側の二列が七人で、中央と廊下側の四列が六人ずつという並びとなっている。僕の後ろの席には先日瀬川ともめていた鹿児島さんが座っているのだが、僕たち三人に囲まれて所在なさにしている。

「クスクス。尾崎くんがやればいいんじゃないかな？」

……忘れていた。河野くんの前は櫂の席だった。なんでこう知り合いの席が近いんだよ。

「僕はいやだよ。どう考えても柄じゃない。櫂がやればいいんじゃないか？ きつとみんな言う事聞くよ。違う意味で」

「あー、尾崎くん。もう櫂くんと接触してたんだね」

そういえば今朝は別のクラスに行っていたから知らないんだな河野くんは。深い溜息をついている。なんだか不憫だ。

「まあね。河野くんは？ 誰か推薦したい人とかいる？」

「……うーん。そうだなあ。男子の中では木村くんや室井くん、矢倉くんの三人は結構人望あるよね。女子だったら金子さんと千早さん、長島さんの三人はしっかりしてるよね。あとは人気者、というところで卯の花さんや逸見さん、三ツ星くんかなあ。特殊なところで響くんというのもあるけど、響くんは生徒会長だからね」

うむ。名前だけ言われても半分くらいしか分からない。僕が知っているのは千早さんと卯の花さんはともかく、チーターこと木村くん、童顔故に可愛いともてはやされている三ツ星くん、響というのは立川生徒会長の名前だ。……やっぱり千早さんが向いてるのかなあ。

「人気があるといえば、鹿児島さんも結構人気者だよな」

「え！？ あたし？」

河野くんが僕の後ろで窓の外を眺めていた鹿児島さんに話しかける。

「アイドルみたいだって、他所のクラスの男子は言ってるよ」

「そんな、あたしなんて……」

鹿児島さんは僕の顔を見ると俯いた。気まずいなあ。僕は瀬川と仲良くしているから、鹿児島さんとしてはそれが気に入らないのだろうけれど。

「……あたし、瀬川さんにひどい事しちゃったし……」

「え？」

鹿児島さんは僕の予想とは裏腹に、自分の行動を悔いているようだった。震えた声で僕に訴え続ける。

「あたし瀬川さんのこと何にも知らなくて。今日昼休み、みんなと楽しそうにしている瀬川さんのこと見てて、ああ、自分はなんて馬鹿なんだろうって思ったの。今までもろくに話した事すらないのにね」

「鹿児島さん……」

「……そうよね。瀬川さんだってクラスメイトだもの。仲良くしなきゃ、なんだよね。ごめんね尾崎くん」

「……鹿児島さんからそんな言葉を聞けるなんて思わなかったよ。……ありがとう。もう気にしてないよ」

鹿児島さんは俯いたままだ。なんだかなあ。僕は別に瀬川の保護者じゃないんだが。いつの間に僕と瀬川はセットな扱いを受けているようだ。

「それに、謝るなら僕じゃなくて瀬川に、だよ鹿児島さん」

「許してくれるかしら、瀬川さん」

「大丈夫。ああ見えて瀬川、人を恨まない奴だから」

そもそも瀬川に恨まれたらきつと今頃殺されてるんじゃないだろうか。お得意のカッターナイフで。

「クスクス。尾崎くんも、人が良いねえ」

僕と鹿児島さんのやりとりを見て櫻が言う。

「やっぱり、キミは委員長としての資格はあるよ。クラスで孤立している子を馴染ませて、みんなの偏見を取り払えるんだからさ」

偏見を取り払えた訳ではないと思う。僕はまだ話したことすらないクラスメイトが大勢居るのだから。

僕はふと、目黒さんのほうを向く。目黒さんは僕の視線に気付き、フンとそっぽを向いてしまった。一度直接僕と対立した手前、彼女が瀬川存在を認めてくれるためには骨が折れそうだ。

「……俺は櫻くんと同じ意見だなあ。僕はこのクラスでは君と瀬川さんの二人が中心になるべきだと思うよ」

「つつても、簡単に瀬川を受け入れられる奴なんてそうそう居ねえ

だろ。鹿児島は自分の非に気付いて改心つつうか、そんな感じにはなっただけよ。瀬川と直接関わってねえ奴らにしてみれば放っておいてくれってのが本音だと思うぜ」

それもそうなんだよな。わざわざ瀬川とみんなの関わらせる必要って、実はどこにもないんだよな。みんなはみんなで仲の良いグループと固まっていたいだろうし。

「やっぱり僕は委員長って器じゃないよ」

「そうかなあ」

河野くんはちよつと納得しがたいようだ。が、佐藤くんの言う事にも一理あるわけで、無理に僕を推す気はないようだ。櫛は流れのままに感じてだし。

「鹿児島さんはどう思う？」

「え？ あ、えーっと。そりゃあ瀬川さんだつてみんなと仲良く出来たほうがいいけど、やっぱりクラス委員でしょ？ 瀬川さんだけじゃなくて、クラス全員のことを考えられる人じゃないと……」

その言い方だとまるで僕が瀬川一筋だから駄目って言ってるもんじゃないか。確かにクラスにで孤立してそんな子はちらほら見受けられるけれど。

「佐藤くん、どうかな。平等精神に則って」

「……いやだと言ったら？」

「クスクス。そういえば佐藤くんも結構人望があるって聞いたよ。昨日は目黒さんと千早さんの喧嘩を止めてたじゃないか。二人が無傷で済んだのは佐藤くんのおかげだとボクは思うよ」

櫛はただ単に楽しんでるだけじゃないのか。

「今は友だちとして、瀬川さんたちと一緒に居るけれど、本当はクラスのことを一番考えてあげられるのはキミじゃないのかな」

そういえば佐藤くんは結構落ち着いているし、確かに委員長タイプかもな。千早さんと組めば結構息ピッタリなんじゃないか？ 子供の頃からの付き合いらしいし。

「因みに櫛。女子のほうはどうなんだ？」

「勿論千早さん、と言いたい所だけだね。さつき河野さんの候補に
拳がった長島さんが適任だと思うよ」

「意外だな。それはどうしてだ？」

「クスクス。佐藤くんてこう見えても結構頭がよくないから。その
反面、長島さんは頭が良くてしつかり者。互いの欠点を補い合える
二人組みだと思うよ」

佐藤くんは不機嫌そうな顔になる。へえ、佐藤くん、頭そんなよ
くないんだ。別段そうには見えないけどなあ。

「といつても、ボクたちだけで結論を出すわけじゃないしね。クラ
スみんなが良いと言ったら、それはクラスみんなが選んだ委員な訳
だから、従わなくちゃね」

悪戯で擲でも推薦してみようか。クラス中の反応を見てみたい。
が、恨まれそうで怖いからやめておこう。

「大体決まったかー？」

足立先生が手を鳴らし、騒がしかった教室は一瞬で静まり返る。
「推薦したい奴がいたら理由も述べるように。ただなんとなくじゃ
勤まらんからな。何人か出揃ったところで投票するぞ」

「はいはい！」

小学生みたいに元気良く手を上げたのは日向さんだ。

「わたしは尾崎くんを推薦しまーす！」

ぐ。てつきり千早さんを推薦するかと思つてたのに。油断も隙も
ないな日向さん。どうやら野中さんも僕を推薦する気らしいな。

「尾崎い？ 言っちゃ悪りいが委員長つて面じゃねえだろ。で、理
由は？」

「だってまーくん、とってもクラスメイト想いだと思います！ ま
ーくんのおかげでわたしもなつちゃんと仲良しになりました！」

なつちゃんてのは瀬川か。でも僕なんかしたつけ。

「待ちな日向。そいつは瀬川の事しか考えてねーだろ。クラスメイ
ト全員のこと考えられるんなら、そんな奴放つておいてもいいはず
だ」

目黒さんが立ち上がり異論を唱える。

「まあまあ、後にしろ。それとな目黒。そういうことは心で思ってもやすやすと口にするな。で、他に推薦するやつはいねえのか」「ちっ」

目黒さんは舌打ちをして着席する。

「はい。俺は佐藤くんを推薦します」

河野くんが立ち上がり言った。どうやらこの場を収めるために佐藤くんを推薦したようだ。佐藤くん、ある意味犠牲になってるけど。「昨日の一件で場を収めてくれたのは佐藤くんだし、周りで黙って見てた他の人たちよりは適任だと思います」

河野くん、もっともらしい事を知っているけれど、佐藤くんがものすごい勢いで睨んでるよ？

「クスクス」

「どうした櫂」

「いや、みんな結構クラスのこと本気で考えてるんだなあって思ってたね」

その台詞も櫂が言うと言得力ないどころか怪しいよ。……といっても、その通りかもしれないな。さっき目黒さんが言った通り、僕はクラスメイト全員のために瀬川と仲良くしているわけじゃない。むしろ、千早さんたちを巻き込んだような感があつて、僕が委員長になったって後ろめたいだけだろう。だったら佐藤くんや千早さんのような平等な人間が委員長をやったほうが良いに決まってる。

「男子しか拳がらんない。女子では誰か居ねえのか。どうせ男女の組み合わせなんだから早めに拳げとけよ」

「私は長島ちゃんを推薦します」

えーっと、名前分かんないが、瀬川の前の席に座っている女子生徒が長島さんの名を挙げた。ふむ、そんなにしっかしっているのか長島さんっていう人は。

「ちよつと須藤ちゃん。先生、私は千早ちゃんを推します」

その長島さんは千早さんを推薦した。どうやら本人は委員長には

なりたくないらしい。

「あー、なんだ。須藤、なぜ長島を？」

「長島ちゃん二年の時も委員長やってたし。こういうのは経験が活きると思います」

「はい、長島」

「私なんかよりもほら、千早ちゃんの方がみんなと交流深いですし。それに、私んかが委員長になったって、瀬川さんの事だつて見捨てていたのに。クラスメイトのために動けないような私に資格なんてありません」

長島さんも長島さんで、昨日瀬川を庇ってやれなかった事を悔いているらしい。まあ、自分がやりたくないっていうよりも、自分には資格がないからやるべきじゃないっていう思いの方が強いのだろう。それだけプライドも高いということか。

「だったら千早ちゃんや尾崎くんみたいに、一人の生徒のためにも動けるっていうのはすばらしい事だと思います」

「……んー。理由はどうあれ、とりあえず四人出たな。他に居ない様なら男子は尾崎と佐藤。女子は千早と長島。この中から男子一人と女子一人を選ぶぞ。思惑は色々あるだろうが、良く考えて選べよ」
否が応でも僕と佐藤くんのどちらかが選ばれるわけか。他に立候補なり推薦してくれれば助かるんだけど。

「……あたしは、尾崎や千早のことなんて認めないよ。佐藤や長島だつて、瀬川がなんだと言いやがつて。こんなやつなんて放っておけばクラスのためになるんじゃないのかよ」

再び目黒さんが立ち上がって異議を唱え始める。

「目黒、お前まだそんな事言ってるのか」

足立先生は難色を示した表情で目黒さんをたしなめるが、目黒さんは続けた。

「だってそうだろう。当たり前前に考えてみろよ。自分の手首だつて平気で切っちゃう奴なんだぞ。そんな気味悪い事するような奴と一緒に居てみんなは楽しいのかよ」

「俺も目黒に賛成だ。瀬川。お前にはそもそも自覚がないのだ。自分が存在するだけで他人に迷惑がかかっているとなぜ気付かない」
背の高い眼鏡をかけた男子生徒が立ち上がってそう言った。……
流石にそれはちよつと言い過ぎなんじゃないのか？

「特に尾崎なんかは迷惑してるんじゃないのか。昼休みにお前がしでかした行動によって、彼はものすごく恥をかいただぞ」

……なんだつて？

「は、長谷川くん。何もそこまで言わなくても……。これはクラス委員を決めるためのホームルームなんだよ？」

長谷川くんとやらの隣の席に座っている千早さんがなだめる。が、彼は鋭い目つきで千早さんを睨んだ。

「お前もだ千早。いいか、瀬川は人に迷惑をかけることが好きな人間なんだよ。そんな奴を庇うのであれば、お前だって同罪だぞ」

「ちよつと長谷川くん！ それはいくらなんでも言いすぎだよ！」

「そうだぞ！ ちーちゃんやなつちゃんに罪はない！」

前後で長谷川くんを挟む元氣ペアも立ち上がって長谷川くんに抵抗する。

「黙れ！ お前ら一体なんなんだ！」

「先生！」

足立先生は頭が痛そうだ。そりやそうだろう。先生にとって、本来なら昨日の時点で決着をつけたと思っていた問題が目の前で勃発しているのだから。

「……仕方ねえな。いいだろう。だったらこの際お前らで話し合ってくれ。瀬川を一人のクラスメイトとして平等に扱うか。或いは、瀬川の存在を認めず、一人孤立させた生活を送らせるか。これはこのクラス全体の問題だと俺は認識している。だから、今日ここで、お前らだけで完全に決着させるんだ。いいな、俺は口出しはしねえぞ」

そうだ。遅かれ早かれこうなるだろう事は分かっていたんだ。これは僕が生み出した問題なのだろう。きつと、僕が瀬川と関わって

それをよくないと思っっている生徒と衝突したからだ。……だからこそ、僕は責任を持って、瀬川の味方をしなくちゃいけない。

「瀬川、こっちへ来い」

僕もこの問題の中心として、立ち上がって瀬川を呼ぶ。瀬川は黙ってこっちを見る。どうしていいのかわからないと言った表情だ。

「いつまで瀬川と関わりを持つつもりだ尾崎」

僕も長谷川くんを敵意を持って見つめる。

「悪いけれど長谷川くん。君の言っていたことは間違いだと、僕が証明してあげるよ」

「ほう？」

「なぜなら、僕は瀬川と一緒に居て楽しかったからだ。これだけは断言できる。僕は瀬川が側にいたって、決して迷惑なんてしていません。だって」

長谷川くんが顔をしかめる。自分の憶測だけでもものを言うから反撃の手段を失うんだ。

「尾崎くん……」

瀬川がポツリ僕の名を呼ぶ。

「君が来ないなら僕の方から行こうか」

「……いいえ。行くわ」

瀬川は立ち上がって僕の側に寄ってくる。僕は瀬川を温かく迎えた。僕だけではない。

「俺も瀬川さんの味方だよ。佐藤くんは平等精神だから、中立な立場で居たいんだろうけど、どうかな」

「いいや。俺の目から見ても、あいつらの言う事は間違っている判断できる。だから今回はお前の味方だ、瀬川」

「……瀬川さん、昨日は本当にごめんなさい。私、反省したの。許してくれとは言わないから、言わせて。ごめんなさい」

「クスクス」

河野くんや佐藤くん。櫂に、そして、鹿児島さんに。今の瀬川は孤立している一人の人間じゃない。僕をはじめとした色々な人たち

に支えられている。

「ちよつと鹿児島！ あんたなにやってるのよ！」

昨日は鹿児島さんと共に瀬川を罵っていた目黒さんが納得いかないというような顔をしている。心内では裏切られたと思っっているのかもしれない。

「ごめんなさい目黒さん。でも私、気付いちやったのよ」

「……何をよ」

「瀬川さんだつて、私たちと同じ人間だつて事。友だちと一緒に居て、一緒に笑いあつたり、悲しんだりしたいんだつて事」

「そんな……ふざけたことを……」

瀬川はふらふらと僕の方へ寄りかかってくる。顔は俯いていて表情が見えない。そつと肩を抱くと、少し震えていた。もしかしたら泣いているのだろうか。いずれにせよ理解できた。

瀬川が今まで平然と振舞っていたように見えても、心の中ではかなり苦しかっただろうことが。きっと、瀬川が自傷行為をするのも、そういった心のストレスを解消するためなんじゃないかと。

千早さんや野中、日向さんの三人も側に来てくれた。合わせて、卯の花さんも立ち上がり瀬川の側に寄つた。僕の周りの席に座っていたクラスメイトたちは立ち退きを余儀なくされたが、かといって長谷川、目黒サイドに行く事もなかった。

「どうだ長谷川くん。瀬川のことを想ってくれているクラスメイトたちはこれだけ居るんだ。それでも瀬川のことを不必要な存在だつて言えるのか」

「……ふん。まだ九人だろう？ 残りの三十人が要らないと言えば、それで納得するか」

「ああ。してやろう。そのときは僕たちの方が少数派で間違つていたということになる。それは認めてやるよ」

思い切つたことを口走ってしまったが、自然と負ける気はしなかった。

「長谷川くん。悪いけど、私は瀬川さんに付くわ」

長島さんもこちらサイドへと加わる。これで十人。

「おい、気は確かか！ 瀬川がどんな人間か知っているだろう！？」
流石に焦りの色が見えてきたな長谷川くんも。そりゃそうだろう。
だって、あれだけ言っておいて長谷川くんサイドは目黒さんと合
せてまだ二人。

「……俺は長谷川の味方だぞ、尾崎」

「……」

勝俣くんか。それともう一人、瀬川と対立していた三人のうちの
最後の一人、福島さんか。これで敵さんは四人。まだまだこちらが
有利だ。

「……瀬川さんの何を知っていると言うの。何にも知らないからそ
うやって距離を置いているんじゃないの長谷川くん」

「なんだと、お前」

廊下側の席に座っていた女子生徒が言った。

「少なくともあたしは何も知らない。何にも知らないでこうして迫
害しているなんて馬鹿みたい。あたしは、瀬川さんのことも含めて
クラスみんなのことを好きになりたいし、瀬川さんだからとか、そ
んな理由で争ってみんなのこと嫌いになりたくないんだ」

「それでお前は どうするつもりだ守屋。こうして争わなきゃ解決は
見られないんだぞ」

「あんたみたいな一方通行な考え方は大嫌いだ。だからあたしは――
――中立の立場をとる」

中立だって？ つまり、僕たちサイドでも、長谷川くんサイドで
もないということか。彼女、守屋さんか。守屋さんはそう言っ
て、教室の中央に居座った。これで戦況は三すくみとなった。

「よく考えても見てよ。尾崎くんみたいに、一人の友だちを大切に
するのも良いけれど、それで他のクラスメイトと対立したって気分
が悪いよ。かといって、長谷川くんみたいに、全体のために一人を
阻害するというのも納得できない。あたしからすれば、両者とも、
このクラスのためには絶対にならないことしてるよ」

……そう、だよな。このクラスは瀬川を中心としているわけじゃない。だからこうして、瀬川をどうこうするなんて議論をしているのは無意味なんだ。

「だが守屋。だったらお前のような中立的な立場でどうやってクラス全体をまとめるんだ」

「……それは……」

「ろくに最善策も出せないのであれば口を出すな！」

守屋さんは黙ってしまった。……これでは埒が明かない。ここらで事態が好転するような出来事が起これば……。ん？　そういえば、立川生徒会長はどちらに着くつもりなのだろう。目を瞑っていて全く動きを見せない。仮にも生徒会長なのだから、こういう問題では積極的に動くべきじゃないのだろうか。

「……さつきから一言も喋らないほかの連中はどうなんだ」

長谷川くんは教室中にまばらとなったクラスメイトたちを一瞥する。みんなは困り果てた様子で周囲の様子を伺っている。

「そうやって周りと合わせなきゃいけないような腰抜けばかりのクラスなのかここは」

「おい長谷川くん。そういう発言は慎め。何様なんだい君は」

「……いや、すまない。だがそうだろう。足立先生も言ったように、これはクラス全体の問題だ。俺や尾崎だけで解決するような問題ではない」

正確には中立派の守屋さんもいるけどな。

「何か意見を言えるものは居ないのか？」

「……僕も守屋さんと同じく中立の立場をとるよ。僕はやっぱり、昨日の一件を黙ってみてたわけでさ、今更瀬川さん側につくのも虫が良すぎると思うんだ」

いまだ子供らしさを兼ね備えた男子生徒の三ツ星くんが中央に移動する。三ツ星くんが動いたと同時に、他のクラスメイトたちもそれぞれ動き出した。……やはり、中立でいる事を望んでいる生徒が多いようだ。……これで僕たちの方は、瀬川を含めて十三人。長谷

川くんサイドは五人。そして中立が二十人と圧倒的に多い。……いや、まだ動きを見せていないのが数人居るな。

「……残りはどうなんだ。特に、立川」

「……………」

長谷川くんは立川生徒会長の回答を促進するが全く反応がない。

一体何を考えているのだろう。

「何を黙っているんだ立川！」

「うるさいわよ」

静まり返る教室。背が小さく、声がか細いが、とても透き通った声の持ち主が僕たちの方も向かずに発言をする。

「さつきから全く進展がないし、一体何がしたいのあんたたちは」

「今の今まで黙っていたお前が言えることじゃないだろう、七海」

七海と呼ばれた女子生徒が深い溜息を吐く。その後姿からも、彼女がかなりうんざりしているという事が見受けられる。

「それともお前がこの議論を終わらせるような、両者を納得させられるような案を出せるというのか」

「そうね。私が言いたいのは、議論するだけ無駄なこと」

「なんだと？ 俺たちは今、このクラスをより良くするために、瀬川のこれから話し合っているんだぞ」

七海さんが二度目の溜息をつく。かなり苛立ちが募っているようだ。見た目がか弱そうなのに、芯の強い子なのだろうか。

「クラスを良くしたいんだったら、それこそこの議論は無駄じゃない。そもそも何？ 瀬川さん一人をどうこうしてクラスがよくなるって言うの？ お門違いもいいところよね」

「何がお門違いなのか、言ってみろ」

「私は瀬川さんがどういう人間なのか知らないけどね、クラスを良くするために一人を阻害するようなクラスを私は良いクラスだとは思わないし、瀬川さん一人を庇って他のクラスメイトたちと仲良くできないようなクラスも良いクラスだなんて思えない。かと言って、考える事を放棄して中立の立場に居座るというのも、目の前の問題

から逃げているだけでなんの解決にもならない」

僕は彼女も瀬川と同様に、クラスで孤立をするタイプの人種だと思っていたのだが、それはどうやら勝手な解釈らしい。

「それじゃあどうするつもりだ。クラス全員で話し合い、全員が仲良く、全員が争わない、そんなクラスを目指すというのか？」

「私はその話し合いそのものが無駄だと言っているの」

「ではどうすればいいのだ。話し合いがなければ何も決まらないんだぞ」

「答えは簡単。話し合いによって何かを決めるからいけないの。いい？ 話し合いで何かを決めるという事は、話し合いによって少数派の意見は抹消されてしまうという事。例え最終的に全員が納得しても、心の中では面白く思わない人もきつという。その心のわだかまりは、争いの火種となりかねないのよ」

「だから話し合いそのものを放棄すると言っのか。それは考えることを放棄するというのと、どう違う」

七海さんの三度目の溜息。もう説明が面倒くさいといった雰囲気だ。

「話し合いは放棄するというよりも、最初からする必要なんてないのよ。いい？ あなたが言っているクラスをより良くするなんてのはね、みんなでルールを決めて、みんながみんなそのルールに従おうって事でしょ？ 法は秩序を司るの。でも良く考えてもみなさいよ。ルールを決めて、それを人に強いるという事は、それだけ自由がないということ。私たちはみんな一人の人間なのよ。誰かの言いなりになったり、このクラスのために自由を束縛されるという状況を誰が納得できるのかしら」

「それはお前の個人的な考え方だろう。それに、みんながルールを守れば、それで確実にクラスは良くなる。そうだろう？」

「確実に悪化する。少なくとも私はごめんよ。ただでさえ校則に縛られている中、クラスでまた別のルールに縛られて生活するのは窮屈でたまらないわ」

……そうだ。僕は何を考えていたのだろう。瀬川を庇って、みんなと瀬川を仲良くさせよう、なんて考えてなかったはずだ。だとしたら、僕は長谷川くんに、君は君の好きにすればいいと、一言言えば簡単な話だったんじゃないのか。そのかわり、僕の方も好きにさせてもらうよと。わざわざこうしてクラス中を巻き込んで対立なんてしなくても良かったのだ。……全く、気付くのが遅すぎる。

「……そういう自己中自分勝手な奴がこのクラスを……！」

「もういいよ、七海くん」

長谷川くんの沸騰しかけた頭を一人の男が発した声が冷却させるととうとう動き出したか。生徒会長、立川響。クラス中が彼に視線を集中させる。

「ふあああ。眠いな、どうも」

立川生徒会長は大きな欠伸をする。そして胸のポケットから眼鏡を取り出し、眼鏡拭きで悠長とレンズを拭いている。

「……貴様、今の今まで何をしていた。仮にも生徒会長だろう！この一大事にその態度はなんだ！」

立川会長は眼鏡拭きを丁寧に折りたたみ、眼鏡をかける。……なんだろう、この威圧感。前々から会長は只者ではないと思っていたが、実際こうして目の前で彼が喋っているところを見るのは初めてだからな。

「だって、とても退屈だったからさ。ああ、そういえば紳士は大口開けて欠伸なんてしてはいけないんだっけ」

「退屈、だと？」

「いや失敬。本当のこととは言え、こういうことをうつかり口にしてしまうのはおれの癖なんだ。怒らせてしまったかな？ そりゃそうだろう。おれはきみが怒るだろうと予測し、わざと退屈だと言ったのだから」

「貴様、俺をおちよくりたいだけなのか！」

長谷川くんの怒りは完全に爆発した。ものすごい剣幕で怒鳴りつけている。だが立川生徒会長は依然と変わらぬ様子で悠長な態度で

席に居座っている。

「勿論。おちよくっている。はっはっは。やはり君のような人間を弄んでいると気分が愉快になるよ」

「この！」

しびれを切らせた長谷川くんが立川生徒会長に本気で殴りかかった。馬鹿な、足立先生も見ているんだぞ！

「……！？」

だが生徒会長はその拳を受け止めるような事はしなかった。ただ微笑を浮かべて、そして、最小限の動きで長谷川くんの拳を回避した。

「とうとう暴力か。退屈な奴だな長谷川くん。きみ程度の人間をおちよくるなど、おれにとっては単なる準備運動にしか過ぎないっていうのに」

立川生徒会長は立ち上がり、続けざまに繰り出される長谷川くんの拳を回避し続けた。おかしい、いくらなんでも一発も喰らわないなんて、ありえない。

「はいはいもうお仕舞い。疲れただろう？　それで、長谷川くんはおれに何を望んでいるというんだい？」

「はあ、はあ。……くっ」

「さっききみはおれのことを、仮にも生徒会長だ、とか言ってたよね」

「……ああ」

「確かにおれは生徒会長だ。おれはこの学校の生徒たち全員の代表だよ。……でも、それがどうした？」

「……なんだと？」

「きみは生徒会長の一言がこの場を治められる絶対的な効力を持っているとは間違っても考えているわけではあるまい？　おれは王でも神様でもないんだ。だからおれが何を言ったところで、きみに納得してもらえないとは思えないんだよ。……きみは頭が固いからね」

立川生徒会長は悠然と語る。とても落ち着いて、ゆるぎない言葉

には彼の自信の全てが込められているようだった。いや、大げさではなく、彼なら王にだってなれるだろう。

「……ならば聞かせてもらおう。立川、お前は尾崎たちに着くのか、俺たちに着くのか。或いは中立か。もしくは、七海のように話し合いを放棄するのか」

「それはなんだい？　まるで派閥争いをしているようだな。それこそ七海くんの言ったように無駄な事だよ。……そうだな。強いて言うならば、おれは七海くんと同じ意見だ」

「……納得できないな」

「勿論、きみがそう言うことは知っていた。だが一つ、教えておいてやろう。おれはな、自由というのが何よりも好きなんだ。自由な事をし、自由の中で生き、そして自由を求める人間たちをおれは拒まない。だからな、長谷川くん。そして尾崎くん。君たちのような人間はな、おれは嫌いなんだよ」

立川生徒会長の言葉には重みがある。伊達で生徒会長を名乗っているわけではない。僕は立川生徒会長の言葉を受け止めた。

「先ほど七海くんが述べた事は全て正論だと、おれが断言しよう。そして尾崎くん。君ほどの男なら、もう気付いているんだろう？」

ふいに僕に話を振ってくる立川生徒会長。僕の身体が自然と硬直する。とても同じ年には思えない。

「気付いて、どうすればいいか、分かっているはずだ」

「……尾崎くん？」

瀬川が僕の顔を見つめる。……ああ、分かっているさ。僕がやるべき事はただ一つ。

「会長。今からでもやり直せるのか？」

「勿論。君がやり直したいと思えるのならね」

「……ありがとう」

僕は瀬川を千早さんらに任せて長谷川くんの方に歩いていく。長谷川くんは驚き身構える。僕はもしかしたら長谷川くんに殴られるかもしれないな。僕なら余裕で避けられるけれど、避けるわけにも行

かない。

「長谷川くん」

「……なんだよ」

「ごめん」

僕は長谷川くんに思い切り頭を下げた。僕の目には長谷川くんの足元しか映っていないが、きっとクラス中が驚いているんだろうなあ。

「な！ 何をするんだ尾崎！」

「……瀬川。君にも、ごめん」

僕は瀬川の方へ向き直り、同じ動作をした。

「尾崎くん、一体……」

「そしてみんな。ごめん」

僕はクラスメイトたち全員に、自らの頭の頂点を見せた。千早さんや卯の花さん。河野くん、佐藤くん。櫛や鹿児島さん。そして、目黒さんや勝俣さんや福島さん。中立派の人たち。僕がやるべきことは、クラスみんなへの謝罪だった。

「……気が済んだか尾崎くん」

「ああ。ありがとう会長。きつかけをくれて」

「いいのさ。さて、長谷川くん、何か言うことはあるか？」

長谷川くんは完全に困り果てている。そりやそうだろう、瀬川阻害派の人たちにとっては僕の行動は理解できないものはずだ。

「何故だ。何故尾崎が謝る必要がある」

「尾崎くんは、クラスメイトたち全員に迷惑をかけたということを謝罪したんだよ」

「馬鹿な。まだ決着は着いていない」

「長谷川くん。決着を着ける必要はもうないよ。そもそも、僕たちはなにを勝負する必要があったんだ？ 七海さんや会長の言うとおりだ。僕たちはそれぞれ、好きなようにすればいいんだ」

長谷川くんは困惑している。彼は頭が固いようだから、僕が言ったことを理解してくれるかどうか。

「それでは俺たちがしてきたことは一体……」

「全部、無駄だった。君としては瀬川をクラスから阻害させたいという気持ちは失ってはいないだろうけど、でも、クラス全体を巻き込んですることじゃなかったんだ」

「……クラス中の理解が得られなければ意味が……」

「意地を張ると身体に良くないぞ長谷川くん。クラス中の理解を得られるのであれば、クラスというものは自然とそうに動いていくものだ。だがどうだろう。こうしてわざわざ議論を交わしたせいで余計にぎくしゃくしてしまっただろう？ 話し合いの決定的なデメリット。クラスをよりよい方向へと動かしたいのであれば、デメリットを含んだ話し合いなど最初からするべきではないな？」

「……だが、自然に任せてクラスの雰囲気が悪くなってしまうたら……」

「そのときはそのときだ。今回の場合、どう考えても自然とはいえない。きみや尾崎くんが意図した対立をしてしまったからだよ。おれは今日の昼休み、瀬川くんたちのやり取りを見て、クラスのみんなが笑顔になっていたのを記憶しているよ。だからといってきみたちが悪いと言うわけじゃない。ただいけないのは、必要もない議論を無理やり交わしてしまったことだ」

クラス中が立川生徒会長の言葉に聞き入っていた。重い。

「俺は間違っていたのか？ 立川」

「失敗を犯すという事を間違いとは言わない。その失敗を活かせるというのであれば、これはむしろ正しいんだ」

「……分かった」

長谷川くんは意を決して僕の目を見据えた。

「尾崎。この一件は保留だ。お前が瀬川との関わりを続けたいというのなら好きにするがいい。だが、あくまでも保留だ。それでこのクラスの雰囲気が悪くなるような事があれば、その時こそ再び議論しなければならない」

「分かってる。一時休戦だね」

僕は長谷川くんに右手を差し出す。長谷川くんは一瞬ためらい、僕の手を握り返した。まるで条約を交わした重役たちを称えるかのようにクラス中で拍手が沸き起こった。長谷川くんも、今回のような騒ぎを起こした張本人としてみんなに謝罪をしていた。

「会長。助かったよ」

「おれは礼を言われるような事をした覚えはないよ。あまりに退屈すぎて最初の方は眠ってたほどだから」

あれは寝てたのか？にしては起床後の立ち振る舞いがやけに自然すぎて違和感がある。……もしかして。

「……あんたもしかして、最初からこうするために黙ってたんじゃないだろうな」

「なんのことかなあ？ 言ったら、おれは退屈してたんだって」

「……はあ。今はそういうことにして置いとくよ」

僕は瀬川のほうに戻る。瀬川の震えは止まっていたが、やはり俯いていて表情が読めない。

「良かったね尾崎くん。とりあえず和解できて」

「千早さんたちも迷惑かけたね」

「クスクス。ボクは見ていっただけで楽しかったけどね」

こいつは……。まあ、なんだかんだで僕たちの味方をしてくれたんだけれど。

「……尾崎くん」

瀬川がようやく顔を上げる。……目が赤い。

「あれ、瀬川泣いてるの？」

「……目薬よ」

そういつて顔を背ける瀬川。そのまま自分の席へと戻っていく。すれ違いに彼女が何かをつぶやいているのが聞こえたが、その言葉を胸の奥に仕舞い込んで、僕も席へと戻る。

散り散りになっていたクラスメイトたちも元の席に座り、ホームルーム開始時の状態へとようやく戻った。……全く、このクラスに立川生徒会長が居なかったらどうなっていたことやら。

「あー。やっと終わったか。じゃ、再開するぞ。クラス委員の推薦で挙がっているのは……」

そういえばその話か。なんだかどつと疲れた。長谷川くんは保留と言っていたが、正直なところ、もうこんな真似はやりたくない。それはクラス中も望むところなのだろうから、クラスはより一丸となって、そう、自然によりよいクラスを目指すようになるのだろう。やれやれ、立川生徒会長は何を考えているか本当に読めないけれど、そのカリスマ性は本物らしいな。

僕も、これからはもっと瀬川の側に居てあげよう。長谷川くんと対立する訳では決してなく、僕は僕なりに、このクラスのために、瀬川と友だちでありたいと思うのだ。

第一章・005

ロングホームルームが再開され、クラス委員が正式に決定した。元々推薦に挙がっていた僕と佐藤くん、千早さんと長島さんの中から誰を選ぶか、というところから協議は再開されたが、あれほどの問題を引き起こした僕は勿論辞退した。佐藤くんも辞退をしたがっていたが、男子の中で他に推薦される男子が居ず、クラス中からその平等精神を買われ、佐藤くんはクラス委員長に就任する事になった。千早さんと長島さんはお互い、先ほど中立の立場を築き上げた守屋さんを新たに推薦する。守屋さんは、自分では荷が重過ぎる、と言っていたが、あの長谷川くんさえも守屋さんが適任だと言われ、しぶしぶ納得する事となった。残るは文化祭実行委員だが、これもクラスから二人選出する事になっていて、男子では三ツ星くん、女子からは金子さんがそれぞれ立候補してあっさりと決まった。僕たちが巻き起こした議論のせいでロングホームルームの時間は圧縮され、結局、文化祭についての話し合いをする機会は次のロングホームルームへと持ち越しとなった。

そして放課後。僕は今日も瀬川と共に美術室へ赴く約束をしていた事を思い出す。今日からは部活動も本格的に開始され、美術室に飾ってある首のない人物像について詳しく知っていきそうな生徒に話を聞くのだ。……別に僕と知り合う前にそういうことは聞いておいても良かったんじゃないだろうかと思うのだが、そんなことを瀬川に言ったところでろくな回答は返ってこないだろう事は目に見えていたため、僕は黙っている事にした。

「それじゃあねーなっちゃん！ まーくん！」

「それではまた明日！ 急ぐぞヒマワリ！ ちーちゃん！」

日向さんと野中さんはなにやら急いで教室を出て行った。教室中が一気に静かになる。やはり日向さんと野中さんの二人がいるとこのクラスが賑やかになるようだ。

「全くあの二人は。じゃあね、尾崎くん、瀬川さん。早く行かないとあの子たちに置いていかれるから」

多分彼女たちの保護者役を買って出ているのだろう千早さんも後を着いていった。まだ教室内に残っている生徒たちも居るが、何人かは瀬川に軽く挨拶をして出て行った。今回の一件で、瀬川がこれから孤立するという事は滅多に起こらないであろう。僕はそう確信して、瀬川に声をかけた。

「瀬川、今日は……」

「尾崎くん。例えば私のカッターナイフがあなたの首を誤って突き刺さる、なんて事が起こったら許してくれる？」

いきなり何物騒な事をつぶやくんだこいつ。こいつの冗談は冗談じゃないレベルなので用心することにする。備えあれば憂いなし。

「……できれば許してあげたいけど、許してあげる前に僕の命が尽きていると思うから期待しないでくれ」

「そう。……あ、ごめんなさい、手が滑ったわ」

サクツ。そんな幻聴が聞こえてもいらい唐突に、彼女がいつの間にか手に握っていたカッターナイフが僕の喉元に突き刺さる。苦しい。

「ゲホッ。洒落になってねえよ瀬川。僕が死んだらどうするつもりだよ」

カッターナイフの刃は仕舞われていたため、喉に穴が開く事はなかったが、それでも硬い物体が喉に突き当てられたら苦しい。つつか痛い。

「死んだら許さないからね。あなたは私が許可しない限り、絶対に死んではいけない」

「それをどの口が言うんだよ。だったらカッターナイフなんて持つな」

「これは私のカッターナイフなの。これを所持する権利は私にしかないのよ尾崎くん。だからあなたに何を言われる筋合いは全くないわ」

はあ。なんて身勝手な奴だ。さっきまでは肩が震えるほど精神が不安定だったくせに。さっき自傷行為をしなかっただけで奇跡だな。

「……それで、今日も行くんだろ？ 美術室」

「そういえばそうだったわね」

忘れてたんですか瀬川さん。まあいいけど。僕たちは自分の荷物を持って教室を出ようとしたが、僕たちを呼び止める声が聞こえた。

「……待つて尾崎くん」

振り向くと、そこには七海さんがいた。こうして向かい合うと本当に小さい。

「さっきは調子に乗ったような事を言つてごめんなさい」

「？ どうして七海さんが謝るの？」

「気にしないで。それとこれ、会長から預かっているの」

七海さんは封筒を取り出して僕に差し出した。……立川生徒会長から？ なんだろう。……というか、会長すぐそこに居るんだけれど。七海さんの後ろに。

「会長。わざわざ七海さんに頼まなくても自分で渡せばいいじゃん」

「はっはっは。気にするな尾崎くん。それと、会長なんてよそよそしい呼び方はよしてくれ。おれは生徒会長である前に、きみのクラスメイトなんだ。普通に立川か響と、呼び捨てで呼んでくれて構わない」

改めてそういわれるとなんだかむず痒いな。ただでさえ絡みにくい種類の人間である生徒会長の名前を呼び捨てだなんて。

「あー、じゃあ呼びやすい方で響くん」

「呼び捨てにはしてくれないのか。まあおれは響くんのように強情じゃあないから別に構わないがね。七海くんもおれの事は気軽に呼んでくれていいんだよ」

「……会長は会長だし。名前で呼ぶの面倒くさい」

七海さんは結構強情かもしれない。僕の知った事ではないが。そういう七海さんの下の名前はまだ聞いてないな。

「七海さん。失礼だけど下の名前ってなんだっけ。まだこのクラス

の生徒一人一人の名前を覚え切れてないんだ」

「加奈子。本当に失礼ね尾崎くん。……実は私もあなたの下の名前分らないんだけど」

「そうだったんだ。僕は蒔良だよ」

蒔良……。つぶやいて七海さんは何か考え事をする。僕の名前を聞いてこういう反応をするということはつまり。

「今年で受験生なのに不吉な名前。面白いわね」

こういうことだ。僕の名前を聞いての印象は大体二通りある。ただ単に変わった名前だと思うか、不吉だと思うか。この反応の違いで、その人がどういった人間であるのかある程度判別する事が可能だ。あくまでも目安程度で僕の勝手な解釈なのだが……。前者は純粹な心の持ち主。後者は捻くれ者。そして変り者である可能性が高い。

自分の名前を占いみたいに使っている僕も捻くれ者なんだろう。

こんな名前を付けられるほど僕の両親は単純な奴で、意味のない勝手な解釈をしてしまっているのは息子である僕なのだから。

「さ、自己紹介も済んだだろう？ 尾崎くん、その封筒を開けてみてくれたまえ」

僕は言われたとおりに封筒を開けた。そこには折りたたまれた紙が一枚。それを広げてみると立派な様式で書かれた文書だ。

「依頼状？」

文書にはそう書かれていた。どういう意味だろう。この学校の生徒会長が直々に何かを依頼するという事だろうか。

「それはおれの依頼状じゃない。作成したのはおれだけど、依頼者は七海くんだよ」

依頼者は七海さん？ どういうことだ？ 僕は七海さんとは今日初めて話したのだから、僕に対してこんなものを作っている余裕などどこにもない。

「以前から七海くんから相談は受けていてね。とある事情によって、その依頼状を正式に手渡しする人間を見極めていた。だが今回、き

みの行動を見た七海くんがきみにすると言ったんだ」

なるほど。つまり渡す相手は誰でも良かったわけか。この文書は予め作成しておいて、いざその時になったから響くんではなく七海さんが手渡しを行ったと。しかし僕を選んだ理由ってなんだろう。

「こう見えて七海くんは人を見る目がある。それはおれが保証するよ。七海くんが選んだ人間に間違いはない。引き受けてくれるなら相応の報酬は用意するよ」

僕は改めて文書の方に目を通す。そこに書かれている内容は、七海加奈子と久家千里との間に出来た溝を埋め、その関係を改善する事。久家千里の心を開いて欲しいという事。この二つのことが書かれていた。

「……この久家千里って言うのは」

「このクラスの生徒よ。席は響くんの前の席。いつも一人で本を読んでいるちよつと無口な子よ。今は図書室で本を読んでいるでしょうけれど」

響くんの前の席……というと、あのおとなしそうな子か。前髪が長くて表情も読みにくいし、ロングホームルームで僕らがあの周辺の席に集まったときも全く動かず本だけ読んでた子だな。

「七海さんとの関係の改善って、二人は何かあったの？」

「……私たち元々は親友だったのよ。だけど、ちよつと、ね」

いざこざがあつて、自分では近づきにくくなってしまったと。それを生徒会長に相談して、この問題を解決できそうな誰かを探していたと。

「でも、どうして僕なんだ？ 別に響くんでも、というか、こういう事って響くんの方が適任じゃないのかな」

「のんのん尾崎くん。確かにおれだって手を貸してやりたいのは山々なんだけれど、おれが彼女と接触するとすぐに誰かの思惑だつてばれてしまう。元々おれと久家くんには面識がないからね。だがきみなら、瀬川くんの事を放っておく事ができないきみなら、久家くんと接触したところで、また余計な世話を誰かに焼いている変なや

つだと思われる程度で済む」

さりげなくひどいと言いまくりやがったなこの会長。

「冗談半分本気半分。久家くんはすでにクラスで孤立している状態だからね。きみはただ、孤立している生徒は放っておけないという瀬川さんのときと同じ理由で彼女と接触すればいいんだよ」

僕は瀬川が孤立をしていたから、というより、瀬川が本当はどういう人間なのか知りたくなったからというのが理由な気もするけど、それでも状況的にはあまり変わらないか。

「ま、分かったよ。けど響くん。こういうことは何も正式な文書を作ってまで頼む事じゃない。こんな形式にこだわってたらどんな行動も遅れるよ。だから僕はあくまでも、クラスメイトに頼まれごとをした程度の気持ちでやらせてもらうよ。七海さんも、それで構わない？」

「……別にいいけど、やるからには本気でやりなさいよ。私だっていつまでもこんな調子じゃないやだもの」

「勿論。瀬川も、勝手に決めちゃったけど協力してくれるかな」

瀬川はなんだかちよつと機嫌が良く無さそうにしている。本日瀬川とともに美術室に行くという用事を伸ばし伸ばしにされるかもしれないと思っているのかもしれない。

「……大丈夫。今日は瀬川に付き合ってやるから」

「私は別に構わないわよ。それに、あなたちよつと勘違いしているわ」

勘違い？　なんだろう。

「……まあ、ありがとう。というわけで七海さん。君の頼みは聞くけれど、今日は瀬川の用事に付き合う約束をしているんだ」

「そのようね。私はあなたにお願いをしている立場として、そこまです要求しないから自分の事を優先してくれていいわ」

「ありがとう。やり方についてはどうする？」

「それもお任せするわ。千里は放課後は遅くまで図書室に居るし、昼休みも図書室で過ごしているわ。居ないほうが珍しいから、好き

なときにいつて相手をしてあげて」

「了解した。じゃ、行こうか瀬川。じゃあね、七海さん、響くん」

僕は、瀬川が急かして僕の袖を引っ張るので足早に退散する事にした。背後から七海さんと響くんの挨拶が耳に届く。が、廊下を暫く歩いていくと、後ろから響くんが追いついてきた。

「そうそう、ついでに一つ、今度はおれからのお願いを聞いてくれないかな？」

「響くん。できれば手短に頼むよ。瀬川が僕を殺してしまう前に」

瀬川のカッターナイフが僕の横っ腹に当てられているのでとても怖い。

「そうだな。でも瀬川くん。君たちは美術室に行くんだろう？」

「……そうよ」

「美術部に鈴木正時という男子生徒が居る事は知っているね？」

鈴木正時？ 初めて聞いた名前だ。同じ学年なのだろうか。まあ、仮にそうだとしても、僕の知らない生徒はたくさん居るから気にする必要もない。

「ええ。鈴木くんなら知っているわ。彼がどうかしたの？」

「……大した事じゃないんだけど、彼の身の回りを調べてきて欲しい。彼の友だちや家族、趣味なんかも色々」と

その鈴木正時くんがなにかしたのだろうか。まるで警察の取調べみたいだ。

「きみたちに頼む理由はさっきと同じ。おれが直接彼に接触するよりも、同じ部員である瀬川くんの方が警戒されないからだ」

それでも瀬川は一応学校中に知れ渡っている有名人なのだけれど、クラスメイトならともかく、他クラスの生徒では瀬川と関わりを持つとうとする人は居ないはずだし、むしろ響くんよりは警戒されるんじゃないだろうか。

「それは本当についてでいいの？」

「ついでで構わない。適当に世間話でもしながらさりげなく聞いてきてくれたまえ。余り深追いする必要もない。すぐにでも必要とい

う情報ではないからね」

「でも響くん。その鈴木って人が何かしたのかい？」

「それは今のところ分からない。何かしたのかもしれないし、してないのかもしれない。もしかしたらこれから何かするつもりなのかもしれない」

意味が不明だ。だがやはり、響くんともあろう人物が特定の人物についての情報を欲しがるというのはやはりきなくさい。その鈴木正時という人物についてはこれから美術室に行けば判明する事だからあえて聞く必要もないが。

「分かったわ。適当に聞いて、報告も適当でいいわね。今度こそじやあね、立川くん」

瀬川は響くんを背を向けて歩き出した。瀬川のやつ、そう簡単に了承しちゃっていいのか？ 話しかけた瞬間逃げられる、なんてことがなければいいが。

「大丈夫よ尾崎くん。鈴木くんとは結構話をしているから」

「そうか」

瀬川と対等に話をする人間がクラスメイトたち以外に居ようとはいや、これは流石に失礼だな。そうなるとその鈴木くんというのはよっぽどの変り者か、佐藤くんのような平等精神の持ち主なのか。

「ところで尾崎くん。彼のことは放っておいていいのかしら」

瀬川が立ち止まって前を指差す。そこにいたのは僕の親友である和久井が窓の外を見ていた。別に放っておいたわけではないのだけれど、三年になってからは別のクラスになり、おまけに瀬川の事も構わなくてはならないので相手をする暇がないのだ。

「和久井」

「あ？ ああ、お前らか」

和久井はだるそうな目をこちら側に向けた。退屈そうだなこの男は。

「何してるんだこんなところで」

「別に。お前からこそどうしたんだ。帰らないのか？」

僕はとりあえず和久井に事のあらましを説明した。といっても、単純に瀬川と美術室に行くと言えたただけだ。

「ふうん。まあお前らが何しようと思手だがな。お前らの組がホームルームで何やってたかは既に噂になつてゐる。あんま目立つような真似すると後々面倒だぞ」

「心遣い痛み入るよ和久井。といつても、もう今更つて感じがするし、僕は全く気にしてないんだ」

「そうかよ」

気にするほうが負け。そんな感じである。まあ、僕のクラスがあの一件で良い方向へと向かつていくのであれば、その噂こそ広まつて瀬川の評価は上がるだろう。そうでなくてもどうせ最後の一年なのだから、色々と考えるよりも気楽な毎日を暮らしたほうが心の負担も軽いだろう。

「暇そうね和久井くん」

「まあな。最近ではしゃばってくる馬鹿どももいなくて腕がなまりそうだ。どうだ尾崎。そろそろ俺と一戦してみるか」

「何度やったつて和久井には勝てないから遠慮しておくよ。今度うちの姉にでも頼めよ。喜んで相手になると思うよ」

和久井の喧嘩の腕は半端じゃないので僕なんか相手にできるやつじゃない。明里姉さんなら和久井と対抗できるのだが、それは対抗どころでは決してなく、姉さんの天才的な技術の前では和久井のほうが話にならないのである。単純な腕力なら和久井の方が上だが、姉さんの洗練された技術が和久井との実力に差をつけている。

「あの阿呆もどうせ本気でやりやしねえんだろ。ちつ、まあいい。俺は帰るぞ」

和久井が玄関に向けて歩き出すが、瀬川がそれを止めた。

「まあ、此処で会つたのも何かの縁だね。和久井くんも着いてきなさい」

「あ？　なんで俺がお前らと一緒に行かなきゃならねえんだよ」

当然の反応だ。和久井は全くもって関係ない。瀬川は自分の気ま

ぐれで無関係の人間を自分の都合に巻き込むという特技を持っているらしい。

「来ないと……」

瀬川の背後から不吉な音が聞こえる。別に止めてもいいんだけど、散々僕が体験した恐怖を和久井にも経験させてやろう。たまには見ているだけというのも…… って、瀬川さん。そりゃないんじゃないですか？

「尾崎くんが死ぬわよ」

「……この流れから行くと和久井を脅すのかと思ってたんですけど浅はかでしたか瀬川さん」

「私は空気が読めないのよ尾崎くん。それに、定石通りの展開じゃつまらないじゃない」

カッターナイフの伸びた刃が僕の首に密着する。動きたくても動けねえ。ええ、僕は瀬川を信用しているから本気でやりはしらないと思いますよ？ でも万が一というのがこの場合考えられるわけでしょう。うっかり瀬川の腕が引かれると、それにつられて僕の首が切れるという状況だ。

「どうせ脅しだろ。やるならやれよ、くだらねえ」

「ちよつと待て和久井。瀬川を挑発するつもりなら俺の命を掛けてくれ。そしてできればかけるな。マジで死ぬから」

「いい度胸ね和久井くん。私が三つ数える内に回答をハッキリさせないと、私が殺人罪で捕まっちゃうかもしれないわ」

今も脅迫罪で逮捕できるレベルですけど瀬川さん。

「と、言うわけだ和久井。人助けと思って」

「……一回死んでみたら案外楽なんじゃないのかお前の人生」

「言ってる場合かこの馬鹿！」

「相談は終了ね。カウントダウン開始」

死の宣告が始まった。つうかここは廊下のだ真ん中なんだけど、都合よく誰も来ない。そりゃあ、瀬川プラス和久井という有名人二人が居て、そこを堂々と通過する強者がいるわけないんだけれど。

「三……二……一……。何か言い残した事は、尾崎くん」

「一杯あるような気がするんだけど、この場で全て語りつくせるほど時間は与えられないんだろうから一つだけ。瀬川、天国に行ったら説教だ」

「……悪くないわね。でも残念。私はきつと地獄へ堕ちるわ」

カッターナイフを握る瀬川の腕がゆっくりとスライドしていく。それに併せて刃が僕の首の皮を引っ張っていく。

「痛え」

「ちよつと痛いだけで済んでよかったわね尾崎くん」

カチカチと瀬川がカッターナイフの刃を納める。多分僕の首には一本の筋ができてるだろうな。いくら切れない方を向けてるからってそんな思い切り食い込ませなくてもいいじゃねえか。

「まあ、オチは分かってたんだけどな。どうだ和久井。瀬川の脅しつてのはただの脅しじゃ済まないんだ」

和久井は頭が悪いからな。分かてるんだか分かってないんだか。それでもとうとう諦めたのか両腕を挙げて降参のポーズをとる。

「ちつ。仕方ねえな。一緒に行けばいいんだろ」

「はじめから素直にすればいいのよ」

「というか瀬川。人を説得するのにいちいち僕の命を使わないでくれ」

「結構な交渉道具よね。私が直接刃をつきたてるよりも簡単」

僕の命の価値ってその程度なんだろうか。これから瀬川が何か言い出すたびに僕は命をかけなくちゃいけないなんて、かなり神経が磨り減るな。

「じゃ、行きましょうか」

「……尾崎。死ぬなよ」

「保証はできないな」

和久井をメンバーに追加して、僕たちは美術室へと向かう。今日から美術部も活動を開始しているはずだし、やはり部外者として気が引けるよなあ。

と、そんなこんなでようやく美術室へ到着。中に入るとやはり美術部員が数名見受けられた。だが見た限り、全員がまとまって活動をしているわけではないようだ。前の方に集まっているグループと、後ろのほうでポツンと活動している女子生徒が一人。僕たちが美術室に入ると、前の方に集まっているグループは知らない顔で活動をしていた。瀬川も美術部員の筈だが、どうやら良くは思われていないらしい。そんな中、一人で活動をしていた生徒が手を休め、瀬川の元へ笑顔で近づいてきた。

「奈々実先輩！ お久しぶりですね！」

「久しぶりね、綾子」

久しぶり、ということとは瀬川とは以前から話を交わしていたようだ。先輩、と言っているということは二年生かな？ 明るくて元気そうな子だ。野中さんや日向さんと通じるところがあるな。

「こちらの方々はどちら様ですか？」

綾子と呼ばれた女子生徒は僕たちに向き直る。

「僕は尾崎蒔良だよ。よろしく」

「まくらですか……。なんだか修学旅行で投げ合いたくなる名前ですなぁ」

枕投げかよ。そういう返しをする人間は珍しいな。そして初対面で失礼だな。

「こちらの方は？」

「……………」

和久井は無愛想にしている。和久井にとっては苦手な人種かもしれないなあ。そうでなくても、和久井は初対面の人間に対しては大抵無然とした態度をとっているが。

「……この方はなんなんですかー！ わたし無視されるなんて思ってもいませんでしたよー！ 人生初の出来事にわたしは大変ショックで気が狂いそうです！ 誰か助けて寂しくて死んじゃう！」

和久井の態度を見て騒ぎ出す女子生徒。あれだけで癇癪を起こすくらい気の短い性格をしているのか？

「やー、やー、無視しないで、無視しないで、お願いしますよー！」
瀬川は既に感染モードだった。僕も止めたほうがいいのだろうが、
なんだか見ていると面白いな、この子。

「きゃーきゃー！ 何で？ 何で？ 無視しないでって言うてるで
しょー！ うわー！ わたし今空気？ それとも蒸気？ それともガ
ス？ 二酸化炭素ですか窒素ですか酸素ですかオゾンですかフロン
ですかヘリウムですか？ 火をつけたら爆発しますよつけなくても
爆発しますよ！ わたしが爆発したらすごいですよ！ いいんです
か？ いいんですね！ じゃあ爆発します！ うっつ！ うっつ！
うわああああ！ …………… ぎゃー！ わたし今すげー痛い子
！？ わたしをこんな痛い子にしたてあげた人はどこのドイツ人だ
！ そんな目でわたしを見るなー！ 哀れまないてくださいお願い
しますよー！ もう、どうでもいいです、あなたなんて知らないで
す！ だから、無視しないでー！」

和久井が黙り続けていると彼女は徐々にヒートアップしていった。
うむ。痛い子だ、完全に痛い子だ。

「…………… 無視すんなっていつてるだろーが！」

そのとき彼女は予想外な行動に出た。なんと、あの和久井にビン
タをかましたのだ。部室中に響き渡る鈍い音。和久井を殴る人間な
んて久しぶりに見た。当の和久井も驚いている。

「…………… あああああ！ わたし今何しました！ ひでー！ わた
しの外道、人でなし！ だから無視されるんですよわたしなんてい
らない子なんだ！ 誰かわたしを殴って！ やっぱ殴らないで痛
いから！」

言っていることが無茶苦茶だこの子。このまま放っておくとどこ
まで暴走するか分からない。興味はあるけどここは止めなきゃいけ
ない気がする。何より和久井を殴って無事で居られるのかどうか。

「ちょ、落ち着いてよ君」

「…………… え？ ああ、すいません。ちょっと取り乱しました。…
…はあ、なんだかとても疲れしました。殴ってごめんなさい。…………屋

上ってどこでしたっけ？　それか、ロープあります？　ああ、瀬川先輩カッター持ってたよね、貸してください」

僕の声に反応したと思ったなら今度は何しようとしてやがるんだこの子！　瀬川も当たり前のようにカッターナイフを取り出すな！

「今のわたしは危ない子」

瀬川からカッターナイフを受け取った彼女はごく自然に刃を左腕に当てた。いや、目が冗談じゃねえ。

「……ああうつせえな！　もう無視しねえから手首なんて切ろうとするんじゃない！」

和久井が彼女の腕を取る。ふう、どうやら事は起きてないようだ。自傷癖の持ち主は瀬川だけで十分だ。これ以上変なのが増えてもらっても困るだけだ。

「ありがとうございます。わたしはこれからいい子になるのでよろしく願います」

今まで騒いでいたのが嘘みたいにくるっとしている彼女。……まさかわざとじゃないだろうな。だとしたらこの子の性格もかなり破綻していると思われる。面白いからいいけど。

「では改めまして。わたしは菊地綾子と言います」

「……和久井和仁だ」

「よろしく願います蒔良先輩。和仁先輩」

菊地ちゃんがあればほど騒いでいたのに、他の美術部員はまるで気にしていない様子である。いや、これはもう、無視されているといった感じだ。心の中ではさっさと帰れとか、お願いだから来るなといった風に思われているのだろう。

「なあ瀬川。やっぱり僕たちは来るべきじゃなかったんじゃないか？」

僕はとりあえず、美術部員たちに気を遣ったふりをして瀬川に問う。

「別に構わないわよ。私は美術部員だし、美術部員が正式にお友だちを招待しているのだから全く問題はないわ。それにね尾崎くん。」

別に部外者はあなたたちだけじゃないのよ。……あの子なんかは、美術部ではなかったはずだし」

瀬川が一人の生徒の方を見遣る。なるほど、自分たちで部外者を呼んでいる手前、僕たちに強く言う権利がないわけだ。

「……仮にそうだとしても、だ。菊地ちゃん。君もどうやら孤立しているみたいだけど、いいのかい？」

「今更ですよそんなの。わたしはあの排他的な人たちと違って、例えどんな人でもどんな国籍でもどんな人種でも、どんな変態さんだろうとオールオッケーなミス・インターナショナルですよ。奈々実先輩も例外ではありません」

ミス・インターナショナルの意味を履き違えている菊地ちゃんではあるが、彼女も彼女でポリシーというものがあるらしい。

「それに、奈々実先輩と一緒に居るほうがなんだか楽しいですもん。いろいろ面白いこと言うし、行動も見ていて飽きませんし。……それにですね、なんだか放って置けないじゃないですか」

菊地ちゃんは、最後は瀬川に聞こえないような小さな声で言った。後輩に気を遣われるとは瀬川も人が悪い。けれど、分からなくもないな。まだ合計して三日ほどしか瀬川とは話していないが、それでもあまり目を話したくない人物である事は確かだ。

「ところで綾子。鈴木くんは今日は来てないのかしら？」

瀬川は菊地ちゃんに尋ねた。忘れるところだったが、本日の目的は、あの首のない絵について詳しく知っていそうな人物に話を聞くこと、と、ついでにその鈴木という人物についての情報を得ること、だ。

「正時先輩なら今は職員室に居るはずですよ。大森先生と次の美展について話し合っているはずです。何か用でもあったんですか？」

大森先生というのは美術教師だな。眼鏡をかけて冴えない印象を与える中年男性だ。

「いえ。鈴木くんならあの絵について詳しく知っているんじゃないかと思って」

「あー、あの首のない絵のことですか。あれの話を聞いて何かあるんですか？」

どうやら瀬川の見立てによると、その鈴木という生徒があの絵に
関して詳しいらしい。響くんの頼みも同時に達成できそうだし、一
石二鳥だな。

「……聞きたい？ とつても怖い、身も凍るような恐怖よ？」

「ぶるる。面白そうですが耳をふさぎます」

今のは瀬川の冗談だろうけれど。菊地ちゃんも本気で信じている
のか疑わしいな。

「じゃあ、正時先輩が戻ってくるまで暇を潰しましょう」

菊地ちゃんがあらゆる遊び道具を準備する。……美術室ってなん
でこう、美術と関係のないものまで一杯置いてあるんだろうか。ト
ランプ、将棋、チェス、人生ゲーム。ありとあらゆるボードゲーム
が美術室には保管されていた。

「……ごめんなさいね綾子。鈴木くんが居ないのなら先にやってお
く事があるわ。そうよね、尾崎くん？」

「先にやっておく事？」

「図書室よ」

ああ、そうか。確かに暇ができるのなら、ここで七海さんの依頼
のほうもこなしておくというのもいいな。

「おい尾崎。図書室ってのはなんのことだ」

「和久井くんは気にしなくていいのよ。というわけで綾子。和久井
くんはここにおいて置くので、存分に遊ぶといいわ」

和久井を連れてきたのは単に菊地ちゃんの相手をさせるためだっ
たんじゃねえだろうな瀬川。流石にそんな扱いでは和久井も泣くぞ。
「おまえな、こんなところに連れてきてそれは……いや、なんでも
ねえ。早く行って来い」

和久井も分かってきたじゃないか。瀬川に対しての抵抗は無駄だ
って事。

「分かりました。いつてらっしゃい先輩たち！ では和仁先輩はわ

たしとお留守番ですね」

菊地ちゃんと和久井を置いて僕たちは美術室を後にした。

図書室は美術室と同じ階にある。様々な実習室が集まる二階にあり、主に文化部の活動はこの二階に集中している。しかしながら、図書室というのは校舎の端のほうに位置し、そこにわざわざ足を踏み入れる生徒も少ないと聞く。でもそれは逆にとても静かであるということであり、僕たち受験生にとっては街の図書館で勉強をするよりは返って落ち着く場合もあるらしく、一、二年生たちよりも三年生の方が利用率は高いのだそうだ。

「尾崎くんも図書室で勉強をしたりするタイプなのかしら」

歩きながら瀬川が僕に問いかける。

「いや。僕にとってはどこで勉強しても同じにしか感じないからな。図書室にしろ図書館にしろ、他人が周りにいる環境での勉強は落ち着かないものがあるし。やっぱり自分の部屋でやるのが一番だと思うよ」

「ふうん」

それきり瀬川は黙ってしまった。そういえば瀬川は試験前とかどうやって勉強しているのだろう。あまり成績は上位の方ではなかったと思うし、まさか全く勉強をしていないわけでは……。いや、もしかしたらそれもありえるのか。

まもなくして図書室に到着する。図書室の前には荷物を置くロッカーのようなものが設置してあるが、これでは無用心だと思う。図書室の戸には「静かにご利用ください」という決まり文句が書かれた貼り紙が貼つてある。入り口の横には司書室があり、窓から司書の先生がコーヒーを飲んでいるのが見えた。

「……あの子だな」

図書室に入り、一通り中を見渡すと、やはり同学年で見かけたことのある生徒がちらほらと見受けられる。僕たちのお目当ての人物は、図書室の奥の方の席に一人で座って読書をしていた。うん。確かに櫂の前の席に座っているクラスメイトだな。僕はそこら辺の本

棚から適当に本を手に取り彼女に近づく。瀬川が僕の行動を不思議がっていたが、僕に倣って本を一冊手に取った。

「ご一緒してもいいかな？」

僕が声を掛けると彼女が目線を本から僕に移動させる。……. といつても、前髪が長すぎて僕の方からは彼女の目が見えないんだけだ。

「えーっと、僕は尾崎っていうんだけど、知ってるよね。クラスメイトだし」

彼女は僕と瀬川の顔を交互に見た。瀬川の顔を見ても全く動じる様子がない。……. 予想以上に反応が薄いな。これは普通に会話をするだけでも大変なんじゃ…….

「たまたま図書室に来たら君のことを見つけてね……. えーっと、名前、なんだったっけ」

本当は七海さんから預かった依頼書に書いてあったため分かるのだが、あえて知らないふりをした方が警戒はされないはずだ。僕は彼女と話したことは一度もないのだから。

「……………」

彼女は机に置いてあったルーズリーフに自分の名前を書いて僕の方に差し出した。

「久家千里さんか。よろしくね。それで、お邪魔でなければ良いかな？」

久家さんは名前を書いた紙にそのまま「ドウゾ」と書き加えた。

「…………. どうもありがとう」

僕と瀬川は久家さんの向かい側の椅子に腰掛ける。それにしても聞いた以上に無口だ。七海さんはちよつとしか言ってたけどこれはそんなレベルじゃない。話せないという訳ではないのだろうけれど、それでもわざわざ紙に書くくらいだから相当なものだ。

とりあえず僕は本棚から持ってきた本を開く。この本はただの力モフラージュ用なのだけれど、なるほど、序盤をちよつと読んだだけで物語に引き込まれそうになった。今度機会があれば本格的に借

りて読んでみよう。

「……ん？」

久家さんは自分が読んでいた本を開いたままの状態で置き、ルーズリーフになにやら書き始めた。僕たちに話題を振ってくれるのだからかと思っただがどうやらそうではないらしい。勉強をしているのか？ いや、久家さんが開いている本は参考書じゃない。よく見れば、クリアファイルの中に文字がたくさん書き連ねてあるルーズリーフが何枚か挟んである。どうやら図書室に来てはこうして何かを書いているらしい。

「何してるの久家さん？」

僕が聞くよりも前に瀬川が先に口を開いた。瀬川はカモフラージュ用の本さえ開かず、久家さんのことを観察していたらしい。

「………」

小説を書いているの。

久家さんは会話用のルーズリーフに文字を書いた。なるほど、この手の子ならありえるな。

「へえ、久家さんは小説を書くのが趣味なのね。休み時間もずっと本を読んでいるから、てつきり読むだけかと思っていたけれど」

こういふ話は男子である僕よりも、久家さんと同じ性別である瀬川の方が話しやすい場合もあるか。よし、ここは瀬川に一任してしまおう。

「………」

奈々実ちゃんの趣味は何？

「私の趣味か……。そう言われると思いつかないわ。今までどんなことをしながら生活してきたかなんて、案外分からないものね。でも強いて言うなら、尾崎くんを虐めるのが趣味よ」

なんて迷惑な趣味を持つてるんだ瀬川は。しかもそれはかなり最近の趣味じゃないか。まあいずれにしろ、瀬川とともに応答を続けているあたり、無口ではあるが、それなりに友好的な性格をしているようだ。でも、どうして七海さんとの仲がこじれてしまった

のだろうか。そのあたりの理由を聞いておいたほうが対策も立てられるというものだが、わざわざ聞くというのも野暮だしなあ。

「……………」
蒔良さんの趣味は？

「僕？ そうだなあ。読書も音楽鑑賞も人並みにはするかな。最近
は映画鑑賞とかも結構するね。昨日足立先生も言ってたけど、僕は
特徴ないのが特徴みたいだから」

「……………」
特徴がないなんてそんなことない気もするけど。もうクラスの中
心的な人物じゃない。

そうだろうか。………… いや、否定はできないか。それはいいとして、
こうして久家さんが紙に自分の言葉を書いて、僕たちだけが声に出
して喋っていると、なんだか周りからは痛い目で見られそうな光景
だ。辛うじて今は瀬川が隣に居るが、それでも図書室内は静かで、
僕たちの声はいやでも周りの耳に届いてしまいそうだし。

「ところで久家さん。どんな小説を書いているのかしら」

「……………」
色々書くけど、最近多いのはファンタジーかな。

「ファンタジーね。恋愛小説とかは書かないの？」

「……………」
恋愛小説はやっぱり書いてて恥かしいし、私自身が恋愛経験ゼロ
だから書きにくい…………。

無口であるという事を除けばかなり普通の乙女だな久家さんは。
僕が今年になって新たに知り合った女の子たちの中では一番まとも
な性格をしているのかもしれない。千早さんや卯の花さんもそこま
で変とは言わないが、標準的ではないことは確かだろう。

「へえ。面白そうね。もし差し支えなければ見せてくれるかしら」
瀬川はかなり自然に久家さんとの会話を進めていく。案外久家さ
んのことを気に入ったのかもしれない。

「……………」

別にいいけど、今作品と言える作品を持ち合せてないの。

「そのルーズリーフは？」

「……………」

これはまだ作品とは呼べない。ただ思いついたことを文章にしてみているだけだから。基本的に、本格的に書くのは家だけで、これは本番前のリハーサルみたいなもののなの。

久家さんの会話用のルーズリーフがどんどん文字で埋まっていく…………でも例え紙だとしても、これだけ会話ができるのだから普通に喋って話すこともできると思うのだが。何か声を発したくない理由でもあるのだろうか。

「……………」

こんな落書きでよければ見せてあげられるけど。

「本当？　ありがとう」

久家さんはクリアファイルに入っているルーズリーフを数枚ほど取り出し、僕たちの方へ差し出した。ルーズリーフには文字がびっしりと詰まっている。

「これで落書き？　すごい文字数ね」

いやすごい。僕にしてみれば十分作品と呼べるレベルだと思うのだが。素人目の基準なんて語ったところで説得力はないけれど。

「そついえば久家さん。僕たちには惜しげなく見せてくれたけどいいの？　こういうのって大抵見せるのが恥ずかしいとか考えそうなんだけれど」

「……………」

私、プロの作家目指してるから。恥ずかしいなんて言ってられないの。

「なるほど。でもなんだか納得。すごいよ久家さん。これならコンクールとかも入賞できそうなんじゃない？」

お世辞ではないが、所詮素人の意見である。本気でプロを目指している人物に対してこういう発言は失礼だろうか。

「……………」

ありがとう尾崎くん。たとえ落書きでもそう言って貰えると少しは気が晴れるわ。……でも、現実ってそう甘くないの。

「……久家さん？」

その長い髪のせいで表情は読みにくいがどうやら落ち込んでいるらしい。文字では明るく話しているように思われるが、実はさつきから久家さんは笑ってない。

「……………」

なんでもない。

「なんか元気ないよ、久家さん。どうかした？」

「……………」

私、端から見ればいつも暗いって言われるけれど、これでもテンション高いのよ。

本当かよ。そう言っても変化が全くわからない。前髪切ればいいのに。

僕は久家さんのルーズリーフをもう一度眺める。見れば見るほどすばらしい作品だと僕は思うのだが、現実には甘くない、ということは何度か落選を経験した事があるということなのだろうか。それでもこうして諦めずにがんばっているのだ。

「久家さんはいつも図書室にいるの？」

「……………」

昼休みと放課後は大体。どうして？

「久家さんがよければまたお邪魔させてもらっわ」

「……………」

私は全然いいよ。ていうか同じクラスだし、気兼ねなく話しかけてね。

「そうね。それじゃあね、久家さん。私たちそろそろ行くわ」

瀬川が立ち上がったて久家さんに手を振った。僕もそれに続いて席を立つ。

「それじゃあ久家さん。また明日」

「……………」

またね。

久家さんは会話用のルーズリーフに最後の一文を書き加え、僕はそれを確認したのと同時にその場を離れる。カモフラージュ用の本を借りていこうかと迷ったが、今日のところは別にいいだろうと思いい、そのまま本棚に戻した。

「いい子じゃない、久家さん」

図書室を出て廊下を瀬川と並んで歩く。

「そうだな。七海さんに話を聞いたときは会話が成り立つか不安だったけれど、結構友好的で安心したよ」

「そうね。こうやって自然にしていれば、その内七海さんの依頼も達成できそうね」

七海さんの一件はとりあえず幸先良いな。でも、もともとは親友だったのだから、七海さん自身が久家さんと直接話をして解決すればいいのではないのだろうか。……そうも言ってられないか。二人の間に溝ができてしまうほどの問題があったわけだし、ただでさえ無口な友だちとは気兼ねなく話かけられないか。

とりあえずこの件はゆっくり取り組めば良いとして、問題は鈴木正時の方か。そろそろ大森先生との話し合いも終わって美術室に戻っていればいいけれど。そう何度も部外者の僕が美術室にお邪魔するというのは気が引ける。

「それにしても全く喋らなかつたわね、あの子」

「そうだな。元々喋れないのかそうでないのかは分からないけれど、でも別にいいんじゃない？ ああやって文字にして会話はできるんだし」

「そうね。野中さんや日向さん。それに綾子もかなりテンション高いし、久家さんくらいの子が居れば釣り合いはとれそうね」

瀬川や七海さんだつて見た目は大人しそつでも性格はそうじゃないからな。どちらかといえばお嬢様。……まあ、普通の性格っていうのは基準がはつきりしてなきや意味はないし、どんな人でも個性があるということだろう。……樗みたいないな性格を基準にしたら異常

なのは僕たちのほうだし。

「案外私の性格も普通なんじゃないかしら」

「それはないな。僕の知り合いにはカッターナイフを脅しに使う人は一人も居ない」

「つまり私のことは普通じゃないと、そう言いたいのかしら？」

「……しまった。これは罠だ。これから僕は瀬川の陰湿ないじめを受ける事になるが、覚悟はいいだろうか？ いや待て、悪いのは僕の方なのか？」

「あれだけみんなに大々的に私のことを庇っておいて、心の中ではやっぱりそう思っていたのね。ショックよ」

カチカチ。案の定だがそう何度もやられてたまるか。僕はすぐさま瀬川の右手を押さえ、カッターナイフを取り上げる。

「……早いわね」

「流石に慣れた。いい加減すぐにカッターナイフを取り出す癖をやめろ。そんなことしているから普通じゃないなんて思われるんだ」

「ふふ。でも、いい感じね」

「何がだ？」

瀬川が僕の顔を見つめてくる。

「そうやって尾崎くんが私を止めてくれれば、私も怪我をしなくて済むものね。これからもあなたがストッパーになってくれるなら、私は安心できるわ」

「……言われなくても、最低でもこの一年はストッパーになってやるが、手首を切りたくないならその始めからカッターナイフなんて持ち歩くなよ」

僕もこうなればすっかり瀬川の保護者だな。……だが、瀬川はなんだか暗くなつて僕の顔をじつと見つめる。

「こんな廊下の真ん中でこんなこと言うのもなんだけど、私ね、こうやって人と会話をする事が少なかったの」

「それは……分かるが。どうした？」

「……だからね。みんなにあいつは異常だ、危ないから近づくな、

だなんて言われると、とてもストレスが溜まってくるの」

「そうだろうな。……そもそも何が原因で瀬川は避けられる対象となってしまったのだろうか。流れている噂はどれも真実味を帯びていないし、そういえば瀬川が具体的にどんなことをしたのか、僕は一度も聞いたことがない。」

「ストレス解消に自傷行為をするなんて、別に珍しい話じゃないじゃない？ 自分で手を噛んだり、爪を突き立てたり。わたしは一度、心が限界まで追い込まれて、死んでしまおうとすら考えた」

「それでリストカットを？」

「そう。けれどリストカットなんて本当は自殺の手段にしては確実性が薄いものでね。私は死ねなかったの。それでも心はなんだかすつきりしてて、それから癖になっちゃったのよ」

瀬川の自傷癖はやはり、極度のストレスによるものだったのか。

異常だなんだと蔑まれ、そのストレスに耐え切れなかった瀬川はところ構わずリストカットをしてしまう。それ故に余計に距離を置かれるようになってしまい、つまりは悪循環が始まるのだ。

「……だからね、尾崎くん。今更私がこのカッターナイフを手放す事はできない。でもあなたが止めてくれるから、私は安心できるの」

「瀬川……」

僕が初めて瀬川に話しかけたときも瀬川は手首を切ろうとした。

僕はそれをかろうじて止めることができたが、今まで自分の自傷行為を止めてくれた人間など居なかったのだろう。

「いいぜ。僕が止めてやる。もしそれでストレスが解消できなかったら……そうだな、僕の手首を切ってくれて構わないよ」

本当は嫌だけれどね。痛いのはごめんだ。でも、それでもしないと瀬川の自傷癖は治らないだろう。

「……それは駄目よ。私の代わりに傷つくなんて、私は許さない。私の痛みは私のものだから。……そうね、尾崎くん。私のストレスが限界に達して、あなたが側に居てくれるというのなら……」

瀬川は僕の顔を見つめ、

「……あなたの前で泣いてもいい？」

その瞳はとても美しい色をしていた。

「ああ。思い切り泣けばいいさ」

「ありがとう」

その美しさを僕は守ってやりたいと思う。不思議だ。どうしてこんな気持ちになれるのだろう。昔の僕から見たら今の僕など滑稽に映ってしまうのだろう。笑うがいいさ。それでも僕は、瀬川の側に居て、こいつの痛みを受け流す緩衝材になりたい。

「……瀬川」

「なあに、尾崎くん」

「それはいいけれど、できれば僕をカッターナイフで脅すのも止めてくれないか」

「ふふ」

瀬川は微笑み、カッターナイフを取り出すとその刃を僕の首にあてがった。

「脅させないと脅すわよ、尾崎くん」

「……ま、分かってはいたけどな」

きつとそれもストレス解消の一部なんだろう。……本当にそうかどうかは分からないが。今更抵抗したって無駄だ。

「じゃ、行きましようか」

「へいへい」

僕と瀬川は再び歩み始めた。

美術室に到着し、僕たちが中に入ると、僕の目に映ったのはなにやら得体の知れない瓦礫の山とそれに埋もれる菊地ちゃんの背中、そして側には和久井が啞然とした姿で座っていた。

「瀬川、僕たちはどうやら場所を間違えてしまったようだ」

「そうみたいね。行きましようか尾崎くん」

さて、何も見なかったことにしてその場を離れよう。

「ぐぐぐ。まくらせんぱい、ななみせんぱい、たすけてくださいよう」

瓦礫の中からうめき声が聞こえるが気のせいだと思いたい。いや、流石に無視するのは可愛そうだろうか。

「……で、和久井。その不燃ごみの山は一体なんなんだ？」

「見て分らんか。これは俺が作った芸術作品だ」

どこをどう見たら芸術作品になるんだ？ いや、タイトルを「ゴミ」と名付けるのであればありえるかもしれない。だがそれだと逆に失礼じゃないか？ ゴミに。

「それとお前らは場所を間違えてはいない。ここは美術室だ」

「僕にはただのゴミ捨て場にしか見えないのだけれど。その内異臭が放ってきそうだな」

「うう。なにをのんきなことを……」

和久井の作品に埋もれる誰かさんのことは放っておいてやろう。その方が静かだ。

「お前みたいな芸術とかけ離れた人間がどういう思考回路を持ったら何かを作ろうだなんて思えるんだ」

「いや。菊地の暇つぶしに付き合っていたら、昔の先輩だかなんだかが置いていった作品を取り出してきてな。仕方なく俺が完成させようと思いついたわけだ」

「なるほど。それで、道具には何を使っただ？」

「金槌」

壊す気まんまんじゃねえかよ。和久井の手は創造するためにあるのではなく、破壊するためにあるのだと自分でも分かっているだろうに。

「とりあえず菊地ちゃんを助けてやりなよ」

流星にいつまでも生き埋めのままにしておくわけにもいくまい。

「？ 菊地が何処に居るんだ。そういえば俺がコイツを完成させた瞬間どっか行っちゃったけど」

「ぎぎぎ。かずひとせんぱいいつかころします」

「お前にはこの地獄からの亡者の声が聞こえないのだろうか」

作品のタイトルを変更せねばなるまい。「亡者の墓場」とかどうだろうか。……なんだか安っぽい名前だな。僕にネーミングセンスはないようだ。

「うつつ……うがあああああああ！」

突然瓦礫の山が大噴火した。菊地ちゃんが大声を上げながら立ち上がる。おお、ずいぶんお怒りのようだ。

「ふふふ……和仁先輩。この怒れる地獄の魔王が蘇ったからにはただじゃ置きませんよ」

「菊地、俺の作品になんてことを……」

「ええスバラシイ作品でしたね和仁先輩。テーマは破壊とか崩壊とかそんな感じですよ！ それとも力オスですか。いずれにせよ、この可愛いキューティクル美少女な後輩を生き埋めにしておいてその態度は一体どういう神経構造をしているんですかあなたは！」

そんな大声を出したら他の美術部員の迷惑になるんじゃないのか。……と、思ったらいないな。とっとと退散したか。これでは美術部の先が思いやられる。

「というか菊地ちゃん。よく生きてたね」

「あと少して死ぬところでした」

「それで綾子。鈴木くんはまだ来てないの？」

話を見事に一刀両断して割り込む瀬川だった。いつもはただ黙っ

てみているだけだったのに、流石に見兼ねたか。

「あー、そういえばまだ来てませんね。他の子たちもいつの間にか帰っちゃってるし、美展、どうするつもりなんでしょう」

大森先生との話がそれほどまでに長引いているという事だろうか。

……これはこちらから出向くべきかな。

「そう。まあいいわ。和久井くん、綾子、このガラクタを片付けなさい」

「おい、これは一応作品で」

「か・た・づ・け・て」

瀬川の一言で同時に動き出した二人だった。案外似たもの同士だな和久井と菊地ちゃん。どっちもかなり馬鹿だ。

「それにしても遅いわね鈴木くん。このまま来なかつたらかなり無駄足だわ」

「あの絵のことについては菊地ちゃんじゃだめなのか？ 一応美術部員だし」

「綾子に聞いたってどうせ分からないわ。あの子、そこまでつつこんだ部活動はしていないし。なにより、見た通りの馬鹿だしね」

ま、どちらにせよ鈴木くんには結局用があるわけだし、まだ日は明るい。もうしばらく待っていたって大丈夫だろう。

和久井と菊地ちゃんが僕たちの背後でせつせと撤去作業を行っている。僕は瀬川と並んで椅子に座り、鈴木くんの到着を待っていた。その間何を話していいのやら分からず、時が過ぎる間、ただ黙っているだけの僕だった。

「……ねえ尾崎くん」

沈黙を破ったのは瀬川の方だった。美術室の戸を見つめて、瀬川との距離が一番近い僕にしか聞こえないくらいの小さな声で彼女は言った。

「運命って信じる？」

その声はどこか儚げだった。……全く。さつきもそうだけれど、コイツはいきなりこうやっておしとやかになって、僕に何かを伝え

ようにする。……もう少し場所を選んで欲しい。その、ムードつてもんが皆無だ。

「さてね。僕は自分の人生が何かによって決定されているだなんて思いたくはないよ。けれど、例えば何かとても幸運な時に、これはこういう運命だったんだ、なんて言われたら、その時僕は一時的にでも信じてしまっだろう。逆に、とても嫌な事が運命だなんて言われたら、それを否定しちゃうんだろうな。そんな運命は認めないってね」

良いこと全てが自分の人生に関わってくるわけじゃないし、悪いことも全てを否定してしまえばそこから先の道は開けない

「そう。……そうよね。でも、そもそも運命って何かしらね」

「……それは誰にも解けない問題だと思うよ。解答は人それぞれ、でいいんじゃないかな。因みに瀬川はどう思っているんだ？」

「わからない。ただの人生と、どう違うのかしら。尾崎くんはどう思うの？」

「僕は、そうだな……。受け入れること、だと思うよ」

「受け入れる？」

「そ。良いことでも悪いことでも素直に受け止める。逃げないで受け止める。目を背けてばかりいたら駄目なんだ。どんな時でも受け入れて、その先を見つめて、見つめた先に見えた未来が、きっと運命なんだと思うよ」

言ってから後悔した。僕は何をえらそうな事を言っているのだろう。僕だって昔から今まで目を背けてきたことがたくさんあるのに。

「見つめた先に見えた未来……」

「……昔話でもしてあげようか」

「え？」

僕は瀬川に、僕がまだ小さかった頃の話聞かせた。

「僕の友だちに女の子が居るんだけどさ。その子は昔、瀬川と同じように孤立していたんだ」

確か僕が小学六年生の頃だったと思う。あのときの僕も今と同じ

ように特徴がないのが特徴と言われてたほど質素な子供だった。けれどどうしてか、その子と出会ったとき、何故だかは分からないが、運命めいたものを感じてしまった。馬鹿げた話、なんだけれども。

「その子は占いが好きだったんだ。つまり、そう、運命を見るということに憧れていた。僕が彼女と出会ったのは本当に偶然だったんだ。僕がたまたま拾った筆箱の持ち主がたまたまその子だった。それをそいつは、これは運命的な出会いだって言ってる。僕が、いや、偶然だ、って言い張っても聞かなくてね」

あいつの顔はとても輝いていた。その時はまだ、自分の人生に生きがいを見出せていたんだ。……けれど、中学に入ってから彼女は変わってしまった。

「小学生の内はまだ占いを信じる可愛い女の子程度の認識だった。けれど、中学に入って、その子自身が占いに手を出し始めると、とうとう周りも、本格的に彼女の事を避け始めた」

「たかが占いでしょ？　そうそう当たるものじゃないし、孤立するほどの趣味には思えないのだけれど」

そう。普通ならそうだ。大人たちでも占いを信じる人や、占いを生業としている人たちも大勢居る。それがただの占いなら、孤立するというのはおかしい話なのである。

「けれど、彼女は孤立した。それは彼女の占いの的中率が異常なまでに高かったからだ」

「……え？」

「人とかけ離れた特技を持つ人間というのは良い意味でも悪い意味でも注目される。その子は占いの才に秀でいたんだ。運命を見るこゝとができた結果、周囲から気味悪がられた。……その子の両親から」

中学に入っただけのあいつを両親が手放すまでの期間は一年を切った。彼女の両親は世間からの風評をひどく気にする両親で、彼女を捨て、すぐに遠くへ引っ越してしまったのだ。

「……そんな」

「運悪く彼女の親戚はどれも遠いところに住んでいて、一銭も持たない彼女は一人で町をさまようようになってしまった。中学も通わなくなつて、僕はそんなあいつのことを放っておく事はできなかった」

家へ来るかと誘つた事もあつた。だがそいつは、どうせお世話になつても迷惑をかけるだけだからと、僕の誘いを断つた。

「運命を見続けた結果、あいつは住む家も財産もなにもかもを失つてしまつたんだ」

「……そう。運命っていうのは本当に、残酷でもあるのね。……それからその子はどうしているの？」

「今は懲りずに占い師をやつてるよ。川の近くに防空壕があつてね、そこでホームレスをやつてる。占いで数日分の生活費を稼いで、占以外の時間は大抵寝てるよ」

そいつは僕と同じ年で、彼女が孤立した後も僕はあいつの側に居た。それでも、自分の心が痛まないように、痛んでも忘れられるようにと、あいつはよく眠るようになった。眠っている間は悪夢さえも見なくて、とても幸せなんだとあいつは言っていた。……あいつが現実を受け止め、見出した未来は……。

「……だから、あいつの人生がそういう運命だったなんて、僕は思いたくはない。例えそうだとしても、一番近くにいた僕がその運命を捻じ曲げてやれなかつたんだ」

「……………」

「だけどあいつは、僕に側に居てくれてありがとつて言つたんだ。相変わらず、僕と出会つたのは運命だったんだって、微笑んでな」
自分の現状を理解したうえで、あいつは自分自身を苦しめた占いという道突き進んだ。並の神経でできることじゃない。

「辛気臭い話をしちまつたな。忘れてくれ」

「いいえ。……でも、じゃあ……」

瀬川が僕の顔を見つめ、

「……私と尾崎くんが出会えた事は運命なのかしら」

僕は、瀬川とあいつは似ているな、なんて事を考えていた。

そのとき、廊下から誰かの足音が聞こえ、まもなくして美術室の戸が開かれた。そこに立っていたのは蒼白で痩せた少年だった。

「おや、何やらおそろいで。はじめましての人もいるようだね」

その少年は儂げな微笑を浮かべた。なんだか今にも倒れてきそうなほどの貧弱さだ。栄養足りてるのか？

「鈴木くん。あなたを待っていたのよ」

ようやくのお出ましか。一見すると、響くんが警戒するような人物じゃ無さそうだけれど。人は見た目では判断できないか。

「もう、正時先輩遅いですよ！ 他の部員はもうみんなとづくに帰っちゃったです！」

「あー、そうみたいだね。ごめんごめん」

いや、帰ったのは多分僕たちのせいかと。

「えーっと、君が鈴木くん？」

「？ そうだけど」

「僕は尾崎蒔良。あつちのでかいのは、知ってると思うけど和久井。瀬川が鈴木くんに用があるってんでその付き添いで来たんだけど」

「付き添いじゃないでしょ」

付き添いだろ。僕はあの絵については特に興味があるわけじゃないんだから。かといって、一応初対面である僕が用などと言えるわけないし。

「……まあいいや。僕は鈴木正時。はじめまして。二人とも、よろしくね」

「……………」

和久井は相変わらず懽然とした態度をとっていた。全く、そう初対面の人間に対していちいち喧嘩売するような態度をとるなよ。

「尾崎くん。彼は怖いね。……僕なにかしたかな」

「いや。和久井はデフォであれだから気にしないほうがいいよ」

「そうなんだ」

「それで鈴木くん。あの首のない絵のことなんだけれど」

瀬川が本題に乗り出すと、菊地ちゃんが突然騒ぎ出した。……今度はなんなんだよ。突然暴れだす病気でも患ってるんですか菊地ちゃん。

「ぎゃー！ 奈々実先輩駄目です怖い話は嫌いですわたしは耳を塞いでいます！」

「……綾子。今後のために言っておくわ。……こういう話を聞いておくと、この先何があっても絶対に恐怖を感じる事はなくなるの」
なに適当な事言ってるやがるんだ瀬川。菊地ちゃんは恐ろしい形相で瀬川の事を見ている。

「ほ、本当ですか」

「用は慣れよ。人が恐怖を克服するという事は大変な事なの。いい？ 綾子。あなたもいずれ出会うことになるであろう、人生最大の恐怖に立ち向かうには、必要な事なのよ」

人生最大の恐怖ってどんなことだろうか。僕は自分なりに想像してみた。やはり死ぬ瞬間だろうか？ いや、死ぬ瞬間ってのは自分の人生を振り返るほど案外冷静らしいからな。となると、テロリストに襲われたとか、受験戦争が激しい、とかだろうか。……ぱつとしないな。

「人生最大の恐怖ですか」

「そうよ。例えば、あなたが将来一人暮らしをするときにアパートの一室を借りて、その部屋が大量のゴキブリで埋まっているとき、あなたはそいつらに立ち向かわなくてはならないのよ」

「ぎゃー！ 確かにそれは怖いですが、最悪の恐怖です。今のわたしじゃ太刀打ちできません！ 多分自殺します！」

おそろべしゴキブリパワー。部屋を埋め尽くすほど大量だったらゴキブリじゃなくても怖いかな。……猫とかだったら可愛いかもしれない。

「ロシアンルーレットやバンジージャンプ、或いは会社の社長を目の前にして最大の失敗をしたとき、あなたはそのどれをも乗り越えなくてはならないのよ。あなたにその心の強さがあるかしら？」

ロシアンルーレットやバンジージャンプなんて経験する人の方が少ねえよ。かなり限られた恐怖を例えにしたって説得力ねえ。

「……ぶるぶる。いいえ、絶対に耐える自身がありません」

「わかったかしら綾子。これはあなたにとって試練なのよ」

「……ぐぐぐ、わかりました。奈々実先輩。わたし、どんな怖い話でも聞く覚悟はできました！ さあ、ほんとこいです！」

「うおおおっと雄たけびを上げる菊地ちゃん。感情の表現方法が極端すぎるな、見てて面白いが。暇があれば菊地ちゃんをからかって遊んでみたい。こういう反応をするのか楽しみだ。」

「まあ、冗談なんだけれどね」

「はい。知ってます」

「知ってたのかよ。お前ら打ち合わせでもしてたのか？ かなりスムーズな掛け合いだったぞ。」

「……もういいかい？」

待ちあぐねた鈴木くんが声をかけ、二人は鈴木くんに注目する。和久井はかなり退屈そうにしている。

「ええ。あのカーテンで仕切られた小部屋に飾ってある、首が描かれていない絵画について、何か知っていたら教えて欲しいのよ」

「ああ、あの絵か……」

鈴木くんはなんだか遠い目をしている。……なんだろう、あの絵に対して何か思い入れでもあるのだろうか。鈴木くんは近くの椅子に腰掛け、話し始めた。

「……あの絵はね、昔、僕の兄さんが描いた絵なんだ」

「！？」

それは予想外だ。てっきり他の生徒が書いた作品か、卒業生が残っていたものかと思っていたから。

「数年前にね。兄さんは張り切っていたよ。この絵が完成したら、最優秀賞だつて夢じゃないってね」

「お兄さんは？」

「……あの絵をコンクールに出す前に、事故に遭って死んだよ」

「……ごめんなさい」

最優秀賞を夢見ていたほどの作品なのだから、やはりそれだけ思いいれがあったのだろう。……だが、その作品を遺して鈴木くんのお兄さんは逝ってしまった。

「いや、いいさ。それからあの絵は僕が引き取ったんだけど、あの絵が既に完成したものなのか、未完成の状態なのか、僕には判断がつかなくてね」

「それで学校に置いてあるのね」

「あの大きさだろう？ 運ぶのも一苦労だし、もし手がけるのであれば、家でやるには狭いしね。……なにより、美術室に置いておいた方が、兄さんの作品がみんなに見てもらえるだろうからと思っていたんだけど、やっぱり踏ん切りがつかなくて……。それで、あんな小部屋にひっそりと飾ってあるというわけさ」

完成品なのか未完成なのかで迷い、手がけるべきか否かで迷い、一般生徒たちに公開するかどうかで迷い、迷い多き作品には、作者と、そして鈴木くんの思念が込められているような気がした。

「……そう」

「ふふ。あの絵がそんなに気になるかい？」

「ええ、なんだか不思議な感じがして」

「ありがとう。それがたとえどんなものでも、自分が死んだ後も自分の作品がなんらかの評価をされるというのは兄にとっては喜ばしい事だろう。勿論、僕にとってもね」

……それが、鈴木くんを傷つけないように言葉を選んだものだとしても、か。瀬川あの絵に対する評価は先日聞いた。……不安になると、彼女はそう言っていた。それは僕も思ったことだし、きっと、鈴木くんだって一度はそう考えた事もあるのだろう。

「あの絵についてはもういいかな？ 正直なところ、兄さんがどんな思いであの絵を描いていたかは、弟の僕でも良く分からないよ。兄さんの芸術の腕は、僕よりも何倍も先に進んでいたから」

「……そうね。ありがとう鈴木くん。貴重な話を聞かせてくれて」

「お役に立ててなにより。……じゃ、僕はあの絵を眺めてくるよ。どうぞゆっくりしていつてね」

鈴木くんは言い残して、カーテンで仕切られた小部屋へと消えていった。

鈴木くんの話は瀬川にとって有益なものだったのだろうか。瀬川がどうしてあの絵について詳しく知りたいだなんて言い出したのは、単に美術部員としての好奇心なのか、はたまた単なる気まぐれなのか、それは分からなかったが、いずれにせよ、あの絵に関してこれ以上の情報を彼から聞くことはできなさそうだ。

「うーん」

瀬川はそれでも何か考えているようだった。

「どうしたんだ瀬川。何か気になることでもあるのか？」

「そうじゃないんだけど。私たち無関係の人間のあの絵に対する評価と、作者の弟である鈴木くんの評価はまた違うじゃないかって思ってたね」

「そりゃあそうだろうよ。でも、そんな事知ってどうするんだ？」

「そうよね……」

「……？　なんだろう、瀬川の奴。そんなにあの絵が気に入ってしまっただろうか。」

「それにしても、全然怖い話じゃなかったじゃないですか奈々実先輩」

「ええ、そうね」

期待してたのか安心したのかどっちなんだ菊地ちゃん。

「それで、お前らそんなことを知ってどうするんだよ。俺はその、首のない絵ってのを見たことねえからなんとも言えねえが」

見たって分からないと思う。僕だって分からないし。

「どうもしないんじゃないかしら。……でも尾崎くん、一応、立川くんに報告できるような情報は手に入ってたんじゃない？」

「……そうだな。だとすればあながち無駄じゃないか。むしろ、自然に会話できるネタが事前にあってよかったかも知れない」

響くんは報告できる事といえば、彼には昔、芸術に秀でた兄が居て、その兄が既に亡くなっているということ。美術室には鈴木くんの兄が描いた首なしの人物画が置かれているという事。……でも、これって一応個人情報だし、鈴木くんの断りなしで喋っちゃって良い問題なんだろうか。最近、色々気が引けるようなことばかりしているな、僕は。

「じゃあ帰るか？ 瀬川。もうここには用はないだろ」

「……それもそうね」

「あのなあお前ら。俺をここに連れてきた意味はなんなんだよ」
言われてみれば、和久井をここに連れてきても意味なんてなかった。単に菊地ちゃんの相手をして、無駄にゴミを増やしてただけではないのだろうか。

「だったらその絵を俺にも見せてみるよ」

「和久井に絵を見せてもなあ。大事な作品だし、壊されても責任取れないぞ」

「見るだけだつつの」

まあ、別にいいか。一応鈴木くんの話を聞いた手前、和久井にもあの絵を見てもらおう。馬鹿の馬鹿なりの意見をたまには聞いてやつても罰は当たらない。

というわけで、菊地ちゃん以外の三人は例の絵が飾られている小部屋へ入る。中に入ると鈴木くんが椅子に座って絵を眺めていた。

「おや？ みなさんお揃いで」

「ちよつと狭いわね、流石に」

確かに、こんな小さな部屋に四人も入ると窮屈だ。和久井の図体がでかいからなあ。

「ふふ。どうぞ。僕はもう散々見ているからね」

鈴木くんが立ち上がるが、瀬川がそれを制した。

「いいえ。まだちよつと居てくれるかしら。この絵について何か気がついたことがあったら聞きたいから」

「……うん、いいよ」

さて、改めてみると、鈴木くんのお兄さんには悪いが、どうしてこんな絵が描けたのか不思議だ。この絵を間近で見るのはこれで二回目だが、やはりどこか不安だ。

「これがその絵か。……で、この絵の事なんか知ってどうするつもりだよ」

「いや、ただの興味本位だよ。和久井はこの絵を見て、どう思った？」

「……さあな。俺はやっぱ、絵なんてもんはさっぱりわからねえ。けどよ、なんだろうか、この絵、ちょっと変だな」

この馬鹿も僕たちと同様の意見らしい。この絵が僕に不安を与え、要素といえば、ひとつは、首が描かれていない事だ。人の形をしているのに、それが不完全なものだと人間は恐怖を覚えるというのは心理的に当然のこと。もうひとつは、この絵に描かれている人物の性別がわからないこと。人を判断する上で性別というものはとても重要だ。性別がはっきりしないというのは、その人物に対してどのように感じるべきか分からないということ。

「鈴木くん、この絵の人物は男性なのかな、それとも、女性なのかな」

「ごめん、尾崎くん。そう言われると、この絵には首も描かれていないし、輪郭もなんだか曖昧で、僕には判断できないな」

「そう。ありがとう」

人体は性別の違いで肉体の輪郭が異なる。……それすらも曖昧だなんて、なんともはつきりしたものがない絵である。

「……ちっ。面倒な絵だな。おい鈴木、この絵の人物にモデルはいるのか？」

和久井が鈴木くんに尋ねる。

「……ごめん。兄さんはこの絵に関しては何も言わなかったからね。モデルについても特に何も。首は元々描く気がなかったのかもしれないし、これから描くつもりだったのかもしれないし。お役に立てなくて申し訳ない」

或いは全く題材というものの決めていなかったのかもしれない。鈴木くんのお兄さんがどういう想いでこの絵を描いていたかはわからないが、なんらかの思い入れはあったことだけは確かはずだ。鈴木くんがこの絵を大事にしていることからそれは理解できる。

「ありがとう、鈴木くん。もういいわ。それじゃみんな、帰りましようか」

「ああ」

瀬川がそう言うので僕たちはそろって小部屋から退室した。菊地ちゃんはもう後片付けを終え、下校準備も万端なようだ。

「あら皆様もお帰りですか。じゃあせつかくだし一緒に帰りましよう！」

「そうね。今日は賑やかになるわね、尾崎くん」

ま、どうせ坂道を下った先の交差点までは誰でも共通の帰り道なのだから、わざわざ別々に帰るというのもおかしい話か。

「その前に、菊地さん」

「あ、そうでした」

僕たちがいざ帰ろうというところで鈴木くんに呼び止められた菊地ちゃんは、なにやら携帯電話を鈴木くんに貸しているようだった。「もしもし。はい。……いつもすみません。いえ。……では」

どこかへ電話をし終えた鈴木くんは菊地ちゃんに携帯電話を返すと、自分には迎えの人が来るから、一緒には帰れないと言った。

「迎え？」

「はは。お恥ずかしながら、僕は生まれつき体が弱くて。学校前の坂道も上り下りが大変なんだ」

確かに見た感じ丈夫では無さそうだけれど。まあ、人それぞれの都合があるし、あまり詮索するようなものではないだろう。

「分かった。じゃあね、鈴木くん」

「ああ。美術室の鍵は僕が閉めておくから」

……鍵。いつもは閉めているのか。でもなんで昨日は鍵が開いてたんだろう。昨日は部活がなかったはずだから、鈴木くんも部には

顔を出していないはずだしな。まあ、大森先生が開けっ放しにしていたのかもしれない。

「菊地ちゃん。鈴木くんは携帯電話を持っていないのかい？」

「はい。帰りはいつもわたしに携帯借りてるので持ってないんだと思いますよ」

自分で持つておかないと大変なんじゃないだろうか。その迎えを呼ぶにしても、菊池ちゃんがいなくて困ったりしないのだろうか。……でも、いざとなれば、学校にも公衆電話が設置してあるし、困らないのかもな。

「にしても、腹減ったな」

学校を出ると和久井がぼそつと言った。確かに、夕飯時にはまだ早いが、それでも食いたい盛りの学生にとっては空腹を催してもおかしい時間帯だ。

「じゃあみんなで何か食べに行きませんか！」

誰か言い出すかと思っただが、真っ先に手を挙げたのは菊池ちゃんだった。

「そうね。尾崎くん、どこか良いお店知ってる？」

「そうだなあ。最近外食なんてあまりしないし、何が食べたいかもよるけど」

瀬川の家のある近所にある商店街はこの時間帯はかなり混むし、駅前も、商店街ほどではないがそこそこ混む。

「お手軽にラーメンなんてどうでしょう」

「ラーメンか。ラーメンといえば和久井、お前この前、変なラーメン屋見つけたとか言ってたかったか？」

なんでも、そのラーメン屋は考えられないような普通でないメニューが存在するらしい。和久井がそのメニューに挑戦し、その内容を僕に教えてくれたのだが、半信半疑で今日まで過ごしてきたのだ。「だがお前、あの時は全然信じなかったじゃねえか」

「あの時はあの時だ。どうせ行くなら大勢で行くほうが楽しいだろうそれに、お前の話がどこまで本当なのか、確かめるにはもってこい

だ」

「……いいだろう。ただし行くなら、全員でそのメニューを注文するぞ」

えー……。それは流石に。どんな際物が出てくるか分かったもんじゃないし。

「面白そうじゃない。私はそのラーメン屋さんと構わないわ」

「色々なものに挑戦するというのはすばらしい事ですネ、奈々実先輩！」

「決まりだな。腹括れよ」

全く物怖じしない瀬川と菊地ちゃんだった。瀬川は最初から期待していないが、菊地ちゃんもそうか、面白そうな事は放っておけない性質か。

そのラーメン屋というのは交差点を直進し、少し複雑な道を歩くとその姿を現した。見た目はごく普通のラーメン屋だ。中に入りメニューを見ると、醤油、味噌、塩などの通常のメニューに加え、メニューの最後に、マル秘ラーメンというメニューが書かれていた。

和久井が店長に、そのマル秘ラーメンを四人分注文する。店長は少し驚いた風にしたが、すぐに喜んで厨房に入った。

「あれが和久井の言っていた変なラーメン、か？」

「そうだ。マル秘ラーメンを頼むと、複数ある隠しメニューの中から店長が気まぐれで選んだラーメンが運ばれてくるんだ。どんなラーメンが運ばれてくるかは、客には全く分からない」

ロシアンレットかよ。つつか、隠しメニューってそんなにあるものなのか？

「安心しろ。食べねえものは一切出てこない」

出てきたらそれはクリームものではないだろうか。……マル秘ラーメンについての注意書きは、注文したらどんなものが出てきても文句言わず食べる事、だった。注文するくらいなら責任もって食べということだろう。

「マル秘ラーメンを注文しておいてそれを残すと店長はすげえ怒る

「からな」

「なんだか緊張してきた。……一体どんなものが運ばれてくるのか。楽しみね。ふふふ。間抜けにうるたえる尾崎くんの姿を見れるとなると、胸が熱くなるわ」

「何を期待しているんだ瀬川。僕はうるたえないぞ。どんなラーメンが運ばれてこようとも、僕は決して冷静さを失わない」

「どこまで本気が、見せてもらうわよ、尾崎くん」

「望むところだ」

「一体何の勝負をしているんだ僕は。まあ、たとえ変なラーメンっていったって、ご当地的なレベルの変り者メニューってところだろう。その程度なら、流石にうるたえるほどじゃあ……」

「へいおまち！ マル秘ラーメン四つね」

「……あいた口がふさがらない。なんだこれは。これはラーメンなのか？」

「う、うるたえてるわね、尾崎くん……ふふふ」

「何言ってるんだよ瀬川……僕は、至って冷静さ。ははは、お前こそ、うるたえてるんじゃないのか？」

「どっちもうるたえていた。引き分けてところか。……いや、でもこれは、マジでなんなんだよ。店長が盆に載せられた四種類のラーメン（らしい）を適当に四人に配っていく。僕の前に置かれたラーメンは、なんだか見た目に色気がない。白い。他の三つに比べれば、辛うじてラーメンの体は成しているといえるが、食ってみないことにはどんなモノか分からない。瀬川の前に置かれたラーメンはひたすら黒い。どこかのご当地ラーメンで黒いラーメンはテレビで見たことがあるが、そんなレベルじゃない。どんな材料を使ったらこんなに黒くなるんだってくらい黒い。もう、まず、中身が全く分からない。具になにが入っているかとか確認できない。むしろ闇を目の前にしている感じ。和久井の前に置かれたラーメンはもはやラーメンの形をしていない。なんていうか、芸術的である。麺と具が立体的になにかの形をしていて、天高くそびえている。他の三つの

ラーメンと比べると、他のお客さんからの注目度は桁違いだ。どうやって支えてるんだその麺。菊地ちゃんの前には運ばれたラーメンは、とりあえず、一番ラーメンっぽい見た目をしているがまず、麺の色がおかしい。緑とか赤とか様々だ。次に具の色がおかしい。メンマとかチャーシューとか全部同じ色だ。そう、ちょうど普通の麺の色をしている。……ということは？

「お客さんら、全員でマル秘ラーメン注文する猛者なんてそうそういないぜ？」

「でしょうね」

「あの、店長さん。これ、それぞれがどういったラーメンなのかしら」

確かに、お客に出すくらいなら説明責任があるはずだ。

「お嬢ちゃんのは闇鍋ラーメンだ。その黒いスープでは、どんな具を掴めるか分からない、闇鍋気分が味わえるぞ。反対にその白いラーメンは、まあ食ってみりやあ分かるさ。その立体的なラーメンはそのまんま芸術ラーメン。すげえだろ？ 自信作だぜ。その麺と具の色がごっちゃまぜになっているラーメンもよく味わってみれば秘密が分かる。どれも味だけは保証できるから、ゆっくりしていきなはっはっは、と嬉しそうに厨房に戻っていく店長。食べば分かるって、怖いんだけど、店長。」

「それじゃ、頂きましよう」

「……そうだな」

和久井はさつさと謎の技術が駆使された芸術作品を崩壊させ、普通に食べ始めた。さすが破壊屋、ちつとは味わえよ。

「いいよな、和久井は。変わっているのが見た目だけで。崩してしまえばただのラーメンじゃねえか」

「運がよかったただけだな。俺がこの前食ったラーメンはこれの何倍も変だった。……で、お前ら、早く食えよ」

いざとなるとやっぱり怖い。僕たち三人は一口も食べてはいなかった。

「尾崎くん。あなたも男なら勇気を出して食べなさい」

「……瀬川こそ。いや、瀬川のラーメンはさすがに仕方ないよなあ。
……分かった、食うぜ」

僕は決心し、白いラーメンの白いスープを一口飲む。うむ、スープは普通に美味い。問題は麺、だ。スープが美味しいのだから麺の味も期待したいところだ。……僕は数本を掴み、いつきにすすする。

「……どう？」

「……これ、美味しいな。普通のラーメンと遜色ないて……んだけど……」

「だけど？」

「これ、こんにゃくだ」

いくなればこんにゃくラーメンだ。麺も具も全てがこんにゃくでできている。……つつかこれは、最早ラーメンじゃない。

「こんにゃくって……」

「さあ、次はどっちが行く？」

「……じゃあ私が行くわ」

瀬川が真っ黒なスープに箸を入れる。……何かを掴み、取り出すと、どうやらそれは麺らしい。だが、麺まで真っ黒だった。

「身体に悪そうね」

瀬川が真っ黒な麺を啜る。すると、いぶかしんでいた瀬川の顔が一変する。

「美味しいわ。これ……。今度は具を掴んでみましょうか」

流石に麺と具の形は違いすぎるので、具らしきものを引き上げるとやはり真っ黒だった。

「食べてみないの何か分からないわね。形はなんだかかまぼこチャーシューって感じよね……。……。これは、にんじんだわ」

なんとというフェイント。にんじんがかまぼこやチャーシュー並みの柔らかさを得たのか。

「でも美味しい。さあ、次は綾子ね。美食家ばりのコメントをお願いしますわ」

「とうとう来ましたか……いえ、でも見た目は普通ですし、たべてみましょう」

菊地ちゃんはとりあえずカラフルな麺から手を出した。緑、赤、茶色。……それに比べて具の色が一色だけということはつまり、僕の予想が正しければ……。

「……これは、にんじんとキャベツとチャーシューですね。どうやって作ったんでしょう」

やはりか。つまり、麺は通常使われる具の材料で作られ、具は全て麺でできているという、麺と具が逆転したラーメンなのだ。……どうという技術だよ。

「でも味はやっぱおいしいです。見た目とか作り方とか材料が変なだけで、普通に食べられますね」

「僕はいい加減飽きてきたけどな。全部こんにゃくだぞ」

「ある意味一番報われないわね尾崎くん」

本当に。和久井はとくに食べ終わっていたが、瀬川は黒い液体から出てくる黒い物体がなんなのか一々予想しながら食べているのでまだまだ続きそうだ。菊地ちゃんも、麺と具が逆転しているだけのただのラーメンなのですぐ食べ終わるだろう。僕はただひたすらこんにゃくを食べるといふ苦行をこなしている。……しばらくこんにゃくは食べたくないな。

みんなが食べ終わり、お金は僕と和久井が女子たちの分も払って店を出た。日もすっかり暮れて、和久井が菊地ちゃんを家まで送っていく事になった。方角は同じなのだが、瀬川が僕を引き止めるのでここでお別れとなった。

「……まだなにか用あるのか？」

「いいえ。近くに公園があるからそこで休んでいきましょう」

なんだろう。みんなと別れてまで僕になにか言いたい事でもあるんだろうか。

近くの公園のベンチに腰掛け、瀬川は星空を見る。

「綺麗ね……」

「……そうだな」

昨日の帰りもそんなことを言っていた気がするけれど。この公園の辺りは灯りが少ないし、星はよく見える。

「それで、何かあるのか？」

「……うん。何も無いわ。何か期待した？」

「何も無いほうが違和感があるっていうのも、変な話だな」

僕は瀬川に何かされたいのか？ いや、そうじゃない。瀬川が側にいるという状況に、完全に慣れてしまったんだ。参ったな、それでもそんな状況に嵌っちまっている僕が居る。

「その……、例の占い師さんと出会えて、尾崎くんはよかったって思う？」

「何を藪から棒に」

「……考えてみたのよ。その占い師さんは尾崎くんが側に居たから、占いによつて自分の人生が悲惨なものになつても、自分の好きなことだからつて続けられたのよ」

いや。違うな。僕はあいつに何もしてやれなかった。

「瀬川。あいつは自分が占いを続けるつて言った時、こう言ったんだ。自分が孤立するのは占いのせいなんかじゃない、元々こうなる運命だったんだって。自分が好きなことやつて自分が不幸になるわけないんだって」

「……そう」

「……僕はあいつと出会えたことを誇りには思っているよ。今でも大切な友だちだ。……だけど、僕は自分の意思であいつに関わったんだ。それは運命なんてもんじゃない。僕はそう思っている」

なんでもかんでも運命で片付けられても、それでは自分の意思なんてあつてないようなもの。自分がどんな事をして、それが全て無駄な事だと思えてしまうのだ。

「私は……」

「うん？」

瀬川が星を眺めながら、静かに言った。

「私は、あなたと出会えたことは運命だったのだと思いたいわ。あなたの意思なんて、私の意思なんて関係ない。私たちはね尾崎くん共に在るべき運命にあるのよ」

「……瀬川」

「なんだか大げさなことを言う奴だ。いや、意外とロマンチストなのか。今は場所も雰囲気もなんだか合っている。」

「だからね、尾崎くん」

「うん」

「その……。私は尾崎くんと出会えてよかったと思っているし、こうしてあなたが側にいるとね、とても暖かい気持ちになれるの」

「うん」

「春休みにあなたが話しかけてくれて、本当はとても嬉しかったのよ。……今も嬉しいわ。こんなに近くにあなたが感じられるっていうのが、とても……」

「うん」

「今の瀬川の表情は今まで見たことないな。……僕はひょっとしてとても貴重な時間を過ごしているのかもしれない。」

「尾崎くん。まだ三日しか話してないし、本当はもっとお互いのことを知った上でこういうことを言うべきなんだけれどね……えっと、その。……あの……」

「なんとなく瀬川が僕に伝えんとしていることが分かった。……でも、僕が瀬川の気持ちを素直に受け止めて、彼女と接する事ができるかどうかかわからない。もしかしたら瀬川を傷つけてしまうかもしれない。」

「……瀬川。その言葉を口にしたら、お前と僕は今までどおりの関係でいらなくなる。お互いが気を遣っちゃって距離が開いてしまいかもしれない。……そうなるとまた、お前が孤立してしまうかもしれない。僕はそんなのごめんだ」

「……でも……」

「はつきり言うとな、瀬川。僕は怖いんだ。いままでの瀬川を失う」

のが。そりゃあお前にカッターナイフを突きつけられるのは嫌だけれど、あの時の瀬川の生き活きとした顔が見られなくなるとやっぱり寂しい」

……こんなことを言っている時点で同じなのかもしれない。僕が瀬川の気持ちを知ってしまった時点で。

「……私はこんな気持ちになるのは初めてなの。この気持ちは一体何？ わからない。だからどういった言葉であなたに伝えればいいのか、見当もつかないの」

「それで？」

「これだけは言える。あなたと一緒に居たい」

瀬川の瞳は決意の色で満ちていた。

「これは運命なのよ尾崎くん。運命に逆らうなんてできない。あなたは私と一緒にいるしかないわ。そうでしょ？」

「運命か。たまにはそういうのもいいかもしれない」

「本当？」

「ああ。お前が自分の気持ちを理解できて、僕にちゃんとした言葉で伝えられるようになるまで、僕はお前の側に居るよ。……それまで、僕も自分の気持ちを整理しておくから」

「……うん。ありがとう」

とりあえずの解答はこんなところだ。瀬川が僕に対して抱いている感情。それに応えてやれるような僕ではまだないが、いつの日かお互いの気持ちを理解しあえるときに、僕の本気の気持ちを伝えよう。

「その代わり、変な気遣いは無用だぞ。今までどおりのお前でいてくれ。僕も今までどおりの僕で居るから。そうじゃないと、僕の本当の良さってのがお前に伝わらないだろ？」

「えらそうな事を言うのね。……いいわ。じゃあ、早く私を家まで送っていつて」

「……了解」

僕たちは星を眺めながら瀬川の家を目指して歩いた。瀬川の家が

近づくにつれ、商店街の灯りで星が見えにくくなり、瀬川はそれを嫌がっていた。どうせ明日の夜になれば星は見えるさと、気取ったことを言った僕のわき腹を瀬川のひじが小突く。

「じゃあな、瀬川。また明日」

「ええ。……おやすみなさい」

商店街前の路地へと消えていく瀬川。……さて、僕も帰るか。明日もまた、元気に瀬川に脅されるために。

夢を見た。瀬川に話をしたからかもしれない、あの占い師の夢だ。夢の中であいつは元気に動き回っている。孤立をしているも、寂しさなど微塵も感じさせないその笑顔を僕はただ、見つめているだけだった。見つめている事しか、できなかった。

そのうちあいつは疲れ果ててその場に座り込んだ。それでも元気に僕に微笑みかけてくれた。時間が経つと、その身体は次第に痩せ細っていき、弱々しくなっていく。それでも僕は動かなかった。あいつのために何かをしてやるべきだと頭の中で分かっている、助ける事ができなかった。

「どうしたんだ蒔良ちゃん。そんな悲しそうな顔をするな、うちはまだまだ元気だぞ」

その無邪気な笑顔が僕の心を締め付けた。お願いだからそんな顔をするな。僕はお前に対して、何もできなかったじゃないか。

「蒔良ちゃんは何も気にする事なんかないんだぞ」

それでも、僕はお前の側に居る資格なんてないんだ。例えお前が許してくれても、僕自身が僕自身を許さない。だから……。

「蒔良ちゃんはうちに嫌われたいの？　うちがこんなにも蒔良ちゃんのことを許してあげるって言っているのに。そもそも、蒔良ちゃんは別に悪い事なんてしていないじゃないか」

僕はいつに嫌われたい……のだろうか。分からない。いや、嫌われたくないなんて虫のよ過ぎることだ。いつも一番側で見守ってきた僕が、なにもしてやれない、ただの偽善者だったのだから。

「……うちは蒔良ちゃんのことを嫌いだ」

……………。

「そう言えば、蒔良ちゃんは納得できるのか？」

納得……できるわけもない。こいつに嫌われたからといって、こいつとの関わりを全て絶ってしまったら、それこそ無責任だ。

「あーあ。蒔良ちゃんがそんな男の子だなんて思わなかったなあ。どうでもいいことでうじうじしてみつともない」

どうでもいいなんて、そんなこと！

「でも、うちには何にもしてくれなかった。うちは結局一人ぼっちだ。いくら蒔良ちゃんが側に居たって心は満たされない。うちが唯一幸せな時間は、夢の中だけだ。今の蒔良ちゃんじゃ、うちを幸せにするなんて無理だよ……。だからさ、蒔良ちゃん」

……。

「うちは蒔良ちゃんのこととは大嫌いだよ」

はつきり言われても、やはり僕の心は納得などしなかった。……どうしてだろう。僕は未だにこういつに対して踏ん切りがつかないでいるのだ。

「……或いは、あの子が居るからかな」

あの子？

「瀬川奈々実っていう、あの女の子」

！？ どうしてこいつが瀬川の名前を知っているんだ。

「驚く事じゃないだろ蒔良ちゃん。うちは占い師だよ。君の想い人くらい、すぐに分かるよ」

想い人？ 瀬川が僕の？ ……それはどうなのだろう。確かに僕は瀬川の側に居てやろうと思っっているけれど、そこに恋愛的感情はないはずだ。……いや、持ちたくない。

「あの人が居るから、蒔良ちゃんはずちのことなんてどうでも良くなったんだね。蒔良ちゃんも罪な人だね。昔はずちのことを……」

！ おいやめろ！ それを口にしない約束だろう！

「うちのことが、好きだったくせに」

どうして……、そんなことを言うんだ。

「今は彼女の事が好きなんでしょう？ だったらもういいじゃないか。うちの事なんて放っておきなよ。彼女のために尽くしてあげべきだよ蒔良ちゃん」

……そう簡単に、人を好きになんてなれない。僕はそう思ってい

る。だって僕は、お前を好きになって、その結果お前を傷つけてしまったようなものだから。

「昔の事をいつまでも引きずるなんて男らしくないよ蒔良ちゃん。うちの事はもう気にするなと言っているじゃないか。うちは傷ついていないし、うちが孤独になったのと、君がうちを好きになったのは別の事だろ」

昔の事なんかじゃない。今も僕は後悔しているんだ。なんの考えもなしにお前を好きになって、お前を傷つけて、お前を助けられなかった。……だから、暫く恋はしないと、僕は自分に誓ったんだ。

「それは君の勝手な思い込みだって。そう何度も言っているのにどうして理解してくれないんだ蒔良ちゃん。そういう考えがうちや瀬川という子を傷つけるんじゃないのか？」

……そうかもしれない。けれど、僕はもう同じ過ちを犯したくない。だから、今度こそ瀬川のことを救ってやりたいと思っている。そのためには、僕は瀬川を安易に好きになれないんだ。

「うちとは違う方法で、彼女を助けたいと思っているんだね。でも蒔良ちゃん。君はうちのことは助けられなかった。だから今度も失敗するんじゃないの？」

あの時は僕が幼すぎただけだ。

「それはいい訳だよ蒔良ちゃん。蒔良ちゃんがそう思っている、うちを助けられなかった事実はきえない」

やめてくれ。お前はそんな事を言う奴じゃなかったはずだ。

「その子もきつとうちと同じ事を言うと思うよ。どうして助けてくれなかったの、って」

これから助けるんだ。だから瀬川にそんなことは言わせない。絶対に。それに、僕の中ではお前の事もまだ決着がついていないんだ。いつか必ず、この気持ちとおさらばして、瀬川の事を好きになるとしたら、その後だ。

「じゃあ、今でもうちの事は好きなの？」

……好きだ。

「嘘つき。君はもう恋はできないね。だからもう一度言っよ、蒔良ちゃん」

あいつは立ち上がり、僕の目の前から消える。頭の中にあいつの声が響く。その声には恨みの念がはつきりと感じられた。

「うちはお前の事なんて大嫌いだ」

……なんて嫌な夢だ。神様っていうのは時折残酷なものをまざまざと見せ付けてくれるものらしい。僕があいつと知り合ってからもう六年……。僕の知り合いの中では一番長い付き合いだ。今更あいつが僕のことを嫌っているはずは、ない。……けれどどうしてだろう。そう断言できない僕が居る。本当は心の中で僕のことを恨んでいるのかもしれない。どうして助けてくれなかったんだ、って。僕は携帯電話のアドレス帳に登録されているあいつの番号を見つめる。あいつは金を持っていないが、携帯電話は明里姉さんが持たせているのだった。料金は全て姉さんが支払っている。最近は電話をしていないな。……この時間帯では寝ているだろうが、放課後あたり電話してみるのも良いかも知れない。

……どうしてあんな夢を見たのだろう。いや、たかが夢だ。いちいち気にする事じゃない。……そうだ。気にするな。

僕は朝食を摂るために、着替えて階下へと降りた。

胸が苦しい。昨日尾崎くんにあんな話をしてからずっと、胸が苦しい。いや、もっと前からだ。初めて尾崎くんと話をしたときから日に日に苦しさは増していった。こんな気持ちは私は初めてだ。苦しくて苦しくて、昨夜は嫌な夢を見てしまった。尾崎くんが私のことを避けている夢。他の人たちと同じように、私は異端だからって決して側に近づこうとしない。尾崎くんだけじゃない。千早さんや卯の花さんたちもみんな、私のことを避けている。……でも、尾崎くんに避けられていると感じると、もっと心が苦しくなった。苦しくて、痛くて、尾崎くんの姿を見る度に、私の心は軋んだ。どうして？ 今まではこんな気持ちになんてならなかったのに。私はいつ

も通り、ストレスを発散するためにカッターナイフを取り出した。尾崎くんは私のことを見ている。でも、私の自傷行為を止めてくれる尾崎くんじゃなかった。その瞳は侮蔑に満ちていた。

「またあいつ、手首切ってるぜ。頭がいかれてるんじゃないか？」

尾崎くんがそんな事を言った。私の頭の中が真っ白になった。今まで誰に言われても決して揺らがなかった私の心が激しく唸り、かつてない憤りが私の身体を支配した。

気がつくと。周りには血だまりができていて、あたりに血の匂いが蔓延していた。私の身体も、誰のものか分からない血液で赤く染まっている。私はカッターナイフを強く握っていて、私だけが生きている。つまり、私がみんなを殺したのだろう。……どうして？

自分をいくら傷つけても、自分の心を何度も何度も殺しても、みんなを殺したいだなんて考えた事もないのに。

「……うつ」

私の足元で一人の男子生徒が呻いた。……首から血を流していて、腕やおなかかも切り裂かれていて、それでも息がある。

「それがお前の本性、なんだな、瀬川」

尾崎くんだ。……私は尾崎くんにまで手を出してしまったの？

あんなに私に優しくかった尾崎くんを？ いいえ。今地に伏している尾崎くんは、私が知っている尾崎くんじゃない。私を蔑み遠ざける、優しさなんて微塵も感じられない尾崎くんだ。

「ふ、ふふ。殺してみるよ、瀬川。それでお前が満たされるんなら、殺してみるよ」

これは尾崎くんじゃない。こんな恐ろしい目をしている尾崎くんは尾崎くんじゃない。……いいわ、殺してやる。

私は尾崎くんの額にカッターナイフを突き立てた。普通の人間ならこれで死ぬはずだ。私は尾崎くんを殺した。この手で。

でも尾崎くんは生きていた。

「どうした？ 僕はまだ生きているぞ」

どうして生きているの？ まだ生きて、それでいて、そんな残酷

な目をしているの？ 私は叫んだ。叫んで、尾崎くんの身体を何度
も何度もカッターナイフで切って、刺して、恐ろしい光を放つその
瞳もくりぬいて。喋れないように舌も切り取って。それでもどうし
て？ 何故生きていられるの尾崎くん。

「どうしたの、瀬川。僕はこっちだよ」

気がつけば、周りに倒れていた全ての死体が尾崎くんだった。み
んな立ち上がって、私のことを見ている。

「瀬川、気がすむまで僕のことを殺すといいよ」

「そうそう。僕はこんなにもたくさん、君の側に居てあげられるん
だからね」

「君のためなら僕は何度だって死ぬるよ、瀬川」

やめて……尾崎くんはそんな事は言わない。お前たちは、尾崎く
んなんかじゃない。優しくそうな顔をして、優しくそうな言葉を吐いて
いても、お前たちは尾崎くんじゃない！

「つれないことを言うんだね、瀬川。僕は他でもない、僕だよ。僕
以外の尾崎はいない」

「そうだよ瀬川。僕は決心したんだ。君の痛んだ心を癒して挙げら
れる方法は、君に、殺されてあげることなんだって」

やめて！

私は一人の尾崎くんの首を切った。鮮血を噴いてよろめく尾崎く
ん。でも決して死なない。

「ぐっ……。そ、そうだよ、瀬川。そうやって僕を殺していればい
いんだ。そうすれば、君の心の痛みも癒せる」

そんなことで私の心は癒されない！ 尾崎くんの姿をするな！

私の前から消えろ！

「どうしてそんなことを言うの？ 僕は瀬川に嫌われているの？
いやだなあ瀬川。僕の方はこんなにも君のために尽くしたいと思っ
ているのに」

お前たちなんか嫌いだ！ 早く消えてしまえ！ 私は必死にカッ
ターナイフを振り続けた。それでも尾崎くんの姿をしたソレらは全

く死ぬ心配がない。……私の心はもう、壊れかけていた。

「……そうか。じゃあ、これでさよならだ、瀬川」

え？ 私の最後の振りで尾崎くんは息絶えた。……まさか、死んでしまったの？

「だめ、行かないで尾崎くん……側に居て、お願いだから！ 側にいてよ！」

私は声なき死体に叫び続けた。でもこれは尾崎くんなんかじゃない。私は何に対して叫んでいるのだろう。それすらもう、分からなくなっていた。

目が覚めると私の目からは涙があふれていた。……夢の中ではないえ、私はこの手で尾崎くんを殺したのだ。なんだか今日はもう尾崎くんとは顔を合わせたくない気分だ。学校を休んでしまおうか。

……でも、一日中彼の姿を見ずに居るのもなんだか不安だ。私が居ない間に、私のことを嫌いになっちゃったりしたらいやだ。

でも、もしも尾崎くんが私のことなんて本当はどうでもいいと思っていたらどうしよう。そう思うとやはり胸が苦しかった。どうしてもこんなにも彼のことを考えてしまうのだろう。その理由が私には分からない。誰かに聞いてみれば分かるだろうか。だけど、私の話を真剣に聞いてくれる人なんているのかしら。やっぱり今日、学校に行って聞いてみよう。私は着替えて、階段を降りて行った。

学校に到着し、僕が瀬川に挨拶をすると、瀬川は何か緊張した様子ですぐに目をそらした。全く、いつも通りに接してくれと言ったはずなのだが、昨日の事で僕との間に気まずい空気が流れたらみんなが心配するだろうに。

「おはよう、佐藤くん……。と、和久井」

何故居るんだ和久井。予想外すぎてお前に慣れている僕も驚かすには居られないじゃないか。

「和久井はさつき廊下で会って、なんとなく連れてきてみたんだ」
「すっかり馴染んでるね佐藤くん。そんなに和久井と仲良くなった

の？」

そういえば佐藤くんは基本いい人で平等精神を持っているけれど、外見は結構碎けたところがあるからな。和久井と佐藤くんの意外な共通点だ。

「尾崎、お前、瀬川となんかあったのか？」

和久井が僕に聞いてきた。昨日ラーメンを食べた後、僕たちは和久井たちと一緒に帰らずにいたからな。そのことを気にしているのかもしれない。

「なんか今日あいつの様子変だぞ」

「何もないよ。それに、あいつが変なのはいつもの事だろ」

僕はとりあえず平静な顔でそう言ったが、佐藤くんはなんだか不振そうな目で見ている。

「……尾崎

「なに？ 佐藤くん」

「……いや、なんでもない」

佐藤くんもどうしたのだろう。なんだか様子が変わだな。瀬川になにかされたのだろうか。……気になるけど、気にする必要はないのかもしれない。

僕は休み時間ごとに瀬川の様子を観察していた。昨日は休み時間になると僕の方にやってきて雑談なんかをしていたのだけれど、今日はなんだか一人で色々な人と話していた。千早さんや卯の花さん、櫛や河野くんらに話しをし、その度に彼らは驚いた様子をしてた。……一体なんの話をしているんだ瀬川。

昼休みにいつものメンバーで集まった時に、みんなが僕の顔をじっと見つめていた。

「……どうしたの？」

「いえ。その、尾崎くん」

「千早。余計な事は言わなくていい」

僕に何か隠し事でもしているのだろうか。みんな揃って？ それともよくある、もうすぐ誕生日だからびっくりさせてやろう、とか

だろうか。瀬川がみんなに根回しをして？　ありえない。そもそも僕の誕生日はまだまだ先だ。

じゃあいつたいなんなのだろうか、みんなのこの態度は。

「えーっと、みんな一体どうしたの？　様子が変だよ？」

「それより尾崎くん。七海さんと響くんに昨日の報告してきて」

僕がみんなに事情を聞こうとしたが、瀬川に割り込まれてしまった。……この様子だとどうせ何も話してくれそうにないな。

「……分かった」

とりあえず瀬川の言うとおりにして、まずは響くんに鈴木くんに関する報告をしに行く。

「響くん」

「おや尾崎くん。なにかな？」

昼休みに分厚い辞書なんか読んでんじゃねえよ。しかも別に調べ物してるわけじゃ無さそうだし。あんたの愛読書は辞書なのか？

「鈴木くんについて報告しようと思って」

そんなことは置いといてさっさと本題を進める。

「もうわかった事があるのかい？　流石だねえ」

「大したことは分かっていないよ」

僕は響くんが、今は亡き兄がいた事。美術室にその兄の描いた絵が飾られている事、体が弱くて毎日送り迎えをしてもらっているという事、ついでに携帯電話を持っていないということを話した。

「はっはっは。本当に大したことがないねえ」

「そう言うなよ」

「まあいいさ。一日そこらでそこまで期待はしていない。ただひとつ気になったんだけど、誰に送り迎えされているんだい？」

「あー、そういえばそこまでは聞いていないなあ。次の機会に聞いておくよ」

「頼んだよ」

僕はとりあえずの報告を済ませ七海さんの方へと向かおうとしたが響くんに呼び止められた。

「尾崎くん。……どうやら瀬川くんとなにやらあったみたいだね」

「そういえばさっき、瀬川となにか話してなかった？」

瀬川が響くとも話をしていたのを思い出して聞いてみるが、響くんはただひたすらニコニコしているだけで何も答えない。一体なんなんだよ。

「……ま、気にするな。他愛もない話だよ。……それに、近いうちに瀬川くんの方から話してくれるだろう。それまでは君は、いつも通りでいたまえ」

なんだかなあ。僕は隠し事をされるという事に慣れていない。それはみんなが正直者であることもできるが、ただ単に隠し事が下手な連中が多いだけである。

「ふーん。じゃ、またね、響くん」

僕は改めて七海さんの方へと向かった。七海さんの依頼は逐一報告をするようなものじゃないけれど、いくつか聞いておきたいこともあるのだ。

「七海さん。ちょっといいかな」

「あら尾崎くん」

相変わらずか細い澄みきった声で応える七海さん。けれど、なんだろう、七海さんの目がちよつと怖い。僕何かした？

「えーっと。久家さんのことでちよつと。昨日早速話をしていただけけれど、結局進展はなかったよ」

「そりゃそうでしょうね。あの子無口だし。でも、進展がないのに一々報告してくれるなんて尾崎くんはしっかりしてるわね」

「いや、それとは別に。やっぱり二人の間に何があったのかだけでも聞いておきたくて。原因が分からないじゃ進展のしようがない」

二人の問題にずかずかと足を踏み入れたくはないのだけれど、この際仕方がないだろう。

「……本当にどうしようもないことよ。でもね、あなたが理由を知ったところで、千里にそのことについて聞くの？ それこそ千里の心証が悪くなるわよ。下手したらもう二度と口利いてもらえないか

もしれない」

それってどうしようもない程度の問題なのかな。

「でも聞くくらいなら……」

「万が一、よ。うっかり口を滑らせてしまったら大変じゃない。それに、あの子あれでかなり勘が鋭いから、余計な知識を持つていくよりはいいのよ」

そうか。それもそうだ。二人の仲違いの原因を知ったところで、じゃあ仲直りしてくれと言って聞くくらいなら仲違いなんてしないだろうし。さりげなく会話をし、さりげなく二人の仲を戻せるなら何も知らないほうが確かに都合は良いかも知れない。

「……了解だ」

「それでね尾崎くん。私からも一つ聞きたいんだけど」

七海さんの瞳がより一層鋭くなる。……体躯は小さくてもこんなに鋭利な瞳を持っているんだなあ、七海さんは。

「あー、七海くん」

七海さんの背後から響くんが近寄る。どうやら七海さんに制止を促しているようだが、七海さんは響くんを一瞥すると、何事もなかったように続けた。

「……瀬川さんのこと、どう思ってるの？」

「え？」

七海さんからそんな質問をされるなんて思わなかった。やはり瀬川がなにか言ったのだろうか。瀬川は七海さんとも話をしていたらしい。どうやら瀬川は知り合い全員となにやら僕には秘密な話をしているのらしいな。

「どうって……。うん。瀬川は友だちだし、側にいたいと思ってるよ」

「側にいたいって、どういう意味で？」

どういう意味？ それこそどういう意味だろう。うーん。あるとすれば昨日の帰りに瀬川と交わした会話が関係してくるのだろうが、それは瀬川と僕しか知らない話で、僕は瀬川の気持ちに整理がつく

までは側に居てやるという事を約束はした。でも、僕が瀬川に抱いている感情はまだ、瀬川が僕に抱いている感情とは違はずだ。それが同じものになるまでにきつとまだ時間がかかる。

「……まあいいわ」

もう話すことはないと言いたいのだろう。七海さんは僕から視線を手元の本に移した。響くんもやれやれと自分の席に戻る。僕もみんなの所に戻り雑談をするが、やはりみんなが隠し事をしているという実感があるため、心の底から楽しめていない自分がいて、そんな自分を僕は憎んだ。……くそ。今朝から嫌な気分が続いている。

私が学校に着いたとき、尾崎くんの姿はまだ見えず、私は知らずにほっとした。今の私は尾崎くんと顔を合わせるのも辛い。でも、やっぱり自分の気持ちを知りたくて、とりあえず私は既に到着していた佐藤くんに声をかける。

「おはよう佐藤くん」

「ん？ ああ瀬川か。……尾崎はまだなんだな」

私と尾崎くんはどうやらセットみたいな認識をされているらしい。でもそう思われても仕方ないか。この二日間は大抵一緒にいるし。

「え、ええ」

「ん？ どうした瀬川。顔色あんま良くないみたいだな」

「え！？ 瀬川さん病気なの？ 大丈夫？」

どうやら顔色が良くない、に反応したのだろう、卯の花さんが私の側に寄ってきてその手を私の額に当てた。……別に風邪引いてるわけじゃないんだけど。

「熱はないみたいけど。どこか具合悪いの瀬川さん」

「大丈夫よ卯の花さん」

でもいい機会だから卯の花さんにも私のこの気持ちを聞いてみよう。

「えっと、二人に聞いて欲しい事があるんだけど。……その、尾崎くんのことです」

「尾崎？ 尾崎がどうかしたのか？」

なんて言えはいいのだろう。そういえば言葉を整理していない。そのまま、尾崎くんのことを考えると胸が痛くなるんだと言えはいんだろつか。でも、胸が痛いなんて言ったら卯の花さんがまた病気と勘違いしそうだ。かと言って、この複雑な心境を他の言葉で言い表す術を私は知らない。

「……その、なんて言えはいいのかしら。尾崎くんの事を考えると落ち着かないというか」

「落ち着かない？」

「気持ちを言葉で表すのって難しいわよね。どう言えはいいんだろう。とりあえず、最近の私は尾崎くんのことばかり考えている気がするわ」

私が言つと佐藤くんと卯の花さんは顔を見合わせてポカンとしていた。……やっぱり私の言葉の意味が伝わらなかったのだろうか。自分では上手く伝えられたと思っていただけ。

「アレよね佐藤くん」

「ああ。アレだな」

どうやら私の言いたいことは伝わったらしい。でもアレってなんだろう。それが私が知ってたがっているこの気持ちなのだろうか。

「あの、瀬川さん？ それってひょっとしてさ、尾崎くんの事を思うと夜も眠れないとか、胸が苦しいとか、そんな感じ？」

「ええ。そうね。昨晚は眠れたけれど、ひどい夢を見たわ」

思い出したくはないけれど。夢の癖にいつまでも頭に残っているのが腹立たしい。

「あー。佐藤くん。どう思う？」

「俺に聞くな」

「つまり、私はこの変な気持ちがなんなのかを知りたいのよ」

二人は溜息をついた。教えてあげるべき？ とか、今までのことを考えると知らないのも無理はないのかもしれない、とか言っているけれど、なんの事か私には分からない。ようやく結論がまとまっ

たよつで、佐藤くんが私に言った。

「瀬川。それはおまえ自身が自分で学ぶべきものなのかもしれない。俺らがどうこう言えるもんじゃないだろうな」

「でもいいことなのよ。瀬川さん。がんばってね」

いい事なのか。でも、いい事なのにどうして胸が痛くなるんだろう。胸が痛いのは良いことなの？ 苦しいのも良いことなの？ 私には分からなかった。

「それで瀬川。このこと、尾崎には言ったのか」

「昨日帰りに言ったわ。尾崎くんも私のこの気持ちがなんなのか知っているみたいだったけれど、私がこの気持ちを理解できるまで今まで通りで居てくれって」

「そうか。……じゃあ、俺から尾崎に言う事は何も無いな。これはお前次第だ、瀬川」

私次第、か。でも私だけじゃやっぱこの気持ちを理解できないような気がする。今日は色々な人から話を聞いてみよう。

「そうね。私たちじゃどうしようもないわね。……でも瀬川さん。

これだけは言えるわ。……尾崎くん、あなたの事は嫌いじゃないみたいね」

嫌いじゃないって……あの悪夢じゃないんだし。心底嫌っているなら私とは関わっていないだろう。でも、やっぱり不安だ。いつか尾崎くんがあのような夢のような尾崎くんになってしまったらと思うと……。いいえ。考えないようにしよう。

「ありがとう。参考になったわ。それじゃ」

私は二人から離れ、とりあえず席に戻る。そしてしばらくして尾崎くんの姿が見えた。彼は普通に私に挨拶をしてきたが、私はなんだか目を合わせられなかった。彼の顔を見つめると、あの夢の中の尾崎くんなのではないかと不安になる。でもこれは気のせいだ。ただの、気のせいなのだ。

私はその後、休み時間毎に私の気持ちをみんなに伝えていく。それでもみんなは、佐藤くんや卯の花さんと同様の反応を示した。……

…皆は私のこの心の不安の正体を知っているようだが、誰も教えてはくれないようだ。それは全て、自分で理解する必要があると、皆は言うのだ。

昼休みになると当然のように尾崎くんと昼を共にする事になる。

私は尾崎くんがご飯を食べ終わった頃、尾崎くんを遠ざけた。

「お前、ちよつとあからさまなんじゃねえか？」

佐藤くんが私の行動をいぶかしむ。やっぱりそうなのだろうか。

今朝からろくな会話をしていないし、別に尾崎くんを避けているわけではないのだけれど。

「でも尾崎くんも瀬川さんの気持ちには気付いているんだよね。だったら逆に尾崎くんを遠ざけるのはやっぱり不審がられるよね」

「そうよね。かといって瀬川さんの気持ちもわからないでもないし」
うーん、と皆は悩む。私のために考える必要なんてないと思うのだけれど、こつこつというのをお人好しというのだろうか。

「で、お前ら一体何の話だ」

そういえばまだ和久井くんには何も話していないから、どうやらこの流れを彼は理解できていないようだ。……でも、和久井くんに話しても無駄な気がする。頭悪そうだし。

暫くして尾崎くんが戻ってきた。私たちはなんでもないように雑談に戻り、残りの時間をすごした。

そして放課後。今日は特に瀬川との約束をしているわけではないが、暇な時間は七海さんや響くんの依頼をこなしておかなければならないため、僕の足は自然と瀬川のほうに向かう。

「瀬川」

「え、ああ。何？」

僕が話しかけただけで固まる瀬川。……いつも通りでいいと言ったのに、この調子じゃこつちが困るよ。まあ、仕方ないか。

「今日はどうする？ このまま図書室に行くかい？」

「……そのことなんだけれど。今日は二人別々に行動してみない？」

尾崎くんが鈴木くと話をきて、私は久家さんと話をしてくるの」

なんだかんだ理由をつけて僕と離れたいだけなんじゃないだろうか瀬川。

「まあ、そうだな。二人で同じところに行くよりは、分担したほうが確かに効率がいい。分かった。帰りはどうする？」

「帰りは……。昇降口で」

「了解。瀬川、一つだけ僕のお願いを聞いてくれるかな」

瀬川の体が硬直する。なんだよ、なんでそんなに緊張するんだよ。まるで僕が弱いもの虐めでもしているみたいじゃないか。

「……早くいつもの瀬川に戻ってくれよ。僕は待ってるからさ。……じゃ、また後で」

僕は言い残して瀬川の元を離れた。……言っている僕も恥ずかしいんだから、早く元通りになって欲しい。

廊下で和久井に遭遇した。こいつはいつでも無愛想な顔をしている。

「よ。今日も一人か、和久井」

「お前も一人なんだな。瀬川の奴はどうした」

「まだ教室。今日はちょっと別行動だよ。僕はこれから美術室に行くんだけど、お前どうする？」

「俺は別にお前に付き合う理由はねえだろ。先に帰る」

ま、そうだろうな。昨日はただ瀬川に脅されて一緒に居ただけだから。

「分かった。じゃあな」

和久井は僕に背を向けて昇降口のほうへ向かっていった。その背中を見送った後、僕は美術室へ向かう。

美術室に到着し、中に入る。教室の前半分に居座っている美術部員は僕の姿を一瞥すると、やはり知らん顔で己の作業に没頭し始めた。昨日瀬川が言っていた、美術部員が連れてきている部外者の姿もあるようで、やはり僕の事を追い出す資格はないらしい。と言っ

ても僕も部外者ではあるので、余り長い間居座りたくはない。とにかく用を済ませて早く帰りたいところだ。

「おや時良先輩じゃないですか。今日は奈々実先輩や和仁先輩は一緒じゃないのですか」

僕の姿に気付いた菊地ちゃんが寄ってくる。この子も相変わらず他の部員たちと一緒に居ない様だ。……瀬川との関わりを持っているからって、そう頑なに他人を否定する事もないだろうに。

「まあね。今日は別行動だよ。まあ、ただ雑談をしに來ただけという感じなんだけれど。鈴木くんは居るのかい？」

「正時先輩なら今日もあの小部屋ですよ。……いくらお兄さんの作品だからと言っても、見すぎな気もするんですけれどね」

「肉親の遺した作品だ。それだけ思い入れがあるということなんだろう」

それでもやはり多少は気になるかな。いくら肉親の作品だとは言え、兄の遺した作品は何もあれだけではあるまい。あの作品だけに固執するというのは他にも理由があるのかもしれない。けれど、それは僕が知る必要のないことだろう。

「そうですね……。うーん。まあいいでしょう。では時良先輩は、今日のところは単に三人でおしゃべりを楽しみたいと」

「そんなとこかな」

「分かりました。今呼んでくるので座って待っていてください」

菊地ちゃんはそのくさと、カーテンで仕切られた小部屋へと消えていく。僕はその間、近くの椅子に座り、その辺に置いてある画材やら工具やらをいじくりながら、今日の瀬川の事を考えていた。

僕が知らないうちに瀬川に何か嫌な事でもしたのかもしれない。でも機嫌が悪いというわけでは無さそうだったし、やはり昨日の事を気にしているのかもしれない。もしかすると、昨日の時点では理解していなかった自分の気持ちに理解でき、ただ単に恥ずかしがっていただけなのかもしれない。……いや、瀬川が素直に恥ずかしがる性格なのかどうかは怪しい。うーむ、分からない。

「どうしたんですか蒔良先輩。そんな難しそうな顔をして。頭の中でパズルでも解いているんですか？ それとも、そこにある道具たちをどのように改造してやろうかと悪巧みしているところですか？もしかして、今日奈々実先輩が居ないのは、蒔良先輩によってなにか妙な事をされたからじゃあ……」

「いや、何を言っているんだ菊地ちゃん」

「いやあ来ないで！ わたしを連れていかないでください蒔良先輩！ 奈々実先輩には悪いですけど、やっぱり自分の身が可愛いので逃げていいですか！」

一体この子は僕のことをどう思っているのだろうか。変なマンガを読みすぎて頭がファンタスティックになっちゃってるんじゃないだろうな菊地ちゃん。

「あのねえ菊地ちゃん……」

「こ、怖いです蒔良先輩。でも大丈夫、わたしには正時先輩という頼りになる先輩が……。……ごめんなさい正時先輩。やっぱり頼りにならなそうです」

「菊地さん、それひどくないかい？」

あ、居たんだ鈴木くん。菊地ちゃんの実感がすごすぎて気付かなかった。

「でも正時先輩。そんな細い身体でどうやってわたしを助けられますか。……困くらいにはなりそうですけど」

あくまで先輩に対してなんて言い草だ。いや、間違っちゃいないけど。確かに鈴木くんはボディガードとしては全く頼りにならないけど。……ふむ。どうせ鈴木くんについての情報はほんのついでという事だから、もうしばらく菊地ちゃんの遊びに付き合っとう。

「菊地ちゃん。実はね、僕は君に言いたいことがあるんだよ」

「な、なんでしょう蒔良先輩」

鈴木くんの背後に隠れる菊地ちゃん。でも全然壁になってない。菊地ちゃんの背はあまり高くはないし、鈴木くんはそこその身長

があるが、それでも鈴木くんの体格では壁というにはいささか無茶がある。

「実はね。僕がこれから菊地ちゃんに言う事は、瀬川には聞かれたくないことなんだ。……だから、今日は瀬川とは別行動なんだよ」

「……時良先輩がわたしに？」

「ああ、とってもプライベートな用事でね」

「プ、プライベート……。なんだかドキドキする響きですね。まさか、愛の告白ですか!？」

はやとちり過ぎる菊地ちゃんだった。まあ、それもいいだろう。むしろその方が面白いかもしれない。鈴木くんはなんだか所在なさにしている。

「あの、尾崎くん。僕はどうすればいいのかな？」

「いや、別にここに居てくれて構わないよ。すぐ済むからさ」

僕は菊地ちゃんの目をまつすぐに見つめる。じつと見つめる。菊地ちゃんの瞳を掴んで離さない。その視線を独り占めにする。

「な、なんですか……。そんなに見つめられると、恥ずかしくなつてきます……」

菊地ちゃんの視線が泳ぐ。頬もだんだんと赤く染まり始め、僕は菊地ちゃんの側に寄る。そして耳元で、菊地ちゃんだけに聞こえる声で、こう、呟いた。

「好きだよ、菊地ちゃん」

「ぶふおっ!」

菊地ちゃんは奇妙な声を上げて僕の目の前から一步で下がる。顔が真っ赤だ。いやあ、そこまで威力があるとは思わなかった。

「愛してるよ」

「げふおっ!」

今度は鈴木くんにも聞こえてしまうくらい堂々と言い放つ。

「僕には君しか居ない」

「あびよっ!」

その度に菊地ちゃんが奇怪な音声を発するが、もしかしてわざと

ではないのだろうかと思えてきた。

「世界で誰よりも、君だけが大切だ」

「がひよっ！」

どう驚いたらそんな声を出せるんですか菊地ちゃん。

「結婚しよう」

「どぶえらっ！」

今のはどうやって発音したんだい菊地ちゃん。僕は菊地ちゃんの様子を伺う。なんだか死闘を繰り広げた戦士のような息遣いで僕の方を見つめている。

「はあ、はあ、なんとという攻撃力でしょう蒔良先輩。いきなり何をおっしゃりまするか！」

動揺しているのかどうなのか。日本語までおかしくなってきた。

「……すみません、取り乱しました。まさか、本当に愛の告白だったとは。……でも、それって……」

「僕じゃ……だめかい？」

僕はわざとらしい演技で菊地ちゃんに言い寄った。菊地ちゃんは僕の顔を見ないようにして、赤くなった顔で小さく応えた。

「い、いやじゃないですけど……その、急すぎると言いますか、心の準備が……」

「急なのは分かっている。僕たちが言葉を交わしたのは昨日が初めてだからね。……でも僕にはそれだけで十分だった」

「あ、えと。その。少しだけ時間をください。わたしにも考える時間……」

「だめ、待てない」

僕は菊地ちゃんの言葉を遮って菊地ちゃんに言う。菊地ちゃんは余計焦った顔をして慌てている。ふむ、面白い反応だ。もしかして瀬川も僕に脅しをしているときはこんな気分なのだろうか。

「……あ、の。それって、本当ですか？」

「どう思う？」

「本当だつたらわたし、断る理由がないというか……あわわわ、何を言っているんだろうわたし、冷静になれわたし、こういう大事な事はすぐには決めちゃ駄目なの。でもでも、この場で先輩の気持ちを無碍にするわけにはいかないでしょうし、あああどうすれば」
うむ。だんだん動揺してきたな。

「さあ、早く答えを」

「ええええ。どうしようどうしよう、こんな展開少女漫画でも見たことありませんよ！少女漫画読んだ事ないですけど。でもでも、現実には小説よりも奇なりって言いますし……ええっとええっと、なんて言えいいのか、ま、蒔良先輩……」

「なんだい菊地ちゃん」

「最後に、本当に、これだけは確認させてください！」

菊地ちゃんが決意の表情で僕の顔を見る。もう決心はついたようだ。ならば僕もそろそろ、いつも通りの僕に戻ろう。

「これは、冗談ですよね！」

「うん。冗談だよ」

「ですよー」

どうやら途中から見抜いていたらしい。あっさりと素に戻る菊地ちゃんだった。どうやら菊地ちゃんもかなり察しがいい方らしい。ノリがすごい。

「まあ、蒔良先輩に限ってありえないと思いましたしね」

「ん？ どういうことだい？」

「……いいえ。なんでもありません。蒔良先輩は雅時先輩に用があるんですからね」

菊地ちゃんも僕に隠し事でもあるのだろうか。いや、まさかな。瀬川は休み時間はずっと教室にいたから今日は菊地ちゃんとは会っていないはず。

「……まあ、用というほどでもないよ。瀬川の出が終わるまで、三人で雑談でも思っただけさ」

「じゃあ正時先輩、こっちこっち」

いつの間にか遠くへ離れていた鈴木くんを手招きする菊地ちゃん。鈴木くんは近くの椅子に座り、こうして僕たちは三人で雑談をする態勢に入る。

「それにしても尾崎くんは瀬川さんと仲が良さそうだったね。まだ知り合って間もないんだろう？」

「ん？ ああ。春休みの時に僕が瀬川に話しかけてから、かな。実際はまだ四日しかろくな会話をしていないんだ」

春休みのときは僕が一方的に喋っていただけで会話自体は成立していなかったのだけだ。

「ふうん。四日でも、あの瀬川さんとそこまで仲がよくなれるというのはすごい事だね。僕は未だに苦手だな、あの人が」

「そついえば鈴木くんも瀬川と普通に会話できてるよね。顧問の先生と美展の打ち合わせをするくらいだから部内の立場としては大変なんじゃない？」

僕は美術室の前半分に集まっている美術部員の方を見遣る。相変わらず彼らは僕たちのことなど見えていないように黙々と作業を続けている。

「僕は一応部長なんだけれどね。でも、だからこそ、同じ部員である瀬川さん一人を放っておくわけにもいかないさ」

「そついうもんかな」

鈴木くんも鈴木くんですれなりの理由をもって瀬川と接しているようだ。でも、それって仕方なく関わっているという風にも聞こえる。……鈴木くんの本心はやはり、瀬川とは距離をおきたいと思っているのだろうか。

「でも蒔良先輩こそ良いんですか？」

「僕は別に構わないさ。自分の、単なる好奇心、みたいなもんかな。それで瀬川に近づいて、瀬川に話しかけて、瀬川と一緒に居るんだ。後悔はしてないよ。それにね」

「それに？」

「昨日はそのことでクラスメイトたちと一悶着起こしちゃってね。」

でも、それによってクラスの皆も瀬川のことを単なる異常な人ではなく、同じクラスの一人として認めてくれるように少しはなったんだよ」

それでもまだ全員がやはり認めたくはないのだろう。できれば関わりあいを持ちたくないと思っているクラスメイトはまだまだいるはずだ。別に彼らを説得しようというわけではないが、最終的に、卒業式には全員が全員を認め合うようなクラスになればいいと、僕は思っている。

「そうなんですか。それほどまでに蒔良先輩は奈々実先輩を大事に思っているんですね」

そうなのだろうか。自分でもよく分からない。

「……尾崎くん、君はいい人だね。でも、それならなおの事、今は瀬川さんの側に居なくてはならないんじゃないのかい？」

「それは分かっている。でも、今日の瀬川はなんだか僕を遠ざけているようだった」

「遠ざける？」

「……しまった、余計な事を口走ってしまった。」

「それってどういう意味だい？」

仕方ない、白状するか。

「なんだか話をしようとしてもすぐに目をそらされるし、皆とは普通に会話をしているみたいだったのに、僕には内緒みたいな、そんな感じで皆からは言われるし」

「そういえば蒔良先輩。昨日奈々実先輩と二人で残って何話してたんですか」

「えーっと、それこそプライベートだから言いたくはないんだけどね。うーん、やっぱり関係あるのかなあ」

僕は瀬川が僕に抱いている感情の正体を知っている。もしかしたら、昨日の時点でその気持ちに応えてやらなかったから怒っているのかもしれない。瀬川は素直じゃないから、普通に怒るという事を知らなくて、あんな態度をとってしまったのかもしれない。

「……なんにせよ、今瀬川さんが一人で居たいと言うのなら、尾崎くんはそれに従うしかないだろうね」

「そうなんだよね」

でも、瀬川はやっぱり今日も僕と一緒に帰りたがっているみたいだから、今は心の整理をつけているのだけで、帰りまでにその気持ちに決着をつける腹積もりなのかもしれない。

「それで奈々実先輩の用事が終わるまでの、これはいわゆる暇つぶしというわけですか」

「そういうことだね」

本当は単なる暇つぶしではないけどね。

僕たちはその後、適当な雑談やカードゲームなどをしてこの時間をすごした。それでも瀬川のことを紛れるわけでもなく、僕は楽しみながらずと瀬川のことを考えていた。

今朝見た夢。僕の大切な占い師に言われたことを思い出す。あいつは、瀬川は僕の想い人だと言った。あれは夢だ。でも、僕があいつの事を好きになり、今はもう、人を容易に好きになってはいけないというのは本当の事だ。だから、もしも瀬川が自分の気持ちを理解し、その気持ちを僕にぶつけてきたら……。僕はそれに応えてやる事ができるのだろうか。あの占い師を傷つけ、今度は瀬川の事を傷つけてしまう事になるのだろうか。そもそも、僕は瀬川を救う必要があるのか？ 僕にそんな義務はないはずだ。いや、たとえ義務がなくても、僕はあの夢の中で、瀬川を救ってやるとあいつの前で宣言した。たとえ夢の中だろうとも、あの気持ちも本物だ。でも、瀬川を救うってどういうことだ？ 瀬川に孤独を感じさせないという事だろうか。皆に瀬川のことを理解してもらおうという事だろうか。分らない。何が瀬川にとっての救いになるのか。分らない。これでは瀬川を救う事なんてできない。……あいつの時と同じで。ただ側に居るだけで、何もできなかった、あの時と同じで。もし瀬川がそれでも許してくれると言っても、僕自身が僕を許せない。誰が僕を許そうとも、僕だけは僕を許す事はできない。

だったらどうする？ 僕はどうすればいい？ なあ瀬川、お前は
その答えを持っているのか？

「尾崎くん？」

僕は鈴木くんの呼びかけで我に返る。窓の外を見ると、もうすでに
日が沈みかかっていた。もうこんな時間か。

鈴木くんは菊地ちゃんに携帯電話を借りて、また迎えを呼んでい
た。……瀬川ももう昇降口で僕のことを待っているかもしれない。

「ありがとう菊地さん。それじゃ、もう美術室を閉めるよ」

「ん？ ああ。……そういえば鈴木くん、いつも誰に迎えに来ても
らっているの？ お父さん？」

さっきまでの雑談で全くと言っていいほど鈴木くんについての情
報を得られなかったので、最後に聞いてみることにした。

「僕の家で働いてる家政婦さんだよ」

「家政婦さん？」

「うん。……父と母は僕が幼い頃に他界したよ。……今の家政婦さ
んは三人目、だったかな」

「……ごめん」

鈴木くんはいいよ、と言ってくれたが、やはり申し訳ない気持ち
になった。既に家族三人に先立たれ、鈴木くんは辛いだろうな。……

……やっぱり、人の家の事情にそう安々と首を突っ込むもんじゃない。
……はあ、嫌な依頼を受けてしまったもんだ。けれどこれでまた新

しい情報が入った。響くんに話すというのも、気が引ける話だ
けれど。

「じゃ、菊地ちゃん、行こうか」

僕たちは三人で美術室を後にした。既に他の美術部員たちは帰っ
ていたらしく、残っていたのは僕たちだけだ。今日はもう、瀬川と
合流をして帰宅するだけ。

昇降口が見えてきた頃、菊地ちゃんが僕のことを制止した。

「もう奈々実先輩は来てますね。……じゃあ蒔良先輩。今日はここ
でお別れです。わたしは先に帰るので、あとからゆっくり奈々実先

輩と帰ってください。じゃあ、行きましょうか、正時先輩」

ずいぶん気の利いた後輩だな。菊地ちゃんも鈴木くんと共に昇降玄関に立っている瀬川と二言三言会話し、そのまま外へ出て行った。僕はそれを見計らい、瀬川の方へと近づいて声をかけた。

「瀬川」

僕はなんだか、久しぶりに瀬川と会ったような、そんな気分になった。

放課後、尾崎くと別れた私は一人図書室へと向かう。その前に千早さんや卯の花さんにがんばってね、と声をかけられが、私がどのようなにがんばればいいのかはわからなかった。今日一日皆と相談をしても、私のこの気持ちを率直に教えてくれる人はまだ居ない。答えは同じ、それは自分で理解するもの、らしい。本当なら綾子や鈴木くんにも聞いておきたいところだが、尾崎くんを美術室に向かわせてしまったため、今日はもう美術室には行けないし、行きたくない。帰りはつい一緒に帰るのを約束してしまったが、帰りまでにこの気持ちに整理がつくのかは分からない。

だから私は図書室に居る、久家さんにも相談するつもりだ。久家さんがなんて言うかは分からないけれど、その答え如何によつては私は尾崎くんを待つこともなく先に帰ってしまうかもしれない。でも、もしも尾崎くんが先に私を待っていたらどうしよう。その時、私が今よりももっと尾崎くんの顔を見るのが辛いと感じてしまっていたら、尾崎くんは怒るだろうか。……それは分からない。今はとにかく、図書室に向かおう。

「久家さん。こんにちは」

私が図書室に入ると、やはり一人で読書をしている久家さんの姿を見つけた。私が近づいて声をかける。

「……………」

こんにちは奈々実ちゃん。

久家さんは相変わらず無口だ。私の姿をその目に移すと、と言っても目は前髪に隠れて見えないが、会話用のルーズリーフを取り出して自分の言葉を綴った。

「……………」

今日は晴良くんは一緒じゃないんだね。

「ええ。尾崎くんは美術室に居るわ。帰るときは一緒なんだけれど

ね

「……………」

そうなんだ。まあいいや。今日は一応作品とぎりぎり呼べるようなものは持つてきているけど、読む？

久家さんがなにやら紙の束が入ったクリアファイルを取り出した。どうやら作品はルーズリーフではなく、一度パソコンで打ち込み印刷をしているらしい。

「ええ。読ませてもらうわ。……へえ、久家さんてパソコン使えたのね」

「……………」

まあね。いちいち鉛筆で書くのは面倒だし、パソコンで書いたほうが楽なの。

私は渡されたA4紙を手に取り、読み始めた。分量はそこそこあり、おそらく文庫本一冊くらいだろう。このぐらいの量なら二、三時間程で読みきれんだろうけれど、今はそんなに時間はない。区切りのいいところまで読んであとは借りよう。

内容は、はつきりとは分らないがおそらくファンタジーなのだろう。と、いうのも、舞台が異世界なのではなく、今より数百年後の地球だ。その世界では戦争によって人類の大半と、人類が築き上げた文明のほとんどが失われた世界で、世界政府といくつかの大企業によって人々の生活がcaろうじて保たれているらしい。世界の中には、世界政府と大企業が共同で造り上げた人類の全てを管理する塔がそびえており、物語はその塔に異変が起きるところから始まる。

物語は三つの視点から描かれている。私たちと同じくらいの年齢の男女の主人公たちの物語と、とある大企業に勤める女性の物語、そして、世界の異変に対抗すべく造られた人工生命体である少年の物語。それぞれのストーリーが今後、どのように交差するかはわからないが、世界の崩壊に主人公たちが立ち向かう王道ストーリーだ。読み進めていくと、どうやら主人公たちの敵となる存在は、世界

を管理する塔の周辺から突如現れた未知の生命体らしい。度重なる戦争によって兵器と名の付く全てを放棄した世界ではそれらに対抗する手段がなかったが、世界政府と大企業たちは結束し、一度は封印したあらゆる兵器を呼び覚まし、それらに立ち向かっていくのだ。

この物語はむしろSFなのだろうか。いや、SFファンタジーというジャンルがあつたのならそれに属するだろう。未知の生命体こそ存在するが、剣や魔法といった要素が存在しないので判断がしにくい。登場人物はそれぞれ、男女一組の主人公の二人は一応世界を旅するという、一見ファンタジーとも思える設定で、人工生命体の少年は、未知なる生命体との戦闘が主だった役割らしい。大企業に属する女性は、世界の中心である管理塔の異変について政治的観点から介入し、世界に巻き起こる異常現象を調査するという役柄だ。

三つの視点から描かれた作品か。とりあえずファンタジーと定義はしておくが、むしろそういった感覚を捨てたほうが楽しめそうだ。「うん。面白そうね。まだちょっとしか読んでいないけれど、世界の異変についての謎が最初からちりばめられているのは読書欲をそそるわね」

「……………」

本当？ 気に入ってもらえたなら何よりだね。でも、今瀬川さんが手にしているので全部じゃないの。それはある意味第一部終了までって感じで完結はしていないわ。

すでに結構な分量なのだけれど。言うなれば上・下巻でいうところの上巻ね。

「この時間だけで全部読んでしまうのは勿体無いし、久家さんが良ければ借りていきたいところだね」

「……………」

全然構わないよ。データは全部パソコンとUSBメモリに入っているからバックアップも万全なの。よければあげようか？

「いいの？ でも続き書くのに困ったりは……しないか。パソコンに入ってるなら」

「……………」

うん。細かい設定とかも全部別に保存してあるし。困ったときはそっち見ればいいしね。

「ありがとう。全部読み終わったら感想を聞かせてあげるね」

それにしても、よくこんなに書けるなあ。頭の中からイメージやアイデアが泉のように浮かんでくるんだろうな、やっぱり。小説に對する情熱は本物らしい。

「……………」

他にもいくつか作品はあるんだけど、今のところ人に見せてもいいと思えるのはそれだけかな。

うーん。私には考えられない。そういえば自分で物語を考えた事はなかったかも知れない。演劇とかオペラとか観るのは好きだし、小説もそこそこ読むのだけれど。

「……私も考えてみようかしら。ストーリー考えるのにコツとかっているのかしら」

「……………」

私もプロじゃないから上手くは言えないけど、自分で面白いと思うものを考えるのが一番じゃないのかな。本当に上手い人は、なんだか理屈っぽいことも言うんだろうけど。

「そうね……。どうしようかしら」

うーん、と、私たちは二人で考えた。しばらくして久家さんがあることを思いついた。

「……………」

テーマを一つ出して、そのテーマにそって即興で短いストーリーを考える遊びはあるよ。三題噺とか四題噺とか言われてるけど。

「なるほど。短いって、まさか久家さん的には原稿用紙三枚くらいとか言わないよね」

「……………」

私は鬼じゃないんだからそこまで求めないよ。本当に二、三行とかでもいいと思うよ。

二、三行か……。手軽に物語を考えるには丁度いいのかもしれない。でもそんなに短くて物語といえるのだろうか。

「……………」
とりあえずやってみようか。テーマはそうだなあ、「鳥」と「りんご」で。

なんとも言えないテーマだ。難しいのか簡単なのかも分からない。とりあえず考えてみよう。鳥とりんご。考えられるのはやっぱり、鳥がりんごを食べているような感じだろうか。でもこれでストーリーを構築するというのは、いろいろな広がり方があって絞りきれない。

私は最初のテーマで既につまづいていた。私には文才というのではないのかもしれない。

「……………」
そんなに難しく考えなくてもいいよ。こういうのは理屈でやらな
いで感覚的にやったほうが楽だと思うよ。頭にぱつと浮かんだスト
ーリーで構築するの。

「頭にぱつと……………」
といっても、既に色々なパターンを思い浮かべてしまった。

「どれに絞ればいいんだろう。分からないわ」
「……………」

複数出てきているということは、それだけのストーリーを奈々実
ちゃんは考えられているということだよ。それっていいことだと思
うよ。

「そうなのかな。まあいいわ。とりあえず、一つだけに絞ってみる
わ」

私は無難に、鳥がりんごを食べに来たというストーリーを選んだ。
「……………こうかな」

一人の少年がりんごを買いに行きました。その少年は、りんごの
一つを母親に、一つを父親に、一つをおばあちゃんに、一つを少年
が想いを寄せる少女に、それぞれ分けました。けれども少年は計算

を間違えて、りんごを一つ余らせてしまいました。さあどうしよう
と考えていると、一羽の鳥が少年の側を飛びまわっています。少年
は最後のりんごを、その鳥に分けてあげました。鳥は喜んで空に飛
んでいきましたが、少年は後から気付きました。なんと、自分の分
のりんごをあつた鳥にあげてしまったのでした。

「……うーん」

「……………」

童話みたいだね。いいと思うよ。

そうだろうか。ちよつと子供っぽいかもしれない。でも、鳥つて
りんご啞えて飛べるのだろうか。……自分で考えておいて意味が分
からなかった。

「やっぱり変だわ」

「……………」

まあまあ最初だしね。じゃあ次のテーマは……「海」と「猫」と
「バイオリン」で。

三つか……。海といえば真つ先に思ふのは夏の風景だ。猫といえ
ばあの可愛い生き物が浮かぶが、海と猫といえば、ウミネコという
鳥がいる。それらと関連性が無さそうなバイオリンをどのように物
語に組み込めばいいのだろう。

「難しいわね、バイオリンが」

「……………」

難しいと思うから難しくなるんだよ。ぶつちやけちやえば、物語
なんだから多少の無茶は効くよ。

効いてもあまり変な物語は考えたくない。うーん。海辺でウミネ
コの鳴き声を聞きながらバイオリンを弾く？ なんだか安易だ。海
と猫を別々に考えてみようか……。どうしよう。

「ねえ、久家さんはどんな物語が思い浮かぶの？」

「……………」

そつだなあ。三題嚟なんてここ最近やってないから変かもしれない
けど。

そう言いなが久家さんは自分の物語を別のルーズリーフに書き始める。そのペンの動きには淀みがない。すでにストーリーは構築し終わっているようだ。

可愛い可愛い動物たちの王国で音楽家兼冒険家の猫は、王国中を渡り歩きながらバイオリンを弾いていました。けれどそのバイオリンの演奏は、動物たちには騒音でしかなく、あまり評判は良くありませんでした。

ある日、猫の音楽家は旅をしている内に広大な海を見渡せる高台へとやってきました。この海の間こうには、自分のバイオリンを聴いてくれる誰かが居てくれると信じました。でも、海を渡り、動物たちの王国の出るという事は錠に反してしまいます。海の間こうは人間たちの世界。向こう側へ渡ってしまえば、猫はバイオリンを演奏できなくなります。途方にくれた猫はその夜、ウミネコの鳴き声を聞きます。ウミネコたちは、海の間こうへ渡ってもバイオリンを弾く事ができる方法を教えてくれました。……それは、人間になる事です。人間になって、人間の世界でバイオリンを弾く事ができると、ウミネコは言いました。けれどその方法は同時に、動物の王国に、二度と帰って来れないということも意味します。猫は迷いました。迷って、その迷いをバイオリンの音にのせて、海の間こう側へ向けて演奏を続けました。人間の世界と、動物の王国との狭間で、猫はがむしゃらに演奏を続けました。その一途な想いはやがて王国中の動物たちに広まり、ウミネコたちも人間たちにその響きをもたらしました。その後、猫は美しい音を奏でる歌い手として有名になったという事でした。

さっき私が考えたりんごと鳥の物語より長い。でもこれも童話みたいだ。

「可愛い面白いお話ね。バイオリンを弾く猫だなんて」

「……………」

子供の頃、動物たちが音楽隊を組む絵本があったじゃない。それを参考にしたの。

ブレーメンの音楽隊、だったっけ。私も読んだ事はあるけれど、
どんなお話だったかはもう忘れてしまった。

「でも分かったわ。私にはあんまり才能はないみたいね」

「……………」

そんなことはないと思うよ。さっきの話もなんだかほのぼのとしていて私は好みだな。

「お世辞でも嬉しいわ」

お世辞じゃないよと久家さんは無表情で言う。相変わらず、文章では色々な感情が読み取れるのに、実際の久家さんの表情は全く変化がないのだった。でも基本的にいい人だと私は思う。聞けば他のクラスの男子から結構な人気があるらしい。卯の花さんも人気者だけれど、違う意味で久家さんも人気があるようだ。

「……………」

じゃあ次のテーマいつてみようか。「心」と「気になる人」と「友だち」……………この三つで。

……………心、気になる人、友だち。

私の頭の中で浮かんできたのは一人の男の子だった。……………言わずもがな、尾崎くんだ。でも、頭の中の尾崎くんがどんな表情をしているか分からない。顔だけばやけて、なんだか尾崎くんの顔を忘れてしまったようで居心地が悪い。

「……………」

どうしたの奈々実ちゃん。

「……………いいえ」

私が導き出した物語は……………私がこれから作り出したい物語は……………。私が、尾崎くんと共に歩いていきたい未来は……………。

「わからないわ。久家さん。あなたはこんな気持ちになったことがあるかしら」

「……………」

どうしたの？

心。私は今、自分の中で渦巻くこの気持ち分からない。気にな

る人。尾崎くんのことを考えるだけで、胸の奥が痛い。友だち。尾崎くんは友だちだけれど、千早さんや佐藤くんたちとは違う、もつと特別なものだと思う。

「……こんなことを言っても仕方ないかもしれないんだけど。尾崎くんのことを考えると胸が痛いの。尾崎くんのことを考えると夜も眠れないの。落ち着かないの。やっと寝つけても、昨日はとても怖い夢を見た。そのせいで今日はろくに尾崎くんとは話してない」

「……………」
それってもしかして……。

「これってどういうときになるものなの？ 皆に聞いても、それはやっぱり自分で見つけるものだからって教えてくれなくて」

久家さんに話しても結局同じ答えが返ってくるに違いない。でも私は話さなくては気が済まなかった。自分の気持ちを理解するために。尾崎くんと共に並んで帰るまで、その時間は残されていないのだから。

「……………」

きつと私も同じことを言うと思うよ。……なんて、本当は私が言えることじゃないの。

「どういうこと？」

「……………」

ちよつとね。……テーマは「心」と「気になる人」と「友だち」

……だったよね。

久家さんは新しいルーズリーフを取り出してペンを走らせた。私が真剣に悩んでいるというのに、どうして久家さんはそんなことができるのだろうか。それとも、私のこの気持ちを物語で表現してくれるのだろうか。

答えは後者だった。久家さんが書き上げたストーリー。そこに描かれている登場人物はまさに私と尾崎くんだった。

ある女の子には気になる人が居ました。ずっと女の子の側に居てくれた一人の男の子。今までただの友だちだと思っていた男の子。

でも最近、その男の子のことがひどく気になります。どうしてこの心はこんなにも疼くのだろう。どうしてこの心はこんなにも痛むのだろう。どうしてこの心はこんなにも不安なのだろう。女の子はそれが不思議でなりません。女の子にとっては初めての経験です。この気持ちの正体が一体なんなのか、女の子には分かりませんでした。

ある日女の子は一冊の本に出会いました。どんなことでも知っている魔法の本。その本は女の子の言葉を解し、女の子の悩みを解決してあげようと言いました。

この気持ちの教えてください。

女の子はその本に問いました。本は自らのページをぱらぱらとめくり、やがて一文字の言葉を女の子に伝えました。

すなわち、恋です。

本はそれだけを伝えると、女の子の前から姿を消してしまいました。

魔法の本は久家さんのことだろうか。確かに図書室にいて、いつも本を読んでいるからイメージは合う。

「……でも」

恋？　これが、恋？　私は尾崎くんを恋をしているの？　恋をするとかこんなにも心が苦しくなるの？

「……」

人を恋するということは色々とおあるけれど、奈々実ちゃんのそれはきつと、蒔良くんのことと単純に、好きなんだね。

「好き……尾崎くんのことと、好き……なの？　私は」

やっぱりよくは分からない。私はいままで人を好きになった事が多分なかっただろうし、恋したこともきつとない。でも、このぼんやりした気持ちに、まるで霧が晴れていくみたいにすっきりとした気持ちに嘘はない。

「……」

人を好きになるのって大変な事だね。辛いよね。でも、それで

いいの。その辛さを感じれば感じるほど、その人のことをもつと好きになれる。

「好き、なのね。尾崎くんのことか」

「……………」

蒔良くんの側に居ると、どんな気持ちになるの？

どんな気持ち……それはもちろん、心が暖かくて、気持ちが良くて、温もりがあつて。安心できた。ああ、そうか。そう感じるということは結局、恋なんだ。私は尾崎くんに恋をしていたんだ。

「……………」

その想いを蒔良くんに告白するにはやっぱり勇気がいると思うけど、がんばってね。

「勇気か……。いいえ、久家さん。私はこの自分の気持ちを理解できたら、尾崎くんにはつきり言うって約束したから、今日の帰りにも告白するわ。でも、どんな言葉で言えればいいの？」

「……………」

ずいぶん思い切りがいいんだね。そうだなあ、難しい言葉や飾った言葉なんて要らないと思うよ。純粋に、好きと一言言えればいいんじゃない？

好き、と一言。簡単な事だ。そう、簡単だ。簡単な事だけれど、やっぱりだんだん心臓が高鳴ってきた。今までならどんな恥ずかしい言葉でも言えた筈なのに、たった二文字の言葉を伝えるだけでこども緊張しなくてはならないの？

「ありがとう。久家さん。私、がんばるわ」

「……………」

うん。応援してる。

そうと決まれば即実行。今日はもう先に昇降口で待っていていよう。

「……………」

奈々実ちゃんがんばるなら、私もがんばらなきゃな。

と、久家さんが続けた。……久家さんにも何かあったのだろうか。その顔は無表情だが、なんだか元気が無さそうに見える。

「どうしたの？ 久家さん」

「……………」

うん。奈々実ちゃんも私に打ち明けてくれたんだもんね。私も相談するよ。聞いてくれる？

「ええ。いいわ」

そういえば本来は七海さんのお願いを聞くために久家さんと話をしているのだった。久家さんがこれからする話がそのことに関わってくるかは分からないが、聞いておくに越した事はないだろう。

「……………」

実は私、友だちと喧嘩中なの。七海加奈子って知ってるよね。奈々実ちゃん、今日も話してたしね。

やはり、七海さんの事か。こちらから余計な詮索をしないで向こうから話をしてくれるなんて好都合だ。

「……………」

加奈子ちゃんと私は昔からの親友だったの。無口な私にも周りの人たちに以上に接してくれたし、私も加奈子ちゃんのが好きだった。さつきはあんなテーマを出したけれど、あれ、自分にも当てはまることなの。友だちだった加奈子ちゃんと喧嘩して心が傷ついて、今でも加奈子ちゃんのが気になっている。でも今更どんな顔をして話せばいいのか分からないの。

久家さんはどうやら、心の中では七海さんと仲直りをしたいと思っっているらしい。けれどそれは七海さんも同じことなので、案外二人の関係はすぐに戻せるんじゃないだろうか。

「一体何が原因で喧嘩を？」

「……………」

ちよつと、ね。……こんなことを瀬川さんに言っただけじゃないよね。でも私、がんばるから。今はまだ気持ちの整理ができていないけれど、いつかちゃんと加奈子ちゃんと向き合うから大丈夫。久家さんがそう言うなら、私がこれ以上口出す事は何もない。自然に関係が回復するというのなら、それに越した事もないのだ。

「そう。でも、私や尾崎くんはいつでも相談に乗るわよ。何でも言
ってね」

「……………」

ありがとう。奈々実ちゃんもがんばってね。

その後私は久家さんに挨拶をして昇降口へと向かった。

廊下が暗い。そんなに長い時間会話をしていたわけではないはず
だけれど、今日はなんだか雲もかかっているし、そのせいだろう。
昇降玄関の近くまでいくと、私の心臓はどんどん高く鳴り響いてく
る。誰も居ない廊下で、私は自分自身の心音がこだましているのか
とも思ってしまった。

尾崎くんは既に待っていてくれるのだろうか。待っていないか
ったとしても、彼の姿が現れるまでに私が自分の緊張に押しつぶさ
れてしまいそうだ。

玄関に出ると、外の光が直接薄暗い校舎内に差し込んでくる。尾
崎くんの姿はまだ、ない。ほっとしたようなそうでないような、私
は落ち着かないまま、昇降口の掲示板の前で待っていることにした。
一分間が長い。二分間が遠い。三分間が果てしない。四分間が永
久だ。五分間は無限に感じられる。

最早時間の感覚なんて意味を成さない。まだかまだかと思いを馳
せて携帯電話の時間を見るとほんの数分しか経っていないし、すれ
違う生徒たちの顔を数えていても、その中に尾崎くんの顔はない。

美術室に向かってみようか。ただ待っているだけというのも退屈
だ。

私は目を瞑って、尾崎くんの姿を捉える。私は手を伸ばして尾崎
くんの背中を追う。でも、決して追いつかない。しばらくして尾崎
くんが振り向く。私はもつと手を伸ばす。もうすこしで届く。届く。
届いた。届いて、尾崎くんの体が鮮血を噴出して傾く。私の手には
いつの間にかカッターナイフが握られていた。

「……………先輩？」

目を開けると、そこには綾子と鈴木くんの姿があった。…………どう

やら眠ってしまったらしい。立ちながら眠れるなんて、なんだかみっともないな。

「綾子？」

「よかった。もうすぐ蒔良先輩も来ますよ。わたしたちは先に帰るので。それじゃ」

言葉を最小限にし、綾子と鈴木くんはすぐに外へ出ていった。

もうすぐ尾崎くんがやってくる。やっぱり怖いな。私の気持ちを素直に受け入れてくれるかどうかとても不安だし、とても痛い。

私がそうやって考えている内、私の横から声が聞こえた。

「瀬川」

私は振り向き、尾崎くんの姿を瞳に収める。どうしてだろう。尾崎くんがとても遠くから帰ってきたみたい、そんな感覚だった。

僕は瀬川の側に立つ。瀬川は今度は目をそらさずに僕の姿を見据えてくれる。

「待たせたな」

「構わないわ。それじゃ、帰りましょう」

僕は瀬川と共に校舎からでて、坂道を下っていく。その間、僕たちはそれぞれ、鈴木くんと久家さんに関する情報を交換し合った。久家さんの方は多少の進展があったといえるだろう。けれど鈴木くんの方は本当に、響くんに話すべきかどうか分からなくなるな。どうして鈴木くんの情報を欲しがっているのだろう。

「……」

僕と瀬川はそれ以降、大した話もせずに坂道を下りきる。交差点に差し掛かり、いつも通りに瀬川を送ろうと、右へ曲がろうとする僕を瀬川が制した。

「尾崎くん。私、尾崎くんに言わなくてはならない事があるの」

瀬川が改まって僕に言う。瀬川の瞳には決意の色が見て取れた。

「なんだ？」

「……私、久家さんに教えられたの。私の、この、尾崎くんに対する想いがなんなのか」

ああ、そうか。瀬川はもう、自分の気持ちに気付いてしまったんだな。それを今から僕に伝えたいというわけか。

「本当は今日、皆に聞いて回っていたのよ。でも、教えてくれなくて」

「それで今日、僕と距離を置いていたわけか」

「ううん。それとは別なの。とにかく、私、尾崎くんに言いたいことが……」

どうしたものか。瀬川の気持ちに素直に伝えてやるべきなのだろうか。でも今の僕が瀬川を好きになるなんてことはできない。……

いや、そうじゃない。僕は怖いのだ。瀬川を好きになる事で、また一方的に彼女を傷つけてしまうのが。

「……聞いてくれるかしら」

「ああ」

それでも、瀬川の言葉を聞かずには居られない。聞かなくてはならない。その後、僕がどのように瀬川と接するかは、それからだとおもつ。

「久家さんは飾った言葉なんて要らないって言ってたから、これだけ言っわ。……好きよ、尾崎くん」

「……」

僕だつて瀬川の事は嫌いじゃない。くそ、僕はなんて心が弱い人間なんだ。瀬川がこれほどまでに真剣に自分の想いを伝えてくれたというのに、僕はそれに応える勇氣もない。

「瀬川。僕にも時間をくれないか」

「時間？」

「僕は臆病だから。今君に僕の気持ちを伝えても、君を傷つけてしまっただけだ。瀬川の気持ちはわかってる。好きって言ってくれて、僕は嬉しいよ。でも、今は僕に考える時間をくれ」

「それって、どういうこと？ 私を傷つけるって……。それって、

本当は断りたいけど、断ると私が傷ついてしまうと思っているの？
だから、今は保留にしたいって事？」

瀬川が僕の顔を必死に見つめてくる。僕は瀬川を真っ直ぐに見据えて言った。

「そうじゃないさ。むしろ、僕は君の気持ちに全力で応えてあげたいとも思っている。でも、怖いんだ」

「怖い？」

「……昔さ、僕は君に話した占い師の女の子のことが好きだった」
瀬川が驚く。

「僕は自分の気持ちをその子に包み隠さず伝えた。あいつも、僕のこと好きだって言ってくれた。でも、その結果、僕はあいつを傷つけてしまったんだ」

「……だから、私を好きになると、その子と同じように私のことを傷つけてしまうかもしれないって、そう思っているの？」

「察しが早くて助かるよ。つまりはそういうことだ」

瀬川が両手で僕の手を握る。

「傷つけるなんてとんでもないわ、尾崎くん。私は逆に癒されていくくらいなのよ？」

「……分かってる。僕だってさ、君の事を素直に好きになれたらどんなに楽かと思うよ。でも、やっぱり心の中で何かがつつかかってその気持ちを吐き出せないでいるんだ」

この心の詰まりを治す方法を僕は知っている。そのためには一度、彼女と会わなくてはいけない。僕が恋し、恋し切れなかったあの占い師に。守ってあげられなかった占い師に。そして、謝らなくちゃいけない。あいつはすぐにでも許してくれるだろうけれど、それじゃ駄目なんだ。それだけじゃ足りない。

「いつまでもは待てないわよ。私はそこまで気が長くないから。……あなたが自力で決断できないときは、そのときはどんな手を使っても、無理やり私のこと好きになってもらうから」

「……それじゃあ」

「ええ。少しだけ時間をあげる。丁度明日は土曜日だし、ゆっくり考えるといいわ。……だからね、尾崎くん」

瀬川が僕の手を強く握る。

「……日曜日、デートをしましょう」

「デート？」

瀬川が僕に与えてくれる時間は一日だけらしい。でも、そうだ、あまり待たせているわけにもいかない。この際、はっきりとこの気持ちに決着をつけてやる。

「そう。日曜日の午前十時。私はこの交差点で待っている。遅刻は絶対に許さないし、一秒でも遅れたら、私はもうあなたとの縁を切るわ。……といっても、もしもそれまでに尾崎くんの気持ちが今のままだったら、そんな状態でデートをしても楽しくないから、来なくてもいいのよ。……その時は、尾崎くんにとっての私の存在なんてその程度だったと思うことにする、から」

瀬川の手が震える。頭を伏せて、僕に顔を見せないようにしている。

「……瀬川」

「今日はこのまま別れましょう。送っていかなくて構わないわ。……それじゃ、日曜日に、会えたら良いわね」

僕の手から瀬川の温もりが去っていく。瀬川は僕から逃げるように、走り去っていった。今の僕には瀬川を追う力はない。瀬川の姿が見えなくなった頃、僕は踵を返して自宅へと向かった。

瀬川、泣いてたな。くそ、結局僕は彼女を傷つけてしまったんじゃないか。僕がうじうじしているから。

「……僕に瀬川の側に居る資格なんてあるのか？」

誰にとも言わず、僕はむなしく広がる曇り空へ独りごちた。

第一章・009

土曜日の朝、目が覚めた僕は朝の身支度を手早く済ませ、携帯電話のアドレス帳を開く。そこに登録されている一人の番号を見つめる。

あの占い師はこの時間帯だとまだ寝ているだろう。僕は一瞬、電話をかけるべきかどうか迷ったが、考えるだけ無駄だと思い直し、その番号の持ち主を叩き起こすことにした。あいつの場合、いつ電話をかけても大体寝ているので、電話をかけるタイミングを見計らう意味はない。

数回のコール音の後、眠たそうな声でそいつは言った。

「はい、こちら大地獄沢、大地獄沢」

元気がないバスガイドのような喋り方で大地獄沢雛が応答する。

大地獄沢というのは仕事用の名前で、本名は別にある。が、雛の場合、本名のほうをとて嫌っているため、僕は決してその名を口にしない。

「おはよう、雛」

「おや、その声は蒔良ちゃんじゃないか。いきなりどうしたんだいこんな時間に。うちは今とっても眠いのでかけ直してくれるととても助かるよ」

眠い割には結構喋ってくれる雛だった。

「お前の場合、いつかけ直したって同じ反応しか返ってこないだろ。一体どれだけ寝てれば気が済むんだ」

「眠るという行為はうちにとっての至福なんだよ蒔良ちゃん。何にも変えがたい、うちだけの幸福。寝ている間は何にも影響を受けず、どんな負の感情も生まれない。夢の中は怪我もしないし死なないし、辛い事なんて決して起こらない。うちがうちであるために、うちは眠り続けるのさ」

それも何回聞いたことか。確かに寝ている間は何も考える必要も

ないから楽だし心地よい。けれど、人生において寝てばかりいるのはやはり現実逃避に他ならないはずである。僕は一度、雛にそのことを言ったことがあるが、やはり否定された。

「それで蒔良ちゃん。何用だい？　そういえば電話なんてずいぶん久しぶりだけど、うちのことが愛しくなったのかな」

「何言ってるんだ。たまにはこうして電話でもしないと、お前、いつの間に死んでそうだからな」

「死ぬのもまた人生だよ蒔良ちゃん」

まあ、明里姉さんがちよくちよく雛の世話をしに行っているから問題ないとは思っけれど。それでも長年のホームレス生活でその身体はとても貧弱だ。あれでよく病気とかかからないとある意味感心する。

「で、何の用？　うちの安否を確認したいわけじゃ、勿論ないよね」

「ああ。実はお前と色々話したいんだ。今から行きたいと思うんだけど、いいかな」

「……そうやって、うちの都合を聞くのもいつもの蒔良ちゃんじゃないね。アポなんかとらなくても、いつ来てもうちが居るって事は分かっているはずじゃないか」

やっぱり分かるか。……平静を装っていても、僕の心は本当は荒れているのだ。

「何か悩んでいる事があるんだね、蒔良ちゃん。いいよ、うちがその悩みを聞いてあげる。解決してあげられるかどうかは分からないけど、微力ながら力になるよ」

「ありがとう、雛。差し入れ持つてく」

「待つてるよ」

雛は電話を切った。さと、雛に持つていく差し入れは何かいいかな。考えるまでもないか。やはりバナナだろう。あいつはバナナは最高の栄養食だと言ってバナナを買いだめしている。

「さとと」

「や、弟くん」

僕が部屋から出ると姉さんが階段の前に立っていた。昨日は僕が家に帰った後、姉さんは僕の様子を見てひどく心配していたようだった。黙って二階に上がろうとする僕に姉さんはなんらかの言葉をかけてくれたはずだが、よく覚えていない。

「もう平気？」

「心配かけてごめん、姉さん。でもこれは僕の問題だし、自分で何とかするべき事だから、姉さんの力は借りないよ。どうなるかは分からないし、もしかしたら今日僕が帰ってきたら、昨日よりひどい状態になっているかもしれないけど、そうなったら暫く放っておいてほしい」

「分かってるよ。あたしはあんたの頼れる姉ちゃんだからね。何があったかは分かんないけど、あたしは応援してるからね」

「ありがとう姉さん。じゃ、出かけてくるよ」

「いつてらっしやい」

姉さんは僕を快く送り出してくれた。全く姉さんには敵わない。

いろいろな意味で、姉さんは僕が知る中で一番の姉さんだ。

僕は雛が住む川原の防空壕跡へと向かう。この街を東西で二分する川はその昔、戦国の時代に戦争が起こったときに東西の両軍の衝突を押さえ込んだと謂われている。詳しくは分からないが、東西の軍隊が川を挟んで対峙したとき、名乗りを上げていた両将たちが突如発生した高波にのまれ、川に落ちたらしい。まぬけな話だが、そのおかげで戦争は中断されたのだそうだ。どこまでが本当なのか分からないが、この街には他にもよく分からない伝説がたくさんある。自転車をこいで約三十分。川の土手に到着。雛が住んでいる防空壕跡は土手を降りたところにある。自転車は降りられないので、土手に自転車を停めて急斜面を降りる。歩けば階段があるが、そこまで行くのは面倒だ。

「あれだな」

降りるとその防空壕跡はすぐに見つかった。この地形条件からすると子供たちなどの秘密基地にされていてもおかしくはないが、奥

のほうに行くとか決まって雛が寝ているので遊ぶに遊べないのだろう。僕もその防空壕跡に入る。中は非常に狭い。僕くらいの背格好になると屈んで入らなくてはならない。しかし奥に行くと少し広くなり、雛くらいの体格なら確かに住めそうだ。

奥にダンボールと毛布、多少の食料が置いてある。本業である占いをするときにはあのダンボールを引っ張って外に出るらしい。ダンボールには大きく大地獄沢と書かれているが、よく考えると人の未来を占う職業で地獄を名乗るというのはいかなものか。それでも物好きな常連がいるらしく、雛の基本的な生活費はほとんどその人のおかげだそうだ。しかも雛の占いはほぼ百発百中らしい。らしい、というのは、実は僕自身占いというものをあまり信じていないからだ。

雛は毛布を被って眠りこけている。予想していた事なので驚かない。

「雛。来たぞ」

眠っていると言っても雛の睡眠は結構浅い。こうして一言声をかけるだけで雛はもぞもぞと動き出し、身体を起こす。僕は腰を曲げて頭も下げているが、雛は背筋をぴんと伸ばしてもその頭は天井に届かない。

「あゝその声は蒔良ちゃんじゃないかあ。どうしたんだいいきなり」
「寝ぼけたふりしてんじゃねえよ」

そして雛は決して寝ぼける事がない。なんでも睡眠自体をコントロールできるとかできないとかで、思い切り熟睡したいときはできるし、別に適当に寝ていただけならこうして浅く眠っているのだ。「冗談だよ蒔良ちゃん。それじゃ、外にベンチがあるからそこまで移動しようか。うちはこのままで全然平気なんだけど、蒔良ちゃんは疲れるだろうからね」

「ああ。既に背中と首が痛い。お前よくこんなところに住めるな」
「住めば都さ蒔良ちゃん」

僕は頭をぶつけないように方向転換し、姿勢を低くして出口へと

向かう。外に出ると僕は思い切り背伸びをした。短時間居るだけだったのに、体が痛い。

続いて雛が外に出てくる。同じく背伸びするが、腕を伸ばしても僕の頭のとっぺんに届かない。寝る子は育つと言うが、雛は成長することもやめたようなもんなので、中学の頃既に小柄だった雛の背は、今見るともつと小さく見える。一見小学生と違わない。

「相変わらず背が高いね蒔良ちゃんは」

「お前が小さすぎるんだよ雛。僕は男子の中では平均ぐらいしかないぞ」

「あー、そういえばそうだねえ」

僕たちは近くのベンチに腰掛けた。雛がその時、久しぶりに歩いて疲れたと言ったけれど、聞かなかったことにする。

「ほれ、差し入れのバナナだ」

「おー！　ありがとう蒔良ちゃん！」

雛はそれを受け取ると嬉しそうに一本目を頬張る。そんなにバナナが好物なのか、雛は。

「うまいか」

「ああ、うまいよ蒔良ちゃん。バナナが一房あれば一週間暮らせるからな」

どんな食生活だよ。

僕と姉さんは一度、雛のあまりにも食べなさ過ぎる食生活を見兼ねて、飯くらいは作ってやろうかと言ったのだが、毎日世話をされるわけにはいかないからと言って聞かなかった。それでもこうしてたまに食べ物を持っていく分には許してくれるため、僕と姉さんは適当な理由をつけて食べ物を持っていくこうと考えたのだが、しばらくするとそれも見破られたのだった。

「おなかいっぱい。眠くなつたから寝てくる」

「せめて僕の話聞いてくれよ」

それに、眠いのはいつもの事だろう。

「悩みがあるんだっただね」

「悩みというか、なんというか。まあ、そうなんだ」

「ふうん。それで、どうしたんだい？」

僕は雛に、昨日までのことを話した。雛がひたすら黙って聞いているので、話しているうちに眠ってしまったのではないかと思ったが、そうではない。

「……それで時良ちゃんは、自分の気持ちに整理が付かないからと、うちを頼ってきたというのかい？」

「……」

雛は深い溜息をついた。

「時良ちゃん、君は馬鹿だよ。うん、馬鹿だ、とつても馬鹿だ。占い師であるうちが言うのだから間違いはない」

一度に馬鹿と三回も言われて流石にショックだが、僕は否定する事はできなかった。

「なんだよ時良ちゃん。それって僕に相談するべき内容かな？ もう答えは出ているんじゃないの？ その、瀬川奈々実ちゃんのことですこまで悩めるのであれば、君の心の中では結果は出ているんじゃないの？」

そう、なのだろうか。

おそらく、そうなのだろう。瀬川の事でここまで悩めるのだ。彼女のことが好きでないというのなら、その旨をはっきりと彼女に伝えて然るべきであり、そうしなかったということは、僕はきつと瀬川の事が好きなのだろう。

でも、この気持ちを彼女に伝えて、彼女を傷付けてしまわないかと僕は恐れている。自分の気持ちに素直になれない。

「雛。僕はどうしたらいいんだろう」

僕がそう言うと、雛は呆れた顔で応えた。

「うちは時良ちゃんのことを過大評価していたみたいだね。そんな簡単な事も分からないなんて、うちはがっかりだよ」

「……」

僕は沈黙する。

「どうやら今回の事に関して、うちが力になれることはひとつも無いよ。いくら蒔良ちゃんがうちに助けを求めたところで、うちを頼ったところで、うちの占いを信用していたって、自分の言葉が分からなくなつて、自分の気持ちが分からなくなつて、自分が頼りないからって、うちは蒔良ちゃんを甘やかす術を知らない。手段を知らない。言葉を知らない」

雛は続ける。

「うちには荷が重過ぎるんだよ蒔良ちゃん。うちは占い師であつても預言者じゃない。君にどんな言葉を投げかけたところでうちの言葉は妄想で想像で虚言でしかないのさ。君の人生を決定付けてしまえるほどの力はないし、うちほど非力な人間はこの世にいないからね」

僕は雛の言葉を黙って聞く。

「蒔良ちゃん。君は、うちがどんな方法で占いをするか分かるよね？　うちはただ、夢を見るだけ。幸せな夢を見るだけ。残酷な夢を見るだけ。平和な夢を見るだけ。殺伐な夢を見るだけ。夢を見て、夢のような世界だつたって感想を述べて、それはまさしく、夢のごとく次の瞬間には忘れてしまうほどの儚い夢でしかないんだよ。君はそんなモノを信じて頼るといふのかい？」

「……僕は、夢を見たいわけじゃないんだ、雛。今ここで、現実には直面する問題をどうやって解決すればいいのか悩んでいるんだ」

「それこそうちの出る幕じゃないだろ？　うちは夢の専門家なんだ。現実から目を背けているだけの引きこもりだよ」

ホームレスだから引きこもる家もないんだけどね、と雛。

確かに今の僕は、雛に頼るべきではなかったのかもしれない。だからといって、それじゃあ解決にはならないのだ。

「知っているだろう、雛。僕は昔、君の事が好きだつた」

「知っているよ蒔良ちゃん。うちも君のことが好きだつた」

なんともなしに返してくる雛。

「好きだから、君のことを傷つけた」

「知っているよ蒔良ちゃん。君がそんな勘違いをしていた事は」
勘違い？

「勘違い。うちは君に傷つけられただなんて、いついかなるときも考えた事なんてなかったよ」

「そうなのか？」

僕としては、てつきりそうだと思っていたのだが。

「当たり前じゃないか。人から好きだ、なんて言われて傷付くくらいなら、うちは君との縁をとくに切っているよ」

そうだろうか。僕にはそうは思えない。

「……なんだ、そんなことを悩んでいたのか蒔良ちゃん。それで、同じ事を瀬川奈々実ちゃんにしたくないというわけだ」

「ああ、ありていに言えばそうだ」

「やっぱり君は馬鹿だよ蒔良ちゃん」

すつぱりと言い切る雛。その表情には先ほどから変化が見られない。いつもの眠そうな顔。気が付けば眠っていきそうな、そんな顔。「確かに、うちはあの頃、とても心が荒れていた。崩壊しそうなほど狂ってた。けど、それはうちの問題で、どこまで突き進んだってうちの問題なんだ。蒔良ちゃんには一切関係の無い事」

関係、ない。

「それに、過ぎた事でもあるしね。知ってるかい蒔良ちゃん？ 占い師というのは、過去など目にも触れない人種なんだよ」

未来を見る職業だから当たり前だ、と雛。

そうは言っても、僕の心は釈然としない。すつきりとしめない。こんなとき、雛のようにすつぱりと、昔のことなど切り離せばいいのに、とも思う。

けれど、雛はああ言ったけれど、僕には大事な過去だと思う。雛と出会い、雛を好きになり、そして、雛を……傷つけた。雛は、傷ついてなんか居ないと言っていたけれど、果たしてそうだろうか。やっぱり僕は雛を追い詰めていたと思う。これは僕の勘違いでは絶対に、ない。その過去は、確かにあったと断言できる。過去を忘れ

てはいけない。

「雛。僕は……。やっぱり君を傷つけたんだと思う」

「傷ついてなんかいいよ」

「きつと、君を狂わせたのは僕だ」

「狂わされてなんかいいよ」

「僕は目を逸らさない。だから雛、一つだけ教えてくれ」

雛は僕の言葉を、やはり眠たそうな表情で聞いていた。

「僕のこと、今でも好きか？」

「うちは蒔良ちゃんのことなんて大嫌いだよ」

即答だった。即答された。けれど、僕の心はなぜか清清しくなっていた。

「だけど、同じくらい蒔良ちゃんのこと大好きだよ」

「……」

「プラスとマイナスで、ゼロ、とまでは行かないまでも、君のことが嫌い好きだ。うちは嘘なんて言わないからね、蒔良ちゃん。蒔良ちゃん……君も、そうだろう？」

雛は僕の顔をじつと見つめた。僕はその瞳を見つめ返して悟った。……簡単な事だ。雛は、昔から何も変わっていない。僕のことを好きと言った彼女。同じぐらい、僕のことを嫌いだった彼女。雛が嘘を吐かない事だって知っていた。だから雛は僕に傷つけられただなんて微塵も思っていないし、狂わされたなど夢にも思わないのだろう。それは、僕と雛の単純な認識の違い。

だから僕は、迷わず答えた。

「そうだな。僕は君の事を、傷つけたくなるほど好きだったし、それを悔いてしまえるほど君の事が嫌いだった」

「行き着けば簡単な事だろ蒔良ちゃん。想っただけなら人の勝手。うちはこれからも君のことが嫌いだし好きなんだろう。そこに付け入る権利なんて蒔良ちゃんにはないのさ」

「なら、僕が今、瀬川のことが好きになって、瀬川が僕のことを好きでも」

「お互いがどうであるかなんて関係ない。大事なのは自分の気持ちだけ、だよ」

結論として、僕が迷う事など一つもなかった。迷うだけ無駄。むしろおろかな行為だったと言えるのだ。

例えば僕が雛のことを傷つけたとしても、それは雛を傷つけたというだけで、ただ、それだけで、瀬川を好きになっではならない理由には、全くならない。

その事に気付かずにはいたなんて、我ながら、馬鹿すぎる。

「蒔良ちゃん。結論は出たかい？」

「ああ。すまなかったな、雛」

「なにも謝る事なんて無いじゃないか。蒔良ちゃんは、ただ勘違いをしただけ。勘違いをして、迷っただけ。迷って、間違っただけ。間違っって、見つけたただだよ。自分の力でね」

「うん。ありがとう、雛」

「謝る必要も、ないじゃないか。どうしても例がしたいなら、一週間分のバナナを持ってきてくれればいいさ」

「ははは。そうだな。いずれ、僕の気持ちが変わったときに、そうさせてもらおうさ」

例え、バナナでなくとも。

僕は雛に感謝しなくてはならないのかもしれない。

いや、謝罪をしなければならぬ。

どちらも必要はないと雛は言うだろうけれど、僕には必要なだけで。それもまた、単なる認識の違いなのだ。認識の、違いだけ。

勘違い、迷い、間違い。

ただ、それだけのことなのだ。

第一章・010

そして、瀬川とのデートの日。

僕は緊張をしたのか、いつもよりも早く起き、いつもよりも早い朝食を摂り、しばらく姉さんと会話を交わしてから瀬川との集場所、十字路へと向かった。

僕が到着した時点ではまだ瀬川の姿が無かった。早く来すぎてしまっただろうか。約束の時間まで約三十分ほど。個人的には、待たされるのにそれほど長過ぎず、また、短すぎるということもない。僕としては、今日という大事な日に五分前だとか十分前ではなく、心の余裕を平然と保てる三十分という時間は心地よい。

僕は、日曜日なのでせわしなく走り去る自動車の、商店街へ向かう流れを眺めながら約束の時を待った。

五分が経過した。故に僕は腕に巻いていた時計を確認する。

まだ五分しか経過していない。

十分が経過した。今一度時間を確認する。残り二十分。

最初に確認してから丁度五分。五分。五分が長い。

十五分が経過した。やはり時計を見つめると、分針が丁度九時の位置で停止している。

また五分。五分おきに時計を見てしまうというのは焦りすぎなのだろうか。僕の体内時計の正確さをこの時僕は初めて実感したが、あまり役に立たないものである。

二十分が経過した。もう時計を見るのにも飽きた。

やはり五分。瀬川の姿は、まだ、ない。

二十五分が経過した。

五分どころか、一分ごとに時計を確認している自分に気がつき、瀬川が歩いてくるだろう商店街の方を向いた。

瀬川の姿がそこには見えた。

瀬川は待ち合わせの五分前に僕の前へ姿を現した。

「……おはよう瀬川。時間を設定しておきながらずいぶんゆっくりな到着じゃないか」

「あら尾崎くん、まだ五分もあるわよ。まさか女の子とのデートだと聞いて自惚れ夜も眠れず、緊張のあまり早く来すぎてしまったというわけかしら」

瀬川の様子は今までの瀬川と大して変わっているようには見えなかった。いつもの瀬川だ。僕は内心ほっとする。もっと難しそうな表情をして現れるものかと思っていたからだ。

「さてね。夜は確かに熟睡とは行かなかったし、多少なりとも緊張をしているから否定はしないよ」

「それを聞いて安心したわ。何も考えないで熟睡できて全く緊張も無いとか聞いたら、わたしなんてそんな程度なのかと思うところだったわ」

「逆に考えても見ろよ。それほど瀬川に対する気持ちが固まっていたととれるぜ」

「そうね。そういうこともあるかもしれないわね」

さもどうでもいいかのような反応を見せる瀬川だった。いつもの瀬川はいつもなりで何を考えているのか分からない。

「さて、行きましょうか、尾崎くん」

と、瀬川は商店街の方へ向き直り歩き出した。僕は慌てて瀬川に追いつき、聞く。

「行くって、どこへ」

「尾崎くん。今日はわたしたちの記念すべき初デートよ。もちろん、デートをするに決まってるじゃない」

「いや、だけど」

「みなまで言わなくてもいいわ」

瀬川は僕の言葉を遮る。

「あなたが何を言おうとしているかは分かっているわ。けれど、それは後にしましょう」

瀬川は何も聞かなくて良いのだろうか。不安は無いのだろうか。

「あなたが何を考えているのかも分かっているの」

瀬川は続ける。

「今日あなたがここに来たということはつまりそれだけで答えになるのよ。だから、このデートの後でゆつくりと聞かせてもらおうわ」

「……君の考えている答えと僕がこれから言わんとしている事が全くの逆だったとしたら？」

それでも瀬川は表情を変えずに僕に言うのだった。

「もしそうならわざわざそんなことを聞いてこないわよね。さ、早く行くわよ」

瀬川の瞳は自信で溢れているようだった。僕の気持ちも本来どうであるかなんて本当は分からないはずだ。それでもこんなにも瀬川の瞳は輝いている。

ああ、これじゃあたとえ僕がどんな解答を用意していたところで関係ないじゃないか。

僕がたとえ瀬川の事を嫌いでも。

僕がたとえ瀬川の事を蔑んでも。

僕がたとえ瀬川の事を好きでも。

結局の事、こんな瀬川の瞳を見てしまったら。

僕のことをこんなにも想っている瀬川の瞳を見てしまえば。

改めて確認するまでも無く、ひどく、瀬川に惚れてしまうだろう。

僕はそう思った。

「……やれやれ」

瀬川に聞こえないように独りごち、僕は空を仰ぐ。この行為にどんな意味があるかなんて僕は知らない。多分。見えない涙が零れないうように上を向いたのだろう。

「それで、今日のご予定は？ お姫様」

僕は瀬川の横に並んで聞く。

「そうね。今日のデートはわたしが提案をしたのだからプランについては任せて。月並みだけれど、まずは商店街で軽くショッピングをしてからお昼ご飯を食べて、その後は駅から電車で隣町まで行き

ましよう」

ふむ。瀬川の事だからどのようなプランニングをしてくるのかと思ったが案外普通そうで安心した。しかし、瀬川にとっての普通が僕の常識で測れるものかどうかは別問題だ。

「隣町ってどっちだ？ 青峠かヨミ浜か」

「青峠よ」

僕たちが住んでいる町は夢見里という。故に僕たちが通う学校は夢見里高等学校というのだが今はそんなことはどうでもいい。この夢見里という町の四方には当然のごとく隣接する町がある。この町の歴史に関する事で僕もよく分からないのだが、この夢見里及び隣接する四方の町はいわゆる一つの国だったらしい。中心部に位置する夢見里に当時の長が住んでいたのだが、もしも反乱などが起きてしまったとき、四方に囲まれているこの場所では圧倒的に不利な立場であった。そのため、それぞれの町が独立し、中心である夢見里に攻め込み難い構造を造った。つまり、この夢見里から四方の町へ行くというのはそれなりに面倒なのである。いまでもこそヨミ浜へは電車で行けるが、電車の無い時代は他の町経由でなければ行く事が出来なかったのである。北の町、杜白は商店街の先から行けるが、昔は夢見里との間に深い溝があり、簡単には渡れなかったのだ。南には大路町があるが、そこは駅の向こう側に位置し、今でも青峠かヨミ浜を経由しなければ行く事ができない。唯一昔から道が繋がっていた青峠だが、峠と名の付くとおり、山があるため徒歩で行くには大変なのだ。

と、簡単に説明してみたものの、僕はこの町の歴史なんて正直どうでもいいため知識として知っているのはこの程度だ。ただ残念な事は、知ろつが知るまいが隣町へ行くための手間がかかるということである。

「青峠か。そこになにかあるのか？」

「さてね。それは後でのお楽しみよ」

その後、適当に瀬川と会話しながら商店街に到着する。瀬川はや

はり月並みにと言って洋服店やアクセサリショップなどを見て回った。

「尾崎くん。この服なんて似合いそうじゃない？」

瀬川が可愛いワンピースなどを手にし、僕に聞く。ふむ、いかにも女の子らしいデザインだ。瀬川には似合うかどうか分からないが、案外いけるかも知れない。

「うん、いいんじゃないか」

「なら着てみてよ」

「……今なんて？」

「わたしがこんな着れるわけじゃない。それに、これは男の子も愛用できる優れもの……だと思えばいいのよ」

「思いたくねえよそんなこと。つか瀬川、ここはやはり月並みにお前が試着を試してみるもんだろ」

「なに尾崎くん。そんなにわたしにこれを着せたいの？　これを着るとわたしは少なからず恥ずかしいと思うし、これから彼女になる予定の女の子に恥ずかしい思いをさせたいなんてサドなの尾崎くん」

これから云々はとりあえず聞き流しておきつつ、やはりいつもの調子に戻った瀬川の軽口を聞いて僕は安心する。

「たまにはそういうのもアリかもなあ。いつも僕の方が脅されてばかりだし、なあ瀬川、これは提案なんだが、僕に脅されてみないか？」

「いやよ。……そうね尾崎くん。なんならいつも通り尾崎くんを脅してこれを無理やり着せるというのもできないはないのよ」

「おまえそんなに嫌かよその服。……意外と可愛いかもしれないぞ」

「うわ尾崎くんが可愛いなんて言った。……どうしよう、貴重な体験をしたわ」

「……いいから着てみるよ」

本気で瀬川のワンピース姿を見たいと思ってしまった僕は半ば強引に瀬川を試着室に押しこむ。抵抗はされていたが瀬川もやはり女の子、男子の力に逆らえるはずもなく、素直に押し込まれていた。

「……覗かないでね」

「覗くかよ」

とりあえず着てみるには着てみるらしい。あれだけ嫌がっておきながらとは思ったが、案外気に入っていたのかもしれない。

しばらくして瀬川がカーテンを恐る恐る開ける。

「……………」

沈黙する瀬川の姿を黙って見つめる。なんというか、これぞ貴重な経験と言っのだろうか、瀬川の頬が染まっている。照れているのだ。

「……………」

「……………」

瀬川の沈黙に対して沈黙で返す僕。ちょっとした意地悪である。瀬川を掌の上に乗せているようで少しだけ気分がいい。

「……なんか言いなさいよ」

「ああごめん。コメントが欲しいならそういえばいいのに」
カチカチカチ。

それは怒りか恥ずかしいのか照れ隠しなのか嬉しいのかどれなんだ瀬川。つか、商品の側でカッター出すなよ。

「……可愛いよ、瀬川。思ったより似合ってる」

「……………」

僕の言葉を聞いてカッターの刃を引っ込める瀬川。そのままカーテンを閉めてしまう。

「……気に障ったのだろうか。と心配した僕だが、

「買うわ」

と、試着室から出てきた瀬川がそう言って会計所にワンピースを持って行くのを見てそうではないのだと安心した。

「ちょっと待てよ瀬川」

僕は瀬川を引きとめ、瀬川の手からワンピース取り上げる。そのまま手早く会計を済ませて瀬川のところに戻る。

「プレゼントだ、瀬川」

「……余計なお世話よ」

僕の突然な行動に瀬川はふてくされているようだが、やはり満更ではなさそうだったので僕の気分はより一層良くなった。

「ところで尾崎くんはアクセサリーを身につける人？」

アクセサリーショップでは瀬川はそう聞いてきた。ガラスケースに入った高級そうなアクセサリーを眺めながら僕は答える。

「いや、見ての通り腕時計以外には身につけてないよ」

「そうよね。どうしてかしら」

「これは僕個人の勝手な考えなんだけど、テレビに出てる婦人とかお金持ちが身につけるアクセサリーってさ、アレは身だしなみって感じはしないんだよね」

高級なアクセサリーで自分を飾っているという事は、自分はこれだけのお金を使って自分の価値を底上げしていますよと言っているように思えるのだ。

「つまりは自分に自信が持てない人がするようなものだろう？」

「でもアレは、自分の財力を誇示する意味合いでもあるんじゃないの？」

「もちろんそれもあるだろうけど、それだけでは決していないだろうさ。勿論僕の考えがまるつきり当てはまらないって人も居るだろうしね」

身だしなみに関して言えば、過剰なアクセサリーはそれこそ過剰であり、美しさと外観を損ねるといえるものだろう。僕はそう考えている。

「なるほどね。つまりこれから尾崎くんは自分を飾らず今のままの平凡な自分で居たいというわけね」

「嫌な言い方だがそうかな」

別に一生涯身に着けないというわけでもないと思うけれど。

「瀬川はアクセサリーは……」

「どうかしらね。こういうのとは今まで無縁な人生を送ってきたから」

「……そうだなあ。安いものなら買ってあげれるけど」

試しに僕は適当なのを手にとって瀬川に手渡してみる。けれど瀬川は難しそうな顔をした。

「いくらデートだからといって何でもかんでも買ってくれなくてもいいのよ？ あのワンピースはありがたく貰っておくけれど、今日はまだこれから色々とまわるし、財布が大変じゃない」

「ほら、こういうのってやっぱり男が買わないと格好つかないだろう？」

「誰に格好つかないのかしら。ねえ尾崎くん。そうやってお金で女の子の機嫌をとるだけじゃ駄目だと思うわよ。特にわたしは……あなたと一緒に居るだけで楽しいし、いろいろ貰っている気分にもなれるから」

最後のほうは俯き加減に瀬川は言った。たしかに軽率だったか。

なんでもかんでも金で機嫌をとろうとするなんて、それこそさっきの金持ちと同じになりかねない。

「オーケー分かった」

「それでいいのよ」

瀬川は僕が手渡したアクセサリを戻して外へ出た。

商店街はそれなりにたくさんのお店が入っているため、適当に見てまわるだけで時間は経過してしまった。今は最寄の喫茶店で軽食を摂っている。

「……それで、瀬川」

「なあに、尾崎くん」

僕は改めて、僕の気持ちを瀬川に伝えようと考えていた。

「僕は瀬川の事、好きだよ」

打ち明けた。僕の本心を。

「嬉しいわ、尾崎くん」

「それでだ、瀬川と付き合うというのに異存はない。けどさ、僕は今、とある女の子について悩みを抱えているんだ」

「例の占い師の子ね」

言わずもがな、大地獄沢難である。

「昨日その子と話して、彼女はもう昔のことはどうでもいいし、僕のせいじゃないって言うてくれたんだけど、僕はそれだけじゃ納得なんてできないから、いつか僕自身が納得できる形で彼女を救いたい」

「それで？ それを私に告げてどうだというの？」

瀬川の反応は至って平常そのものである。

「え？ いやだから、もしかしたら瀬川のこと、片手間になっちゃうかもしれないし、いつも瀬川の側に居てやれる保証もないわけ」「ねえ尾崎くん。貴方にとってその子の存在がどれほどのものなのかはわたしは知らない。けれど今尾崎くんは言ったわよね。わたしのこと好きだって、言うてくれたわよね」

「ああ……」

「わたしの事とその子との問題は全く関係のない問題だしわたしがこういうのもなんなんだけど、だったら尾崎くん。わたしはわたしなりの方法で尾崎くんに尽くしたいと思うの」

僕は瀬川の言葉を黙って聞く。

「わたしにも手伝わせてくれないかしら。今すぐにも言えないけれど、これは尾崎くんの問題で、わたしが関わるべき問題じゃないのかもしれないけれど、尾崎くんの彼女としてのわたしなら、何かできることがあると思うの」

瀬川のその言葉と決心は確かなようだった。瀬川が持つ瞳の輝きが、僕の心に強かな気持ちをし、僕の背中を後押しするだけの力を与えてくれるようだった。

「……ちよつと考えればわかる事なのにな」

「え？」

「ごめん瀬川。僕は君という素晴らしい彼女が居ながら君に手を貸してもらおうという考えを持てなかった」

「……無理もないわよ」

だってわたしは……と瀬川は俯く。……そうか、今までの瀬川の

ことを考えると、瀬川が僕と付き合って、拳句、雛の事に関しても手伝うと言ったのは瀬川にとって革命的なことなのかもしれない。だとしたら僕は、そんな瀬川の気持ちを無下にはできないし、そして、瀬川の事も……。

いつか周囲に認めてもらえるように。

支えていかなくてはいけない。

瀬川を支えられるのは。

今は僕だけだ。

「瀬川。僕の方からもお願いするよ。手伝ってくれ」

「……うん」

その後僕たちは喫茶店を出て駅まで歩いていく。道中瀬川の機嫌も直り、いつものように軽口を言い合って駅に到着する。

「それで、青峠には何があるんだ？」

「そうね、あなたって結構歴史に疎そうだし、教えてあげるわ」
まあ疎いけど。

僕たちは青峠までの一駅分の切符を購入し、ホームへ入る。

「歴史というよりも伝説ね、この場合。青峠には見ての通り峠、というよりも山があるのは分かるわよね。その頂に祠があるのよ」

「祠？」

「そう。この夢見里を含む五つの町にはそれぞれ祠が一つずつあって、それぞれがそれぞれの神様、或いはそれに近いモノを信仰し崇拜していたらしいの」

なるほど。ありがちな話だ。

「その青峠の祠もそうだった神様を祀っているのだけど、その神様というのが、つまりは恋愛成就に近い神様、らしいの」

「ありがちな。それにしても、近いってどういう意味だ？」

「その神様が別に、恋愛成就のために奉られているわけじゃないかなのよ。厳密に言えば、人間の心の安息、安泰。幸、不幸。心情的なモノを豊かにしてくれる神様、ということらしいわ」

それで恋やら愛やらはその神様が一番関係あるかもしれないとい

う、その程度の信仰ですか。

「月並みだけれどね。興味はあるじゃない」

「まあな」

そうこうしている内に電車がやってきたので僕たちは乗り込む。

空いている席に座り、僕は再び瀬川と会話をする。

「ところで、青峠以外の四つの神様にはどんなものが居るんだ？」

「そうね。まず夢見里の神様は夢を司る神様、というか、巫女らしいわ」

「巫女？」

巫女は神様に仕えるもので、奉られる対象にはならないのではないだろうか。

「変な話よね。まあそれはさておき。その巫女は夢の世界を管理しているらしくて、その世界では妖怪も神様も人間も、みんなが平和で暮らしていると聞くわ」

まさに夢の世界といった趣だ。

「その夢の世界はこの夢見里の現実と隣り合わせに存在するらしくて、その世界への入り口も、夢見里のどこかに在るって聞いたわ」

「でもそれはやっぱり伝説なんだよな。そんな世界がもし本当に存在したら……」

「面白そうよね」

妖怪や神様が住んでる世界なんて怖くて行きたくはないが。まあ、伝説は伝説だ、特に気にする事もないだろう。

「他には？」

「ヨミ浜は黄泉の世界へと続く浜、すなわち死後を司る神様がそこに奉られているらしいわ」

「そのまんまだな」

「怖くて誰も信仰をしないという噂」

「だめじゃねえか」

信仰をもらえない神様って。

「大路と杜白についてはよく分からないわ。特に杜白は、それこそ

意味の分からないモノを祀っているらしいし」

「伝説は伝説だし、気にする事はないか」

「まあね」

それにしても、夢見里を中心とした国家はそれなりの信仰心があったのは確からしいな。興味が沸いたら詳しく調べてみるのも良いかも知れない。

それにしても夢の世界と、それを司る、管理する巫女か。夢と言えば、夢見る占い師、大地獄沢難という知り合いが居たっけな。実は難もその世界の住人で、彼女の占いの的中率もその辺りに要因があるのかもしれない。……なんて、馬鹿なことを考えている僕だった。

しかし考えてみれば、伝説というのは例え伝説であっても、その伝説が成立するに至る何かが確かにあったはずだ。それは歴史を紐解かなければ分からない事だから、今の僕がそれを知る由もないのだけれど。

青峠の駅に到着し、青峠の頂を目指す。といっても、登山をするわけではなく、もとよりそんなに険しい山道というわけでもないが、頂上へのゴンドラがあるため、それに乗ることにする。

「このゴンドラは夢見里方面からは乗れないのよ」

と、瀬川が説明をしてくれた。

ゴンドラの長さはさしてない。ものの二、三分で頂上に到達する。頂上はそれなりの広さがあり、どうやら件の祠以外にも見所があるらしい。

「今はシーズンじゃないから人も少ないわね」

「へえ。ここはある種の観光名所なのか」

「そうよ。それじゃ、行きましょう」

瀬川が指し示す方向へと歩いていく。歩いていく中、朽ち果てた神社がちらほら伺える。

「こんなにも神社があったのか」

「成れの果てね。その昔、この辺りには神様がたくさん居たらしい

けれど、みんな人間に愛想をつかして何処かへ行ってしまったのね」
瀬川はな何とはなしにそう言った。

「こつちよ」

瀬川が僕を誘導すると、そこは茂みで隠れた小さな獣道が存在した。

「ここに行くのか？」

「ええ。今は青峠に住んでいる人でも知っている人は僅か」

「それをなんで瀬川が知っているんだ」

「言わなかったかしら。わたし、青峠の生まれなの」
なるほどね。ここは瀬川の遊び場でもあったわけだ。

「さ、誰かに見られる前に早く行きましょう」

見られて困るわけでもあるまいに、瀬川はそう言っただけの中を分け入っていく。僕もそれに続き、少し進むと、多少広い空間に出た。

「ここは……」

「ようこそ、秘密基地へ」

「落ち着くな。ここだけ世界が隔離されているみたいだ」

外から聞こえてくるはずの人のにぎわいも聞こえない。確かにこれなら独り占めをしたくなるのも分かる。

「祠はあつちよ」

瀬川が先へと進む。すぐに、朽ち果てた社と、何かを模した偶像が置かれた祠が姿を現した。

「多分、この事を知っているのは多分わたしと、尾崎くんだけね」
「そうなのか？」

「うん。昔からここには人が来なかった。この祠もわたしが手入れをしていたのだけど、全然駄目ね。きつとここにいた神様も何処かへ行ってしまったのね」

神様が居なければこうも荒れ放題になるのか。それも仕方がないのかもしれない。

「ここはわたしと尾崎くんだけの秘密の場所ね」

「……もしかしてそれが言いたかっただけか」

「素敵じゃない。そういうの。所謂ロマンというやつよ」

「まあ、いいけどな」

瀬川がポケットから紙を一枚取り出す。その紙に自分の名前を書き、僕に手渡した。

「昔はこうして一枚の紙にお互いの名前を書いて二人の未来の幸せを祈ったらしいわ」

言われたとおりに僕は渡された紙に名前を書く。瀬川はそれを確認し、二つに折って祠の中にそつと置いた。

「これでいいわ」

「うん。月並みだな」

「それでいいのよ。それが一番。というわけで尾崎くん。これからもよろしくね」

瀬川がそれまでに見たことのない飛び切りの笑顔を見せてくれた。そうやって笑っていてくれればどんなに可愛いかと僕は思ったが、まあいいだろう。

どんな瀬川だろうと僕は瀬川が好きだ。うん。改めて確認するまでもないな。

僕は始めから瀬川の事が好きだったのかもしれない。

だとすれば、僕は何を迷っていたのだろう。何に迷っていたのだろう。

分からないが、分かる必要もないのかもしれない。ともすれば、瀬川のこれからも、僕のこれからも、二人のこれからも、きつと未来は明るいものになるのだろう。

と、やはり月並みにそう思った。

第一章・010（後書き）

第一章これにて閉幕。

それでは次回以降は第二章へと移ります。

次のページは第二章の登場人物紹介であります

第二章「哀れな才能の子羊」といわれる「始めに」（前書き）

このページは第二章の主な登場人物紹介です。

登場人物のほとんどは第一章の被りますが、役柄が脇役から主役に変わったりとかします。

ふふふー

これより第二章ですが、登場人物たちがお互いを呼ぶときの二人称が第一章の時と異なる場合がございます。あしからず

あらすじは概ね変わりません。

第二章「哀れな才能の子羊」といわゆる「始めに」

第二章「哀れな才能の子羊」

・主な登場人物

尾崎蒔良 おぎまくら 相変わらず主人公アンド語り部
瀬川奈々実 せがわななみ 相変わらずヒロイン
櫛ナツカ けやきなつか クラスメイト
立川響 たちかわひびき クラスメイトアンド生徒会長
鈴木正時 すずきまさとき 美術部

・他の登場人物

前回と同様の方々

・クラスメイト

前回と同様の方々

・新しい登場人物

安藤久美子 あんどくみこ 女性
井澄蓮 いずみれん 男性 蒔良の親友
大森大輔 おおもりだいすけ 男性 教諭 美術部顧問
谷野永吉 やのえいきち 男子 クラスメイト 美術部員

第二章「哀れな才能の子羊」といわゆる「始めに」(後書き)

それでは第二章「哀れな才能の子羊」
始まりでございます。

第二章・001

今も昔もそう変わらないことが一つだけある。一つだけ。

過去は変えられない、という事実。僕こと尾崎蒔良や僕の周りにいる人たちはみな、なんらかの過去を持って生きている。それはこの世に生まれ、この世で生きてきた以上当たり前で、ごく、当たり前のもので、覆しようの無い事実であると共に、何物にも変えがたき真実でもある。

その過去から目を背けようとしたり、過去なんて無かったなんて言い出す人がいるのなら、僕が自ら、その人のところに行つて一発お見舞いしてやろう。ありきたりな言葉で「過去を受け入れる！」なんて叫んで、青春ドラマよろしくその人の心になんらかのきっかけを与えて、その人が前向きに生きれるようになればいいと思う。

ただまあ、頭で思っているだけで実際の僕にはそんな行動力はないし、僕には荷が重過ぎるというものだ。僕は誰かの未来を築けるほどの出来た人間ではないし、そもそも築こうだなんて思わない。自身の未来は誰かの言葉や誰かから与えられるきっかけで掴むものじゃなく、やっぱり自分で見つけなきゃいけないものだから。それでもやはり、そうしないと生きられないという人も居るだろうけれど、それも一つの生き方だというのであれば仕方ない。

そういえば僕は、自分の人生を語ったようなノンフィクション作品は嫌いだ。芸能人とかが「僕は昔はこんなにも貧乏で、こんなものを食べてました」だとか、「わたしは昔から両親から愛されてなく、こんなことをしてしまいました」という告白。或いは独白を書いた作品をたまに出版するけれど、僕から言わせて見れば、だからどうした、という一言に尽きる。

不幸自慢かつての。

同情貰いたいのかつての。

その上、「自分はこんな人生を乗り越えたから、皆さんもがんば

りましょう」と上から目線で言われたって、僕はむかつくだけである。

彼らよりもつと悲惨な、凄惨な人生を歩んできた人間なんて山ほど居るだろう。わざわざ文章にしなくたって、そんな人たちはそんな中でも小さな幸せを見つけて生きているのだろうから、余計なお世話とも言える。

或いはお世話するつもりなんて全く無いのかもしれない。だとしたら尚更文章として起こすべきではないと僕は思う。

一体何のつもりだろう。

とか、書店に並ぶそういつた作品の数々を眺めていると、そういう不平不満が零れてくる。やれやれ、だ。まあ、僕みたいなちっぽけな、彼らからすればちっぽけな人間が文句を垂れたところで彼らの耳には届きやしないのだけど。

それで、なんの話だったか。いや、特にこれといった話題は無かったのだったか。

最初に過去は変えられないと言った気もするが、その後は何について語ったのだったか。

……まあいい。僕なんてそんなもんだ。

自分が頭の中でどんなことを考えていたかなんてすぐにでも忘れてしまう。うん。意味も無く考え、意味も無く忘れるというのも、時として必要だ。

過去も、変えることは出来なくとも、うっかり忘れてしまう事くらいはできるだろう。

だから今は忘れていいさ。

次に思い出すまでに、記憶喪失とかにでもならない限り、完全に頭の中から消えてしまうなんてことは起きないんだからさ。

さてと、気持ちをそろそろ切り替えよう。僕はこれからどこに行くんだったつけ。

今日の日付を確認する。月曜日。即ち平日。

平日といえば、学生の身分である僕にとっては当たり前のように

学校がある。平日の朝っぱらから意味の分からない独白を続けているなんて、ずいぶんと時間の余裕があったものだ。

事実、あるのだけど。

朝食は済ませた。身支度も整えた。となればあとは、僕の姉、人間であるかも怪しい僕の姉であるところの明里姉さんに「行つてきます」を言つて、いつもの通いなれた道を歩いて学校へ行くだけだ。途中、僕の通う学校、夢見里高等学校の生徒たちからは単に「十字路」とだけ呼ばれている交差点にて、最近、というかつい昨日ほどから僕の彼女である瀬川奈々実と待ち合わせ、一緒に学校への一本の坂道を登っていくのだ。

もしかしたらその間、僕のクラスメイトたちと合流する事になるかもしれない。学校に行くためにはその坂道を必ず登らなくてはならないため、どんな生徒と一緒になっても不思議ではない。まあそれならそれで、別に構うまい。僕はクラスメイトたちとの交流は大事だと思っているから、たとえ嫌な奴だろうと快く加えてやるう。ふむ、そろそろいい時間だ。さて、それでは脳内シミュレートした通りに学校へ向かうとしよう。

「姉さん、行つてきます」

玄関から居間に向かって言う。

「おー、いつてらー」

居間の中から姉さんの声が返ってくる。その言葉を聞いてから僕は玄関の戸を開け、外に出る。

いい天気だ。こんな日は、何かいいことが起きるといいなあ、なんて、年甲斐も無く思つてしまふ。玄関の戸を閉め、駅に向かって歩く。

しばらく歩くとすぐに駅が見える。駅から電車通いの生徒がぞろぞろと出てくる。夢見里の電車は都会ほどこしようちゅう走つてはいないので、この時間帯の電車を逃したただけで遅刻確定だ。

駅を右手に僕は左折する。まっすぐ行くと十字路が見えてきた。うむ、どうやら瀬川の姿はまだないようだ。腕時計を確認する。

まだ余裕はある。となればここは待つのが吉か。

生徒たちの邪魔にならないよう、電柱に寄りかかりながら人の流れを見つめる。ふと、夢見里の生徒ってこんなに居たんだな、とかどうでもいいことを考える。夢見里は割と田舎ではあるが、どうやら少数化という言葉には無縁らしい。

瀬川を待つ間、僕は本日しなければならぬ事の確認をする。まずはクラスメイトの一人で現生徒会長である立川響くんにも個人的に頼まれた依頼、美術部所属の鈴木正時くんの身辺調査の報告。同じくクラスメイトの七海加奈子さんに、これまた個人的に依頼された、クラスメイトの久家千里さんとの関係改善に向けてさりげなく話をしていくという依頼の報告。先日金曜日、僕と瀬川はそれぞれ、僕が鈴木くんにも話を聞き、瀬川が久家さんに話を聞いて、お互いの結果報告だけは済ませている。あとは依頼主に直接報告をすればいい。ただまあ、直接的な解決なんてまだしてないだろうから、調査自体はまだまだ続きそうだ。特に鈴木くんに関することは、響くんもどうして鈴木くんの身の回りを知りたがっているのか、そのところは聞いておきたいところだ。

そうして僕が今日の予定を立てていると、駅の方より佐藤さんと河野くんの姿が見えた。佐藤恵、僕たち三年三組の委員長。河野鉄平、同じく三年三組でクラス一友だちが多い男。

「お、やあ尾崎くん」

河野くんが僕に気付き軽く手を振る。

「おはよう佐藤くん、河野くん」

「おう。誰かと待ち合わせか」

「まあね」

そうか、と佐藤くんはそれだけ言い、河野くんと一緒に坂道を歩いていった。彼らの背中を見つめていると背後から不吉な声が聞こえる。

「まーくーらーくん。クスクスクスクス」

気色の悪い笑い方に背筋がゾクつとする。振り返ればそこには予

想通り、櫛ナツカの姿があった。

「け、櫛……」

「クスクス。おはよう蒔良くん。今日はいい天気だね」

いつも不適に微笑んでいるこの男は、軽くメイクをするだけで道化師と見紛ってしまいそうな顔をしている。

「いい天気過ぎて、今日はいいことが起こらないかなあとか、年甲斐もなく考えてしまった蒔良くん。いい天気だね」

「どこまで見透かしてんだてめえは。あーはいはいいい天気だね。さつさと学校いけよ遅刻するぞ」

「いやいやー。こうして朝会ったのも何かの縁だし一緒に登校するのもボクとしてはやぶさかじゃあないんだけど」

ち、僕が今瀬川と待ち合わせをしているのは知っている癖に。空気が読めよ少しは。

「あー、でもあれかー。蒔良くんにしてみれば、彼女を置いて学校なんか行けないもんねー。昨日は二人の記念すべきデートだったんだって？ いいなあ、青春だねー」

「なんでそんな事まで知ってたんだ。実はストーキングが趣味とか言わないよな？」

「あれ？ 凶星？ いやだな蒔良くん。ボクはカマをかけさせてもらっただけだったのに、そう簡単に認めてもらっちゃあ張り合いもないな」

全部知ってるくせに欲言う。僕は、どうやったらこの男の口を減らせるか本格的に考える必要があるようだ。それこそ瀬川からカッターナイフでも借りて首を掻っ切るくらいしか思いつかないが。…

…明里姉さんに一度お灸をすえてもらおうかな。

「やだなー、そんな顔をしないでくれよ」

クスクスと笑う櫛。と、僕はその背後に近づいてくる男の姿を見た。

「ああ眠い眠い。眠いぞ櫛。櫛？ おー櫛。こんなところで何してる櫛。そつだ櫛。お前に話があるんだ櫛。こんなところで電柱に向

かつて独り言をぶつぶつ喋ってるぐらいならその減らず口をおれに存分に向けるがいい櫂。なんならお前に仕事を与えてやろうか櫂。おれは仕事すんの面倒だからな、お前にやってもらおうか櫂。うむ、そうしよう櫂」

無闇やたらに櫂の名を連呼する立川響生徒会長その人である。現在の響くんは眼鏡をかけている。周囲から恐れられている人物であるはずの櫂の襟元を掴んで引っ張っていかうとする。さすが響くん、怖いもの知らずというより、怖いものがなさすぎる人である。

「いやー待ってくれよ会長殿。そこに蒔良くんがいるから一緒に話をしていただけなんだよ」

「尾崎くん？ それは同じクラスの尾崎蒔良くんのことを言っているのか？ だとするならお前は相当に目が悪いなあ。そこには電信柱が立っているようにしか見えない。ああ、見えない。おれの頭がおかしいとか、仮にもお前にそんな度胸があるなら言うがいいさ。だが、眼鏡をかけているおれの今の視力は最高値で、見間違っわけが無い」

基本響くんは誰に対しても呼び捨てにする事が少ないらしいが、どうやら櫂は別らしい。というか、かなり目を付けられているらしい櫂である。

「ああ、そういえば、おれは電信柱に挨拶をする習慣があるのを忘れていた。やあその電信柱さんおはようさん。ほれ、とっと歩け櫂」

「アハハ……またね蒔良くん……」

「また意味のわからない事を。とっとと歩かんか」

どうやら響くんは、瀬川と待ち合わせをしている僕に気を遣ってくれたらしい。正直助かった。櫂を朝っぱらから相手にするのはどうも疲れる。まあ、響くんが相手でもそれは同じことだけど。

それはいいとして、僕は再び腕時計を見る。そろそろ瀬川も到着する頃だろう。

僕が商店街の方角を見遣ると、案の定瀬川の姿が見えた。瀬川が

僕の姿を視認する。僕は瀬川に言葉を投げかける。

「おはよう、瀬川」

僕の目の前でぴたりと止まる瀬川。

「変ね。私の目の前にある電信柱から声が聞こえたわ」

「お前まで響くんみたいなこと言うなよ」

「まただわ、どうしよう、浮かれすぎて尾崎くんの幻聴を聞いてしまっようなってしまったのかしら。あらやだどうしよう」

それはなんだ、僕と恋仲になったことで嬉しすぎるということなのか、それとも、僕なんてそれこそ電信柱レベルとでもいいいたいかどっちなんだ。

「あのなあ瀬川。お前こそ電信柱に向かって何独り言言ってるんだよ」

「はっ！ 電信柱に気付かされてしまっなんて、私もう駄目だわ。頭がどうにかなくなってしまったようよ」

ふう、やれやれ、瀬川は相変わらずである。僕は瀬川の両肩を掴んで軽く揺さぶってやった。

「ほらー、瀬川さん瀬川さん、朝ですよー、寝ぼけていないでねー」

「あうあうあー」

これ以上やると、道行く生徒たちに不審な目で見られそうなので自重する。というかもう手遅れなきもする。

「ふう。あ、尾崎くんおはよう。遅いわよ」

あくまでもボケ通すつもりの瀬川だった。

「僕はさっきからここにいたぞ。その電信柱によっかかってお前を待ってたつてのに」

「ああ、通りで尾崎くんの声が聞こえたのね。気付かなかったわ。

……でも尾崎くん。尾崎くんは気付いていないかもしれないけれど、あなた、そこに立っていると本当に電信柱のようよ」

そこまで同化してただろうか。別に学校の制服が電信柱と同じ色をしているわけでもないつてのに。

「まあいいさ。じゃあ行くか」

「ええ」

気を取り直して僕たちは学校への坂道を登る。

「さあ尾崎くん。私の手を握りなさい」

突然に瀬川が右手を僕に差し出す。

「カップルなんだから、それくらい……」

「ものすごく恥ずかしいんだけど。人一杯居るし」

本音である。今の時間帯、この坂道の混み具合は相当なものだ。上から誰かが転がり落ちてきたら下の人間はみんな犠牲になるだろうな。

「彼女の要望を聞けないだなんて、あなたさでは私の事嫌いね？」

「そんなわけないだろ。……分かったよ」

僕は渋々瀬川の手を握る。……瀬川の手を握ったのはもしかして初めてだろうか。意外とちっちゃいんだな、瀬川の手。

「……恥ずかしいわ、尾崎くん」

「お前が言い出したんじゃねえか」

そして意外にシャイな瀬川であった。

「そうそう」

瀬川が思い出したように僕に言う。

「登下校というのは学生にとって退屈なイベントであると思うのよね」

「またもや突然に、それも今度は訳の分からないことを言い出した瀬川である。」

「別にイベントってわけじゃあないだろ」

「いいえ、イベントよ。儀式と言ってもいいわね。私たちが学校に着くまでの間に、或いは家に帰るまでの間に必ずしなければならぬ行事なのよ」

行事というほどのことでもまた、やはり無いのだった。

「刺激が足りなさ過ぎると思うのよ。こうして毎日同じ道を同じ時間に歩くというのはやっぱり飽きるのよ。それこそなにかイベントたりえる何かが必要だと思うの」

ただの登下校でそんなことを考える辺り瀬川らしいとも言えるが。
「こうして適当に会話をするだけじゃ駄目なのか？」

「それも含めて、やっぱり刺激が必要だと思わない？ 登下校中になにか面白い事が起これば、それを話題にして楽しめるじゃない」

一理あるように聞こえるが、どうだろう。嫌な予感しかない。

「それで、じゃあ瀬川はどうしたいんだ？」

「たとえば、誰かがこの坂道を転がり落ちていくというのは？」

「ただ危ねえだけだろそれ。刺激云々の前に」

死者が出そうなことを平気で言う瀬川だった。

「この場合、面白いかどうかは関係ないわ。つまりは、滅多に無い事に遭遇するという事が大切な事なの」

「滅多にないことを求めてたって仕方が無いだろ。だったら何か自分で刺激を作れよ。僕に面白いことをやってみせてくれ」

ふーむ、と考え込む瀬川。こいつのことだ、ろくな事を考えないに違いない。まだ一週間かそこの付き合いしかないはずだが、僕は瀬川の事をよく知っているような気分だ。

「私がやるより、尾崎くんにやってもらうほうが面白いかも。というわけで尾崎くん。この坂道を転がり落ちてみなさい」

「却下だ」

もちろん即答する。

「お前は彼氏を殺したいのか。ありがちな少女漫画や恋愛小説よろしくな感じで彼氏を大怪我させたいのか。そうはいくか、僕はああいう展開嫌いなんだよ」

「別に尾崎くんの好みは聞いてないわよ。何よ少女漫画って。もしかして尾崎くん、あんなの読んでるの？」

ものの例えだっつもの。読んでなくなっつて最近やたらとそういうもののドラマ化が多いし、嫌でも耳に入ってしまう。

「とにかく、登下校で刺激を求めるな」

「求めるかどうかはまた別として、尾崎くんが転がり落ちる必要はなかったわね」

「誰にとつても必要はねえよ」

刺激イコール犠牲という公式を頭の中で持っていそうな瀬川である。というより、犠牲者候補として常に名を挙げている僕の寿命は短いかもしれない。

「今日はもう学校に着いてしまっわね」

瀬川の言うとおり、阿呆な会話をしている内に校門が目の前だ。

風紀委員会の人が生徒たちの服装チェックをしている。

「でもね尾崎くん。明日はこうして面倒な登校をしなくてすむ方法を思いついたわ」

「ろくなアイデアを期待しないが一応聞こうか」

「学校に泊まる」

「却下だ」

予想通り過ぎるので、これも即答だった。

正面玄関より入って左に行くことと三学年の教室が並んでいる。一組から五組まで、総数にして約百九十人。僕たちの三年三組は丁度真ん中の教室で、教室に入るとそこには勿論のこと、クラスメイトたちが居た。

新学期早々、僕たちは瀬川奈々実というクラスメイトの待遇をどのようなものにするかという、非常に下らないことで争ってしまった。元々生徒たちから異常、異端と呼ばれていた瀬川奈々実をクラスメイトとして扱うか否か、否というのは即ち、瀬川一人だけを孤立させるかということである。くだらない、非常にくだらない。争いを引き起こした僕自身が後になって気付いた事だ。あの争いはするべきではなかった。

いや、して正解だったのだろうか。現に、あの争いの後からクラスメイトたちは瀬川に良くしてくれる。勿論、未だ関わりを絶っている生徒も何人かいるけれど。

それはいい。だから、今こうして、教室に入ってきた僕たちに対しても快く挨拶を交わしてくれるクラスメイトたちのことが僕は好きだ。

なんていいクラスなんだろう。

そう思った。

「やつほー、まーくん。なっちゃん」

教室で荷物を降ろし一息ついた僕たちは、とても明るいクラスメイトの野中潤さんと日向彩音さんの歓迎を受けた。

「おはようお二人さん」

彼女たちはこのクラスのムードメーカーと言ってもいい存在で、クラスの騒がしい部分を探せば必ず二人が紛れ込んでいる。

「今日は一緒に登校なんだな！」

「そうだね。というか、最近はよく一緒に帰ったりしてるけどね」

「あー、そうだったね」

土日挟んじゃってるからだろうか、日向さんは頭を傾けて思い出そうとしている。別に今すぐ必要な記憶じゃあないし、考え込む必要なんてないんだけどね。

「ところで日向さん、野中さん。宿題はやったかい？」

なんだか能天気そうな二人なので、僕はそんな言葉を投げかけてやる。

「え？ 宿題なんて……あつたっけ？」

うんごめん。本当は宿題なんて出てないんだ。それでも二人はそれに気付くことなくあたふたし始める。

「あらあら日向さん。いいこと？ 宿題っていうのは家でやるものであって、ここやるものじゃないのよ？ もしも先生が家でやる以外の、それこそ学校でやるような課題をだすのであれば、それは学題というのよ」

僕の意地悪に乗ってくる瀬川だった。ちなみに学題なんて日本語なんて存在しない。

「ど、どうしよう野中っち」

「お、お、お、落ち着けあーちゃん。宿題なんてない宿題なんてない！」

うん。野中さんは正しいよ。宿題なんてありません。

「どうしたのかしらお二人さん。現実から目を逸らさないで。ちゃんと、目の前にある課題にぶつかっていくのよ」

うん。嘘に気付くっていう課題だな。

「これは一大事だよ野中っち。かつてない衝撃、いままでにない大問題がうちの目の前に立ちほだかっているう！」

「センター試験真つ青な問題だ！ 助けてくれまーくん！」

「いやあ、僕に助けを求められても出来る事なんて限られてるしねえ？」

限られすぎている。うん。

「それでもいい！ その限られた力をあたしらに与えてくれ！」

「何馬鹿みたいなことやってるのよ」

と、元気な二人に反して冷静なつつこみが入る。常に肩に大きなヘッドホンを掛けているクラスメイト、千早なつきさんだ。彼女のにはあのヘッドホンはファッショナらしい。暴走しがちな野中さんや日向さんのブレーキ役といったところか。

「おお、救世主現る！」

「たすけてくれちーちゃん、あたしら、宿題やってないんだ！」

まだ気付いてないのかよ。いい加減鈍感すぎるぞ。というか勢いだけで生きているだろこの二人。

「安心しなよ。宿題なんて出てないから。……さては尾崎くん、この子らになんか言った？」

「別に。宿題やった？ って聞いただけ」

「なるほど。……騙されるほうも騙されるほうだけど、君ってそんな簡単に嘘つけるのね」

「嘘じゃないさ。僕は、宿題をやったかどうかを聞いただけで、宿題が出た、なんて言っていないさ」

ただの屁理屈だよ、と千早さんは呆れていた。まあ、それを言われるとそれまでなんだけどね。あながち嘘と言っても過言じゃないし。あんな簡単に騙されるとは思わなかったから騙す気は無かったんだけどね。

「なんという罠。こちらは騙されたのだ！」

「おそるべしまーくんアンドなっちゃんコンビ。そのコンビネーションは洗練された動き！ あたしらも見習うぞあーちゃん！」

意味分からん。無駄にテンション高すぎるだろこの二人。

おりゃーという掛け声と共にどこかへ去っていくムードメーカー共。その場に残されたのは千早さんだけだった。

「……改めて、おはよう尾崎くん。瀬川さん」

「おはよう」

ふう、と一息つく千早さん。

「朝からよくあんな元気がでるわね、あの子たち」

瀬川が最もなことを言った。

「昔から、元気だけが取り柄、みたいな子たちだからね。あの子たちに付き合っていると、私でも疲れることってよくあるよ」

「そうみたいね」

千早さんは野中さんと日向さんとは昔からの馴染みなのか。そういえば昔馴染みといえば、千早さんって確か佐藤くんとも幼馴染だったって言ってたな。

「まあいいわ。あの子たちが元気なだけで、私も救われるから」

「え？」

「なんでもないわ」

千早さんはそう言っただけで自分の席へ戻った。

なんだろう。何か悩み事でもあるのだろうか。……まあ、立ち入ってはならない領域かもしれないし、放っておくしかあるまい。

「……気になるわね」

「まあ、な。けれど、僕たちが気にしたってしょうがない。あんまり変な事に首突っ込まないでくれよ？」

「そんなことしそうに見える？」

見える。うん、見えますとも。一見大人しそうに見えて、お前って結構強引なところあるからな。一度何かを始めたら、僕を始めとした誰かが犠牲になるに違いない。

「さてと、もう席に戻るわね」

始業が近づいてきたので瀬川はそういつて席に戻る。教室もだんだんと人が増えてきた。

瀬川が僕から離れていくのを確認してか、櫂が僕の元へやってきた。

「クスクス。甘々だね君たち」

「お前な……」

櫂はそうやって人の機嫌損ねるようなことと言って楽しいのかよ。

「まあボクとしては、君があやって瀬川さんと仲がいいと嫉妬を覚えるんだ」

「なんだって？」

「……フフ、勿論冗談さ。ボクは嫉妬される側で、嫉妬する側じゃあないからね」

意味の分からないことを言う。櫂が一体誰に、どんな分野で嫉妬されるといふのだろう。

「だけど、サ」

櫂が何かを言おうとして口ごもる。……前にもこんなことが無かったか？ そう、初めて櫂と会話をしたとき、なんだか意味深な事を言っていたような気がする。

「おやおや櫂。なあ櫂。どうしてお前の名前は櫂なんだろうな。なあ、櫂」

またもや櫂の背後に現れる生徒会長立川響。響くん、あんたが人の背後に立つと冗談じゃなく怖いから。

「……やあ会長殿」

「殊勝だな櫂。お前がおれに挨拶だなんて」

この二人、一体どういった関係なんだろう。なんというか、目には見えない強力な何かで結ばれているんじゃないだろうか。……主に主従関係的な意味でだが。

「響くん。さっきは言いそびれたけどおはよう」

「ああ、言いそびれたって何をだ？ おれは今日、きみとこうして

話すのは初めてじゃあないか。ともあれおはよう尾崎くん」

あくまであの時の響くんは電信柱に話しかけていたということか。ならばそれでいいだろう。

「これは大きな声では言えないが」

響くんは僕に顔を寄せて小さな声で言う。

「瀬川くんと恋仲になったそうじゃないか。おめでとう。……うむ、君なら彼女の事を任せられるよ」

「……どうということ？」

「別に。彼女は今まで孤立していたからね。腐っても生徒会長であるおれは、その辺の事も気に掛けてはいたわけだ」

そういうことか。……だが、生徒会長、それも、単なる生徒会長じゃあない立川響ともあろう者が、今の今まで瀬川の孤立をどうにかできなかったのは、何か理由があるのだろうか。

「きみの疑問も最もだ」

声に出してもいないのに響くんはその疑問に答えてくれた。

「前にも言ったとおり、生徒会長ひいては生徒会の力で一人の生徒を保護するというのには問題があるんだ。分かるだろ？ おれは単なる生徒会長であって、王や神ではない。瀬川くんと関わりを持ちたくない人間が多数の状況で、少数派の人間の味方をするというわけにもいかないのだ」

「……わかるけどさ」

「勿論その逆も然りだがね。生徒会というのは中立で在らなければならぬ。だから、何もすることができなかったのだ」

おれ一個人としても同様にね、と響くんはそう言った。確かにそうだろう。その通りだ。響くんは個人レベルなら、瀬川の味方をしたかったらしい。だが、響くんほどの人間が、生徒会長というイスに座っている限り、個人レベルで瀬川の味方をして、それはやはり、生徒会長の行為として見られてしまうのだ。多数の意見をまるで無視し、少数にまわった、生徒たちに仇なす生徒会長の行為として。

立川響という男は、そういう男なのだ。苦勞の耐えない、心勞の耐えない、完璧に見えてひどくもろい、生徒会長、立川響。

「今はきみが瀬川くんの側に居てやれる。勿論、君だけでなく、佐藤くんや河野くん。千早くんや卯の花くん。委員長の長島くんなんかもね」

「……響くん。きみは、瀬川の味方なのかい？」

「……残念ながら。完全に味方をする事はできないさ。やはり、生徒会長という肩書きが邪魔をする。まあ、あと数ヶ月もすれば任期満了だ。そうなれば、おれはおれ個人で成し得なかったことができるようになる」

生徒会長という枷が無くなった響くん、か。どうなのだろう。生徒会長としてできたことが出来なくなるのだから、やはりプラスマイナスなのではないか。

「まあ、何か困った事があるのならば、響に言いたまえ。こいつのことはあごで使ってもいい」

やっぱり響との間に主従関係があるのだろうか。

「やだなあ会長殿。ボクは最初から最後まで、蒔良くんの味方だよ。

……だけどさ会長」

「なんだ響、なにか文句でもあるか」

「……いや、いいさ」

さっきからなんなのだろう、響は。どうにも齒切れが悪い気がする。何か言いたそうだけれど、響くに釘を刺されて言えない、ようにも見える。

「ともあれ、ボクはいつでも力になるからね、蒔良くん」

「あ、ああ」

「おっと、時間だな」

響くんが言うと始業を知らせる鐘が鳴った。それじゃ、と響くんは自分の席へと戻っていく。その後、他クラスに行っていたらしい河野くんや佐藤くんが戻ってきた。河野くんは僕の隣の席で、佐藤くんはその後ろだ。響は河野くんの前。僕の後ろには鹿兎島さんと

いう女子生徒が座る。

クラス全員がそろい、クラス担任である足立智成先生が教室に入ってくる。最近子供が産まれた国語教師で、生徒受けのいい、人気のある先生だ。

「おーし、ショートホームルームはじめっぞ。まずは出席確認だな。今日は珍しく、卯の花が休みだ。どうやら風邪らしい」

卯の花さん、卯の花つばみさん。生徒の怪我を治すのが趣味らしい優しい女子生徒で、多くの男子のファンを獲得している。

その卯の花さんが休み、か。いろいろな意味で一大事だな。まず、怪我をした男子生徒が卯の花さんの不在に気付いて暴動を起こすかもしれない。さらには人を治す事を生業としている自らが病気に掛かるだなんて、その病原体はかなり強力と見える。

まあ、大げさだが。

「それと……三ツ星も今日は学校には来れないらしい。理由は不明。出席確認は以上だ」

三ツ星くんか。あの童顔の。まあ、僕は彼とはほとんど話したことは無いし、これは大したことじゃあないだろう。

「じゃあ連絡事項だ。……うーん、職員会議じゃあなんか言ってたような気がするが、お前らに關係あるようなことは特にないな。ま、いつも通り適当にやれ」

僕ら三年生だし、適当というわけにはいかないんじゃないだろうか。まあ、そういういい加減な雰囲気があるゆえんでもある。

足立先生は「じゃあ授業はちゃんと受けるよ」とだけ念を押して教室を出て行った。さっきは適当に、とか言っていたくせに。ちゃっかりしている。

さて授業だ。

大抵の授業についてはなんの面白みも無い話をしているだけなので省略し、今は四時限目の体育の時間。この時間は、四月末に行われる毎年恒例の競歩大会のための走りこみをする。競歩大会とは言っても、本格的なルールによる競歩ではなく、普通に走ったり歩い

たりしながら制限時間内にゴールするばいいという単純なものだ。ただし、時間内にゴールできなかったり途中リタイアしたりすると、後日マラソンというペナルティが課せられるのだが。

距離にして、男子二十七キロメートル、女子二十キロメートルと、おい女子と男子の差がいくらなんでも開きすぎじゃねえのかと嘆いた事もあるが、そんなことお構いも無くとにかく二十七日だ。

まあ僕は今年で三回目の競歩大会となるわけで、体力もそれなりにあるつもりだから余裕だろうけれど、一年制や、運動に疎い生徒にとっては二十七日という長さは苦痛である。

制限時間は六時間。人間が普通に歩く早さを時速四キロだと仮定するならば、四掛ける六イコール二十四キロ。つまり三キロ足りない。ということは即ち、必ずどこかで三キロ分を稼がなければならぬため、結局は最初の方で走る人が大半だ。バテる後半はゆっくり歩いてゴールできるぐらいには走る。それが普通である。

「やれやれ、競歩大会なんて疲れるな」

「そうだね」

体育の走りこみの途中、佐藤くんが僕にばやいてきた。僕は佐藤くんと並んで走る。

「毎年のことだししょうがないさ」

「……なあ、尾崎。お前って意外に体力があるよな」

「そうかな？ まあ、人並みよりはあるつもりだよ。昔から体力ある和久井とか姉とかと遊んでたから自然についたのかな？」

和久井というのは和久井和彦といい、僕の親友の一人だ。とにかく喧嘩が強く、夢見里高校内では和久井に勝てる奴はいない。和久井もガラは悪いが、他の不良たちが一般生徒たちの迷惑にかかるようなことをしていた場合、そいつらを成敗してしまうような正義感の持ち主なため、和久井に勝てないような不良はこの学校に存在できず、すなわち和久井はこの学校の治安を、知らずよくしているのだった。姉さんは姉さんで、本当に人間なのかどうか疑わしくなるような事も平気でやってのけるような変人で、喧嘩の腕、というよ

り、武術の腕なら和久井よりも上である。単純な筋力だけなら和久井の方が完全に上だ。それでも和久井が姉さんに勝てない理由は、単純に技術力の違いである。僕はそんな二人とはよく取っ組み合いをしていたから、自然と体力がついたのだろう。うん、僕は普通を装っているけれど、本当は素人程度には負けないぐらいの実力はあると思う。喧嘩にしろ体力にしろ技術にしろ。まあ、それはこの際どうだっていいんだけど。

「けど、佐藤くんだって相当体力あるだろ？ 全然バテてない」

「この程度なら楽勝だろう」

楽勝っていうけどね、僕たち以外の体力ない人たちが余裕でギブアップするくらいには走ってるんだけど。先生は無理するなど言っていたからその人たちは休憩をしているが、生き残っている生徒は僕含め、数人だ。

「まあ、お前は変な奴とばかり知り合いだから、体力があつたところで不思議じゃないさ。だが、俺が不思議に思っているのはだな、あの生徒会長がなんで俺たち以上に走れているのかということだ」

佐藤くんの疑問は至極もつとものだ。僕もそれは気になっていたところだし、気にしたら負け、くらいの気持ちがあつた。

なんせ響くん、陸上部エースの木村くと並んでるもんな。一介の生徒会長が陸上部の、短距離走者といえど陸上部のエースである木村くんと同じ体力つてどういう原理だ。あの人はプライベートで陸上部並の走り込みをしているっていうのか。

「……まあ、気にするなよ佐藤くん」

案外響くんと和久井あたりを勝負させたら互角かもしれない。変人度合いで言えば姉さんにも勝るとも劣らない響くんか、もしかしたら、姉さん以上の実力者なのかもしれない。いや、もしそうだったとしたら、姉さんが今以上に強くなってしまうだけだが。負けたら強くなるってどこの異星人だよ。

「この学校は変人ぞろい、という噂は本当だったのか」

「さてね。少なくとも僕をその枠にいれなくてくれよ？」

「気付いていないのか？ 尾崎、お前はもうとつくに、少なくともうちのクラス内では変人リストの仲間入りだぞ」

なんだそのブラックリストは。僕はそのリスト存在を寡聞にして知らない。勿論冗談だとは思うが、僕が変人たちと知り合いだからといって、一般生徒よりほんの少し体力があつたり喧嘩が強かつたりする程度で、瀬川を始めとする、響くんや和久井、櫛らと同列に見られるというのは僕では実力が不足している。見られたいわけではないけれど、見られる程度の、それほどの謂われが僕にはないはずだ。

誰が決めたんだよその基準。

「ふう、やれやれだね。僕は僕らしく、僕らしい生きかたで学校生活を楽しんでいるというのに」

「ふん。どうだか」

なんだか疑われているなあ。僕なにかしたっけ。まあ、僕は僕がどう思われているようが気にしないタイプだからいいけれど。変人呼ばわりは、いつまでたっても慣れない、な。

あとは適当な雑談をしながら走っている内に体育の授業が終わった。四時限目が終わったということは即ち昼休みが始まるということだ。

また、いつものメンバーで集まって弁当を食うのだろう。今日は卯の花さんが休みだが、基本は変わらない。

今日はどんな話をするのだろう。

第二章・002

とても、昼休みだ。

先週から、すなわち新学期が始まってから昼休みに集まるメンバーというのは、僕が去年まで一緒に集まっていたメンバーとは総入れ替えが行われたかのように、誰一人として被ってはいない。僕の親友であるところの和久井和彦だって、去年僕と一緒に居たメンバーたちが怖がっていたため、昼食を共にした事は一度も無い。そして現在、僕が瀬川と関わりを持ったということが彼らに知れ渡り、和久井までならよかったものの、流石に僕に愛想を尽かしてしまったらしい。新学期に入ってから一度も彼らと会話らしき会話をしていない。

おそろべし、瀬川の異常性。

今となつては当たり前のように瀬川の側に居るけれど、そういえばどうして瀬川が「異常」だとか「異常」だとか呼ばれていたのだったか、ともすれば忘れてしまいそうだ。うん。というかほとんど忘れていく気がする。いや、忘れてはいないけれど、思い出しても今はそっちの方が現実味が無くて信じられないという感じだ。

例えば瀬川の「異常性」。よくリストカットをする。人前で。

瀬川は常にカッターナイフを所持していて、何かあるとすぐにそのカッターナイフでもって自らの左手首を傷つけるという行為をしよつちゆうしていた、らしい。僕が瀬川と初めて会話したときも、僕の目の前でいきなり手首を切るうとした。幸い未遂で終わらせる事が出来たのだが、後日、始業式当日にクラスメイトたちと揉めたとき、僕が止めに入る隙も与えず、クラスメイトたちの目の前でリストカットを許してしまった。

例えば瀬川の「異常性」。これはまだ実感をしたことが無いが、どうやら痛覚が無いらしい。痛みを感じるとい事が、ほとんど、ないらしいのだ。

それは神経に疾患があるというわけではなく、単純に、自傷行為をしていく内に痛み慣れたとも取れる。こればかりは様々な憶測が飛び交っていて真相は知れない。瀬川に直接聞いて確認をしたいことでもないような気がするし。

瀬川の「異様性」を表現する噂はもちろんこれだけではない。だがそれらの「異質性」はまるで根拠の無い、単なる噂、ひどい思い違いが多分に含むものだと思ふ。僕たちみたいな人間は、いや、僕たちでなくても人間は、集団行動においては「誰か」一人、或いは二人、単数でも複数でもこの場合は同じだけれど、自分たち「以外」の「誰か」又は「何か」という存在を区別、差別することで自らの正当性、「普通性」を強調してしまうのだと思う。

例えば瀬川の「異様性」。瀬川の側に居る人間、瀬川に近い人間は例外なく、死ぬ、または死ぬ目に遭うというもの。

勿論、こんな冗談でも言っただけではない言葉で、最悪とも、最低とも、底辺よりもっと下、ともすれば人間の放つ言葉では、間違っても広めてはいけない類の劣悪な噂だ。今瀬川の側に居る人間、こうして昼休みに一緒に集まってくれているメンバーや、僕。僕たちは現在とてもぴんぴんしているし、何か災難に遭うようなことはない。誰が最初にそんな噂を広めたのか、それを知れたら僕はそれのことをつん殴ってやる。

例えば瀬川の「異質性」。嫌がらせが好き。人が困るような事をするのが好き。人に危害を加えるようなことが好き。ド級のサドでどんな人間でも目を付けられたら地獄に堕ちるといふほどの悪魔っぷり。

勿論根拠がない。というか、人に危害を加えるのが好きな人間だったなら、自分の手首を切るなんて真似は絶対にしないだろう。自分ではなく、他者を傷つけて然るべきである。けれど、僕が見てきた限り、或いは聞いてきた限りにおいて、瀬川に直接的な危害を加えられたり嫌がらせを受けたりという話は聞かない。そういう噂が広がってはいるにせよ、実際にそういうことが起きたという話を全

く聞いたことがないのである。単純に僕が聞いたことがないだけなのかもしれないが、それでも、危害を加えられた人が生徒会長である響くんや、学校の治安維持隊長の和久井に告げれば、瀬川は今頃この学校にいない。告げていなくなつて、妙にいろいろな情報を握っている響くんの下僕のような櫛だつて居る事だし、気付かれないはずがないのである。

和久井も響くんも櫛もそんな噂だけで誰かをどうにかしようなどとは思わないだろう。

瀬川が他者から恐れられ忌み嫌われる謂われは大体のところがあるものだ。けれど、大半が憶測によつて飛び交う噂であり、僕が知る限りにおいて、自傷行為というその一点のみしか当てはまつていないのだ。

その自傷行為も、生徒たちから迫害を受け続けていた瀬川のストレスによつて引き起こされていたものと、最近の僕は考えている。現に、最近の瀬川表情は活き活きしていて、どうやらリストカット行為はしていないようだ。真つ当に對話をすれば、真つ当に話をすれば瀬川はごくごく、ちょっと冗談のきつい、ごくごく普通の女子生徒であり。

僕の彼女なのだ。

最後の一言は考えただけで照れるけれど。

「最近、アイドリング・ストップする自動車が増えたわよね」

そろそろモノローグを終了し、今は昼休み。どうしようもなく昼休みだった。

千早さん、野中さん、日向さん。それに佐藤くん、和久井、僕。そして瀬川というメンバーで机を合わせて弁当を食べている。いつもならこの場に卯の花さんがいるのだが、あいにくの欠席である。卯の花さんを合わせれば女子五人、男子三人という、男子のメンツが微妙に弱いそれなりの人数が集まっているグループになる。

「アイドリング・ストップ？」

「ええ。エコだとか言つて。公営バスとかも信号でアイドリング・

ストップしている時があるわ」

話題を振ったのは瀬川だ。こういう他愛もない会話は結構好きだ。
「それさあ、町中でよくアイドリング・ストップっていう看板見るけど、結局なんなんだ？」

野中さんが千早さんに聞く。

「自動車とか、停まっているときにエンジンを掛けっぱなしにしないで、エンジンを切ることを言うのよ」

「えー？ 停まってるんだからエンジン切ってるのが普通なんじゃないのー？」

この二人は元気なだけで頭の方はさして良くはないらしい。千早さんも佐藤くんも呆れた顔をしている。和久井は黙々と弁当を食べている。無愛想な男だ。馬鹿なくせに。

「普通はね。けど、一時停車の時とか、エンジン掛けっぱなしにしている人が結構居るのよ。だから例え一時的でもエンジンを切って節約しようってことなの」

「へー」

二人が声をそろえて感嘆の声を漏らす。

「でも、バスが信号でアイドリング・ストップってどういうこと？」

「つまり、信号が赤の間エンジンを切っておくんだ。今のバスはすぐにエンジン掛けれるようなシステムになっている場合が多いらしい。俺はそこまで詳しくは知らんが」

今度は佐藤くんが解説をする。

「まあ、乗用車だとそういうシステムが、あるにはあるらしいが、やっぱり再始動に時間が掛かるからな。渋滞の元にもなっているらしい」

信号の度にエンジン切ってたらなあ。そりゃあ渋滞にもなるよ。

僕はまだアイドリング・ストップによる渋滞は見たことがないけど。
「まあアイドリング・ストップの話は置いておいて、つまり私が言いたいのは、バスが一時的であれなんであれエンジンを停止している時間というのはどうにも不安になるのよ」

瀬川が本題に入ったようだ。

「不安？」

「ええ。だって、あの間バスの中がとっても静かなのよ？　誰も喋らないし、ハイジャックされたバスみたいじゃない」

ハイジャックされたバスは混乱と犯人の罵声のせいでかなり騒がしくなると思うがな。だがまあ確かに。僕もアイドリング・ストップをしているバスに一度だけ乗ったことがあるが、道中にエンジン音すら消えて何事かと思った。そのうち慣れてきたけれど。

「不安に……なるかなあ？」

「お前、結構小心者だな」

和久井がぼそりと言ったのを瀬川が反応する。

「あら。あらあらあ？　和久井くん、今あなたを不安にさせるようなことをこの場でしてもいいのよ？」

うん。嫌な予感がする。嫌な予感しかしない。これはあれか。例のカッターナイフを使って僕の命を脅しに掛けるんだ。そうだ。絶対そうだ。

「何を逃げようとしているのかしら尾崎くん」

「いやあなんのことだろう。僕は全然分からないなあ、分からないから先生に教えてもらいにいこう」

既に他のメンバーは傍観モードに入っていた。この僕の命の危機になんて薄情な、なんて、思ったりしないよ？　うん。僕は寛大だからね。

「待ちなさいよ尾崎くん。別にあなたをとって食おうというわけじゃないわ」

「とって何する気が教えてもらわないと怖くて行けない。瀬川さん、和久井じゃなくて僕が既に滅茶苦茶不安なのですよ、ええ」

「……尾崎くん。尾崎くんにとって私がそんな程度だったなんて……。見損なったわ。仮にも彼女が、仮にも彼女が。仮にもか・の・じょ、が。あなたにこっちに來てと言っているのにどうしてそんなに不安になることがあるのかしら？　行かないなら私から行こうか

な。尾崎くんの側に居ないと寂しくて死んじやいそんなほど私は兎なの。兎に角、うさぎにつのだなんて面白い日本語だけれど兎に角兎にも角が生えそうなほど私は寂しがり屋なのよ尾崎くん」

兎に角という日本語の成り立ちについてはおいおい勉強するとして、兎に角、僕はピンチだった。ええ、ピンチですとも。

「まあまあ瀬川。わかった、わかったからその物騒なものを仕舞え……ってあれ？」

「なにを？」

物騒なものすなわちカッターナイフなど、瀬川の手には握られていないようだった。珍しく瀬川が武装をしていない事に僕は驚いたが、そのおかげで冷静さを取り戻した僕は、どうやら周囲の目、それも驚きを隠せないような、そういえば瀬川が何気ないことを言ったような気もするけど、そのせいか、天変地異でも目の当たりにしたみたいな顔をしている千早さんらとクラスメイトたちだった。

瀬川と僕が恋仲になったっていうの、そういえば非公開でしたね。響や響くんにはばれてたけど。

「あーちゃん、今すぐ『ドッキリ大成功』という看板を探すんだ……」

いつもは元気な野中さんが放心しながら言った。

「ヤヤヤヤヤ。こここれはいつものいつもの冗談だよ野中っち」

反面、ものすごく動揺している日向さん。

「あー、なんだその、つまりはどういうことだ、尾崎」

佐藤くんは冷静に状況確認を開始した。

「えーと言っべきかどうか迷ってはいたんだけど」

「何を迷う事があるのかしら尾崎くん。おめでたいことじゃない？」

僕が何を言うべきか迷っている間に千早さんが言った。

「私は応援するよ？ 他ならぬ尾崎くんと瀬川さんだもんね。……」

クラスメイトたちの衝撃は私たち以上の上のようだけ」

うーん。困った事になった。どう説明すればいいのか。

「瀬川とはまあ、その。これは冗談でもなんでもなく、嘘偽りなく、

つまりはカップルというか、お付き合いをしているんだ」

「詳しくは聞かないけれど……。ずいぶん突然じゃない？」

まあ、クラスメイトたちからはそうみえるか。そうだよなあ。僕からしてみればかなりの葛藤があった訳だけれど。主に勘違い、いや、違うか。自分に課していた下らない制約というのかな。それを解くきっかけもあって、今回の事に関してはまあ、説明するだけ面倒くさいとも言っ。

「尾崎くん」

「ん？」

突然瀬川が僕の側にまでやってきて僕の手を握った。空いた片方の腕を僕の背中に回して、背伸びをして僕の頬に。

「！」

キスをした。

「な、なにを突然」

僕は自分の顔が熱くなるを感じた。瀬川が手を離して俯く。多分照れているのだろう。……いやいや瀬川さん。なにもこんなところでキスなんてしなくたっていいじゃないか。先週の話だが、膝枕をさせられるよりもよっぽど恥ずかしいんだけど。

「あーもう、見せつけてくれんじゃねえかよ！」

途端に教室内にいた一人の生徒が僕に向けて言った。その生徒は先週、僕たちと瀬川のことに対立した目黒さんという女子生徒だ。またなにか瀬川に対して酷いことを言い出すのかと思いき身構えたがそうではなかった。

「……どーぞおしあわせに」

僕の顔から目をそらして目黒さんは言った。……なんだかなあ。歯がゆい。

「……どうも」

「ふん」

目黒さんは結局僕の顔を見ないまま自分の昼食に戻った。

「おー、おー、おー。……おめでとうなっちゃん！ まーくん！」

日向さんが爆発した。千早さんや野中さんが僕と瀬川に祝福の拍手をする。するとクラス内からちらほらと、控えめながらも拍手の音が聞こえてきた。……喜んでいいのかなあ。先週クラス内で争いを引き起こした張本人としては素直に喜べない。この事実を反瀬川派の人たちが聞いたらなんて言いだすか……。クラスの治安さえ悪くさえしなければ休戦状態が破られる事はないだろうけれど。それでもちよつとは不安だな。

というか瀬川、ちよつとは先のことを考えて発言をできないものなのだろうか。未だに瀬川という彼女がどういうときにどういう行動を起こすかというのを把握できないでいる彼氏である。

ま、それも含めて、か。僕が瀬川の事好きになったのは。

なんだかなあ？

「そ、それで、尾崎くん」

「ん？」

まだ照れているのか瀬川が顔を突つ伏したまま僕に言った。

「あのね」

「なんだ」

「アイドリング・ストップがアイドリング・ストップだったら恐ろしいわよね」

最後だけ平静な顔で言った瀬川だった。クラス内がっかりしていた。いままでの騒ぎは一体なんだったのか、そんな疑問が浮かんでくる瀬川の問いだった。

「I Drink Stop」

「言い直してどうする」

「ファミレスでアイドリング・ストップと言ったらドリンクバーをストップしますとか言われるのよ」

「割とどうでもいいぞ瀬川」

「私、飲むのやめるわ」

「勝手にやめろよ」

「ワタシ、ノムのヤメルネ」

「インチキ中国人にしたところで結果は同じだ！」

瀬川の思考をアイドリング・ストップしたい僕だった。

という阿呆な会話をしながら昼休みの時間は過ぎていく。本日の衝撃発言というか衝撃告白は、瀬川に膝枕をされる、瀬川に膝枕する、という二大恥辱に匹敵する恥ずかしさなため、一生涯封印したい。くそ、どうせあとで櫂とかに馬鹿にというかしつこく迫られるんだ。僕の今日の命運は決まった。案の定、昼休みが終わって櫂が教室に帰ってきて、あの場に櫂は居なかったはずであるにも関わらず昼休みに何が起きたか完全把握している櫂が早速僕に話しかけてきたが全力で無視し、故に特に描写する必要性もないまま現在掃除が終わって放課後。

「さてと、瀬川。今日はまずは響くんと七海さんに報告だな」

クラスメイトたちの大半が下校及び部活動に行ってしまった、現在教室に居残っているのは僕と瀬川と、読書をしている七海さんだけだった。

「うん。だけれど尾崎くん。立川くんがどこかへ行ってしまったわ」

「そうだな。もしかしたら生徒会の仕事をしているのかもしれない。響くんのことだからすぐに帰ってしまったということはないだろう」となればまずは七海さんへの報告を先に済ませておこう。

「七海さん」

「なあに？ と、一応聞いてみるけれど、大体用件は分かっているわ」

七海さんは小柄な女子生徒だ。声量も小さいけれどよく響く、透き通った声をしているため聞き取りやすい。しかしながらその可愛らしい見た目に反して意思が強く頑固であるようだ。確固たる自分の意思でもって他者と接していく。そういう性格をしている。

「うん。えーっと、久家さんはどうやら、七海さんとの関係を改善したいという気持ちはあるようだよ。『今はまだ自分の気持ちを整理できないけれど、いつかちゃんと加奈子ちゃんと向き合うから大丈夫』だそうだ」

僕は瀬川から聞いた、久家さんが言っていた言葉をそのまま七海

さんに伝えた。だが七海さんはなんだか難しそうな言葉をして僕たちのことを見ていた。

「どうしたの？」

「ねえ、尾崎くん。瀬川さん。どうして私とあの子との間に溝ができてしまったか、わかる？ あの子はそのことを話したかしら」

「いいえ。私は聞いていないわ」

瀬川がそう答えた。うん、僕が瀬川から聞いた話だとそうだ。久家さん曰く、僕たちに話したってしょうがないこと、だそうだ。

「そう。……あなたたちがもしもそれを聞いていたら、そんなにも簡単に納得するわけではないわよね」

「どういうことだ？」

「ご存知の通り、私は千里と、もう一度仲良くしたいと思っているわ。勿論、千里も同じことを考えているでしょう。それは正しいわ、聞いた通りよ。気持ちが整理できたら、というのも正しいでしょうけれども、それしか正しくないわ」

どういうことだろう。お互いに仲直りの意思があるのなら簡単なのではないだろうか。それとも、二人の間に溝を作ってしまった原因、それは僕たちが予想するよりもずっと深刻なのだろうか。

「正確には本当のことを言っていない、けどね。言っていないことがあるだけなんだけどね。そういうことも全部、あなたたちには分からないでしょうね」

……。

「あなたたちをお願いしたのは私だし、いい機会だから話しておこうと思うの。あなたたちには知る権利がある。けれど、やっぱりこれはあくまでも私たちの問題だから、もしもあなたたちが聞きたくないというのであれば話さないわ」

願ってもいないことだ。だけど、これは素直に聞いておくべきなのだろうか。七海さんのこの様子は、聞いて欲しくない訳でもないけれど、別段聞いて欲しいわけでもないという様子だ。……あくまで部外者、関係のない僕たちが話を聞く権利が、本当にあるのだから

うか。

「迷っているわね。当然でしょう。けれど、迷っているくらいなら聞かないほうが楽かもしれないわね。けれど、聞かなくても一度関わってしまった手前責任を感じてしまつて楽じゃないのかもしれないわね。それでも聞くだけ聞いて抱いている疑問を解消しても楽かもしれないわね。けれど聞くだけ聞いて後に引けなくなつて楽しくなくなるのかもしれないわね」

言われて余計に迷う僕だった。

七海さんと久家さんとの間にどれほどに深刻な問題があるのか僕は分からない。それを七海さんが話してくれると言っているけれど、それを聞いたところで僕にできることなどあるのだろうか。そもそも七海さんとしては、僕や瀬川のように、今年知り合ったばかりのクラスメイトにそういう大事な話をしてもいいのだろうか。聞かれないのだろうか？ それを喋つて、七海さんにとってはそれで気が晴れるのだろうか。問題解決の糸口に繋がると言うのだろうか。僕は、聞くべきじゃない？

そうはいつでも、七海さんから頼まれた立場として、さらには、響くんからもよろしく言われた身として中途半端に投げ出すというのいかなものか。無責任な男だと、七海さんから罵られるかもしれない。響くんから幻滅されるかもしれない。もしかしたら七海さんは、僕たちのような、ともすればクラスメイトではなく、ただの他人にでもその理由を打ち明けてしまえるほど切羽詰っている状況なのだろうか。助けを、求めているのだろうか。僕が瀬川を救えた人間だと思ひ込んで、自分も救つて欲しいなどと間違つても考えているのだろうか。僕は、聞くべきなのだろうか。

「ふふ。冗談よ」

七海さんはそういつて微笑んだ。けれどその微笑みはどこか悪魔的で意地悪だった。

「冗談というのが冗談ということもあるかもしれないわね。或いはこれこそが冗談なのかもしれない。そもそも本当は私と千里は喧嘩

なんてしてなくて、あなたたちにこうして頼んだ事も全部冗談かもしれないし、千里が仲直りしたいと思っているのも冗談かもしれない。だとしたら私も本当は千里と仲直りしたいなんて冗談を仄めかしたりしたかもしれないわね」

永遠に続き、永遠に続かず、永遠に始まり、永遠に始まらず、永遠に終わり、永遠に終わらず、永遠につながり、永遠につながらず、永遠に巡り、永遠に巡らない。

そんな冗談みたいな永久が、冗談じゃなく存在している。

そんな冗談みたいな連鎖が、冗談じゃなく存在している。

そんな冗談みたいな輪廻が、冗談じゃなく存在している。

そんな冗談みたいな冗談が、冗談じゃなく存在している。

なんて、冗談じゃなく冗談めいてるじゃないか。

メビウスの環なんてものを考え出した人間は全く、なかなかどうして頭が廻っていたのだろう。それこそ環のように。終わらない思考を繰り返して。

一体僕にどうしろっていうだ。一体僕に何を信じろっていうんだ。

一体僕はどうすればいいっていうんだ。

僕の思考も輪廻する。輪廻し連鎖し永久に巡り巡って、巡らない。まとまらない。

どうしてだろう。こんなにも考えてしまうなんてどうかしている。僕は哲学者にでもなったつもりか。七海さんの単純な問いにも答えずに。イエスカノーか、たった二択しかない問題にどうしてここまで頭を悩ませているのだろう。難しい事を考える必要なんてないじゃないか。いつも通りに、僕は僕の考えを喋って、喋って。

喋ってどうするっていうのだろう。

そもそもなにを喋るのだろう。喋るのは七海さんじゃないか。

僕はそれを聞こうとしているんじゃないのか。

或いは聞きたくないんじゃないのか。

だから僕が出すべき答えはイエスカノーか。聞か、聞かないか。その二つだけのはずだ。そうだ。なにを迷っているんだ僕は。

なにもこの問いが自分の命を左右する重大な問いというわけでもなし。究極的にどちらかを選ばなくてはいけないような、そんな意地悪な問題では、ないはずだ。

「僕は……」

「面白いわね」

「え？」

七海さんが微笑んでいる。

「面白い？」

「ええ。そして興味深いわ。どうしてもそこまで悩めるのかしらね。普通なら適当に断るか、適当に聞くか。それだけでしょう？ 何も難しいことも考えないで、私たちのことなんてどうでもいいな、そんな風に答えてくれるだけでいいのよ」

そんなこと。どうでもいいだなんて僕は思っちゃあいない。

「……けれどね。それがあなたのいいところなのかもね。瀬川さんが惚れるのも無理はないかもしれない」

僕は思考を切り替えて瀬川の方を向く。瀬川は考えているのか考えていないのか。或いは今の七海さんの発言に対して思うところがあるのかよく分からない表情をしている。

「ね、瀬川さん」

「……そう、ね」

どういうことだ？ と、僕は今日何度目かの同じ疑問を頭の中で繰り返す。

「尾崎くん。だから改めて、あなただから、あなたたちだからお願いするわ。私の話を聞いて、そして、それを聞いた上で千里と話をしてくて」

「七海さん……」

「勿論、あなたたちがどうにかできる問題では勿論ないでしょう。それでもいい。私はあなたたちに聞いて欲しい。これはお願いよ」
七海さんの表情は本気だった。どうやら今度は冗談で言っているわけでは無さそうだ。或いはこれが冗談なのかもしれないけれど、

それはもう考えるだけ無駄であると思った。

「尾崎くん」

「ああ。……じゃあ、七海さん、話してくれるかな。その、七海さんと久家さんの間に溝ができてしまった原因を」

七海さんは頷いて話し始める。

「……私と千里は幼い頃から一緒だった。家でご近所さん同士で、産まれたときからずっと一緒に育ってきた。私たちはそれこそ本当の姉妹のように、血の繋がっている姉妹のように、私のお母さんからも、千里のお母さんからも、勿論お父さんたちからも目一杯の愛情を受けて育ってきた。お互いに一人っ子だったから、尚更二人で育ってきた」

……………。

「同じ保育所に入って同じ小学校に通って、私たちはずっと一緒に居るものと、それが当たり前だと思ってた。

けどそうじゃなかった。中学に入ってから千里は演劇部に入った。私も勿論、一緒に演劇部に入った」

久家さんが演劇部？

「ふふ、信じられないでしょうね。けれどね、昔はむしろ私の方が人見知りだったのよ。千里は元気があって明るくて人当たりもよくて、クラスの間になとも、演劇部のみんなとも仲がよかった。千里は私が持っていないものを一杯持っている。私にない、私がずっと欲しいと思っていた『才能』の全てをを、千里は余すことなく持っていた。それでもよかった。例えば私が手に入れることが出来ない『才能』を持ってたって、私はそんな千里のことを誇りに思ってたから。とても羨ましくて、羨ましかったけれど、自慢の出来る私の片割れ。そう思っていた。それまでは、そう思っているだけで満足だった。千里が側にいるだけで、私自身が満たされていた」

そう、それまでは、と、七海さんはもう一度繰り返し返した。

「演劇部に入ってから千里は、それはもうすごかった。先輩たちや同級生たちに後押しされて、それまで持っていた才能の全てを費

やして、僅か数ヶ月で演劇部のエースになった。……それからだった。人見知りの私は演技をするなんて到底無理で、千里や他のみんなの足を引っ張ってばかりだった。それでも私は千里の側に居続けて、千里の行く場所行くところ全てに付いていった。そう、『付いていった』のよ。今まで当たり前のように『一緒に居た』んじゃないく、『付いていった』の。それから、私は一個人としての『七海加奈子という私』じゃなく、『久家千里の友だち』と呼ばれるようになった。分かる？　今まで同じ場所に二人揃っていたのに、その時から何かあれば私は千里と比べられた。同じように育ってきた二人なのに、姉妹でもないのに双子でもないのに比べられて、その度に私は千里よりも低い位置で見られていた」

それはなんというか。どう表現すればいいのだろう。今の僕には言葉がない。

「それでも私は笑ってた。それでも千里は千里で、私は私だつてずっと思ってきた。千里が三年生になって演劇部を引退するまでの間ずっと我慢してきた。……我慢、してきたのに、とうとう千里が引退して、これでまた二人で一緒に生きていけると思っていたのに、千里が、高校でも演劇部と一緒にやろうって言い出して、千里やみんなの足を引っ張ってばかりいた私をそれでも誘ってくれる千里が眩しくて、眩しすぎて」

「嬉しかった？」

「いいえ、何も見えなかった。眩しすぎて、その眩しさから目を閉じたらその先は暗闇しかなかった。せつかく誘ってくれているのに、全然嬉しくなかった。演劇部に入ったらどうせ私は今までと同じように千里と比べられて、千里たちの足を引っ張って、相変わらず私は千里にひっ付いてくるだけの『友だち』で、心の中では千里も私の事を馬鹿にしているんだって思った。そんなはずないと分かっているけど、そう感じているんだって思った。私が側に居れば、千里の輝きが増すから。だから私はその時に、言ってしまった。嫉妬の渦にまみれた言葉を。積み重なってきた穢れを一気に放出するように」

僕は、聞きたくなかった。けれど、七海さんはまるで抵抗する様子も無しに続けた。

「あんだなんか喋れなくなればいいのに。話せなくなればいいのに。笑えなくなればいいのに。友だちなんていなければいいのに。あんなには下賤な私さえいいのに。他には何もいらぬのに。どうして全部もつてるの？ あんたが持つてる才能も、あんたが持つてる名誉も、全部全部無くなつてしまえばいいのに。無くなつてしまえばいいのに」

[illegible]

衝撃だった。

七海さんがそういう言葉を放ってしまった事実もそうだが、千里さんが現にあんな風に喋る事をやめた今でも、七海さんの心の中には昔のような感情の醜い渦が存在しているのだ。

僕は人の心の中なんて覗けないから分からないけれど、七海さんの今の表情がそうであると物語っている。七海さんと同じクラスになつて僅か一週間。たった一週間で何が分かるんだと誰かに言われそうではあるけれど、少なくとも僕が一週間で七海さんに感じた印象に、こんな表情をする女の子だなんて認識は一切、ない。

それほどの、笑顔。

狂気の、笑顔。

瀬川がカッターナイフをちらつかせれば、今にも誰かに切りかかつていきそうな殺人的な笑顔。狂おしく愛しい者に向けられた笑顔。いまそこに彼女の姿はない。

「アハハ。そう言つたら千里、本当に声を出せなくなつちやつた。次の日から学校に来なくなつて、私は毎日お見舞いに行つたわ。でも千里、私には姿を見せてくれなかつた。その内千里のお母さんから、娘があんな風になつてしまつたのはあなたのせいだつて言われ

て、もう二度とあの子と関わらないで、とも言われた。うちのお母さんと一緒に私を育ててくれた優しい千里のお母さんがよ？

千里が声を出せなくなったのは精神的な理由なんだって。失ったものは声だけじゃない。感情の一切も表にあらわす事が無くなった。暫くして学校に復帰してから千里の友だちがこぞって心配をしていたけれど、千里はなんの反応も見せることなくついには孤立していた。……私が千里に向けて言った言葉が本当になっちゃった」

七海さんは続ける。

「千里がこの学校に入るらしいという話を聞いて、私はこの学校を選んだ。勿論、あの子が全てを失ったのは、あの子から全てを奪ったのは私だから。千里に償いをしなくちゃいけない。そのためにはいつまでも気弱な私じゃいけないと思って、あの子の側に居られるような私にならなくちゃいけないと思っていたのだけれど……。うまくいかないまま、とうとう三年生になっちゃった」

……話はここまでと言わないばかりに七海さんは首を振った。

「どう？　ここまで聞いて、あの子と私の関係を元通りに出来そう？」

正直に言えば難しい話だろう。久家さんと長年一緒に生きてきた七海さんで無理だったというなら、それこそ最近知り合ったばかりの僕らではどうしようもできないほどの難しさだと思う。

「……ねえ七海さん」

瀬川が溜息まじりで口を開いた。

「どうしてあなたは私たちに、私たちなんか、そんなことを頼んだの？」

「それは……私じゃどうにもできなくなったから」

「どうにもできなくなったから？　それって諦めたってこと？　他でもないあなたが？　久家さんと一番近い位置にいたあなたが？」

きついものの言いようだ。……まあ瀬川に任せておこう。

「そんな気持ちで、あなたは本当に久家さんと仲直りしたいの？」

「……ええそうよ。それは勿論。ずっと一緒に居れたあの頃のように

に」

「それは無理ね」

「え？」

おいおい。

「無理だわ。一生涯無理よ。無理を千回買いたって、一万一億一兆回買いたって無理ね。無の理と書いて無理よ。この場に熱血な主人公がいるのであれば可能性はゼロじゃないとか言いそうだけれど残念ね、そんな主人公はここには居ないし、もし居たとしても可能性はゼロよ。成功する倍率は常にゼロだわ。蟻一匹が巨像を倒すくらい無理よ。一発で踏み潰されて終わり。無理無理。ぜったい無理」

無理無理言い過ぎだ瀬川。おまえ、さっきみたいな七海さんの狂気で刺されても知らないぞ。

「どうして無理なのよ……？」

「当たり前じゃない。今の状態から『あの頃』に戻るなんて考える時点で間違っている」

「それでも、私は、千里と、『あの頃』の私たちに戻りたい」

「あのねえ七海さん。今のこの状態はあなたが望んだ結果なのよ。

あなたが望んだ通り久家さんは声を発する事も、感情を表現する事もできなくなつた」

「私は望んでなんかない！」

「そうかしら。あなたがこの学校に来たのも、本当は久家さんを見下すためだったんじゃないかしら。久家さんを哀れみの目で、今の自分は久家さんよりも優れていると思ひ込んで見せ付けるために。中学時代にあなたが感じた痛みを久家さんに同じように味わわせているだけなのかもしれない。否、かもしれないじゃなく、味わわせているのよ」

それは極論つてもものだろう。いや、そうでもないのか。その可能性も大いにあり得るのかもしれない。少なくとも、さっき瀬川が言ったような、かつての二人に戻る可能性よりは現実的な数字なのかもしれない。少なくとも、ゼロではないのだろう。

でなければ、あんな笑顔を見せたりはしないだろう。

「……知った風な事を言わないで！ 私がなんでそんなことをしなくちやいけないって言うのよ！」

「理由が無いわけではないでしょう？ あなたは才能にまみれた久家さんに嫉妬し、嫉妬し続けていたんだから」

「それ以上言うとも怒るわよ」

「怒ればいいじゃない。けれどそれは私にじゃなくて……久家さんにね」

「どうして千里に怒らなくちやいけないのよ」

「……今でも心の中に恨み妬みが残っているのでしょうか？ ならばつけなさいよ、彼女に。全部全部なくなるまで彼女とぶつかり合いなさいよ。喧嘩の一つもしてみせなさいよ。どうせ向こうだって怒っているわ。久家さんはあなたと仲直りしたいだなんて言っていたけれど、あなたと仲直りなんてできるはずない。久家さんの人生を狂わせたのは他でもないあなただものね。あなただけが久家さんの人生を狂わせて、あなただからこそ、久家さんの人生を狂わせたのだわ。きつと久家さんもあなたのことを恨んでいるでしょうね。少なくともあなた以上にあなたの事を恨んでいるでしょうね。教室ではそうは見えないけれど、久家さんから負のオーラが常に漏れ出しているのが私には見えるわ」

いい加減な事を言いつつ瀬川が言っていることは決して的外れしているとは言えなかった。話を聞いている限りでは、確かに久家さんが七海さんを恨んでいてもおかしくはない。自分の精神に大打撃を与えた人間を、声も表情も表に出せないような精神状態に追い込んだ張本人を二、三年で許せるほどの人格者がいる訳がない。仲直りをしたいだなんて思っている、その気持ちは限りなく、嘘に近く、限りなく真実に近く、脆く曖昧な気持ちなのだろう。ともすれば、ちよつとの一言で崩壊してしまえるほどの、脆さ。久家さんは一度精神を壊している。一度壊れたものは、同じ場所からならいとも簡単に壊れるものだ。

「千里と喧嘩だつて？ そんなことしたら余計に仲が悪くなるじゃないの」

「なあに？ 姉妹同然のように過ごしてきたあなたが今更喧嘩を恐れるというの？ それともあなたは久家さんと一度も喧嘩したことなどないとも言うの？ そんな程度の関係だったの？」

喧嘩するほど仲がいい、とはよく言ったもので、例えば僕と姉さんは仲はそこそいいが、喧嘩なんてしょっちゅうしている。和久井も然り。あいつとはいつ知り合ったのだから知らないけれど、いつの間にか和久井は僕の側にいて、僕は和久井の側に居た。が、お互い譲り合いの精神など皆無だったため、主にモノの取り合いで喧嘩をしまくった。僕の幼馴染であるところの大地獄沢難だつて例外ではない。まああいつは喧嘩をしたところで次の日には忘れてしまうやつだ。主に口喧嘩だったけれど、姉さんや和久井とやるような喧嘩とは違つて後腐れがなくて楽だった。

というような感じで、僕も僕で結構な喧嘩をしてきているのだった。それを七海さんや久家さんに当てはめるとなると多少の無理はあるのだが。

「喧嘩はもちろんしたわよ。何度だつてした」

「昔のように戻りたいのなら、だったら昔のように喧嘩をすればいいんじゃないかしら？」

それは思い出がほとんど喧嘩で埋め尽くされている場合に有効な手段だ。

「でもさつき、昔には戻れないってあなたも言っていたじゃない」

「確かに言つたわね。でも、そんなことを一々確認してくるということはやっぱり恐れているのね？ 怖いんだ。昔に戻るのが。本当は知っているのよね？ 昔には戻れないって。そりやそうよ。昔になんて誰も戻れない。過去は絶対に変えられないし戻れない。これはいつだったか尾崎くんが提唱していた、世界の法則の一つよ」

そういえば今朝方そんなことを考えていたような気がする。あれはこのための伏線だったのだろうか。いやいや、そんなはずはない。

いくらなんでも自分が知らない未来への伏線など張れるはずもないし、そもそも僕は瀬川の前でそんな法則を提唱した覚えなど全くない。

「だったら喧嘩する意味なんてないじゃない」

「意味なんてなくて当たり前よ。喧嘩するのにいちいち意味なんて考えていられますか。でもね七海さん。確かに昔には戻れないけれど、昔のようにには戻れても、今のあなたじゃ絶対に無理だけれど、今のあなたなら、今には戻れるのよ」

今には戻れるってどういう表現の仕方だろう。ありがちな台詞を使えば、「俺たちは前を向いて生きればいい！俺たちの人生はこれから始まるんだ！」というような感じだろうか。いや、ニュアンスがちよつと違うか。

ところで僕って今、結構呑気に構えているけれど大丈夫だろうか。いけないいけない、集中せねば。

「自分で言っておいてなんだけれど、安っぽい台詞だわ。安くすぎて十円ガムが帰るレベルよ」

瀬川も瀬川で冗談を言うほど呑気であった。

「けれど、あなたたちの関係はその程度の安さで解決できるのよ。十円ガムよ十円ガム。私だったらそんなもの買つくらいなら自動販売機の百十円で使っけれどね」

微妙だよ。

「けれど十円って結構便利よね」

「あなたふざけてるの？」

とうとう突っ込まれた瀬川だった。だが、突っ込みを入れられるほど七海さんの気持ちは落ち着いてきたようだ。いや、今のは「てめえ舐めてんのか」的はニュアンスだったかもしれないが、それは気にするまい。

「私はいつだって大真面目。大真面目すぎて真面目さを一周するくらい真面目よ。うんうん真面目真面目」

本当に真面目な人はそんなに連呼はしないだろう。

「それはともかく。私はあなたたちに協力できる事なんて何一つないと結論付けたのだけれどどうかしら？　喧嘩の仲裁ならお断りだけれど」

「なんで喧嘩することが前提になっているのよ。あなた全然人の話聞いてないわね」

「そういえばあなたの言い分を全く聞こうとなんてしていなかったわね。今からでも話してくれて構わないけれど、聞く気はないので独り言にしてね」

「あなたね……。まあいいわ。……私たちは今には戻れる、か。それが十円ほどの価値しかないかどうかは別だけれど、或いは喧嘩をするかどうかもべつな話だけれど、それが本当だとしたら、今更、なんてことはないのかしら。遅すぎたということはないのかしら？」

「尾崎くん、七海さんが独り言を喋っているわ。どうしよう、かわいそうな子」

「な！？」

阿呆なことを言うな瀬川。七海さんがもうそろすごい剣幕で怒ってらっしゃるよ？

「まあまあ七海さん落ち着いて」

とりあえず七海さんをたしなめておく。

「冗談よ。七海さん、私は『今に戻る』と言ったのだから遅すぎるなんてことは無いわ。むしろ、今しかないんじゃないかしらね。あなたが私たちに打ち明けて、多少なりとも心のストレスが晴れた今しか」

だったら余計に余計な事を言うなよさつきから。

「……確かにね。少しはすっきりしたかもしれない。けど、私だけ心の準備が出来ていても、千里の方はなんにも準備できてないわよ？」

「それもそうね。それじゃあちよっくら久家さんを怒らせてきましよう」

「どうやってだよ。大体瀬川、怒らせても意味無いだろ。心の整理

どころかいらんストレスを与えかねない。例え彼女が感情を表に表せなくとも、感情が全く無くなったという訳じゃあ無さそうなのはお前も知っているだろ？　むしろそんな状態ならよりストレスを感じやすいはずだよ」

感情の逃げ場が無いからな。感情を溜め込むと、いざ暴発したときの爆発力は凄まじいのはエネルギーの蓄積を考えれば当然の事だ。静かな奴ほどキレると怖いと言われているのもその辺りが原因なのではないかと僕は思う。

「それもそうね。じゃあ七海さん。どうやら私たちにできそうなことはもう無さそうだから帰るわね」

「ちよつと待つてよ。なんでそうなるのよ。あなたたちにはまでやれる事があるわ」

「何かしら。これはあなたと久家さんの問題だし、私たちがどうこうできるものじゃないと思うのだけれど。そもそも、七海さんのお願いを私たちが聞く必要あったのかしらね。それこそ立川生徒会長に頼めば有効な手を考えてくれそうなものよね？」

「今更そんなことを言っても私はあなたたちにお願いをするわ。というか、ここまで話しておきながらいきなり無視を決め込まないでよね」

まあ勿論瀬川にそんな気はないだろう。ほとんど他人に近い僕たちに過去を打ち明けたんだ、それを聞いてどうしようもないからはいさようならでは虫が良すぎる。

「わかったわよ。一体何？」

「とりあえず、私、千里と話し合うことに決めたから。でも、いきなり私が千里と会ってもあの子はなんの反応も示さないでしょうから、ここはやっぱりあなた達が千里を説得して欲しいの」

「説得と言われてもどうしろと？」

「だからまあ、その。とりあえずなんでもいいから、やりかたはあなたたちに任せるから、とにかく千里を私のところに連れてきて」
連れてきて、か。なんだかなあ。自分から行けよと思わなくも無

い僕であつた。いや、思うだけで言うべきじゃあないけれど。

「自分で行けばいいじゃない」

言いやがった。

「自分でどうにか、どんな方法を使ってもいいから梃子でも動かせばいいじゃない」

「そんなことをして、図書室で喧嘩にでもなつたらどうするの?」

喧嘩をする気があるのかないのか、そんなことを言う七海さんだが、瀬川はその言葉で納得したようだった。

「それは困るわね。図書室にはまだ読んでいない本があるわ。あなたたちにそれを破らせるわけにはいかないわ」

「どんな壮絶な喧嘩を想像しているの」

「最悪、図書室の本が燃えかねない」

「燃やさないわよ」

「図書室……図書室……。うん、図書室と言つたらやつぱりあれよね。魔法少女たちの戦い。図書室に保管されている魔道書を巡つて争う二人だった」

「趣旨変わつてゐるわよ!？」

「結局その魔道書も一緒に燃やしてしまう二人だった」

「本末転倒じゃない!」

「司書の先生に怒られる魔法少女たちだった」

「シヨボ!」

瀬川のボケ全てにツツコミを入れる七海さんだった。今度から瀬川のボケは全部七海さんに受けてもらおうかな、とか悠長に考えている僕だった。というか七海さん、突っ込みもできたのか。うんうん。今日は七海さんの意外な一面を見れたな。最初のアレは思い出したくも無いが。

「とにかく、久家さんに話をつけてくればいいのね」

「ええ、そうよ。別に今日すぐにで無くても構わないから」

「日にちと場所が決まったら果たし状を使って久家さんをおびき寄せればいいのね?」

「ええ、そうよ。そうしたら私たち三人で千里を囲って……ってな
んでよ！」

見事なノリ突っ込みを見せてくれる七海さんだった。だんだん僕の頭の中で構成された七海さんのイメージが崩壊していくようだった。

「とにかくまあそんな感じで。じゃあ七海さん。早ければ今日中に決着がつくかもしれないから心の準備だけはしておいてね」

今日って……いくらなんでもそう簡単にはいくまい。僕らにはもうひとつ、響くんより頼まれた仕事もあるのだから。まあそれは暫くは保留という形にはなるだろうけれど、とりあえず報告だけでも済ませておきたいところだし。

「はあ、面倒だわ。ねえ尾崎くん、立川くんの依頼は無視してもいいんじゃないかしら。別段、七海さんたちの問題よりも深刻そうじゃないし」

「そういうわけにもいかないだろ。依頼主はかの響くんだぜ？ あんまり無碍にしていたら何をするか分からない」

そうそう何をするもんでもないだろうが。何をするかわからないという事は、突き詰めても何をするか分からないのだから、それが響くんが全生徒から畏怖される所以でもあるのだ。

「まあ、ね」

「……ふう。やっと話がまとまったわね」

まとまったとも言えないような気もするけれど。今日僕たちがしたことといえ、単に七海さんに報告をし、七海さんから話を聞いたくらいだ。瀬川は何かした気にでもなっているのかもしれないが、結局改めて、七海さんと久家さんの関係改善に向けての橋渡し。大本の趣旨は変わってはいない。

「それじゃあ七海さん。今日のところはこれで。また後でになるかまた明日になるかは分からないけれど、とりあえずさようなら」

「ええ。二人も。……今日はありがとう」

「……どういたしまして」

七海さんは僕たちを教室に残して足早に去っていった。……ふむ、ならば僕たちも動くとするか。

「さて、これからどうする？ 直接久家さんのところに行くか、響くんを探すか」

「そうね……。どうしようかしらね。でも、ねえ尾崎くん、私思ってたんだけど」

瀬川が曖昧な返事をし、続けた。

「例えば七海さんと久家さんが話し合いの結果喧嘩をする事になったとしましょう。でもね、久家さんって、どうやって喧嘩するのかしらね」

ものすごくどうでもいい質問だった。なあ瀬川。まずは当面の問題に目を向けようぜ。久家さんがどうやって喧嘩をするかなんて本当、そんな事考えるのは後にしよう。きつと久家さん、表に出せない感情が爆発して、それこそ魔法少女かって位の超能力とか発揮して喧嘩するんだろうぜ。まあそれだと七海さんも同等の力を持つていないと喧嘩にはならないけれど、まあ未だに嫉妬の念が残っているみたいだし、大丈夫だろう。盛大な姉妹喧嘩になるに違いない。

「……いこうぜ、瀬川」

「ええ」

僕たちは結局、後先の事も考えずに教室を後にした。

僕は呑気に、「冗談じゃなく久家さんってどうやって喧嘩するんだろうとか考えていた。

第二章・003

教室を出てからさあどこへ行こうかと悩みに悩みぬき、言って、別に底まで悩む事でもないと思に至りつつ今に至った結果。

とりあえず響くんには報告だけでも済ませておこうということに決まった。

報告。報告、ねえ。そんな言葉を使うとまるで僕たちがなにやらそういう「仕事」めいたものを行っているかのように感じられるが、どうしてこんなことをやっているのかと疑問に思えてくるほど、そもそも理由なんてなかったのだ。別に断る理由も無いのだからこうして響くんの仕事を請け負ったのだが、よくよく考えてみれば安請け合いもいいところである。だいたいがだいたいにおいて、お願いをしてくる人物が立川響生徒会長であることがまず問題だ。響くんなら大抵の問題など問題にさえならないだろう。特定の人物の身辺調査など、それこそわざわざ僕たちをお願いをするほどのことではない。響くんは響を下僕として扱っているみたいだし、調べモノをさせるなら響を使えばいい。そちらの方がむしろ効果的だ。あるいは生徒会役員の誰かを使うとか。まあそんな言い方をしたら響くんがそれこそお代官様というか王様になってしまいそうだけれど、現に僕らを使っている、表現できない事もない。生徒会役員はたまたま仕事が多いとか。響はあんな性格をしているからむしろ全然アテにできない情報を持ってきてしまうとか信用できないとか。いろいろと理由はあるだろうがなにより重要なのは、どうして僕たちなんだろう、ということだ。

帰宅部で暇そうだから？

たまたま同じクラスでいきなり目立つような事をしていたから？

誰もが忌み嫌う瀬川の側に居ることができたから？

……分らない。響くんの考えている事は分らない。

生徒会長立川響。彼はおそらく、夢見里高等学校変人リスト、そ

んなものがあるのかどうかは知らないが、生徒からもやたらと変人が多いと称されるこの学校内の変人たちの中でランキングをつけるとするならば、瀬川や和久井や櫛などを差し置いて、断然トップの座に位置することだろう。誰もが認める生徒会長。それは、単純に仕事ができる信頼ができる生徒会長という意味ではない。決して、ない。

それは、誰もが畏怖する、畏敬の念を向ける対象として、という意味で、誰もが認める生徒会長、なのだ。

「……ふう」

そこまで考えて、考えるのをやめた。響くんに対してはそれだけの評価を持っているだけで十分だろう。あの人を過小評価したり過大評価したりしても、意味は無い。

僕たちの予想など無意味なほど、彼はその高みにいるのだから。

「どうかしたの尾崎くん。溜息なんてついて」

瀬川が僕を案じて声をかけてくる。

「いや、なんでもない」

「そう。でも尾崎くん。溜息をつくとき幸せが逃げるっていうよわよね」

確かによく聞くジンクスだ。

「それがなんだ？」

「今の溜息で、尾崎くんの幸せが一生分逃げたわ」

「そんなに!？」

「もうあなたに幸せなんて微塵も残ってないわ。幸先悪いわね。いや、幸の字が逃げてしまったのだから、先悪いわね」

「その言葉の響きも微妙に悪いよ……」

おまけに語呂も微妙に悪い。

「あなたの人生にはもう不幸しか残されていない。いいえ、やつぱり幸の字が逃げて不しか残ってないって感じね」

「幸せ以外のどんな言葉にも不が付きそうな事を言うなよ。僕の未来の可能性が不可能性になっちゃってしまいそうだ」

「今日からあなたの名前は不崎くんね。不崎フクラくん。ふつくらしてそうで、ある意味おいしそうよね」

「幸も不幸も全く関係ねえ！ 僕の名前のニュアンスを微妙に変えないでくれ」

あとおいしそうとか言うな。瀬川が言うとか妙に怖い。食べないでね。

「不不不」

「不で笑うな。つかそれは笑っているのか」

「どうでしょうね。まあそれはともかく。逃げた幸せは必ず捕まえなくちゃいけないのよふつくらくん」

「ともかく言うならもうふつくらはやめてくれ。……で、どうやって捕まえればいいんだ」

そもそも一度逃げた幸せって捕まえられるもんなのか。

「そういえば一般的に、逃げた後どうすればいいかという方法は伝わっていないわね。でもまあ、溜息って吐くものだから、吸えばいいんじゃないかしら」

「吸う？」

「深呼吸よ尾崎くん」

言われたとおりに深呼吸をする。すーはーすーはー。

「……酷く間抜けよ尾崎くん」

「うん。どうして廊下のだ真ん中で深呼吸しなくちゃいけないんだろっね」

「それにやつぱり、吐いてるわよ」

「気づけよ、僕……」

深く呼吸しているんだからある意味溜息を吐くより幸せが逃げていきそうだった。

「先悪いわね」

「ああ、先悪いな」

「このまま尾崎くんの幸せが逃げたままだと、カップルとしては後味が悪いわね」

言い出したのは瀬川のほうだろう。瀬川の前ではむやみやたらと溜息を吐くもんじゃないのか。

「というわけで早く幸せを捕まえてね。今のところは私の幸せを分けてあげる」

「ん？」

そう言つて瀬川は僕の手を握った。……廊下ですれ違う人が一瞬注目をする。僕としては瀬川との関係を公に知られたくないのだけれど、既に昼休みで瀬川が豪語しちゃったからな、今更何も言うまい。……やっぱり恥ずかしいけれど。

さてと。響くんはどこかな。彼の事だ、例え生徒会の仕事があったところで大人しく生徒会室にいる訳もないだろう。かといってどこを探せばいいのか見当がつかない。となればやっぱり生徒会室が一番有効なのだろう。響くん以外に誰かが居れば、居場所を聞けるかもしれない。

……そもそも今日生徒会の活動があるのかどうかは知らないけれど。

というわけで、生徒会室前。会議中だったらいけないので、とりあえず廊下から中の様子を伺う。……もの音一つしない。誰も居ないのだろうか。しかし、どうやら会議中というわけでは無さそうだ。僕は生徒会室の戸をノックする。

すると、どうやら誰かが居るようで、中から女生徒のものと思われる声が返ってきた。

「どうぞ」

「失礼します」

断つて、僕と瀬川は生徒会室に入る。そういえば生徒会室に入るのはこの三年間で今日がはじめてだ。どんなものかと思えばなんてことはない。普通の部屋だった。真ん中に長い机が二つ並んでいて、そのまわりをイスがいくつか囲んで置いてある。イスの後ろには書類をまとめる棚が置いてあるだけで、別段特に特別性を感じる部屋ではない。

「いらつしやい」

生徒会室の、どうやら入り口から真正面の席が会長の、つまりは響くんの席だろう。その斜め前の位置にその女生徒は座っていた。

「……こんにちは。えっと、きみ一人？」

生徒会室には彼女が一人だけだった。彼女も生徒である以上、三年生である僕と同級生か或いは後輩かのどちらかだろうから特に畏まらずに言う。……もしかしたら留年生かもしれないという可能性は全く考慮していない。

「あなた様は今私に、他の人は居ないのかと聞いたのでしょうか。ならば私は、はいそうですねと答えます」

彼女は一言余計な確認をしてから、僕たちに対して丁寧な言葉で対応をした。だとしたら二年生なのだろうか？

「どうぞ、空いている席にでも自由に座ってゆつくりしてください」

「いいのかな？ 僕たちは部外者なわけだし」

「別にいいんじゃないかと私は思います。どうせ今日は活動らしい活動はないですし。会長もどっか行っちゃって暫くは帰ってこないでしょうし。なんならお茶でも出しましょうか」

いくらなんでもゆつくりしすぎじゃないだろうか。まあ、この人自体はそんなに悪い人そうじゃなさそうだし、瀬川のことは知っているだろうから瀬川の姿を見ればそれなりに嫌そうな顔をするんじゃないかと思っていたのだが心配は無さそうだ。

「ところで、君は？」

「あなた様は今私に名前を聞いたのでしょうか。なれば私はその問いに答えたいと思いますが、その前に一つ、僭越ながら恐れながらまずは訪問者であるあなた様から名乗るべきだと私は思いますがいかがでしょうか、尾崎蒔良様」

彼女はまた一言確認をしてから答える。

「ああ、ごめん。……って、なんで僕の名前を？」

瀬川の名前なら知っていてもおかしくは無いが僕の名前まで知っているとなるとちょっと不思議だ。それとも、僕と瀬川の関係が下

級生にまで知れ渡ってしまったのだろうか。

「別に不思議なことでは全然ありません。卑しくも私、生徒副会長を任されている身として全生徒の最低限のプロフィールを把握しているだけなのです。三年生や二年生は勿論の事、一年生や滅多に学校に来ない不登校や退学処分を喰らった生徒のプロフィールまでもござれます」

「へえ、そいつはすごいな。入学してきたばかりの一年生のことで知ってるのか。ん？ でもそれって、顔と名前全部一致させてるの？」

「はい、そうです。……おかげでここ一週間の授業は全く身に入っていない上に寝不足です。あなた方がここに来るまで、実はめっちゃ寝てました」

……うん、すごいけど、すごいけど無駄な努力過ぎるだろそれ。生徒副会長、だっけ？ 副会長が勉強よりも優先して生徒のプロフィール覚えるって、本末転倒だ。一見真面目そうには見えるけれども、いや実際真面目なんだろうけれど、真面目になるべき方向を間違えてないか？

「ともあれ私が生徒副会長の山田未来です」

「え、ああ、うん。よろしく山田さん」

しかもさりげなく自己紹介を済まされてしまった。なんなんだろうこの人、こっちの調子が狂う。

「山田さんは二年生なの？」

「いいえ、あなた様と同じく三年生ですよ」

「じゃあ別にそんな丁寧な言葉で話さなくてもいいよ」

なんだか居心地が悪い。というか三年生だったのかこの人。山田さんには悪いけれどあんまり廊下ですれ違った事もなさそうだし覚えていない。

そういえば、山田や田中という苗字は総じて地味だというジンクスが僕の中であつた。実際はそんなわけ無いのだろうけれど。

「この喋り方は癖みたいなのです。喋り方が丁寧なだけで別にあ

なた方に敬意を払っているとかそんなつもりは全く持つて微塵もありませんのでお気になさらず」

「逆に気になるような事を言われたけれど分かったじゃあ気にしない」

山田さんのことが全然分らない。今までに違う人種である事を僕は実感した。

「ところで私の事はどうか呼び捨てにしてください」

「んー、呼び捨てはちよつとなあ……」

初対面だし、僕には抵抗がある。

「お気になさらず。私はあなたの事をおーちゃんと呼ぶので」

「初対面でいきなりそんな呼びかたされるの僕!？」

「いっちゃああなたが慣れなれしいというか図々しい。」

「じゃあまつきー。或いはオザツキー。さらにはまきまき、おざきんぐなどなど色々ありますが、どれがご所望でしょうか」

「呼び方に対してはだいたいおおらかな僕だけれど、なんだかどれも拒否したくなるよ!　っていうか拒否するよ!」

だ、だめだ、山田さんのペースに巻き込まれちゃあ駄目だ。よく考えたら生徒副会長っていうことは、会議のときは大体となり響くんがいるってことじゃないか。まともな神経な人がそんな役職できるわけがなかった。

「冗談です。私の言っていることは全部冗談でできています」

「はあ、ということはそれも冗談って言う事だよな」

「勿論冗談です。私の言っていることは全部本気です」

どっちがどつちだかもはやどうでもいい。とりあえず、山田さんも変人という事を理解した。ええ、理解しましたとも。

何故か変人が多いと言われるこの学校の生徒会の会長と副会長がそろって変人じゃあ……そりゃ変人が多くもなるか。というか生徒会が原因なんじゃないのか?　類は友を呼ぶ、の拡大版みたいな感じで。

「ところで本日はどのようなご用件で」

気を取り直して山田さんが僕に聞いてきた。僕は、こんな生徒会に真面目さを求めたって仕方が無い事を悟って山田さんの向かい側に座る。瀬川が僕の隣に座る。

「とりあえず、響くんに用があつたんだけど、居ないんだよね？」

「居ないかといわれれば居ませんね。ああそういえば居ませんでしたね。どこに行つたんでしょうね」

「さっき自分でどっかいったって言ってなかったつけきみ……」

物忘れが激しいのかい？

「言つたと言われれば言いましたね。ああそういえば言いましたね。なんて言つたんでしょう」

「いちいち言い回しを変えないで、普通に喋れないのかい？」

「これが癖ですし。それに、あなた様にとって普通でなくとも、私にとつては普通であるというただそれだけのことなのですよ」

まあ、普通というのは主観的な意見では語れないか。極論を言えば、自分以外の人間は全て変だとも言えるわけだし。

「それで、響くんがどこに行つたか分からないんだね？」

「さてどうでしょう。ここで分からないといえば、生徒副会長としての私の評価が底辺の底辺にまで落ちてしまいそうですし、分かっていますと言つたところで私が本当のことをあなた様に話すとは限らないでしょうし、さてさて、それはもしかしたらあなた様に依るところなのかもしれないと、僭越ながら恐れながら私は言うのです」

「回りくどいね。つまりは知らないんだね？」

「……………黙」

「黙するな。口に出して発音する事じゃないしそれ。別に君の評価を下げたりなんかしないから」

「あらそれはそれは蒔良さんとはとても心が寛大ですね。でもそれも逆に困りますね。私の、卑しく下賤な私の評価が底辺でないだなんてそんな可笑しな話はあつてはいけないのです。ええですから蒔良さん。私のことなどどうか底辺とお呼びください」

「君はMなのか？」

だとしたら酷くやりづらい相手だ。しかも瀬川が喜びそうな相手だ。瀬川にとってMな人ほどいじりがいる人はいるまい。……いや、逆なのか？ 相手の嫌がる顔を見たいならMな人には手を出さないのかもしれない。

「今あなたは私にMなのかと聞かれましたか。ならば私はこう答えましょう。いいえ、私はSですと。鏡に映っている泣き崩れた自分の姿を高い位置から眺めてほくそえんでいたりするのです」

「それって完全にエムじゃねえかよ！」

「さてどうでしょう。先ほども言ったように、私が本当のことを言っているのかどうかは分からないのです。どうか私を信用しないでください。私を信じて裏切られた、なんて言われて恨まれたくないですから」

「別に恨みはしないだろうけど」

なんだかそこまで言われると、なんだか山田さんも何かしらの事情を抱えてそんな信念を持っているのかもしれないと思わずにはいられない。或いはそれが既に嘘で冗談なのかもしれない。いや、こんなこといちいち考えていたらキリがない。

「というわけなので、私がどんな情報を持っていたとしても、信じないでください。そして、信じられない情報をお渡しするわけにはいかないのです。私は生徒副会長として限りなく秘密主義者なのです」

「そんな秘密主義者は聞いたことが無い。……けれどまあ、今更どこにいるか聞いたって、あの響くんのことだ、既に別の場所へ移っているかもしれないし、探すだけ無駄な可能性もあるな」

と、言えば聞こえがいいかもしれないが、単純に考えるのが面倒になっただけである。山田さんがどんなことを言っても、僕は山田さんの言うとおりに山田さんを信用しないか、或いは山田さんの期待を、それこそ裏切って信じるかの二択を迫られるのである。勿論、その逆も然りで、いわゆる究極の選択をしたくないだけである。…

…これも考えるだけ無駄なんだけど。

「そうですか。では会長が戻ってくるまで待っているといいです」
「どうでしょうか。このまま図書室に行って久家さんに話をしに行くのもいいけれど。」

「どうでしょうか、瀬川」

僕はなんだかぼーっとしている瀬川に聞く。……うん、なんだか久しぶりに瀬川に話しかけた気がするんだけど、気のせいだよな。

「……………」

「つまりは黙、ですね」

「おーい、瀬川？」

ぼーっとしているというか、じーっと山田さんの顔を見つめている。焦点は合っているようだ。

「何か？」

じー。

「卑しくも下賤なこの山田未来に何か御用でも」

じー。

「だめですよ奈々実さんほどの高貴な方が私のような底辺の底辺に位置する賤民を注目するなど。ええ、もつてのほかです。私はその視線で、その視線で死んでしまえるほど卑しいのですよ？」

じー。

「……ならばこれならどうでしょう。……奈々実先輩、そんなに見つめないでください、私、私、おかしくなっちゃいます」

山田さん。どんなキャラだよ。

「だめですか。じゃあこれは。……べ、別にあなたにみられて照れているわけじゃあないんだからね、勘違いしないでよね」

つまりは照れているのか？ というか山田さん。どっからどこまでが本気でどこからどこまでが冗談なのかはつきりしてくれ。もう僕には山田さんのキャラが理解できなくなってきた。

「ご、ご主人様、どうしてそんなに見つめられるのですか？」

じー。

「あははー、奈々実ちゃんったらそんなに見つめてー、照れるなー！」

じー。

「奈々実くん、僕に対する熱視線、大変喜ばしいけれど、そんなことをしても、僕は何にもしてあげられないよ？」

じー。

「奈々実様、どうか、どうかお許しくださいませ！ 私としたものがなんたることを！」

じー。

「あらあ？ 奈々実ったら、そんなに見つめてどうしたの？ お姉さんに虐められたいの？ うーん、どうしようかしら」

じー。

「……奈々実。……見つめすぎ」

じー。

なんというか山田さん。恥とか知らないのだろうか。いろんなキャラクターを演じてくれたけれど、瀬川は全く反応していないのだった。

「以上、蒔良さんが喜びそうなキャラクター設定集でした」

「僕かよ！ 喜ばねえよ！ 瀬川もいい加減に何か反応してやれよ。矛先が僕に向いちまったじゃねえか」

「……うん。計算どおりよ」

グツと親指を立てる瀬川。……なに？ 二人の間に台本めいたなにかが存在してたつての？ 二人はいつからそんなに仲がよくなったの？

「まあともかく。でも尾崎くんが一番喜びそうなキャラクターがなかったわね、山田さん」

「だからなんで僕が喜びそうなキャラ探してんだよ」

「……いえいえ高貴なる奈々実様。蒔良さんが喜びそうなキャラクターなら演じる必要などもはや無いものだと結論付けたものでして」

僕が喜びそうなキャラなんてそんなの。ねえ？

「そうね」

だからなんで意気投合しちゃってんのあなたたち。瀬川なんてさつきまでだんまりだったくせに。

「でもどうしようかしらね。立川くん、ここには居ないんでしょう？」

「そういうことになりますね。まあ今日はもう一度ここに寄るとは言っていましたから、その内戻ってくるでしょう。……そうですね、どうせあなた方はもう一つの案件があるのでしょうけれど、それはひとまず置いておきませんか」

「……どうしてそれを？」

もう一つの案件。即ち七海さんと久家さんの関係の改善。

「今どうしてと聞かれましたか蒔良さん。ならば卑しくも下賤な私はこう答えましょう。……ただのカマかけですと」

どうもそれだけじゃなさそうだ。……なんというか山田さん、響くんほどとは言わずとも、一筋縄じゃいかなそうな雰囲気がある。

「或いは会長から聞いただけ、なのですけどね」

……そうでもないような雰囲気もまた、漂っているのだった。

「それで、どうしてひとまず置いておかなくちゃいけないのかしら？ 山田さんは私たちになにか用でもあるのかしら。私たちのほうは別に、もうここに居る理由もあまりないのだけれど」

もつともな事を瀬川が言う。

「そうでしょうとも。でも私にはあるのです、あなた達を引き止める理由が。或いはもしかしたら無いのかもしれないのですけれど。」

例えばあなた方と雑談を楽しみたいのだと思ったらそれは用という程のことではないのかもしれないし」

「いちいち回りくどいわ」

「それが癖ですから。奈々実さんにも癖の一つや二つあるでしょう。それと同じように私にも癖があるのです。まあそれは置いておいてとりあえず私の用というのが、あなた方が持ってきた、会長への報告を私が聞きましょう、ということですよ」

僕たちが生徒会室を訪れた理由など、本当はとくに知っていたということか。或いはこれもカマ掛けか？ いや、それは無いだろう。副会長としての山田さんが響くんから何か聞いていてもおかしくはないし、聞かされていてもおかしくは無い。けれど僕はあえてその真意を確かめるために、といったら聞こえは悪いけれど、そのために、しらばっくれることにした。

「なんのことだい？ 報告って」

「おや、私の勘違いでしたか」

「やっぱりカマを掛けていただけか」

「てつきり、あなた方が会長から請け負った、『鈴木正時の身辺調査』についての報告かと思っていたのですが、どうやら勘違いだったようです。気に障ったのなら謝りましょう。けれど謝ったところで卑しく下賤な私の言葉など聞き入れては、許してはくれないでしょうね。ええ、それでいいのです蒔良さん、奈々実さん。どうか私のことは底辺の底辺だと思って蔑んでくださいませ」

「ちょ、山田さん」

「どうやら全部知っているようだが、それだけでそこまで自分を低く貶めて彼女に何か得はあるのだろうか。本日話した限りで、彼女の言い回しに色々なパターンがあるのは分かったけれど、自分を「卑しく下賤な」と評価するというのは最初から最後まで変わっていない。もしかしたら本当にMなのかもしれない」

「ごめん、僕が悪かったから、そこまで自分を貶めないでくれ。うん、そうだ、その報告をしに僕たちはここへ来たんだ」

「いいのですいいのです蒔良さん。でも一つだけ勘違いしないでください。私は何も自分を貶めているわけではありません。ただ単に自分が『底辺の底辺』なだけです。『底辺』はいつまでたっても『底辺』なのです。これ以上自分を卑下することなど私自身にはできないのです」

「どうしてそこまで自分を「底辺」として見るのだろうか。それを聞けばまた、冗談だと言われそうだけれど、こればかりは彼女の確

固たる意思でそう思っているような気がした。

「山田さん。とりあえず報告は後回しにして、山田さん。これはもしかしたら僕如きに踏み入ってはいけない話なのかもしれないけれど、どうしてそこまで自分を下に見るんだ？　もし差し支えなければ聞かせてくれないかな」

「差し支えるだなんてとんでもない。理由を聞きたいのであれば卑しく下賤な私は躊躇わずに理由を話しましょう。けれど蒔良さん。やはりそれは勘違いというものです。私は自身を下に見ているわけではありません。言っただでしょう。私は『底辺の底辺』なのだ。私は最初から『底辺の底辺』なだけです。そしてこれもさっき言っただでしょう。『底辺』の下は無いのです」

「だからその理由を僕は聞きたいんだよ」

「私の答えがお気に召しませんでしたらすみません。けれどその理由とは、どういう理由のことを言っているのでしょうか。私が『底辺の底辺』である理由ですか？　それとも私が私自身を『底辺の底辺』だと評する理由ですか？」

僕が聞きたい理由は、そのどちらでもない気がした。けれどそれをどのような言葉で表現すればいいかわからない。

「蒔良さんがどちらの理由を求めているも、或いは両方の理由を求めているようにと、卑しく下賤な私が持っている答えは共通してただ一つです。……単に、始めから、私が産まれたときから、そして死ぬまでの間変わることなく『底辺』だからですよ」

言葉上ではさっきと言っていることが変わっていないような気がするけれど、実際は全然違う。いや、単に僕と山田さんの認識が異なっているだけだ。つまり、それが理由となっているわけだけれど、やっぱり僕には納得する事ができない。

「どうして始めから『底辺』だなんて思うんだ？」

「今あなたは、どうして始めから『底辺』であると思うか、その理由を問うたのですね。ならば卑しく下賤な私はこう答えるでしょう。単に、『始めから底辺』だからですよ蒔良さん」

これも認識の違い。

「もうちょつと分かりやすく答えてくれ」

「すみません。私の答えが曖昧で分かり難く、理解しがたい解答だとおっしゃるのでしたらそうなのでしょう。では改めてこう答えましょう。とあるモノが元々『そう』であるのに理由なんてないように、私が元々『底辺』であるのに理由なんてないのです」

これ以上どのような質問をしたって同じ答えしか返ってこないのだろう。つまり、それだけ彼女が信念として、信念と称していいか分からないが、信念としてそういう考えを持っているという事だ。

「理解できましたでしょうか。卑しくも下賤な私の解答がお気に召しましたでしょうか。もしそうであるのなら私はとても、至極幸せです」

「……ああ、とりあえずね。でもこれだけは言わせてくれ。たとえば君が自分の事を『底辺』だと評価しようが、僕はそんな事は思っちゃあいいないよ」

「恐れ多いですよ蒔良さん。そんな言葉は私には勿体無いのです。けれどそうですね、言うだけでしたらなんとでも言えますからね。

蒔良さんがなんと言おうと誰がなんと言おうと、私が居るのは常に『底辺の底辺』です。くれぐれも勘違いだけはしないでくださいね」

僕はとりあえずそれで納得した、振りをしておいた。例えば山田さんがそんな信念を貫こうが僕は知った事ではない。それは単なる主観的で独りよがりでしかない我がままとも表現できるものだ。だから僕は、いつかその考えをぶち壊せる日が山田さんに訪れる事を願っておこう。

「それにしてもおかしいですね。こんなの、ともすれば冗談かもしれないことに対して真面目に聞いてくるなんて」

七海さんにも似たような事を言われた気がするなあ。

「蒔良さんは疑うという事を知らないのですか。私がどんな情報をあなたにもたらしても、信用するというのはやめた方がいいと最初に言っただけですよ」

「そうだけども……。でもやっぱ、全部が全部信用できないってわけじゃあないだろ？」

「そうとも限らないのが人間との会話という奴です。卑しく下賤な私は、卑しく下賤であれど、他の動物たちと違って会話ができるのです。いや、対話、でしょうか」

それにどんな違いがあるのかは分からないけれど、確かにそうかもしれない。動物たちは本能で活動する分、嘘をつけないから。もしも動物と会話ができるのであれば、その動物の言葉は全て信じてもいいくらいに、彼らは真っ直ぐだ。……中には他の生き物を騙して捕食する、なんて生態をとる生き物も居るらしいけれど。

「納得したのであれば本題に移りましょうか」

今はまあ、それしかないか。

「というわけでさっさと報告しちゃってください。まあ、卑しく下賤な私には報告する義理なんて本来全くありませんが、これでも一応会長の右腕、恐れ多くも右腕なのでくれぐれもご容赦してください」

「分かった分かった。そう急かないでくれ」

僕は山田さんに、響くんから頼まれた「鈴木正時の身辺調査」の報告をした。

美術部である鈴木正時くんはとても体が弱いこと。

鈴木くんにはかつて兄がいて、その兄は既に他界している事。

両親にも先立たれて、体の弱い鈴木くんが家政婦を雇っている事。

その家政婦は今は三人目の家政婦で、学校と家までその家政婦さんに送ってもらっている事。

などを一通り報告した。前に響くんに報告した内容と若干被っている部分もあったかもしれないが、そんなことをいちいち気にする山田さんではないだろう。

「ふむふむ。なるほどなるほどわかりましたわかりました。それではそれでは、会長にはそのように報告しておきます」

また微妙にキャラが変わっている山田さんだった。

「ところでところで、ここまで聞いておいてなんなんですけど、会長から賜った伝言があるのでございますが聞きますか」

響くんから伝言？ 今朝会った時にはできなかったのだろうか。

「それはまず前提として、あなた方が私にもたらした情報と、会長が自ら収集した情報となんら差異が無かった場合と、あった場合の二通りがあります」

「会長が自ら？ おいおい、それも冗談？ 会長は僕たちに依頼しておいて、自分は自分で情報集めて居たって事？ 僕たちが信用されてなかったってことか？」

だとしたら憤慨だ。……いや、それこそ信用されていると思ってる僕のほうが馬鹿なのか？

「さてどうでしょう。会長の事です。あなたの事を信用しようがしまいが関係なく情報収集くらいはするでしょうね。問題はどうか解釈するかです。けれどその問題も今ではどうだっていいのです」

「うーん。……それで、どっちの前提があてはまったんだ？」

「今あなたはどちらの前提があてはまったのだと聞きましたね。ならば卑しく下賤な私はこう答えましょう。……どちらの情報も、ほとんど全く差異がなかった、と。いずれにしろこれは私たち側の問題ですので、あなた方に見てみれば、これから私がする会長の伝言に違いが出るだけの事です」

それって、だけ、と言つていいものなのかどうか疑問だ。

「その伝言って？」

「たまには回りくどくしないで率直に言う事も大事だとたつた今思い至つたため、率直に、かつ正確に伝えましょう。『鈴木正時にはこれ以上深入りするな』」

……それだけ？ たつたそれだけか？ なんの脈絡も無い伝言だ。それに、人に依頼をしておいて勝手に深入りするなど、その一言だけで終わらせようというのか。

いや、そんなのは納得できないしするべきではない。本人に直接事情を聞くべきだろう。

もしかしたら今朝、櫂と響くんが一緒に居たのにも訳があるのかもしれない。いや、一緒にいたのはたまたまなき気もするけれど、今日の、或いはこの間の櫂の様子が煮え切らない態度だったのは何か関係があるのかもしれない。

「勿論あなた方にしてみればそんな伝言一つで納得するわけは無いだろうと思います。ので、こうも言っていました。『事情を知りたいのであればそれなりの覚悟を持っておけ』と。卑しく下賤な私が伝えられる会長の言葉はそれだけです」

事情を話す気は、どうやらあるようだ。だがそれなりの覚悟を必要とする事情ってどういうことだろう。鈴木正時。人当たりの良さそうな彼が何か問題を抱えているというのだろうか。……聞くべき、だろうか。それを。

最近、僕や僕たちが解決していくべき問題が増えていつている気がする。正確には解決するのは僕たちではなく当事者たちなのだけれど、この場合余り違いはない気がする。

新学期早々、いろいろな事に巻き込まれすぎではないだろうか。

「因みに、卑しく下賤な私はその事情とやらを全く把握していませんし、たとえ把握していたとしても、今の私には荷が重過ぎる問題だと思われます。……そして卑しく下賤な私個人の意見を言わせてもらえるのならば、あなた方にも荷が重過ぎる問題だと思えます」

「……何か知っているのかい？」

「いいえ。私は何も知りません」

山田さんはこれ以上話すことなど無いと言わないばかりに口を閉じた。

「どうする、瀬川」

「……眠いわ、尾崎くん」

瀬川が目を擦った。本気で眠そうである。僕と山田さんが物議を醸し出しているのがそんなに退屈だったか。

「というか、仮にも彼女を放っておきすぎよ、尾崎くん」

「仮じゃねえけどそれは謝るよ。つい熱い討論を交わしてしまった」

討論というほどじゃあなかったけれど。

「仮じゃないとは嬉しい事を言ってくれるわね。勿論私も仮のつもりなんて最初からないけれど。でもねえ尾崎くん。いくらなんでも眠くなるような話をしすぎよ」

眠くなるって。それは山田さんが底辺か否かの話だろうか。いや、あれは熱くならざるを得ないって。自分は「底辺」だって、あそこまで言い張る人と僕は初めて会ったからな。

「私からしてみれば、主観的な意見に対して主観的な意見で返す尾崎くんも尾崎くんよ。それじゃあ決着なんて着くわけ無いじゃない」
「僕の意見が主観的だって？」

「そうよ。ええ。これはいつかちゃんと話し合わなくてはならないわね。主観性と客観性の違いについて。今はそれはどうでもいいのよ。で、なんだっけ？」

「会長の伝言を聞いてあなた方がどうするか、という話です奈々実さん」

山田さんの助け舟を聞いて、そうそう、と頷く瀬川。どうやら眠気のせいで話の大半を聞いていなかったらしい。

「で、それをなんで私に聞くのかしら、尾崎くんは」

「いや、僕だけで判断していい事じゃないだろう？ 七海さんたちのこともあるし、それが僕たちにとって手に負えない問題だったとしたら、聞くだけ損、ということもあるかもしれない」

「二人だけじゃ話し合いにはならないのよね。何かを決める上で、二人だけで決めるとするのは結構問題があると思うわよ。まあそれも置いておいて。聞くだけでは損にはならないと思うわ」

そりゃあ何事も、聞かないで損になることは多くとも、聞かずに損という事柄はそうそうないだろうさ。けれど、他でもない響くんが「覚悟しろ」と言うほどの事情をそう安々と聞いてしまっているのかというと、そうは問屋が卸さないだろう。

「……ねえ尾崎くん。何をそんなに恐れているのよ。立川生徒会長に対して。個人的な意見を言わせて貰えばね、彼も人の子なんだか

ら、そんなにすごい事をしているというわけでもないのよ。確かに学校内での彼の評価は凄まじいものがあるけれど、彼は生徒会長として当たり前で、当たり前前の事しかしていないんじゃないかしら？」

「うーん」

「そんな生徒会長の言葉一つで自分が今まで成してきた事の、例えそれがただ人の身の周りを聞くななんていう誰にでもできそうな簡単な仕事でも、自分がしてきたことに関わる事情から目を逸らそうというの？」

……目を、逸らしているのだろうか。

「ええ、逸らしているのよ尾崎くんは。逃げていると言ってもいいわね。責任逃れ、とも言いわね。いずれにしろ、一度関わってしまったことから最後まで逃げずに、尾崎くんは、勿論私にも、その事情とやらを聞く義務がある」

「……そうかもしれないな」

「お待ちください奈々実さん。卑しく下賤な私としてはあなたの立派なその考えに水を差したくは無いのですが言わせてください。それくらいの権利くらい与えてください。……これはそんな簡単な問題ではないのです」

突如として山田さんが口を挟む。

「やっぱり何か知っているのね山田さん」

「……恐れ多くも、卑しく下賤な私は会長からその事情を聞きました。いいえ、その場にはナツカもいたのですが、ことこの件に関しては会長とナツカと私の三人であたっていた事なのです」

ナツカ、即ち櫂のことは呼び捨てにしているのか山田さん。つつかやっぱり櫂も関わってたんじゃないかよ。

「私とナツカが主に学校内で聞き込みをして、会長が外部での聞き込みをしていたのです。ナツカはナツカで色々な情報網を利用して情報を集めていたのですが、卑しく下賤な私やナツカが集めた情報というのは大体が大体、先ほど蒔良さんが報告してくれたもの程度のものだったのです」

響くんが外部調査？ でも学校の外で何を調べるといふのだろう。

「……その、会長が持ち帰ってきた情報というのが、いわばその事情ということになるのですが……こればかりは卑しく下賤な私に軽々と喋っていい権利はないのです」

「でも、それがどうして、簡単な問題じゃない、になるのよ」

おそらくそれは響くんが独自に集めた、或いは何かコネを利用したのかもしれないが、独自に集めた情報がただならぬものだったということなのだろう。

「会長から報告を受けて衝撃を受けました。そのとき、これ以上関わりたくないのであれば、関わらなくてもいいとも言ってくれました。……卑しく下賤な私は、それ以上踏み込む事をやめました。私には荷が重過ぎる。ナツカや会長はまだ調べ物を続けていますが、本当なら二人にだってもうやめて欲しい。あれ以上、『アレ』に関わらないで欲しい。……卑しく下賤な私はそう願っているのです」

山田さんが強調した「アレ」とはなんだろう。それほど危険なものなのか。おそらく、それが今、響くんや会長が調べている「何か」のキーなんだろう。そしてそれは、鈴木くん自身にも関わる事なのだ。

「いいわ山田さん。それ以上話さなくて。……でもなんだかすごい話を聞いたわね。立川くんや響くんがなにやら裏で暗躍している正義のヒーロー、みたいな感じね」

「そんな生易しい印象は感じなかったけれど。でもまあ、そうだな。その事情を知ってしまったら確かに、後戻りはできないかもしれない」

「あら。正義のヒーローは生易しくなんて無いわ。だって、彼らはいつだって命がけで悪と戦っているのよ？」

そりゃそうだけど。昔の特撮モノで街が思いつきり壊されて、どう考えてもあれは死者がたくさんでただろうなあというのもあったけれど。

「それに、事情を聞くだけなら後戻りくらいなら許してくれそうじ

やない？　ただし、戦線一步手前、というところまで迫りそうだけれどね」

「ええ、奈々実さんの言うとおりです。けれど、卑しく下賤な私としてはできるなら、できるなら身辺調査程度で済ませられるあなた方にこれ以上知ってはほしくありません」

……そこまで言われると、これは大人しく退いたほうがいいのかも知れない。けれど、櫛はまだマイナーだけれど、それでも他者から恐れられる程の情報量を持っている櫛と、そして立川響生徒会長が二人で関わっている事象がどれほどのものなのかも気になってしまふ。

聞くべきか、否か。

「私たちなら心配は無用よ山田さん。それがどんな事情であれ、一つや二つ聞いた程度で恐れを抱いてしまふ程の繊細な神経は持っていないわ」

いや、僕はともかく瀬川ってかなり繊細な神経の持ち主じゃなかったっけ？　結構すぐ泣くよね、きみ。

「……卑しく下賤な私は、僭越ながら、恐れ多くも奈々実さんに失礼な事を言いますがご容赦くださいね。……あなたって結構馬鹿でしょう？」

「そんなの失礼にはあたらないわ。むしろ褒め言葉よ。この世界は天才が制するんじゃない。私や尾崎くんみたいな馬鹿者が制するのよ」

さりげなく僕まで馬鹿呼ばわりされた。

「そうですか。……ではどうか誓ってくださいね。卑しく下賤な私に誓ってください。……決して後悔しないって」

「しないわ。絶対に」

「うん。しないよ、絶対に」

僕は瀬川に倣って、そう断言をした。

この時の僕じゃあ予想などできまいが、この先の未来がもしも視ることができたとしたら、決してそんな誓いなどたてなかったこと

だろう。

僕は決意して、覚悟を決めたそのとき、

「そこまでだなあ皆の衆」

生徒会室の戸が開き、我らが生徒会長、立川響の姿がそこにはあった。

人の世の中には、なんて汚らしい感情がうごめいているのだろう。いや、汚らしいだなんて表現はしてはいけないのかもしれない。

僕だってそんな感情を全く感じることなくこれまで生きてきたわけでは勿論無い。聖者だって始めから聖者なわけじゃないんだから、そんな感情を抱いていたはずだ。人間だったら誰だって、当たり前のように感じている事。

たとえば誰かが誰かをどうしようもなく好きになって。それでも相手が自分を振り向いてくれなかったらどうだろう。その人のことをずっと好きでいられるだろうか。

たとえば誰かが自分よりも優れた才能の持ち主だったなら。自分はその人のことを一切妬まないだろうか。どうして自分ではなくあいつが、と心の中で感じていたりしないだろうか。

たとえば誰かが自分のことを見下していたら。同じ位置にいるはずのあいつが、どうして自分をあんな目で見ることができだろうか。目の敵にしないだろうか。

たとえば誰かが、自分が求めていたものを手に入れてしまったなら。本来それは自分のものだ、どんな手を使ってでも奪い返したやるだなんて、考えないだろうか。

汚らしく思えたって、汚らしいだなんて他でもない自分自身が口にできることじゃない。自分が人間である限り、感情に依る生き物である限り、僕たちはそんなものとずっと一緒に生きていくしかない哀れな生き物なんだから。

響くんの話を聞いて、僕の中ではそんな考えがより深く、より一層強くなった。……本当にどうしようもない。

人を妬み、人の心を乱して声を奪ったと主張する少女や、自分が抱いている恋心を踏みにじられた少年。同じだ。どちらの心にも狂気がそこには存在した。違いがあるとすれば、救いがあるか、救い

が無い。救えるうちなら僕が救ってやろう。少女のように。

だか少年、君のことはすくえない。その狂気が僕たちの方を向いていてというのだから。僕はその狂気に立ち向かわなくてはならないのだが、さて、どうしよう。

響くんの話を聞いてから、瀬川はショックを受けてしまった。そのストレスは計り知れなかっただろう。それでも瀬川は耐えた。自らを傷付けず、耐え忍んだ。耐え難きを耐えた。

彼のような嫉妬がそこに入り込む隙なんて無い。僕たちが葬ってやろう。

そして今日は火曜日。昨日、結局久家さんの元へは行けず、僕たちは瀬川を家まで送っていったのだが、どうしても家に帰る気分ではなかったし、瀬川の側に居てやりたかったので、僕は家の人に泊めてもらえないか頼んでみた。しかしながらやはり、男である僕が泊まるより、同性である山田さんが泊まったほうがいいだろうということになって、僕は家に帰った。瀬川の家の人に事情を説明するのが多少面倒だったが、そこは響くんが適当にはぐらかした。

さて、火曜日という事はやっぱり学校に来なくてはならないが、今の僕は到底そんな気分じゃない。否、行くべきじゃない、と言ったほうが正しいか。

これも響くんの忠告、だ。

彼はいつも通り学校に行っているだろう。ちゃんと授業を受けているかどうかは別として、学校にはいるはずだ。昨日、響くんたちから携帯の番号とアドレスを貰ったので、随時状況を伝えなくてはならない。いくらなんでも大げさじゃないか、と僕は思ったものだが、どうやら事態はそんなに安心してもしられない状況らしい。

とりあえず僕はまず、瀬川に電話をかける。しかし、電話に出たのは別の人だった。

『もしもし』

「もしもし？　もしかして山田さん？」

どうやら山田さんは学校には行かないで瀬川の家に残っているら

しい。

『はい。おそれながら卑しく下賤な山田でございます。蒔良さんとしては可愛い可愛い彼女であるところの奈々実さんじゃなくて残念でありましょうが、第一声が卑しく下賤な山田で酷く落ち込んだところでございましょうが、どう足掻いたところで山田なのです』

「うん。分かってるよ。そこまで言わなくてもいいじゃないか。……ところで、瀬川は」

『奈々実さんは未だ起きる気配がございません。いいえ、起きてはいますが活動に移る気力が全く無いそうです。電話に出る元気すらないそうです。彼氏としては残念でしたね』

「……きみさ、実は僕のこと虐めてないか？」

人の不幸は蜜の味、というほどではないけれど、なんだかそんな雰囲気電話越しに漂ってくる。山田さんの自分を下げる性格、というか信念については昨日響くんから聞いて納得をしているため、山田さんの言い回しにはいちいち棘が生えているような気がしてならない。……そういう感じ方をするようになってしまった。

『いえいえ、ご勘弁を。今は冗談をいつている場合ではありませんまい。ですけどそうですね、ずっと緊張ばかりしては考えられることも考えられなくなってしまうため、多少はボケても罰は当たらないでしょう。……というわけで蒔良さん、今から面白いネタを披露しちゃってください』

「きみは僕に何を求めているんだい？　そして言っている事と言っている事が矛盾しているんだよきみ！」

言っている事とやっていることではない、あくまで言葉上の矛盾だ。

『これはこれは、卑しく下賤な私の行動に矛盾など、まあ、全く無いとはいいませんが、一割ほど健全な行動をしている私に対してそんなことを言うとは蒔良さんも人が悪い。恐れながら僭越ながら言わせていただきますと、いくらなんでもそれは失礼ですよ』

「だから一割じゃ少なすぎるだろ。どう考えても矛盾だらけだ。と

ころできみは僕のこと嫌いだったりするのかい？」

『あなた様は今私に、僕のことを嫌いなのか、と問われましたね。ならば卑しく下賤な私はこう答えましょう。質問に対して質問で返すという愚行ではありませんが、それは私が蒔良さんのことをどう思っているのか、という解釈でよろしいのでしょうか。もしそうなら、蒔良さんが大好きで愛してやまない奈々実さんの前で、アイラブユーと囁いてもいいのでしょうか』

性質の悪すぎる冗談だ、そんなことを言われたら後で瀬川に何をされるか分からない。……いや、もう手遅れかもしれないが。

「どうか、僕をこれ以上虐めないでくれ。僕だってちよつとは参ってるんだから」

『……そうですか、それはすみませんでした。聞きましたか奈々実さん、蒔良さん、既にあなたに参っているから私とは付き合えないという断り方をしましたよ。まあ卑しく下賤な私が蒔良さんのお膝元に置いておかれる訳も謂われもないため丁度いい、といより重畳でございますため結構な事です』

「僕はそういう意味で参ってるって言っただんじゃねえ！　そしてやっぱ山田さん、僕のこと嫌いだな！　さりげなく酷いこと言ってるじゃねえか！」

断られて嬉しいって言われてたんだぞ、僕。

『……尾崎くん』

そこで瀬川の声がした。元気が無い声、いつもの張り合いがない声。いつもより抑揚の無い声。……瀬川はまだシヨックが抜け切っていないようだ。

「瀬川、大丈夫か」

『私は大丈夫。だけど、もしかしたら尾崎くんが大丈夫じゃなくなるかもしれないから、とりあえず、家に来ない？』

「……山田さんの言っていることを真に受けないでね」

『いやですね蒔良さん責任転嫁とは。卑しく下賤な私はそんなつもりで言っていたわけじゃありません。まあ、卑しく下賤な私の言

葉など、蒔良さんにとっては卑しく下賤にしか聞こえなかったでしょうが」

「あのなあ山田さん」

『それはそうと』

山田さんが僕の言葉を遮るように言った。こんどは真面目に、真面目そうな声色で。

『どうか早く奈々実さんの側に居てやってください。今はご家族揃ってお仕事に行っていますので』

「ああ、分かった。すぐ行くよ」

僕は簡単な支度だけ済ませて、自転車にまたがって瀬川の家に向かった。

途中、昨日響くんから聞かされた話を思い出しながら。

開かれた生徒会室の戸。そこに立つ立川響生徒会長の姿はまさに、まさに王者さながらの姿だった。大げさにもそう表現してしまえるほどの堂々としたいでたち。油断をすれば取って食われるかもしれないという底知れぬ威圧感。多少の喧嘩ぐらいなら自信がある僕でも、和久井や姉さんと幾度と無く喧嘩をしてきた僕でも、響くんにとってみれば、ただ黙って食われるだけの獲物。小動物。そう感じてしまえるほどの絶対的な捕食者、食物連鎖の頂点に位置する存在。そんな響くんの威を狩ろうとする者は問答無用で狩られるのだろう。おそらく、響くんの背後に立てるものはいない。響くんの後ろには、誰もいない。副会長の山田さんでさえも、きつとそこには到達できないだろう。僕は何故だかは分からないが、そう断言できてしまえるほどの恐怖を覚えた。これから響くんが話してくれるであろう「事情」など、今となっては忘れてしまえるほどに。

当の本人はただそこに居るだけなのに。

響くん自身はただ薄く微笑み、僕たちを見下ろしているだけなのに。

ただただそこに「在る」だけなのに、どうしてこうも逃げ出した

くなるのだろう。

僕にはその理由は分からなかった。いや、理由などどうでもよかった。そんなものを考えている理由など今の僕にはなかった。考えても、考えるだけ無駄だろうという結論がきつともたらされることだろう。

立川響という人間はそういう人間なのだから。

理由など無い。

強いわけじゃない。弱いわけじゃない。特別なわけじゃない。普通というわけじゃない。異常というわけじゃない。立川響という存在は「そういうもの」だ。そうとしか表現のしようがない。

「ん？ どうした皆の衆。揃いも揃って呆けた顔をしているぞ。飯はちゃんと食っているか。とくに山田、お前はただでさえ寝不足なんだからな、無理は禁物だぞ」

響くんの威圧感に気圧されたのはどうやら僕だけではないらしい。

瀬川も山田さんもじつと響くんの様子を伺う。

「なんだなんだ？ おれはもしかして嫌われているのか？」

「……やあ響くん」

僕は努めて冷静に、響くんに言った。

「おう電信柱。いや、尾崎くん。……ここに居るという事は、おれが依頼した調査の報告というところだろうがまあそれはいい。おれもお前たちに伝えたいことがあったところだ。だがまあ、堅苦しい話は後にして、まずは軽く世間話から入ろうか」

「あ、あの、会長」

いつも通りの調子の響くんにおびえる様に山田さんが言う。

「その件ですけど、卑しく下賤な私は話を聞くべきではないと思います。いいえ、聞きたくありません」

「ああ分かっているとも。今響が校門にてお前を待っている。おれたちの話が終わるまで響と二人で待っていてくれないか。まあそのまま家に帰ってしまっても構わない。だが、場合によってはお前の力が必要かもしれない」

場合によつては、というのはどうということだろう。

「はい、分かりました。会長の言うとおりにします。それでは蒔良さん、奈々実さん、卑しく下賤な私は後で合流する事にします。…それでは失礼します」

山田さんはそれだけ言うと、生徒会室から出て行つた。それほど「事情」を聞きたくないのだろう。いや、山田さんは既に響くんから聞いて知っているんだつたか。だったら、もう二度と聞きたくない事情、ということなのだろう。

「ふむ」

響くんは一度だけ頷くと、僕たちの左隣に位置する会長席に座る。自然、響くんが僕たちの側に居る事になり、僕はなんだか居づらくなつた。

「そう縮こまらなくてくれ。瀬川くんも、この場にはおれや尾崎くんしか居ないのだから、肩の力を存分に抜いてリラックスしてくれたまえ」

響くんの側でリラックスだなんて、それってライオンの目の前で胡坐をかいているようなもんだろう。いつ殺されたつて文句をいえないような状態だ。いや、響くんの場合、たまに狩りを失敗するようなライオンと比べちゃいけないだろう。この人なら、絶対に狩りを成功させる。失脚する事などありえない、絶対的な王者。神に最も近い王者だ。

「それじゃあ楽しい楽しい世間話から始めようか。そういえばおれは、君たちと世間話らしい世間話というものをしたことがなかったな。うむ、生徒会長としてこれはいかな。一般生徒たち一人一人とちゃんと話をしてこそ、立派な生徒会長だ。さてところで、どんな話をすれば君たちと盛り上げられるのだろうか」

響くんと楽しい世間話なんてできるんだろうか。こっちは萎縮しっぱなしだつて言うのに。

まあいいだろう。僕もここいらで響くんに慣れておこう。どうせ同じクラスだし、何かと関わる事もあるだろう。

「じゃあ響くん。響くんって兄弟っているの？」

「その前に立川くん」

僕が適当な質問をしたところで瀬川が割って入った。

「あなたって響くんとどういう関係なのよ。それと、山田さんと響くんの関係は？ 山田さんってなんだあんな自分を貶めるような性格をしているの？」

世間話というか思い切り堅苦しい話から始めようとしている瀬川だった。まあ、響くんに対して手を抜いてちゃあ駄目なのは分かるが。

「いきなり人のプライバシーを探ってくるか瀬川くんは。それもまあいいだろう。きみらがそういう話に興味を持つというのならおれが答えるのはやぶさかではないし。じゃあまずおれと響の関係だが」
見たところ、響よりも響くんの方が立場は上のようにだけれど。そこになんらかの事情があれば聞いておきたいところだ。欲を言うなら、響の弱みを握りたい。

「単なる幼馴染というやつだ。響とは小学校依頼の付き合いで、響と山田もまた幼馴染同士だ。あの二人は本当に仲がいい。山田が唯一心を開く人間が響だ。だがおれと山田が知り合ったのは高校に入ってからだ。正確には一年の後半、生徒会に立候補したとき知り合った。響が山田を生徒会に推薦したのだ」

へえ、幼馴染、ねえ。というか山田さん、響と仲がいいってやっぱり変だよあんだ。つか僕の周りには幼馴染同士の関係が結構居るな。

「それから三人で一緒に行動する機会が多くなった」

「山田さんのあの性格は響くんのせいだったりするのかしら？」

「いや、山田のあの性格はだな。おそらく山田自身こう言っていた筈だ。『自分は自分を貶めているわけじゃありません』とな」

うむ、確かに聞いた。でも、僕にはどうしても分からない。山田さんが自分の事を「底辺」だと言い張る理由が。

「山田は別に、自分だけが『底辺』だと言っている訳じゃあない。

自分を含めた自分以外の全ての人間も生まれながらにして『底辺』で『卑しく下賤』だと思っっているんだ。だからやつは、他の誰をも上に見ることも下に見ることもしない」

「でも私たちの事を高貴なる、とか、私たちを持ち上げる表現をしようちゅうしていたわよ」

「それは単なる皮肉さ。本当にそう思っているわけではないし、そんなこと間違っても思わないだろう。じゃあなんで山田は人間を「底辺」に見るのだろうか？ その理由を聞きたいか？」

聞いても結局同じ答えが返ってくるような気がした。僕たち人間は始めから「そう」いうもので、理由なんてものは存在しないのだと。

「今尾崎くんが考えているであろう答えのほかにもう一つ。簡単なことさ、ただ単に、山田が生まれてから今まで、人間が「底辺」より上の存在である証明が為されなかっただけのこと。「底辺」であるのに理由がないのと同じように、「上」に見れるだけの理由もまった、ないのだ。この世界で始めから頂点に位置する存在など無いだろう？ 山田にとって人間というのは、スタート地点である「底辺」から一段も上がれていないのさ」

証明が為されていないから、底辺。それはまた、人間らしい解答だった。人間というのはなんでも証明をしたがる生き物だ。証明が無ければ何も証明されないだけ。それは「無い」のと同じ。

人間勝手な理屈だけれど、科学は即ちそうやって発展してきたのだ。

僕はその意見には同意しかねる持論を持っているのだけれど。

「理解できたかな瀬川くん？」

「……まあまあね。まあ、あなたがどういった関係であるかなんて本当はどうでもいいのよ」

どうでもいい質問を平気でする瀬川であった。瀬川の性格がなんでこういういい加減なものなのかという理由を聞かれても、僕はやっぱり、そういうものだからとしか答えられないのだろう。

「そうか。それで、尾崎くんの質問だけど、おれの兄弟構成だっけ？」

「ん、ああ……。なんか今となつてはどうでも良くなっちゃったけど」

例え兄弟が居たところで、それが似たもの兄弟だと未恐ろしいしな。

「ふむ。まあ、ただ間をもたせるだけの質問である事は分かっているさ。だがおれは、例えそんな思惑があつたところで全く構わないむしろ、おれは君たちともっと話しをしたいと思つているぞ」

「どうして？」

「そりゃあ、おれという人間がこんな人間だからな。誰もおれと対等な話をしてこない。おれと対等だと思つている人間なんてそれこそ櫛くらのものでな。或いは、尾崎くん、君の姉君とかね」

……姉さんとも知り合いか。まあ、僕の家族構成などとうに割れていてももはや不思議ではないだろうな。確かに姉さんなら、響くんとも対等に話せるだろうけれど、僕としては、姉さんの顔見知りの一人に響くんという大物が追加されただけで懸案事項が増えた感じだ。

「まあそれはいいでしょう。そしてこれはおれからのお願いだが、どうか君たちも、おれとは対等の立場で居てくれないか」

正直に言えば荷が重いし気が乗らない。ただでさえ僕は響くんの存在感にびびつていてというのに、それを対等だなんて。山田さんじゃないけれど、それこそ恐れながら、だ。

「……無理だよ響くん。僕と君とでは器が違いすぎる。僕が君に抱いている感情は畏怖だよ。怖いんだ、君が。本当は今すぐに逃げ出したいくらいに」

「正直に言つてくれてありがとう尾崎くん。だが君たちになら、おれと肩を並べられるほどの器がある。おれにはできないことが君たちにならできる。おれをそこまで持ち上げてもらっちゃあ困るな。おれは確かに自分の力を信じている。おれと比べたら周りの人間の

力など小さい。小さすぎる。しかしきみたちは違う。おれと等しく大きな力を持っているんだ」

その時点で僕と響くんと明確な違いが現れているじゃないか。絶対的な力を信じる響くんと、そんな力と対等に在れるわけが無いと思う僕。それだけで計れる力の差。レベルの違い。僕が生まれながらに底辺なら、響くんは生まれながらに王者だ。それほどの違い。「尾崎くん。なんにもおれは万能というわけじゃあない。それだけはわかって欲しい。そして、自分の力を疑わないで欲しい」

響くんが言った。

「瀬川くんもだ。いいか二人とも。他でもないこのおれがそう断言できるのだから、間違いは無い。自分とおれとの力の差を感じているのならば、せめてこの言葉だけでも信じる気はないか」

王者の言葉を僕は頭の中で反芻する。

何度繰り返しても、やはり僕が響くんと対等になれるわけは無かった。

僕がそう思っているんじゃない。響くんがそう思っているんだ。

元々対等な人間なら、この問いすら必要が無いのだから。

「おれの願いが敵わないのであればそれでも構わないさ。だが、いずれ、な」

「……考えておくよ」

考えても結論など出ないかもしれないが。

「うむ。……それで、おれの兄弟構成だが、実は中学生の妹が一人居る。おれと違い友達も多いみたいでなによりだ。おれの事はよく慕ってくれているし、おれも妹の事は可愛いと思っている」

別に言わなくても良いことまで喋ってくれる辺り、人は良いよな響くん。しかし、今の説明だけで判断するのはいささか早いかもしれないが、響くん、実はシスコンだったりするんじゃないだろうか。いや、別に兄として当たり前の感情なのかもしれない。

「ずいぶんと妹さんを可愛がっているのね。私には姉妹が居ないから分からないわ」

「まあな。あいつはおれに比べてよっぽど常識人だし、どうかこれからもおれを目指さないで欲しいものだ」

妹に自分のようにはなつて欲しくは無いらしい。それにしても、響くんの妹でありながら常識人であるとは、一体兄と妹とでどのような教育の違いがでているのだろう。

気にする必要はないか。

「……まあばちばちおれの事などおいておこう。そろそろ本題に入るが心の準備はいいか？」

本当に無駄な話をしてしまった。僕は気持ちを切り替えて響くんの言葉に耳を傾けようとする。

「覚悟は決まったようだ。それでは話そう。どこから話したもんか……そうだな、まず、おれから君たちに依頼した鈴木正時の身辺調査についてだが、鈴木正時の身辺自体に特に問題はないようだ」

身辺自体に。という言い方が僕には気になった。それではまるで、

鈴木正時本人に破問題があるように聞こえる。

「……尾崎くんは既にそういう可能性について考えているようだね。うむ、その通りだ。君たちが調べたのはあくまで鈴木正時の身辺であつて、鈴木正時本人についてはあまり調べては居ないんだろう。それはおれがすっかり身辺調査だと言つてしまったからだ、それが幸いしたようだ、彼はまだなんの行動も起こす気はないらしい。現時点では」

「つまりそれってどういうこと？　鈴木くんが私たちに何かするかもしれないってこと？」

瀬川が響くんに問う。……もしそうだとすると、鈴木くんに何が出来るだろうか。からだが弱く、力も無さそうな鈴木くん。

「その可能性は高い。いや、君たちに限らず、な。現時点では誰一人として鈴木正時の標的にはされては居ないようだ」

「鈴木くんが危険人物だと？」

「あくまで可能性だ。証拠が不十分で断定はできない。もしかしたらおれたちの気のせいだということもある。……まあ、これまでの

経験から物を言わせて貰えば、そっちの可能性のほうが低いだろう」

鈴木くんが危険人物、ねえ。とてもそんな風には見えなかったけれど。実の兄を亡くし、両親をも早くから亡くしてしまった鈴木くんの心中は察して余りあるけれど、それでも何かをしでかすような人間には見えない。……まさか兄や両親の死因に関係するとか。だれかに殺されてその復習だとか。

いや、それはないだろう。でなければ響くんの「標的にされる」という表現はおかしい。

「鈴木くんが危険人物である根拠は？」

「どれもこれも不確定な要素ばかりなんだが、一番の要因はとある薬物だ」

「薬物？ ドラッグってこと？」

「いわゆる麻薬というやつだ。だがそれは一般に広まっているものではなく、とある人物が個人的な実験のために開発したもので、利益目的ではないから裏社会でよく出回るようなものではないらしい」

その薬物を鈴木くんが服用しているということか？

「もちろんこれも証拠は無い。おれ自身薬の現物を見たわけじゃないし、そんな薬のことは寡聞にして聞かない。知り合いの警察になんとか探ってみても得るものは無かったから、その薬の事は正直に言って半信半疑だ」

「じゃあどうしてその薬の事を知っているの？」

「情報をくれたのは宮大輔さんというおれの知り合いだ。……尾崎くん、もしも君が宮さんに会うことがあれば、おれの存在がどれだけちっぽけか思い知る事になるだろう」

その話に既に信憑性がねえよ。響くんがちっぽけに見えるほどの人間なんて姉さんぐらいしか僕は知らない。いや、これは姉さんが本気になったらの話だが、本気になる姉さんなんてこの世に居ないから、平常モードだと流石にちっぽけには映らないか。

じゃあその宮さんってどんな大人物だよ。

「宮さんの話はいつだって半信半疑に聞いてはいるが、何せあの人

は顔が広いからな、おれにくれる情報は太抵真実味を帯びているんだ。どうやら誰かにその情報を話すときには、大体自分自身で裏付けをとってしまうらしい」

「じゃあ今回のことも？」

「他ならぬ宮さんからの情報だ、鵜呑みにはできない」

響くんはどうやら、その宮さんの事を信頼しているらしい。……

響くんがちつぽけになるほどの大人物、一度でいいから会ってみた気はするな。

「その宮さんとやらの情報で鈴木くんが危険人物であることは分かっているんでしょう？ 薬物を使っているのなら、それこそ警察に任せたりはできないのかしら？」

「……それはできないよ瀬川」

さつきから響くんが喋ってくれていることは全て不確定な情報だ。証拠は何一つ、ない。証拠が無ければ警察は動けないし、現時点での鈴木くんはなんの事件も起こしちゃあいない。そんな一介の高校生相手に、例え僕たちが警察に訴え出たとしても動いてくれるわけは無い。

「そういうことだ、瀬川くん」

「証拠が無いのなら、鈴木くんを危険人物である前提で話を進めるのはおかしくはないの？ いくらその宮さんの情報が信頼できるからって、証拠が無ければ信憑性は無いんじゃないの？ 宮さんが嘘を吐いているとか、宮さん自身が偽の情報に踊らされているとか」

瀬川の言うことも最もだ。それはもつともすぎる答えで、僕自身も、響くんが何か決定的な情報を話してくれない限りどうこうしようという気はない。

「……鈴木正時が病弱に『見える』ようになったのはここ最近の話だ。とある生徒が言うには、兄を亡くし、心身ともに疲れ果てていた筈の鈴木正時がある日突然、見違えるほど元気になって登校してきたという。その時の鈴木正時は力があふれ出るようだと言ったらしい。もりもり元気が出て、普段は苦手だったはずの体育でも異常

な活躍を見せた。その日以降、鈴木正時の身体は徐々に痩せていったという」

響くんは瀬川の疑問を無視するような形で鈴木くんについて語った。それは僕たちが行ったただの「身边調査」では知りえなかった情報だ。

「鈴木正時は元々はあるには痩せ細ってはいなかったらしい。運動こそ苦手だったものの、体力自体は人並みにはあつて病気とは無煙だったそう。これは中学のときから彼を知る同級生たちから聞いた話で、信頼しても良いだろう」

「それが薬による副作用だと？」

「勿論証拠は無い。そうだとしたら覚醒剤に近い作用を持つ薬なのだろうが、問題なのは、鈴木正時本人に薬物使用者に共通して見られる幻覚や幻聴などといった症状が見られないことだ」

それが麻薬である限り、そういう症状はあつてもおかしくはないだろう。……だが確かに、僕たちが話した鈴木くんにはそれは見られなかった。響くんが話したような元気のある鈴木くんでもまた、なかった。

「全てが全て、証拠となりえるものはない。だが、何か嫌な予感があるのだよ、尾崎くん、瀬川くん。櫻や山田と一緒に調べていくうちに、とある薬物の存在にたどり着いた。これは宮さんが情報を提供してくれたあとの話だ。その薬物が宮さんの言う薬物と同じものかは分からないし、もし同じものだとしたら、今の鈴木正時は『鈴木正時ではない何か』に変貌しているはずなんだ」

その時の響くんの表情は、いままで僕が見たことも無い表情だった。いや、表情自体に変化は無い。その裏打ちされた威圧感はいつもと変わらない。それでも、その威圧感に隠された、響くんには似ても似つかない恐怖めいた感情。……それを僕は感じ取っていた。

「その薬って……？」

「あんなおぞましい薬、思い出したくも無い。その薬を服用した男を俺たちは間近で見ていたが、あんなもの、この世にあつてはいけ

ないものだ」

「……どう、なったの？」

「……体中の組織を破壊されて、そのまま死んだ」

「！？」

響くんが告げたことはあまりにも衝撃的だった。薬を飲むと体中の組織が破壊されて、死ぬ。そんなの、最近のオカルトじゃあまわりにも稚拙と捉えられてもおかしくない薬じゃないか。悪魔が造った薬だとか、呪われた薬だとか、そんなの麻薬じゃあない。

完全に目的が「殺し」になっているじゃないか！

「おれたちはすぐに警察に連絡し、その事を告げたが、薬の事は信用してもらえなかった上に、おれたちの方が疑われてしまった。司法解剖の結果、その男の体から薬物の痕跡は無かったそうさ。それでも異常な死に方である事は間違いない、破壊自体も内部から行われていて、一介高校生には無理だろうと、おれたちは釈放された」

「証拠の残らない、麻薬……」

残念ながら、そういうことだ。と響くんは言った。

「おかげでその薬を造った人間が一体誰なのかは分からずじまいだ。おれたちは一旦そこで調査を打ち切り、山田は調査自体を降りた。おれと響は相変わらずその薬のことを追っているが……、手がかりなんてほとんどない状態で舞い込んできたのが、鈴木正時の件だ」

鈴木くんの、薬物使用疑惑。

「だが、鈴木正時がああ薬をやっているのなら、一つ目で鈴木正時は死んでいる。だから鈴木正時はああ薬は使っていないのだろう。

……それでも嫌な予感はあるんだ」

鈴木くんに、他の薬が手渡されているとしたら？

だとしたら危険なのは僕たちではなく、鈴木くん本人なのではないだろうか。

「……これも不確定な情報。おれはさつき、現時点では誰も標的にしていないと言ったが、標的に定めそうな人物が一人居る」

「誰？」

「……君だよ、瀬川くん」

「……!？」

瀬川が鈴木くんの標的、だって？ でも、どうして……。

「ここから先は耳を塞いでくれても構わない」

「……聞くわ」

瀬川は覚悟を決め、響くんの話に耳を傾ける。

「いいだろう。鈴木正時は君に恋をしていたのだ」

「え……？」

「だがそれは猟奇的な恋だった。今美術室に飾られている首なしの絵画を見たことがあるか？ あの絵の左手首には、君と同じリストカットの痕が描かれている。君は美術部員だし、鈴木正時とも以前から交友があっただろう？ 君の左手首を観察し、その痕を描くなど容易なことだ」

瀬川がその絵に感じた違和感のようなものの正体はそれか。自分の左手首に存在する同じ傷痕を意識せず視界に捉えてしまっていたのだろう。……だがまてよ？ あの絵は元々鈴木くんのお兄さんが描いていた物だったのではなかったか。

そんな疑問を響くんに伝えると、響くんは何の迷いもなく答えた。

「そんなもの、兄が死んだ後で自分でも描き足せるだろう」

「でも、鈴木くんはお兄さんの事を尊敬していたんじゃないのかい

？ 兄の遺品にそう簡単に手を加えるとは思えないんだけど」

「だから猟奇的だと言ったのだ。あの絵には元々、そんな傷痕など描かれていなかったと、美術部顧問の大森先生は言っていた。」

なるほど。つまり後からいくらでもあの絵に触れる機会のある人

間、即ち鈴木くんが怪しいという道理は成り立つ。

「鈴木正時はあの絵に描く人物を瀬川奈々実と重ね合わせた。一度、身体を壊した鈴木正時の家に見舞いに行ったという鈴木正時の友人からは、その日、彼からは瀬川奈々実に対する想いを延々と語られたそう。その時の鈴木正時はなんだか怖かったとも言っていた」

「……なんだよ、それ」

瀬川奈々実が誰かに好かれている。それはそれで喜ばしい事だ。いや、現時点で瀬川の彼氏である僕が考えるような事ではないが、瀬川が誰かに認められるというのは素直に嬉しいと思う。だから今回も、鈴木くんが瀬川に恋心をを抱いていたって別に構いやしないんだ。

それが、人に恐怖を感じるほどの恋愛感情でさえなければ。響くんの言葉を借りるなら、猟奇的な想いでさえなければ。

瀬川に、嫌な思いをさせるような想いでさえなければ。

「鈴木正時がそんな風になったのも、兄を亡くし、まるで薬でもやったかのような変貌を遂げてからだ。だから、例え物的証拠も決定的な根拠も無かったって、あいつが危険人物であることには変わりはないんだ」

放っておけば何をするか分からない。響くんは瀬川に対してそう告げた。

瀬川の顔色はよくない。響くんの話を聞いていくうちに、底知れぬ恐怖を感じ取っているのだろう。瀬川の心は繊細だ。ちょっとしたストレスを感じてしまうと自傷行為に移ってしまうほどに。今の今まで他人に拒絶されてきた瀬川の心は、多少のストレスには耐えられるように鍛えられたわけじゃなくて、積み重なるダメージを受けて脆くなっているのだ。

響くんの言葉はあまりにも、僕にとってはそれほどでもない恐怖でも、瀬川にとっては大変に重くのしかかってくる。

「瀬川」

僕は瀬川の肩を抱いた。……震えている。

僕が支えてやら無いと。

「……すまない。もう少し気を遣うべきだった」

響くんがそんな瀬川の様子を見て申し訳無さそうに言った。

「いいさ。無用な気遣いは返って瀬川の負担になる」

「……しっかり支えてやるんだ、尾崎くん。……今日はもうようそう」
響くんが立ち上がる。僕は震える瀬川を支えながら、響くんの後

についていく。

瀬川は必死で耐えているようだった。……同じ美術部員である鈴木くんの瀬川に対する想い。それに対する戸惑いもあるだろう。鈴木くんの真意は僕には知れない。その感情が本当に猟奇的に走っているのかはわからない。けれど、瀬川をこんな風にさせた罪は、重い。

「瀬川」

「……尾崎くん。そうやって私を押さえつけていてね。じゃないと私……」

「分かってる」

やはり。瀬川のストレスは既に最高潮だ。自傷行為をしないと瀬川のストレスはたまるばかりで、瀬川の理性が整ってきたとき、その解消役として僕がなんらかの酷い目に遭うのは目に見えているが、それでも構わない。

瀬川にこれ以上、自分を傷つけて欲しくないから。

瀬川の代わりに僕が傷つこう。

全部の痛みを背負えるわけじゃないけど。少しでも瀬川の気持ちに楽になるのなら。瀬川の傷を癒せるのなら。

僕の心がズタズタになるまで、僕の心を殺してくれて構わない。

校門に着いたとき、そこで待っていた櫛と山田さんが心配そうに僕たちの方を見る。僕は心配ないよと二人に告げる。僕は響くんとこれからのことを話し合おうと思い、一旦瀬川の事を二人に任せた。

「さて尾崎くん」

三人から離れた位置で響くんと向き合う。

「明日から瀬川くんは学校に来るべきではないだろう。……鈴木正時がすぐになんらかの行動を起こすとは思えないが、俺の見立てでは、明日にでも瀬川が危険にさらされる確率というのは、実はかなり高いんだ」

「……どうしてそう思うんだ？」

「今日は鈴木正時に会ったか？」

そういえば会っていないな。今日は七海さんと久家さんのことで相談をし、その後で生徒会室に向かった。……しまった、結局図書室に行っていないじゃないか。

いや、それは今は良い。あとで七海さんに謝ろう。

「鈴木正時は今日、学校に来ていない。学校には連絡は来なかった。奴は今のところ無断欠席をしても、体が弱いからという理由で学校側も深くは追求をしてこない状態だ」

「ただの欠席じゃあないのか？」

「今日、三ツ星くんが学校を休んだだろう？ 実は昨日の夜、鈴木正時と三ツ星くんが会っているのを目撃した人物が居る。別になんでもない、ただ普通に会話をしているように見えたらしい」

三ツ星くんの欠席理由は分からない。結局学校には連絡は来なかったらしい。……もしかして、三ツ星くんに何かあったのか？

「大丈夫、三ツ星くんは無事だ。家で引きこもっていた。……おびえていたよ。一体何を見たのかは話してはくれなかった」

「えっと、昨日の夜、鈴木くんは三ツ星くんの目の前に居たんだよね？ もし三ツ星くんが鈴木くんの『何か』を見て怯えていたのだとしたら、三ツ星くんは今頃……あ、逃げ帰ってきたとか？」

鈴木くんが三ツ星くんに何かをしようとしても、三ツ星くんの運動神経なら逃げられるだろう。……だけど、鈴木くんには突然活発化する薬をやっている可能性があるからな。

「実際には、会話も何もしていない。言っただろう？ 目撃者はただそう『見えた』だけなんだ。そもそも三ツ星くんと鈴木正時に面識はない。おそらく、鈴木正時が『何か』をしているのを見てしまったんだ。幸い三ツ星くんは鈴木正時には気付かれなかったらしいが、もしかしたら、という恐怖感を抱いてしまっているんだ」

……鈴木くんの危険人物である可能性が急上昇したな。

「だがそれでも見間違いという事もある。如何せん夜だったし、三ツ星くんは自分が見た相手が誰だったかは分からなかったらしい。目撃者の方は鈴木正時と誰か、という認識だ。二人の話を照らし合

わせた結果、そこには何かをする鈴木正時と、それを見た三ツ星くん。そして、おそらく目撃者が鈴木正時の話し相手に見間違えた誰かが、そこにはいたということになる」

その誰かは、鈴木くんに何かをされたと見るべきなのだろう。その人が無事かどうかは分からない。三ツ星くんが恐怖を抱いてしまった何かをされたのだ。

或いは、鈴木くんがされた……？

……僕の頭の中に、何かが引つかかった。池の中に小石を放り込んだような波紋。その波紋は大きな波を立てることなく儚く消えた。

「……つまり、今日鈴木くんが学校を休んでいるのは」

「何か行動を起こす一歩手前、嵐の前の静けさ、なのかもしれない」
「いよいよ持つてまうまいな。鈴木くんの標的が瀬川に向かっている可能性が高い以上、確かに学校に来るのはまずい。」

「……いや、学校の方が安全という可能性もあるかもしれない」

「それは駄目だ。明日以降瀬川には学校を休んでもらう。……今の精神状態をしてみる、そんな状態で学校に来て鈴木正時に付け込まれてみる」

恐怖の対象を目の前にした瀬川が完全に崩壊してしまうかもしれない。……肉体的な危険よりもそっちの方が危ないか。……」

「明日以降、瀬川にずっと家に居ろって言うのか？ それも危険だ」
「だからお前が居るのだろうか？」

……あ。

「お前が側に居てやれ。今日のところはひとまず俺たちも一緒に瀬川を送ろう。お前はそのまま瀬川の家泊まって、明日以降瀬川の側に居てやるんだ」

……女子の家に泊まるなんて酷く気が引けるのだが。

「……これはお前のためでもある。おまえ自身、鈴木正時の標的になる可能性が高いんだからな」

「なぜだ？」

「好きな女子と付き合ってる男だぞ。狙われる理由としては十分だろう？　今の鈴木正時にとっては」

瀬川と付き合うだけで命を狙われるなんて、どんな下手な昼ドラだよ。まあ確かに、瀬川のことばかりに頭が回って僕自身の安全なんて考えちゃ居なかったな。

そもそも僕は鈴木くんなんか遅れをとるつもりはないし。例えば不意打ちされたって避ける自信がある程度には、姉さんや和久井との喧嘩で実力をつけている。鈴木くんがなんらかの薬でパワーアップしてたって、元が弱い鈴木くん、その程度はたかが知れている。

「……油断はするなよ、尾崎くん」

「それを言うなら、いらんこと嗅ぎ回ってる君たちも危ないんじゃないか？」

「とつくに肝に銘じてるさ。まあ、実際やりあったらおれたちより君の方が強いだろうがな」

それはあるかもしれない。響くんが学校中で恐れられているのは喧嘩の強さじゃなく、飛びぬけたカリスマだからな。というか、響くんが喧嘩をしたという話は聞かないので実力の程は分からないが、和久井より上だなんてことはないだろう、流石に。

響は見ての通り細身、余裕だ。

「山田には調査自体を降りてもらったから危険は少ないだろう。……まあ明日以降、縁が合ったらまた会えるだろう。……もしもきみたちが鈴木正時と相対し、奴を打ち負かす事ができたなら、君はやはりおれと対等と認めるべきだ」

「……どうだか、ね。たかが鈴木くんだろう？　薬でどれだけパワーアップするんだか知らないが、いざとなれば和久井と手を組むし、負けるなんてありえない。もし僕や和久井が負けるんだったら、それこそ姉さんの出番だが。」

「考えておくさ。……あんまりみんなを待たせるのも悪いし、明るいうちに帰ろう」

「そうだな」

僕は櫓と山田から瀬川を受け取り、瀬川は完全に僕に体重を預けていて歩き難かったが、僕たちは瀬川の家へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9958/>

マクラな草子

2011年2月3日21時40分発行